

完全習得 英文法

CloudSeminar
クラウドゼミ

第 1 部

時制

1 基本時制（現在形、過去形、未来形）[be 動詞の現在形 (am, are, is)]

be 動詞の現在形には am, are, is があり、意味は主に「～です」「～にいる」「～にある」の 3 つがあります。

そして、be 動詞の現在形、am, are, is は主語によって使い分けます。

まず、主語が I 「私」の時、be 動詞は am を用います。

よって、例えば「私は、生徒です。」という文を作りたい時には、主語 I の後ろに be 動詞の am を置いて以下ようになります。

I am a student.

主語が文の先頭にくるということは英語も日本語も同じですが、日本語だと動詞は文の最後にくるのに対し、英語では動詞は主語の次にきます。

この英語の「主語 + 動詞」という並び順は、日本語の文の並び順と大きな違いの 1 つです。しっかり覚えておきましょう。

また、この文中の student は数えられる名詞で、この場合 1 人なので a student と a を名詞の前に付けることを忘れないようにしましょう。

日本語に訳す時は、特に「1 人の」と訳す必要はありません。複数の生徒を表す時は、students と最後に s を付けます。

主語が、You 「あなた、あなた達」、They 「彼ら、彼女ら、それら」などの場合、現在形では以下のように be 動詞は are を用います。

You are a student. 「あなたは、生徒です。」

They are students. 「彼らは、生徒です。」

下の文の生徒は複数を表すので、student の最後に s を付けます。

主語が、He 「彼」、She 「彼女」、This 「これ」、That 「あれ」、It 「それ」などの場合、以下のように be 動詞の現在形は is を用います。

She is on the stage. 「彼女は、その舞台の上にあります。」

It is in the box. 「それは、その箱の中にあります。」

また、be 動詞の後ろに on ～「～の上に」や in ～「～の中に」など場所を表す言葉がくる時は、be 動詞は「～にいる」や「～にある」という意味になります。

この場合、stage や box は漠然としたものではなく、「どの舞台か」や「どの箱か」分かっているの
で a ではなく the 「その」を前に付けます。

文の作りは、「主語 + 動詞 + ～」となり、be 動詞は主語によって使い分けるということをしっかり覚えておきましょう。

be 動詞の現在形の否定文は、be 動詞の後ろに not を付けるだけです。意味は、「～ではない」「～にいない」「～にない」となります。

以下の be 動詞を用いた 3 つの文を否定文に書き換えてみましょう。

You are a student. 「あなたは、生徒です。」

She is on the stage. 「彼女は、その舞台の上にあります。」

It is in the box. 「それは、その箱の中にあります。」

これらの文の否定文は be 動詞の後ろに not を付け、以下ようになります。

You are not a student. 「あなたは、生徒ではない。」

She is not on the stage. 「彼女は、その舞台の上にいません。」

It is not in the box. 「それは、その箱の中にありません。」

会話では、以下のように省略形を用いることがほとんどです。

You aren't a student.

She isn't on the stage.

It isn't in the box.

疑問文は、be 動詞を主語の前に出し「be 動詞 + 主語」の順に変え、文の最後にクエッションマーク？を付けます。

よって、先ほどの 3 つの文を疑問文に変えると、以下のようになります。

Are you a student? 「あなたは、生徒ですか。」
Is she on the stage? 「彼女は、その舞台の上にありますか。」
Is it in the box? 「それは、その箱の中にありますか。」

be 動詞の最初の文字は文の先頭にくるので大文字にし、主語の最初の文字は文の途中にくるので小文字に変えることを忘れないようにしましょう。

答え方は、Yes または No と be 動詞を用い、以下のようになります。

Are you a student?
Yes, I am. 「はい、そうです。」 No, I am not. 「いいえ、ちがいます。」

Is she on the stage?
Yes, she is. 「はい、います。」 No, she isn't. 「いいえ、いません。」

Is it in the box?
Yes, it is. 「はい、あります。」 No, it isn't. 「いいえ、ありません。」

2 基本時制（現在形、過去形、未来形）[一般動詞の現在形]

現在形は、その名の通り「現在における事実や状態」を表します。

そして、be 動詞の「～です」、「～にいる」、「～にある」という意味以外の現在の動作や状態を表す時には一般動詞の現在形を用います。

例えば日本語なら、「私は、日本に住んでいます。」というような文章です。

この場合、住んでいるという動詞の部分に一般動詞の live を用い、英文は以下のようになります。

I live in Japan.

この文では動詞の部分に一般動詞の live 「住んでいる」を用い、これは「現在」日本に住んでいるという私の現在の状態を表しています。

次に、「私は、ペンを持っています。」という意味の英文を作ってみましょう。

この場合、以下のように一般動詞の live を「持っている」という意味を持つ一般動詞の have に置き変えるだけです。

I have a pen.

この文は、「現在」ペンを持っているという事実を表しています。

pen 「ペン」の前に置かれている a は「1 つの」という意味を表します。

pen のように数えられる名詞が単数（1 個）の場合は、そのまま文中で使えず a を前に付けなければなりません。

apple 「りんご」のような発音（アップル）した時に最初の文字が母音（アイウエオ）ではじまる名詞の場合には、an（アン）をつけます。

I have an apple. 「私は、りんごを持っています。」

a や an は、「1 つの」という意味を持っていますが、特に日本語に訳す必要はありません。

ペンを何本か持っている場合には、some「いくつかの」を pen の前に、pen の最後に複数を意味する s を付けて pens とします。

よって、「私は、何本かペンを持っています。」という意味を表す英文は以下ようになります。

I have some pens.

「数本」という部分は、特に訳す必要はありません。

複数形は、「私は、ネコが好きです。」というような文でも用いられます。

このような場合、1 匹のネコが好きな訳ではなくたい様々な種類のネコが好きという意味を表します。

よって、好きという意味を持つ一般動詞 like と cats を用い、英文は以下ようになります。

I like cats.

一般動詞の現在形の否定文は、一般動詞の前に do not を置きます。

最初の I live in Japan. という文を否定文に書き換えてみましょう。

一般動詞 live の前に do not を置き、否定文は以下ようになります。

I do not live in Japan. 「私は、日本に住んでいません。」

また、do not の省略形 don't を用い、以下のように書くこともできます。

I don't live in Japan.

むしろ、こちらの方がよく使われます。

一般動詞の現在形の疑問文は、文の先頭に Do、文の最後にクエッションマーク ? を付けます。

最初の I live in Japan. という文を疑問文に書き換えると、自分に質問するのはおかしいので主語を you に変えて以下ようになります。

Do you live in Japan? 「あなたは、日本に住んでいますか。」

答え方は、Yes または No と do を用い、以下ようになります。

Yes, I do. 「はい、住んでいます。」

No, I do not (don't). 「いいえ、住んでいません。」

3 基本時制（現在形、過去形、未来形）[三人称単数 (一般動詞の現在形)]

まず、三人称単数とは何か解説します。

私 (I) や私達 (We) は、自分一人または自分を含む一つのグループなので一人称と呼ばれます。

また、私は一人だけなので一人称単数、私達は複数なので一人称複数となります。単数とは一人または一つを表す言葉です。

そして、あなた (you) やあなた達 (you) は話の中で二人目または二つ目のグループになるので二人称と呼ばれます。

あなたは一人だけなので二人称単数、あなた達は複数なので二人称複数となります。

最後に、彼 (He)、彼女 (She)、それ (It) や彼ら (they) などは話の中で三人目または三つ目になるので三人称と呼ばれます。

この中で、彼、彼女、それなど一人または一つを表すものは三人称単数、彼らなど複数を表すものは三人称複数となります。

簡単に言うと、三人称単数とは「私やあなた以外の一人の人または一つのもの」を指します。または、He、She、It に置き換えられる人やものです。

そして、一般動詞の現在形の文を作る時、主語が三人称単数の場合は動詞の最後に s を付ける必要があります。

例えば、「私は、日本に住んでいます。」という意味を表す英文は、以下のように一般動詞の live をそのまま用います。

I live in Japan.

また、以下のように主語が「私達」や「彼ら」の場合も、動詞の部分には live をそのまま用います。

We live in Japan. 「私達は、日本に住んでいます。」

They live in Japan. 「彼らは、日本に住んでいます。」

ところが、主語が三人称単数の He の場合は、He live in Japan. 「彼は、日本に住んでいます。」ではなく、以下のように一般動詞 live の最後に s を付けます。

He lives in Japan.

ゆっくり考えれば大丈夫だと思いますが、会話などですばやく英文を作らなければならない時に日本人はよく s を付け忘れます。

英語で一般動詞の現在形の文を作る時、主語が三人称単数の場合には一般動詞の最後に s を付けるということを忘れないようにしましょう。

主語が三人称単数の時、否定文は do not ではなく does not を一般動詞の前に置きます。そして、does not の後ろの一般動詞は s をとり動詞の原形にします。

これは、肯定文で動詞の後ろについている s が、否定文では do の後ろに付き does (= do + es) となるためです。

よって、He lives in Japan. という文を否定文に書き換えると以下ようになります。lives の s をとり、live と原形に直します。

He does not live in Japan. 「彼は、日本に住んでいません。」

does not の省略形、doesn't を用い、以下のように書くこともできます。
He doesn't live in Japan.

主語が三人称単数の時、疑問文は Do ではなく Does を文の先頭に置きます。そして、一般動詞は s をとり動詞の原形にします。

これは、lives の s が Do の後ろに付き Does (= Do + es) となるためです。

よって、He lives in Japan. という文を疑問文に書き換えると以下ようになります。
Does he live in Japan? 「彼は、日本に住んでいますか。」

lives の s をとり、live と原形に直すことを忘れないようにしましょう。

答え方は、Yes または No と does を用い、以下ようになります。

Yes, he does. 「はい、住んでいます。」
No, he does not (doesn't). 「いいえ、住んでいません。」

4 基本時制（現在形、過去形、未来形）[be 動詞の過去形 (was と were)]

まず、be 動詞の現在形について少し復習してみましょう。

be 動詞の現在形は、am, are, is の 3 つでした。そして、この 3 つの be 動詞は主語によって使い分けられます。

主語が I（私）の場合、以下のように be 動詞は am を用います。

I am a student. 「私は、生徒です。」

主語が You 「あなた、あなた達」、They 「彼 [女] ら、それら」や Boys 「少年達」などの複数形が主語の場合、be 動詞は以下のように are を用います。

The pens are in the box. 「ペンは、その箱の中にあります。」

主語が He 「彼」、She 「彼女」、It 「それ」や He, She, It に置き換えられるもの（三人称単数）の場合、be 動詞は以下のように is を用います。

Ken is in the room. 「ケンは、その部屋（の中）にいます。」

そして、be 動詞の意味は主に「～です」「～にある」「～にいる」の 3 つです。

それでは、これらの文を過去形に書き換えてみましょう。

be 動詞の過去形には was と were があり、現在形で am と is を用いる場合は was、are を用いる場合には were に変えます。

be 動詞の過去形の意味は、「～でした」「～にあった」「～にいた」となります。

よって、先ほどの be 動詞の現在形を用いた 3 つの英文を be 動詞の過去形を用いた文に書き換えると、それぞれ以下ようになります。

I was a student. 「私は、生徒でした。」

The pens were in the box. 「ペンは、その箱の中になりました。」

Ken was in the room. 「ケンは、その部屋（の中）にいました。」

また、過去形の文では以下のように、文末に ten years ago「10 年前」や yesterday「昨日」などの過去を表す言葉がよく用いられます。

I was a student ten years ago.「私は、10 年前に生徒でした。」
Ken was in the room yesterday.「ケンは、昨日その部屋にいました。」

次に、be 動詞の過去形の否定文について解説します。

be 動詞の過去形の文は、be 動詞の現在形の文と同様に be 動詞の後ろに not を付ければ否定文になります。

I was a student.「私は、生徒でした。」
The pens were in the box.「ペンは、その箱の中にありました。」
Ken was in the room.「ケンは、その部屋にいました。」

この 3 つの文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

I was not a student.「私は、生徒ではありませんでした。」
The pens were not in the box.「ペンは、その箱の中にありませんでした。」
Ken was not in the room.「ケンは、その部屋にいませんでした。」

以下のように、was not と were not の省略形、wasn't と weren't を用いることもできます。意味は同じです。

I wasn't a student.
The pens weren't in the box.
Ken wasn't in the room.

最後に、be 動詞の過去形の疑問文について解説します。

be 動詞の過去形の文は、現在形の be 動詞の文と同様に be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

よって、先ほどの 3 つの文を疑問文に書き換えると、以下ようになります。通常自分 (I) には質問しないので、1 つ目の文の主語はあなた (You) にします。

Were you a student?「あなたは、生徒でしたか。」
Were the pens in the box?「ペンは、その箱の中にありましたか。」
Was Ken in the room?「ケンは、その部屋にいましたか。」

文の先頭の文字を大文字にし、文の途中にくる主語の先頭の文字は小文字に (Ken は人の名前なので大文字のままです) することに注意しましょう。

答え方は、「はい」なら Yes、「いいえ」なら No を用い、その後に主語 + be 動詞 (was 又は were) という形を用います。

よって、上の疑問文に対しての答えは、それぞれ以下ようになります。

Were you a student?
Yes, I was.「はい、生徒でした。」
No, I wasn't.「いいえ、生徒ではありませんでした。」

Were the pens in the box?
Yes, they were.「はい、ありました。」
No, they weren't.「いいえ、ありませんでした。」

※ the pens の繰り返しをさけるために、主語にはそれら (they) を用います。

Was Ken in the room?
Yes, he was.「はい、いました。」
No, he wasn't.「いいえ、いませんでした。」

※ Ken の繰り返しをさけるために、主語には彼 (he) を用います。

5 基本時制（現在形、過去形、未来形）[一般動詞の過去形]

まずは、一般動詞の現在形を用いた以下の文を「私は、昨日テニスをしました。」という過去の文に書き変えてみましょう。

I play tennis. 「私は、テニスをします。」

現在形の文を過去形の文に書き換えるポイントは、一般動詞 play 「～する」の最後に ed をつけて過去形の played 「～した」に変えることです。

よって、一般動詞の過去形の文は、以下のようになります。

I played tennis yesterday. 「私は、昨日テニスをしました。」

現在形では、主語が三人称単数の He になると、He plays tennis. 「彼は、テニスをします。」というように一般動詞 play の最後に s を付けて plays としました。

ところが、過去形の文は、以下のように主語に関係なく play に ed を付けます。

He played tennis yesterday. 「彼は、昨日テニスをしました。」

live 「住む」や like 「好む」など最後が e で終わる一般動詞は、ed ではなく d だけつけ、lived 「住んでいた」、liked 「好んだ」となります。

よって、I live in Japan. 「私は、日本に住んでいます。」という一般動詞の現在形を用いた文を過去形の文に書き換えると、以下のようになります。

I lived in Japan last year. 「私は、去年日本に住んでいました。」

過去形の文は、過去を表す yesterday 「昨日」や last year 「去年」などの言葉が文末につくことが多いので合わせて覚えておきましょう。

このように、最後に ed を付けると過去形になる動詞は規則動詞と呼ばれます。

これに対し、ed を付けるのではなく、不規則な変化をして過去形なる動詞があります。例として、go 「行く」の過去形について考えてみます。

go の過去形は、最後に ed を付けるのではなく went （行った）と不規則に変形します。このような動詞は不規則動詞と呼ばれます。

では、以下の文の過去形を考えてみましょう。

I go to the park. 「私は、公園に行きます。」

以下のように、go を went に変えれば過去形の文になります。

I went to the park yesterday. 「私は、昨日公園に行きました。」

現在形では、主語が三人称単数の He になると、以下のように go の最後に es （最後が o で終わる動詞のため）を付けました。

He goes to the park. 「彼は、公園に行きます。」

過去形の文は、以下のように主語に関係なく go を went に変えるだけです。

He went to the park yesterday. 「彼は、昨日公園に行きました。」

不規則動詞の過去形は、動詞の過去形を覚えておく必要があります。

一般動詞の過去形の否定文は、didn't （または did not）を一般動詞の前に置き、その後ろにくる一般動詞を原形にします。

現在形の否定文は、don't （do not）や doesn't （does not）を一般動詞の前に置きましたが、過去形の場合 didn't を用います。間違えないようにしましょう。

それでは、以下の規則動詞と不規則動詞の過去形を用いた文を否定文に書き換えてみましょう。

I played tennis yesterday. 「私は、昨日テニスをしました。」

I went to the park yesterday. 「私は、昨日公園に行きました。」

この 2 つの文の否定文は、以下のようになります。

I didn't play tennis yesterday. 「私は、昨日テニスをしませんでした。」

I didn't go to the park yesterday. 「私は、昨日公園に行きませんでした。」

didn't を動詞の前に置くということに気を取られすぎて、一般動詞を played → play、went → go というように原形に直すことを忘れないようにしましょう。

現在形で主語が三人称単数の場合、否定文では doesn't を用いましたが過去形では主語に関係なく didn't を用います。

He played tennis yesterday. 「彼は、昨日テニスをしました。」

この文を否定文に書き換えると以下のようになります。

He didn't play tennis yesterday. 「彼は、昨日テニスをしませんでした。」

疑問文は Did を文の先頭に置き、一般動詞を原形にします。疑問文なので文の最後にクエッションマーク ? を付けます。

現在形の疑問文の場合は、Do や Does を文の先頭に置きましたが、過去形では Did を文の先頭に置きます。間違えないようにしましょう。

否定文のところで用いた 2 つの文を疑問文に書き換えてみると、以下のようになります。自分に質問することはあまりないので、主語をあなたに変えます。

Did you play tennis yesterday? 「あなたは、昨日テニスをしましたか。」

Did you go to the park yesterday? 「あなたは、昨日公園に行きましたか。」

Did を文の先頭に付けるということ以外に、動詞を played → play、went → go と原形に戻し、文の最後にクエッションマーク ? を付けることも忘れないようにしましょう。

答え方は、Yes または No と did を用い、以下のようになります。

Yes, I did. 「はい、しました。」

No, I did not (didn't) . 「いいえ、しませんでした。」

一般動詞の現在形の文では、主語が三人称単数の時の疑問文では Does を用いましたが、一般動詞の過去形では主語に関係なく Did を用います。

よって、He played tennis yesterday. 「彼は、昨日テニスをしました。」という文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Did he play tennis yesterday? 「彼は、昨日テニスをしましたか。」

答え方は、Yes または No と did を用い、以下のようになります。

Yes, he did. 「はい、しました。」

No, he did not (didn't) . 「いいえ、しませんでした。」

6 基本時制（現在形、過去形、未来形）[未来形 (will)]

未来形は、未来の状態や未来の予定などを表す時に用います。

未来のことを表す時には、will 「～するつもりです」「～するでしょう」を用います。will は助動詞と呼ばれ、動詞の前に置いて用います。

そして、will の後ろの動詞は原形（s などをつけない元の形）になります。

よって、He plays tennis. 「彼は、テニスをします。」という現在形の文を未来形の文に書き換えると、以下のようになります。

He will play tennis. 「彼は、テニスをするでしょう。」

未来形の文を作る時には動詞 play の前に未来を表す will を置くということの他に、動詞を plays から play（原形）に直すことに注意しましょう。

助動詞の後ろは動詞の原形なので、以下のように主語が三人称単数でも s をつける必要はありません。

・現在形の文

My mother cooks dinner. 「私の母は、夕食を作ります。」

※ my mother は三人称単数なので、動詞 cook に s を付けます。

・未来形の文

My mother will cook dinner. 「私の母は、夕食を作るでしょう。」

※主語が三人称単数でも will の後ろでは cook に s を付けません。

次に、be 動詞の未来形の文も考えてみましょう。

He is rich. 「彼は、お金持ちです。」という現在形の文を未来形の文に書き換えると、以下のようになります。

He will be rich. 「彼は、お金持ちになるでしょう。」

will の後ろには be 動詞の原形の「be」を置きます。

また、未来形の文には、以下のように文末に tomorrow（明日）などの「未来のある時点」を示す言葉が付くことがよくあります。

He will play tennis tomorrow. 「彼は、明日テニスをするでしょう。」

I will live in London next year. 「私は、来年ロンドンに住むつもりです。」

will を用いた未来形の文は will の後ろに not をつければ否定文になり、意味は「～するつもりはありません」や「～しないでしょう」となります。

よって、He will play tennis tomorrow. 「彼は、明日テニスをするでしょう。」という未来形の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He will not play tennis tomorrow. 「彼は、明日テニスをしないでしょう。」

また、will not の省略形 won't を用い、以下のように書くこともできます。

He won't play tennis tomorrow.

以下は、未来形の否定文の例です。

It won't rain tomorrow. 「明日、雨は降らないでしょう。」

I won't live in Paris next year. 「私は、来年パリに住むつもりはありません。」

They won't go to the party. 「彼らは、パーティーに行かないでしょう。」

will を用いた未来形の文は、will を文の先頭（主語の前）に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

そして、意味は「～するつもりですか」や「～するでしょうか」となります。

では、以下の未来形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He will play tennis tomorrow. 「彼は、明日テニスをするでしょう。」

この未来形の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will he play tennis tomorrow? 「彼は、明日テニスをするでしょうか。」

will は文の先頭にくるので w を大文字に、主語の he は文の先頭ではなくなるので、h を小文字に直すことに注意しましょう。

答え方は、Yes または No と will を用い、以下のようになります。

Yes, he will. 「はい、するでしょう。」
No, he will not (won't) . 「いいえ、しないでしょう。」

以下は、未来形の疑問文の例です。

Will it rain tomorrow? 「明日、雨は降るでしょうか。」
Will you live in Paris next year? 「あなたは、来年パリに住むつもりですか。」
Will they go to the party? 「彼らは、パーティーに行くでしょうか。」

7 基本時制（現在形、過去形、未来形）[will と be going to の違い]

まず、意思未来「～するつもり」の違いから解説します。

will はその場で決めた意思、be going to は事前に決めていた意思を表します。

例えば、パーティーに誘われた時、その場でパーティーに行くことを決めた場合は will を用い以下のようになります。

I will join the party. 「私は、（その）パーティーに参加します。」

これに対し、前もってパーティーに参加することを決めていた場合には be going to を用い以下のようになります。

I am going to join the party.
「私は、（その）パーティーに参加するつもりです。」

もう一つの違いは will の単純未来「～でしょう」と be going to の近接未来「～しそうだ」です。

まず、単純未来ですが、天気予報などを観て単純に「今夜、雨が降るでしょう。」と予測するような時に用います。

It will rain tonight. 「今夜、雨が降るでしょう。」

これに対し、話し手の主観や確信が入ると be going to を用います。

例えば、空を見て凄く曇っているので、話し手が自分の主観で「今夜、雨が降りそうです。」と言う場合には、be going to を用い以下のようになります。

It is going to rain tonight. 「今夜、雨が降りそうです。」

8 進行形（現在進行形）

例えば、以下の一般動詞の現在形の文は、現在部活動や友達と遊びでサッカーをするということを表し、今している最中という意味ではありません。

I play soccer.「私は、サッカーをします。」

「私は、今サッカーをしているところ（最中）です。」と、**現在ある動作をしているということを表す時に現在進行形を用います。**

現在進行形の形は、「be 動詞 (is, am, are) + 動詞の ing 形」です。

そして、意味は「(今) ～しているところです」や「(今) ～しています」で、現在形の「～します」や「～する」とは異なります。

よって、「私は、今サッカーをしているところです。」という意味の文は、以下のようになります。

I am playing soccer now.

このような現在進行形の文だと、私はまさに「今」サッカーをしている最中ということになります。

be 動詞は、以下のように主語によって変わります。

You are playing soccer now.「あなたは、今サッカーをしています。」

He is playing soccer now.「彼は、今サッカーをしています。」

動詞の ing 形を作る時に、最後が e で終わる make「作る」や write「書く」は、e を取って ing を付けるので、making や writing となります。

また、run「走る」や swim「泳ぐ」など、短母音（母音 1 個）＋子音で終わる動詞は最後の子音を重ねて ing をつけるので running や swimming となります。

これらは、よく用いられる動詞なので覚えておきましょう。

次に、現在進行形の否定文について考えてみましょう。

現在進行形の文は動詞に be 動詞が用いられるので、be 動詞の後ろに not を付ければ否定文になります。

よって、I am playing soccer now.「私は、今サッカーをしているところです。」という現在進行形の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I am not playing soccer now.「私は、今サッカーをしていません。」

この文の意味で注意することは、今はサッカーをしていないということを表しているだけということです。

もし、サッカーを全くしない場合には、一般動詞の現在形 play を否定して以下のように表します。

I don't play soccer.「私は、サッカーをしません。」

一般動詞の現在形の文と現在進行形の文の意味の違いには、気をつけましょう。

主語が He に変わると、以下のように be 動詞も is に変わります。

He is not playing soccer now.「彼は、今サッカーをしていません。」

is not の省略形 isn't を用いて以下のように書くこともできます。

He isn't playing soccer now.

最後に、現在進行形の疑問文について考えてみましょう。

現在進行形の文は動詞に be 動詞が用いられるので、be 動詞を主語の前に出し、文の最後にクエスチョンマーク？を付ければ疑問文になります。

よって、I am playing soccer now. という現在進行形の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Are you playing soccer now? 「あなたは、今サッカーをしていますか。」

自分に聞くことは普通ないので主語を I 「私」から you 「あなた」に、be 動詞も are に変えます。

答え方は、Yes または No と be 動詞 am を用い、以下のようになります。

Yes, I am. 「はい、しています。」

No, I am (I'm) not. 「いいえ、していません」

以下のように、主語が He に変わると be 動詞は is に変わります。

Is he playing soccer now? 「彼は、今サッカーをしていますか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞 is を用い、以下のようになります。

Yes, he is. 「はい、しています。」

No, he is not (isn't) . 「いいえ、していません」

現在進行形の形と意味をもう 1 度思い出してみましょう。

現在進行形の形は「be 動詞 (am, are, is) + 動詞の ing 形」、意味は「(今)～しているところです」でした。

例えば、「私は、今サッカーをしているところです。」という現在進行形の文は以下のようになります。

I am playing soccer now.

そして、以下の現在形の文との違いも確認しておきましょう。

I play soccer. 「私は、サッカーをします。」

現在進行形の文が「今サッカーをしている最中」ということを表すに対し、現在形の文は「サッカーをするけど今している最中ではない」ということを表します。

それでは、過去進行形について考えてみましょう。

過去進行形の文の形は、ベースは現在進行形と同じ「be 動詞 + 動詞の ing 形」で be 動詞を過去形にするだけです。

よって、過去進行形の文の形は「was または were + 動詞の ing 形」となります。

意味は「(過去のある時) ～していました」となり、過去のある瞬間にある動作をしている最中だったということを表します。

先ほどの現在進行形の文を過去進行形に書き換えると以下のようになります。

I was playing soccer then. 「私は、その時サッカーをしていました。」

then は、「その時」という意味です。

be 動詞は、主語によって変わります。

主語が We になると be 動詞は were に変わり、以下のようになります。

We were playing soccer then. 「私達は、その時サッカーをしていました。」

また、過去進行形の文では then 以外に、以下のように at 5p.m. yesterday「昨日の 5 時に」のような「過去のある瞬間」を表す言葉が文末に付きます。

I was playing soccer at 5 p.m. yesterday.
「私は、昨日の 5 時にサッカーをしていました。」

次に、過去進行形の否定文について考えてみましょう。

過去進行形の文は be 動詞が用いられているので、be 動詞の後ろに not を付ければ否定文になります。

そして、意味は「(過去のある時点で) ～していませんでした」となります。

それでは、以下の過去進行形の文を否定文に書き換えてみましょう。

I was playing soccer then.「私は、その時サッカーをしていました。」

否定文は be 動詞の後ろに not を付け、以下のようになります。

I was not playing soccer then.
「私は、その時サッカーをしていませんでした。」

was not の省略形 wasn't を用い、以下のように書いても同じ意味になります。

I wasn't playing soccer then.

be 動詞が were でも考え方は同じです。

We were playing soccer then.
「私達は、その時サッカーをしていました。」

この過去進行形の文を否定文に書き換えると以下のようになります。

We were not playing soccer then.
「私達は、その時サッカーをしていませんでした。」

were not の省略形 weren't を用い、以下のように書いても同じ意味になります。

We weren't playing soccer then.

最後に、過去進行形の疑問文について考えてみましょう。

過去進行形の文には be 動詞が用いられているので、be 動詞を主語の前に出し、文の最後にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

そして、意味は「(過去のある時に) ～していましたか」となります。

それでは、以下の過去進行形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He was playing soccer then.「彼は、その時サッカーをしていました。」

疑問文は、be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付け、以下のようになります。

Was he playing soccer then?「彼は、その時サッカーをしていましたか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞 was を用い、以下のようになります。

Yes, he was.「はい、(サッカーを) していました。」

No, he wasn't.「いいえ、(サッカーを) していませんでした。」

be 動詞が were の時も考え方は同じです。

They were playing soccer then.
「彼らは、その時サッカーをしていました。」

という過去進行形の文を疑問文に書き換えると以下のようになります。

Were they playing soccer then?
「彼らは、その時サッカーをしていましたか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞 were を用い、以下のようになります。

Yes, they were.

No, they weren't.

10 進行形（未来進行形）

未来進行形は、「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしているでしょう。」というような未来のある時点での進行中の動作を表します。

He will play tennis tomorrow. 「彼は、明日テニスをするでしょう。」

この未来形の文だと、「彼は明日テニスをする」ということは分かりますが、明日の何時にテニスをしているかまでは分かりません。

しかし、未来進行形を使うと、「彼は明日の午後 3 時にテニスをしている最中（だから携帯に電話してもでないだろう）」ということが分かります。

未来進行形の形は、進行形「be 動詞 + 動詞の ing 形」に未来形を表す will を付けて「will + be + 動詞の ing 形」となります。

will の後ろは動詞の原形なので、未来進行形で用いる be 動詞は必ず原形の be になります（am, are, is などに変化しません）。

では、上の未来形の文を「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしているでしょう。」という未来進行形の文に書き換えると以下ようになります。

He will be playing tennis at 3 p.m. tomorrow.

もう 1 つ以下の未来進行形の文をみてみましょう。

It will be raining at about 8:00 tomorrow.
「明日の 8 時頃、雨が降っているでしょう。」

この文は、明日一日中のことではなく明日の 8 時頃という未来のある時点で雨が降っている（最中）だろうということを表しています。

未来進行形の文は未来形の否定文と同じように、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の未来進行形の文を否定文に書き換えてみましょう。

He will be playing tennis at 3 p.m. tomorrow.
「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしているでしょう。」

will の後ろに not を付け、否定文は以下ようになります。

He will not be playing tennis at 3 p.m. tomorrow.
「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしていないでしょう。」

また、will not の省略形 won't を用いて以下のように書くこともできます。

He won't be playing tennis at 3 p.m. tomorrow.

そして、未来進行形と未来形の文との意味の違いにも注意しましょう。

この文では、ただ明日テニスをしないのではなく、明日の午後 3 時という未来のある時点で彼はテニスをしていないだろうということを表します。

もう 1 つ、以下の未来進行形の否定文をみてみましょう。

It will not be raining at about 8:00 tomorrow.
「明日の 8 時頃、雨が降っていないでしょう。」

この文は、明日一日中雨が降らないということではなく、明日の 8 時頃の時点では雨が降っていないだろうということを表します。

未来進行形の文は、未来形の文と同じように will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

以下の未来進行形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He will be playing tennis at 3 p.m. tomorrow.
「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしているでしょう。」

will を主語の前に出し、文末に？を付け、疑問文は以下ようになります。

Will he be playing tennis at 3 p.m. tomorrow?
「彼は、明日の午後 3 時にテニスをしているでしょうか。」

この文の場合、will は文の先頭にくるので W を大文字に直し、He は文の途中にくるので h を小文字に直すことにも注意しましょう。

また、未来進行形と未来形の文との意味の違いにも注意しましょう。

この文では、明日テニスをするのかを尋ねているのではなく、明日の午後 3 時という未来のある時点でテニスをしている最中であるかを尋ねています。

もう 1 つ以下の未来進行形の疑問文をみてみましょう。

Will it be raining at about 8:00 tomorrow?
「明日の 8 時頃、雨が降っているでしょうか。」

この文では、明日一日中のことではなく、明日の 8 時頃の時点で雨が降っているだろうかということを探っています。

11 進行形（状態動詞と動作動詞）

現在形の解説で、以下の文を例に用いました。

I live in Japan. 「私は、日本に住んでいます。」

実は、通常この文は、以下のような現在進行形の文にはできません。

I'm living in Japan now. 「私は、今日本に住んでいるところです。」

※仕事などで一定期間日本に住んでいるという場合には I'm living in Japan. と言えますが、これは現在進行中の動作を表している訳ではありません。

なぜでしょう？

現在進行形は、今まさに進行中の動作を表します。
そして、「その動作をすぐにやめたりすぐ始めることができる動詞」の時に現在進行形の文を作ることができます。

上の文で用いられている live 「住む」という動作は、3 秒後にやめられません。普通どこかに住み始めたらある程度の期間住み続けますよね。

その動作を瞬間的に開始したりやめたりできない動詞なんです。このような動詞は、状態動詞と呼ばれます。

状態動詞は他に、know 「知っている」、like 「好む」、love 「愛している」、believe 「信じる」、belong to 「所属する」、have 「持っている」、stand 「(建物などが) 立っている」などがあります。

このような動詞は進行形の文で用いることができません。状態動詞は少なく、頻度の高いものを上に書いておいたのでもっと覚えておきましょう！

逆に、その動作を瞬間的に変えられる play 「する」、run 「走る」、swim 「泳ぐ」などの動作動詞と呼ばれ、進行形の文で用いることができます。

I am playing tennis now. 「私は、今テニスをしているところです。」

上で例にあげた状態動詞以外のほとんどの動詞は動作動詞です。
進行形の文を作る時に、状態動詞か動作動詞かを注意しましょう。

＜例外があります＞

live は基本的に進行形の文章を作ることはできませんが、仕事の都合などで決められた期間一時的に住んでいて、その期間が過ぎたら普段住んでいる場所に戻ることが決まっている時には現在進行形の形が用いられます。

I'm living in London. 「私は、ロンドンに住んでいます。」

普段は日本に住んでいるが 1 ヶ月だけ仕事の都合でロンドンに住んでいて、1 ヶ月後に日本に戻るということが決まっているという場合、このように live を現在進行形で用いることができます。

＜注意すべき動詞＞

have には、「持っている」と「食べる」の意味があります。

「(何かを) 持っている」という場合、持っているものは急になくなったり、また見つかったりと状態は瞬間的にコロコロ変わらないので「持っている」という意味での have は状態動詞になります。

I have a car. 「私は車を持っています」

※車は、通常すぐになくなったり、見つかったりしません。

「食べる」という動作は、すぐにやめたりまた始めたりできるので、「食べる」という意味での have は動作動詞です。

I'm having dinner now. 「私は、今夕食を食べています。」

同様に、「建物が立っている」という意味の stand は状態動詞、「人が立っている」という意味での stand は動作動詞となるので注意しましょう。

状態動詞と動作動詞の知識は、完了形と完了進行形の使い分けの時にも必要になるのでしっかり覚えておきましょう。

12 現在完了形と現在完了進行形（現在完了形 [継続]）

現在完了形は、今まで勉強してきた現在形などの基本時制や進行形の文と考え方が全く異なり、日本人が苦手とする文法です。

しかし、英語の中では大切なところですのでじっくり解説していきます。

まず、現在完了形の形と 3 つの意味を覚えましょう。

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞（動詞の過去分詞形）」で、意味は以下の 3 つです。

- (1) 継続「(ずっと) ～し続けている」
- (2) 経験「(今までに) ～したことがある」
- (3) 完了、結果「～し終えたところです、～してしまった」

現在完了形は 1 つの形で 3 つの意味を表しますが、ここではまず現在完了形の継続の文について解説します。

では、実際に現在完了形の継続の文を作ってみましょう。

例えば、I live in Japan. 「私は、日本に住んでいます。」という現在形の文の動詞 live を have lived という形に変えると、以下のように現在完了形の文になります。

I have lived in Japan .

ところが、これだけだと経験の「私は、日本に住んでいたことがある。」と継続の「私は、(ずっと) 日本に住んでいる。」のどちらの意味が分かりません。

そこで、経験か継続のどちらの意味で用いているのかははっきりさせるために、現在完了形の継続、経験、完了にはそれぞれキーワードがあります。

ここでは、現在完了形の継続の意味を確認しながら継続の意味を表すキーワードについても解説していきます。

継続を表すキーワードは、継続の期間を表す for 「～間」と since 「～から」です。

for は、後ろに何年や何ヶ月など期間をそのままつけ、for two years 「2 年間」というような形で現在完了形の文の最後に付けます。

よって、先ほどの現在完了形の文が継続を表す時には、for two years を文の最後に付け、以下のようになります。

I have lived in Japan for two years. 「私は、2 年間日本に住んでいます。」

since は、後ろに過去のある時点を表す言葉を置き、since two years ago 「2 年前から」というような形で以下のように文の最後に付けます。

I have lived in Japan since two years ago.
「私は、2 年前から日本に住んでいます。」

for や since という継続期間を表すキーワードが付いているので、これらの文は経験ではなく継続の意味を表していると分かります。

現在完了形の文は、have (has) の後ろに not を付ければ否定文になります。

よって、He has lived in Japan since last year. 「彼は、昨年から日本に住んでいます。」という文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He has not lived in Japan since last year.
「彼は、昨年から日本に住んでいません。」

この現在完了形 [継続] の否定文は、去年アメリカなどの他の国に引っ越して、それ以来日本には住んでいない、というように現在までの継続の否定を表します。

上の否定文は、has not の省略形 hasn't を用い、以下のように書いても同じ意味になります。

He hasn't lived in Japan since last year.

現在完了形 [継続] の否定文の意味は「(ずっと) ～していない」となり、ある状態の現在までの継続の否定を表します。

現在完了形の文は、have (has) を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付ければ疑問文になります。

よって、He has lived in Japan since last year. 「彼は、昨年から日本に住んでいます。」という文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Has he lived in Japan since last year?
「彼は、昨年から日本に住んでいますか。」

この現在完了形 [継続] の疑問文は、「日本に住んでいる」という状態が現在まで継続しているかどうかを質問しています。

継続の疑問文の意味は、「(ずっと) ～し (続け) ていますか」となります。

答え方は Yes または No と have (has) を用い、以下のようになります。

Yes, he has. 「はい、住んでいます。」

No, he hasn't. 「いいえ、住んでいません。」

そして、継続の疑問文の場合、How long 「どの位の間」という疑問詞を用いて「継続の期間」を尋ねる疑問文がよく用いられます。

疑問詞は文の先頭に置き、その後ろに疑問文が続きます。

よって、以下のような疑問文になります。

How long has he lived in Japan?
「彼は、どの位の間日本に住んでいますか。」

答え方は for や since で継続期間を表し、以下のようになります。

For ten years. 「10 年間です。」

Since last year. 「昨年からです。」

13 現在完了形と現在完了進行形（現在完了形 [経験]）

まずは、現在完了形の形と意味について確認しておきましょう。

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞（動詞の過去分詞形）」で、意味は以下の 3 つです。

- (1) 継続「(ずっと) ～し続けている」
- (2) 経験「(今までに) ～したことがある」
- (3) 完了、結果「～し終えたところです、～してしまった」

しかし、現在完了形は形が 1 つなのに対し意味が 3 つあるので、例えば以下のように「have + 過去分詞」だけだと意味の判別ができません。

He has lived in Japan.

この文では、経験の「彼は、日本に住んでいたことがある。」と継続の「彼は、(ずっと) 日本に住んでいる。」のどちらの意味が分かりません。

そこで、経験か継続のどちらの意味で用いているのかははっきりさせるために、現在完了形の継続、経験、完了にはそれぞれキーワードがあります。

ここでは、現在完了形の経験の意味を確認しながら経験の意味を表すキーワードについても解説していきます。

経験のキーワードでよく用いられるものは、once「1 回」、twice「2 回」、three times「3 回」などの経験の回数を表す言葉と before「以前」です。

3 回以上の回数は、three, four などの数に times「～回」をつけ表します (four times「4 回」、ten times「10 回」など)。

そして、これらの経験を表すキーワードは文の最後に付けます。
よって、以下のように once や before が文末に付いていると、現在完了形の文は継続ではなく経験の意味を表します。

I have lived in Japan **once**.「私は、**1 回**日本に住んだことがあります。」

I have lived in Japan **before**.「私は、**以前**日本に住んだことがあります。」

そして、**現在完了形の経験には非常によく用いられ注意すべき表現が 1 つあります。それは、「～へ行ったことがある」です。**

通常、「行く」という動作を表す時は動詞は go です。

よって、「～へ行ったことがある」という経験を表す場合、go の過去分詞 gone を用いて現在完了形の形は have gone ではないかと思ってしまいます。

しかし、「**～へ行ったことがある**」という経験を表す時には、**have gone (to)** ではなく **have been (to)** を用いなければなりません。

よって、「私は、以前パリに行ったことがある。」という現在完了形の経験の文は以下ようになります。

I have been to Paris before.

現在完了形の経験の文で、have (has) gone は使わないので注意しましょう。

また、**通常現在完了形の文は have の後ろに not を付ければ否定文になります。**

ところが、**現在完了形の経験の否定文は、have や has の後ろに not ではなく、never「(今までに) 1 度も～ない」を付けます。**

よって、He has lived in Japan before.「彼は、日本に住んでいたことがある。」という現在完了形 [経験] の文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

He has never lived in Japan before.

「彼は、(今までに) 1 度も日本に住んだことがない。」

has never の省略形はありません。

また、現在完了形 [経験] の否定文では、以下のように文末の before をとってしまう場合もあります。

He has never lived in Japan.

経験の否定文の意味は、「(今までに) 1 度も～したことがない」となります。

通常、現在完了形の文は、have (has) を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付けば疑問文になります。

現在完了形の経験の疑問文の場合だけ、加えて過去分詞の前に ever「今までに～」を置きます。

よって、They have been to England before.「彼らは、以前イングランドに行ったことがあります」という現在完了形〔経験〕の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Have they ever been to England?
「彼らは、今までにイングランドに行ったことがありますか。」

ever は経験の疑問文のみで用いられるので注意しましょう。

経験の疑問文の意味は、「(今までに) ～したことがありますか」となります。

答え方は、Yes または No と have (has) を用い、以下のようになります。

Yes, they have.「はい、あります」

No, they haven't.「いいえ、ありません。」

そして、「2 回～したことがありますか」、「3 回～したことがありますか」といちいち経験の回数を尋ねることはあまりしません。

そこで、現在完了形の経験の疑問文では How many times「何回」という疑問詞を用い、経験の回数を尋ねる疑問文がよく用いられます

先ほどの現在完了形〔経験〕の疑問文を How many times を用いて書き換えると、以下のようになります。

How many times have they been to England?
「彼らは、何回イングランドに行ったことがありますか。」

答え方は、以下のよう回数に答えます。

Twice.「2 回です。」

14 現在完了形と現在完了進行形（現在完了形〔完了〕）

まずは、現在完了形の形と意味について確認しておきましょう。

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞（動詞の過去分詞形）」で、意味は以下の 3 つです。

- (1) 継続「(ずっと) ～し続けている」
- (2) 経験「(今までに) ～したことがある」
- (3) 完了、結果「～し終えたところです、～してしまった」

しかし、現在完了形は形が 1 つなのに対し意味が 3 つあるので、例えば以下のように「have + 過去分詞」だけだと意味の判別ができません。

He has finished the work.

この文では、「彼は、その仕事を終えたところです。」という完了の他に、「彼は、その仕事を終えたことがある。」という経験の意味の可能性もあります。

そこで、完了か経験のどちらの意味で用いているのかははっきりさせるために、現在完了形の継続、経験、完了にはそれぞれキーワードがあります。

ここでは、現在完了形の完了の意味を確認しながら完了の意味を表すキーワードについても解説していきます。

現在完了形の完了のキーワードは、just「ちょうど」、already「すでに」で、これらは have と過去分詞の間に置きます。

よって、先ほどの現在完了形の文で完了の意味を表す場合は以下のようになります。

He has just finished the work.
「彼は、ちょうどその仕事を終えたところです。」

He has already finished the work.
「彼は、すでにその仕事を終えてしまいました。」

下の文は、仕事を終えた結果→今仕事がないということも表すので、現在完了形の完了は完了・結果と分類されることもあります。

そして、**現在完了形の完了（結果）**でよく用いられ、**注意すべき表現があります。それは、「行く」という動作の完了です。**

「行く」という動作の完了には、片道で完了「行ってしまった」の場合と往復で完了「行って（帰って）来た」の 2 つがあります。

この 2 つの違いを表すために、been to と gone to を使います。

「行ってしまった」という片道で完了を表す時は have gone to を、「行って（帰って）きた」という往復で完了を表す時は have been to を用います。

実際に、例文をみてみましょう。

My brother has gone to the post office.
「私の弟は、郵便局へ行ってしまった（その結果今いない）。」

My brother has been to the post office.
「私の弟は、郵便局へ行ってきた（その結果今いる）。」

※（）内は訳す必要はありません。

「行ってしまった」という完了は「その結果今いない」、「行って（帰って）来た」という完了は「その結果今いる」という結果も表しています。

また、これらの表現の時には完了の意味を表していることは明らかなので、通常現在完了形の文中に just や already を付けません。

現在完了形の文は、have（has）の後ろに not を付ければ否定文になります。

そして、現在完了形の完了の否定文では just や already をとり、文末に yet 「まだ」を付けます。

よって、I have already finished the work. 「私は、すでにその仕事を終えてしまった。」という完了の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I have not finished the work yet. 「私は、まだその仕事を終えていません。」

have not の省略形 haven't を用い、以下のよう書いても同じ意味になります。

I haven't finished the work yet.

現在完了形 [完了] の否定文では、肯定文の just や already ではなく文末に yet 「まだ」というキーワードを付けます。

現在完了形 [完了] の否定文の意味は「まだ～していない」となります。

現在完了形 [完了] の文は、have（has）を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付ければ疑問文になります。

そして、**現在完了形の完了の疑問文では just や already をとり、文末に yet 「もう」を付けます。**

よって、I have already finished the work. 「私は、すでにその仕事を終えてしまった。」という完了の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Have you finished the work yet?
「あなたは、もうその仕事を終えてしまいましたか。」

現在完了形 [完了] の疑問文の場合、肯定文の just や already ではなく文末に yet 「もう」というキーワードを付けます。

そして、**疑問文の意味は「もう～してしまいましたか」となります。**

現在完了形 [完了] の否定文や疑問文では、just や already の代わりに yet を用いるということを覚えておきましょう。

15 現在完了形と現在完了進行形（現在形や過去形と現在完了形の違い）

まず、以下の現在形の文をみてみましょう。

He lives in Japan.「彼は、日本に住んでいます。」

この現在形の文は、彼が「今」日本に住んでいるということを表し、「過去にどこに住んでいたか」や「未来にどこに住んでいるか」については全く分かりません。

次に、以下の過去形の文をみてみましょう。

He lived in Japan last year.「彼は、昨年日本に住んでいました。」

この過去形の文は、彼は昨年という「過去のある時点」で日本に住んでいたということを表しています。

よって、彼が「今どこに住んでいるか」や「未来にどこに住んでいるか」については全く分かりません。

このように、現在形の文は「今」のことだけ、過去形の文は「過去のある時点」のことだけを表し、その他の時のことは分かりません。

このことから、**現在形や過去形（未来形も）が表す時は、「今」や「過去のある時点」という「点」であることが分かります。**

ここで、現在完了形について考えてみます。一番分かりやすいので、まずは現在完了形の継続の文をみてみましょう。

He has lived in Japan since last year.
「彼は、昨年から日本に住んでいます。」

この現在完了形の文だと、彼は日本に「昨年から今まで」ずっと住んでいるということが分かります。

現在完了形の文は、過去だけでもなく今だけでもなく「過去から今まで（ずっと）」と過去と現在が繋がっていることを表します。

現在形は「今」、過去形が「過去のある時点」という「点」を表すのに対し、現在完了形は過去から今まで時が繋がる「線」のようなイメージです。

次に、以下の現在完了形の経験の文をみてみましょう。

He has lived in Japan before.「彼は、以前日本に住んでいたことがある。」

この文も、「生まれた時から今まで」の経験を表すので「生まれた時という過去のある時点」と「今」が繋がっている「線」のようなイメージになります。

現在完了形の完了（結果）は、過去形の文と混乱し易いので気をつけましょう。

まず、以下の過去形の文をみて下さい。

He finished the work yesterday.「彼は、昨日その仕事を終えた。」

この過去形の文は、昨日という「過去のある時点」で仕事を終えたというように、昨日の時点での動作しか表しません。

よって、「今」のことは分からないので、今はたくさんの仕事をしている可能性があります。あくまで、昨日仕事を終えたということしか分かりません。

次に、以下の現在完了形の完了の文をみてみましょう。

He has already finished the work.
「彼は、すでにその仕事を終えてしまった。」

この現在完了形の文は、「過去のある時点」で仕事を終えて、その結果「今」もまだすべき仕事がないということを表します。

よって、過去の動作が完了し、その結果として今の状態が分かります。やはり、過去のある時点と今が繋がる「線」のようなイメージになります。

過去形の文と現在完了形の完了〔結果〕の文は、日本語に訳すと非常に似ていますが表す意味は全く異なります。

もう 1 つ過去形と現在完了形 [完了] の例文を比べてみましょう。

以下の過去形の文は、「過去のある時点」で弟が郵便局へ行ったことだけを表し、「今」家に帰ってきているか、まだ外出中かは分かりません。

My brother went to the post office. 「私の弟は、郵便局へ行きました。」

ところが、以下の現在完了形 [完了] の文は、「過去のある時点」で弟は郵便局へ行ってしまい、「今」もいないということを表します。

My brother has gone to the post office.
「私の弟は、郵便局へ行ってしまった。」

よって、**現在完了形は過去と今が繋がる「線」**のようなイメージになります。

16 現在完了形と現在完了進行形（現在完了進行形）

現在完了進行形の形は「have (has) + been + 動詞の ing 形」、意味は現在完了形の継続と同じ「～し続けている」です。

現在完了進行形の形は、名前の通り現在完了形と進行形がくっついた形です。

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞」、進行形の形は「be 動詞 + 動詞の ing 形」なのでこれらを足し算すると以下ようになります。

have (has) + 過去分詞

+ be 動詞 + 動詞の ing 形

have (has) + been + 動詞の ing 形

↑ be 動詞の過去分詞

そして、これが現在完了進行形の形となります。

意味は、現在完了形の継続「～し続けている」と同じですが、全く同じなら現在完了進行形は必要ありません。

よって、現在完了形の継続と現在完了進行形の継続は、ある条件でどちらの継続を使うか決まります。それは、動詞の種類です。

動詞の種類とは、状態動詞と動作動詞のことです。

状態動詞とは、その状態をすぐに変えることができない動詞 live, know, believe など、通常進行形 (ing 形) にできません。

動作動詞とは、その動作をすぐに変えることができる動詞 play, run, study など、進行形 (ing 形) にすることができます。

状態動詞は通常進行形（ing 形）にできないので、状態動詞の継続の時には以下のように現在完了形を用います。

I have lived in Japan for ten years.
「私は、10 年間（ずっと）日本に住んでいます。」

逆に動作動詞は進行形（ing 形）にできるので、動作動詞の継続の時には以下のように現在完了進行形を用います。

I have been playing tennis since this morning.
「私は、朝から（ずっと）テニスをしています。」

現在完了進行形には経験や完了の意味はなく、継続「～し続けている」の意味しかありません。キーワードも現在完了形の継続と同じ for と since です。

よって、現在完了進行形は「have（has）＋been＋動詞の ing 形」という形と現在完了形の継続との違いを抑えておけば大丈夫です。

現在完了進行形は、have（has）の後ろに not を付ければ否定文になります。

意味は、「（ずっと）～し続けていません」となります。

それでは、以下の現在完了進行形の文を否定文に書き換えてみましょう。

I have been playing tennis since this morning.
「私は、朝から（ずっと）テニスをしています。」

否定文は、have の後ろに not を付け以下ようになります。

I have not been playing tennis since this morning.
「私は、朝から（ずっと）テニスをしていません。」

have not の省略形 haven't を用いて、以下のように書くこともできます。

I haven't been playing tennis since this morning.

もう 1 つ、以下の現在完了進行形の文の否定文を考えてみましょう。

It has been raining for a week.
「1 週間（ずっと）雨が降り続いています。」

rain は動作動詞（雨は降ったり止んだりころころ変わる）なので現在完了進行形で継続を表し、主語が三人称単数なので have ではなく has を用います。

否定文は、has の後ろに not を付け、以下ようになります。

It has not been raining for a week.
「1 週間（ずっと）雨が降っていません。」

has not の省略形 hasn't を用いて、以下のように書くこともできます。

It hasn't been raining for a week.

現在完了進行形の文は、現在完了形と同じように have（has）を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

意味は、「（ずっと）～し続けていますか」となります。

それでは、以下の現在完了進行形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He has been playing tennis since this morning.
「彼は、朝から（ずっと）テニスをし（続け）ています。」

疑問文は、has を主語の前に出して文末に？を付け、以下ようになります。

Has he been playing tennis since this morning?
「彼は、朝から（ずっと）テニスをし（続け）ていますか。」

答え方も現在完了形の時と同様に Yes または No と have（has）を用い、以下ようになります。

Yes, he has. 「はい、彼は（テニスをし）続けています。」

No, he hasn't. 「いいえ、彼は（テニスをし）続けていません。」

現在完了形の継続の疑問文と同様に、現在完了進行形の疑問詞も How long 「どの位の間～」を用いて継続の期間を尋ねることもできます。

上で作った疑問文を How long を用いた疑問文に書き変えてみましょう。

疑問詞 How long を文の先頭に置き、その後ろに現在完了進行形の疑問文を付け、以下ようになります。

How long has he been playing tennis?
「彼は、どの位の間テニスをし（続け）ていますか。」

継続の期間が分からなくて尋ねているので、since ～ の部分は省略されます。

答え方は、期間を表す for や since を用いて以下ようになります。

He has been playing tennis for two hours.
「彼は、2 時間（ずっと）テニスをし（続け）ています。」

He has been playing tennis since 10 a.m.
「彼は、午前 10 時から（ずっと）テニスをし（続け）ています。」

これは丁寧な答え方で、会話では通常以下のように期間だけ答えます。

For two hours. 「2 時間です。」

Since 10 a.m. 「午前 10 時からです。」

17 過去完了形と過去完了進行形（過去完了形 [継続]）

現在完了形の形は、「have (has) + 過去分詞」です。そして、過去完了形の形は、現在完了形の have を過去形の had に変えて「had + 過去分詞」となります。

過去完了形には、現在完了形と同じく「継続」、「経験」、「完了」の 3 つの意味がありますが、現在完了形とは少し異なります。

ここでは、過去完了形の継続の意味について解説していきます。

まず、以下の現在完了形の継続の文をみてみましょう。

I have lived in Japan for two years. 「私は、2 年間日本に住んでいます。」

この文は、2 年前から「今まで」の間日本に住んでいることを表しています。

このように、現在完了形の継続は過去のある時点から「今まで」何らかの状態が続いていることを表します。

今度は、過去完了形の継続の文について考えてみましょう。

上の現在完了形の文の have を had に変えると過去完了形の文になります。

I had lived in Japan for two years.
「私は、2 年間日本に住んでいました。」

継続のキーワードは、現在完了形の継続と同じように for 「～間」を用います。

この過去完了形の文は、過去のある時点から「過去のある時点まで」2 年間日本に住んでいたということを表します。

現在完了形の継続は、何らかの状態が過去のある時点から「今まで」続いているということを表します。

これに対し、過去完了形の継続は過去のある時点から「過去のある時まで」何らかの状態が続いていたということを表します。

よって、日本語に訳す時、現在完了形の継続は「～し続けている」であるのに対し、過去完了形の継続は「～し続けていた」となるので注意しましょう。

過去完了形の継続の文には、「過去のある時まで」を表す言葉や文が後ろに付くことがよくあります。

過去完了形を用いた以下の文をみてみましょう。

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前に 2 年間日本に住んでいました。」

この文の before I went to America の部分は、日本に住んでいるという状態が続いた時点（過去のポイント）を表しています。

このように、過去完了形の継続の文では、「過去のある時点まで」を表す文を付けることにより過去のある時点までの継続を表していることを明確にします。

そして、過去完了形の継続の否定文は、had の後ろに not を付け、「(過去のある時点まで) ～し続けていなかった」となります。

以下の過去完了形 [継続] の肯定文を否定文に書き換えてみます。

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前 2 年間日本に住んでいました。」

この過去完了形 [継続] の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I had not lived in Japan before I went to America.
「私は、アメリカに行く前に (ずっと) 日本に住んでいませんでした。」

通常、「〇年間住んでいなかった」というような言い方はしませんから、for two year は省略します。

過去完了形を用いずに、以下のように過去形を用いることもできます。
継続の意味はなくなりますが、言いたいことは伝わります。

I didn't live in Japan before I went to America.
「私は、アメリカに行く前に日本に住んでいませんでした。」

過去完了形の継続の疑問文は、had を主語の前に出して文末にクエッションマーク ? を付け、「(過去のある時点まで) ～し続けていましたか」となります。

以下の過去完了形 [継続] の肯定文を疑問文に書き換えてみます。

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前 2 年間日本に住んでいました。」

この過去完了形 [継続] の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Had you lived in Japan before you went to America?
「あなたは、アメリカに行く前に (ずっと) 日本に住んでいましたか。」

自分に質問することは普通ないので主語を you に変えます。また、「〇年間住んでいましたか」というような質問は普通しないので、for two year は省略します。

過去完了形を用いずに、以下のように過去形を用いることもできます。
継続の意味はなくなりますが、言いたいことは伝わります。

Did you live in Japan before you went to America?
「あなたは、アメリカに行く前に日本に住んでいましたか。」

18 過去完了形と過去完了進行形（過去完了形 [経験]）

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞」、過去完了形の形は、have を過去形にして「had + 過去分詞」です。

未来完了形の形は、現在完了形の have に未来を表す will を付け、「will have + 過去分詞」となります。

意味は、現在完了形や過去完了形と同じく完了、経験、継続の 3 つがあります。

ここでは、未来完了形の経験について解説します。

未来完了形の経験の意味は、「(未来のある時点までに) ~することになる(でしょう)」です。

以下の未来完了形の文をみてみましょう。

I will have read the book three times if I read it again.
「もしもう 1 度読むと、私は 3 回その本を読むことになる(でしょう)。」

この文は、もう 1 度その本を読むという「未来のある時点まで」の経験 (3 回読む) を表します。

未来完了形の経験は、「生まれた時」から「未来のある時点」までの経験 (回数) を表します。

上の未来完了形の経験の文だと、「生まれた時」ともう 1 度その本を読むという「未来のある時点」が「線」で繋がっています。

そして、その間で 3 回その本を読むことを経験するということを表しています。

未来完了形の経験の文を、以下の現在完了形と過去完了形の経験の文と比べてみましょう。

まず、現在完了形の経験の文です。

I have read the book twice.
「私は、(今までに) 2 回その本を読んだことがあります。」

この文は、生まれた時から「今まで」の経験 (2 回読んだ) を表します。

次に、過去完了形の経験の文です。

I had read the book once before I was 10 years old.
「私は、10 歳(になる)までにその本を 1 回読んだことがありました。」

この文は、生まれた時から 10 歳(になった)という「過去のある時点」までに、1 回読んだという経験を表します。

これからも分かりますが、完了形の経験はある時点までの経験を表します。

そして、現在完了形は「今まで」、過去完了形は「過去のある時点まで」、未来完了形は「未来のある時点まで」の経験を表します。

現在完了形と過去完了形の解説でも同じことを書きましたが、完了形はある時点とある時点が繋がっている「線」イメージです。

未来完了形は、未来のある時点を終点とした「線」のイメージです。

未来完了形の文は、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の未来完了形 [経験] の肯定文を否定文に書き換えてみましょう。

I will have been to England once before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度イングランドに行くことになる(でしょう)。」

この未来完了形 [経験] の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I won't have been to England before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前にイングランドに行くことはない(でしょう)。」

この未来完了形 [経験] の否定文は、20 歳になるという「未来のある時点まで」にイギリスに行くという経験をしないということを表しています。

未来完了形の経験の否定文では、以下のように not の代わりに never 「1 度も～ない」を用いることもあります。

I will never have been to England before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度もイングランドに行くことはない(でしょう)。」

未来完了形の文は、will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

以下の未来完了形〔経験〕の肯定文を疑問文に書き換えてみましょう。

I will have been to England once before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度イングランドに行くことになる（でしょう）。」

この未来完了形〔経験〕の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will you have been to England before you are 20 years old?
「あなたは、20 歳になる前にイングランドに行きますか。」

この未来完了形〔経験〕の疑問文は、20 歳になるという「未来のある時点まで」に、イングランドに行くことを経験をするかということを質問しています。

19 過去完了形と過去完了進行形（過去完了形〔完了〕）

現在完了形の形は、「have (has) + 過去分詞」です。そして、過去完了形の形は、現在完了形の have を過去形の had に変えて「had + 過去分詞」となります。

過去完了形には、現在完了形と同じく「継続」、「経験」、「完了」の 3 つの意味がありますが、現在完了形とは少し異なります。

ここでは、過去完了形の完了の意味について解説していきます。

まず、現在完了形の完了の文をみましょう。

I have already finished the work.
「私は、すでにその仕事を終えてしまった。」

現在完了形の完了は、過去から行っていた動作が過去から現在のどこかで完了したということを表します。

次に、過去完了形の完了の文について考えてみましょう。

上の現在完了形の文の have を had に変えると過去完了形の文になります。

I had already finished the work when my boss came.
「上司が来た時、私はすでにその仕事を終えてしまっていた。」

この過去完了形の文は、上司が来たという「過去のある時点」までの過去のどこかで仕事が完了していたということを表しています。

日本語訳は「～してしまった」と似ていますが、現在完了形の完了は「現在」までのどこかで動作が完了したということ「(今までに) ～してしまった」、過去完了形の完了は「過去のある時点」までのどこかで動作が完了したということ「(過去のある時点までに) ～してしまった」を表します。

20 過去完了形と過去完了進行形（疑問詞を用いた過去完了形の疑問文）

そして、過去完了形の完了の否定文は had の後ろに not を付け、「(過去のある時点までに) ~し終えていませんでした」となります。

以下の過去完了形 [完了] の肯定文を否定文に書き換えてみます。

I had already finished the homework when my friend got to my house.
「友達が家に着いた時、私はすでにその宿題を終えてしまっていた。」

この過去完了形 [完了] の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I had not finished the homework when my friend got to my house.
「友達が家に着いた時、私は (まだ) 宿題を終えていませんでした。」

had not の省略形 hadn't を用いて、以下のよう書くこともできます。

I hadn't finished the homework when my friend got to my house.

過去完了形の完了の疑問文は、had を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付け、「(過去のある時点までに) ~し終えていましたか」となります。

以下の過去完了形 [完了] の肯定文を疑問文に書き換えてみます。

I had already finished the homework when my friend got to my house.
「友達が家に着いた時、私はすでにその宿題を終えてしまっていた。」

この過去完了形 [完了] の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Had you finished the homework when your friend got to your house?
「友達が家に着いた時、あなたは (すでに) 宿題を終えていましたか。」

この場合、自分に質問することはまずありえませんか、主語を I 「私」 から you 「あなた」 に、my 「私の」 を your 「あなたの」 に変えます。

just 「ちょうど」 や already 「すでに」 は、過去完了形の完了の否定文や疑問文には付けないことが多いです。

疑問詞 How long 「どの位の間」と How many times 「何回」を用いた過去完了形の疑問文について解説します。

How long 「どの位の間」は継続の疑問文で、How many times 「何回」は経験の疑問文で用います。これらは What 「何」などと同じ疑問詞なので、疑問文の前に付けて使います。

まず、How long 「どの位の間」を過去完了形の継続の文に付けると、以下のようになります。

How long had you lived in Japan before you went to America?
「あなたは、アメリカに行く前にどの位の間日本に住んでいましたか。」

How long をつけた過去完了形の継続の疑問文は、過去のある時点までの何らかの状態の継続期間を尋ねる時に用います。
答え方は、過去完了形の文の最後に for を用いて継続期間を付けます。

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前 2 年間日本に住んでいました。」

これは丁寧な答え方で、会話では通常以下のように継続期間だけ答えます。

For two years. 「2 年間です。」

次に、How many times 「何回」を経験の疑問文の前に付けると、以下のようになります。

How many times had you visited America before you were 20 years old?
「あなたは、20 歳になる前に何回アメリカを訪れたことがありましたか。」

How many times をつけた過去完了形の経験の疑問文は、過去のある時点までに何らかの動作を経験した回数を尋ねる時に用います。
答え方は、過去完了形の文の最後に経験した回数を付けます。

I had visited America twice before I was 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 2 回アメリカを訪れたことがありました。」

これは丁寧な答え方で、会話では通常以下のように経験の回数だけ答えます。
Twice. 「2 回です。」

21 過去完了形と過去完了進行形（過去完了形 [大過去]）

現在完了形と過去完了形で解説しましたが、完了形は時に幅があります。

例えば、以下の過去完了形の文は、パリに引っ越したという「過去の時点」とパリに引っ越す 5 年前という「過去の時点」の間の継続を表しています。

I had lived in Japan for five years before I moved to Paris.
「パリに引っ越す前に、私は 5 年間日本に住んでいました。」

このように、過去完了形は、過去のある時点とそれより前の過去のある時点が繋がっている「線」のイメージです。

ところが、過去完了形には「点」の意味を持つ特殊な使い方があり、大過去と呼ばれます。

大過去とは、過去よりさらに前の過去のある時点のことを表します。
(大過去は点のイメージになります。)

これを解説するために、「私は、買ったペンを失くした。」という文を英語で考えてみます。

I lost my pen which I bought. 「私は、買ったペンを失くした。」

この文で用いられている which は関係代名詞で、which I bought の部分が my pen を修飾しています。

関係代名詞まで解説すると膨大な量になってしまうので、ここでは lost と bought の時制に注目して下さい。

この文では、lost 「失くした」と bought 「買った」の両方の動作に過去形を用いています。

この文は一見よさそうですが、これだと「失くした」と「買った」という動作が（ほぼ）同時に起こったことになってしまいます。

しかし、買ったと同時にペンを失くしたということは普通ありえません。

通常、ペンを買って使っていてしばらくした後で失くしたというように、「買った」という動作は「失くした」という動作より前に起きます。

しかし、lost 「失くした」という過去の時点より、「買った」のがさらに前に起きたということを表したいのですが、過去形では表せません。

そこで、ある過去の時点よりさらに前の過去に起こったことを表すために、過去完了形と同じ形「had + 過去分詞」を用います。

そして、これは大過去と呼ばれます。

よって、「私は、買ったペンを失くした。」ということを言いたい時には、「買った」という部分には以下のように大過去の had bought を用います。

I lost my pen which I had bought.

大過去は、形は過去完了形と同じですが、時に幅はなく「過去のある時点」より「さらに前の過去のある時点」に起こったことを表します。

22 過去完了形と過去完了進行形（過去形と過去完了形の違い）

まず、以下の過去形の文と過去完了形の継続の文の違いを考えてみましょう。

I lived in Japan before I went to America.
「私は、アメリカに行く前に日本に住んでいました。」

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前 2 年間日本に住んでいました。」

まず、上の過去形の文は日本に住んでいたという「過去のある時点」での状態を表しているだけで点のようなイメージになります。

※しかし、住んでいたという場合には前後半年間など、時に幅のある大きな点のイメージになります。

これに対し、過去完了形の継続の文は「過去のある時からある時まで」何らかの状態が継続していたことを表しており、線のイメージになります。

下の過去完了形の文は、アメリカに行く 2 年前からアメリカに行った時までの 2 年間住むという状態が継続していたことを表しています。

過去形は過去のある時点の動作や状態を表し点のイメージに、過去完了形は過去のある時と過去のある時が繋がっている線のイメージになります。

次に、以下の過去形の文と過去完了形の経験の文の違いを考えてみましょう。

I visited America before I was 20 years old.
「私は、20 歳になる前にアメリカを訪れた。」

I had visited America twice before I was 20 years old.
「私は、20 歳になるまでに 2 回アメリカを訪れたことがあった。」

まず、上の過去形の文は何回行ったという経験は表しておらず、ただ 20 歳になる前の過去のある時点でアメリカを訪れたということだけを表しています。

これに対し過去完了形の経験の文は、生まれた時から 20 歳になった時という過去のある時点までの間で 2 回アメリカを訪れたという経験を表しています。

最後に、過去形の文と過去完了形の完了の文の違いを考えてみましょう。

I finished the work when my friend got to my house.
「私の友達が家に着いた時、私は宿題を終えた。」

I had already finished the work when my friend got to my house.
「私の友達が家に着いた時、私はすでに宿題を終えていました。」

まず、過去形の文は「友達が着いた」という時点と「宿題を終えた」という時点に時の幅がないので、この 2 つの出来事が同時に起こったような意味になります。

つまり、友達がこんなにちわと挨拶して玄関から入ってきたまさに時、宿題が終わったということになります。

これに対し、過去完了形の完了の文は、「過去のある時点と過去のある時点」が（線で）繋がっているような意味を表します。

よって、過去完了形の文は、私が「宿題を終えた」後しばらくして「友達が着いた」という意味を表しています。

「宿題を終えた」時点と「彼が着いた」時点に時間差（時間の幅）があり、その 2 つの過去に結びつきがある（線で繋がっている）ことを表しています。

過去形は過去のある時点（1 点）での動作や状態を表すのに対し、過去完了形は過去のある時点とある時点が「線」で繋がっているような意味を持ちます。

完了形は「線」、基本時制（現在形や過去形）は「点」のイメージです。

日本語を話す時は、これらを区別せずに自然に使い分けているので英語でいざ考えると混乱しやすい部分なので注意しましょう。

23 過去完了形と過去完了進行形（過去完了進行形）

過去完了進行形の形は「had + been + 動詞の ing 形」、意味は過去完了形の継続と同じ「～し（続け）ていた」です。

過去完了進行形の形は、名前の通り過去完了形と進行形がくっついた形です。

過去完了形の形は「had + 過去分詞」、進行形の形は「be 動詞 + 動詞の ing 形」なのでこれらを足し算しすると以下ようになります。

had + 過去分詞

+) be 動詞 + 動詞の ing 形

had + been + 動詞の ing 形

↑ be 動詞の過去分詞

そして、これが過去完了進行形の形となります。

意味は、過去完了形の継続「（過去のある時点まで）～し（続け）ていた」と同じですが、全く同じなら過去完了進行形は必要ありません。

よって、過去完了形の継続と過去完了進行形の継続は、ある条件でどちらの継続を使うか決まります。それは、動詞の種類です。

動詞の種類とは、状態動詞と動作動詞のことです。

状態動詞とは、その状態をすぐに変えることができない動詞 live, know, believe など、通常進行形（ing 形）にできません。

動作動詞とは、その動作をすぐに変えることができる動詞 play, run, study など、進行形（ing 形）にすることができます。

状態動詞は通常進行形（ing 形）にできないので、状態動詞の継続の時には以下のように過去完了形を用います。

I had lived in Japan for two years before I went to America.
「私は、アメリカに行く前 2 年間日本に住んでいました。」

逆に、動作動詞は進行形（ing 形）にできるので、動作動詞の継続の時には以下のように過去完了進行形を用います。

I had been studying English for two hours before he came to my house.
「私は、彼が私の家に来る前、2 時間英語を勉強し（続け）ていました。」

過去完了進行形には経験や完了の意味はなく、継続「（過去のある時点まで）～し（続け）ていた」の意味しかありません。

よって、過去完了進行形は「had + been + 動詞の ing 形」という形と過去完了形の継続との違いを抑えておけば大丈夫です。

過去完了進行形は、had の後ろに not を付ければ否定文になります。

そして、意味は「～して（し続けて）いませんでした」です。

それでは、以下の過去完了進行形の文を否定文に書き換えてみましょう。

I had been studying English for two hours before he came to my house.
「私は、彼が私の家に来る前、2 時間英語を勉強し（続け）ていました。」

否定文は、had の後ろに not を付け以下ようになります。

I had not been studying English for two hours before he came to my house.
「私は、彼が私の家に来る前、2 時間英語を勉強し（続け）ていませんでした。」

この過去完了進行形の否定文は、「彼が私の家に来た」という過去の時点より前の 2 時間全く英語を勉強していなかったという意味になります。

had not の省略形 hadn't を用いて、以下のように書いても同じ意味になります。

I hadn't been studying English for two hours before he came to my house.

過去完了進行形の文は、過去完了形と同じように had を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

そして、意味は「～し（続け）ていましたか」となります。

それでは、以下の過去完了進行形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He had been studying English for two hours before I got to his house.
「彼は、私が彼の家に着く前、2 時間英語を勉強し（続け）ていました。」

疑問文は、had を主語の前に出して文末に？を付けて以下のようになります。

Had he been studying English for two hours before I got to his house?
「彼は、私が彼の家に着く前、2 時間英語を勉強し（続け）ていましたか。」

この過去完了進行形の疑問文は、「私が彼の家に着いた」という過去の時点より前の 2 時間英語を勉強し続けていたかどうかを尋ねる時に用います。

答え方は、Yes または No と had を用い、以下のようになります。

Yes, he had. 「はい、していました。」

No, He hadn't. 「いいえ、していませんでした。」

過去完了進行形で継続期間を尋ねる時には、過去完了形の継続の疑問文と同様に How long 「どの位の期間」を文の先頭に置きます。以下は例文です。

How long had he been studying English before I got to his house?
「彼は、私が彼の家に着く前、どの位の間英語を勉強していましたか。」

答え方は、期間を表す for を用い、以下のようになります。

For two hours. 「2 時間です。」

24 未来完了形と未来完了進行形（未来完了形 [継続]）

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞」、過去完了形の形は、have を過去形にして「had + 過去分詞」です。

未来完了形の形は、現在完了形の have に未来を表す will を付け、「will have + 過去分詞」となります。

意味は、現在完了形や過去完了形と同じく完了、経験、継続の 3 つがあります。

ここでは、未来完了形の継続について解説します。

未来完了形の継続の意味は、「(未来のある時点まで) ～し続けている (でしょう)」または「～し続けることになる (でしょう)」です。

以下の未来完了形の文をみてみましょう。

I will have lived in Tokyo for four years next August.
「私は、来年の 8 月で 4 年間東京に住んでいることになります。」

この文は、来年という「未来のある時点」で 4 年間東京に住んでいることになるというように、「未来のある時点まで」の継続を表します。

未来完了形の継続は、未来のある時点まである状態が継続するだろうということを表します。

未来完了形の継続の文を、以下の現在完了形と過去完了形の継続の文と比べてみましょう。

まずは、現在完了形の継続の文です。

I have lived in Tokyo for three years.
「私は、3 年間東京に住んでいます。」

この文は、「今まで」3 年間東京に住んでいるという意味になります。現在完了形の継続の文は、「今まで」の継続を表します。

次に、過去完了形の継続の文です。

I had lived in Tokyo for two years till last August.
「私は、昨年 の 8 月 まで 2 年間東京に住んでいました。」

この文は、昨年の終わりという「過去の時点まで」2 年間東京に住み続けていたという意味になり、「過去のある時点まで」の継続を表します。

このように、完了形の継続はある時点までの継続を表します。

そして、**現在完了形は「今まで」、過去完了形は「過去のある時点まで」、未来完了形は「未来のある時点まで」の継続を表します。**

現在完了形と過去完了形の解説でも同じことを書きましたが、完了形はある時点とある時点が繋がっている「線」イメージです。

未来完了形は、未来のある時点を終点とした「線」のイメージです。

未来完了形の文は、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の未来完了形 [継続] の肯定文を否定文に書き換えてみましょう。

I will have lived in Japan till next year.
「私は、来年まで日本に住んでいるでしょう。」

この未来完了形 [継続] の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I will not have lived in Japan till next year.
「私は、来年まで日本に住んでいないでしょう。」

will not の省略形 won't を用い、以下のよう書くこともできます。

I won't have lived in Japan till next year.

この未来完了形 [継続] の否定文は、来年という「未来のある時点まで」日本に住むという状態が継続しないだろうということを表しています。

未来完了形の文は、will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付ければ疑問文になります。

以下の未来完了形 [継続] の肯定文を疑問文に書き換えてみましょう。

I will have lived in Japan till next year.
「私は、来年まで日本に住んでいるでしょう。」

この未来完了形 [継続] の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will you have lived in Japan till next year?
「あなたは、来年まで日本に住んでいますか。」

自分に質問することは普通ないので、主語を you 「あなた」に変えます。

この未来完了形 [継続] の疑問文は、来年という「未来のある時点まで」日本に住むという状態が継続するかということを質問しています。

25 未来完了形と未来完了進行形（未来完了形〔経験〕）

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞」、過去完了形の形は、have を過去形にして「had + 過去分詞」です。

未来完了形の形は、現在完了形の have に未来を表す will を付け、「will have + 過去分詞」となります。

意味は、現在完了形や過去完了形と同じく完了、経験、継続の 3 つがあります。

ここでは、未来完了形の経験について解説します。

未来完了形の経験の意味は、「(未来のある時点までに) ～することになる(でしょう)」です。

以下の未来完了形の文をみてみましょう。

I will have read the book three times if I read it again.
「もしもう 1 度読むと、私は 3 回その本を読むことになる(でしょう)。」

この文は、もう 1 度その本を読むという「未来のある時点まで」の経験(3 回読む)を表します。

未来完了形の経験は、「生まれた時」から「未来のある時点」までの経験(回数)を表します。

上の未来完了形の経験の文だと、「生まれた時」ともう 1 度その本を読むという「未来のある時点」が「線」で繋がっています。

そして、その間で 3 回その本を読むことを経験するということを表しています。

未来完了形の経験の文を、以下の現在完了形と過去完了形の経験の文と比べてみましょう。
まず、現在完了形の経験の文です。

I have read the book twice.
「私は、(今までに) 2 回その本を読んだことがあります。」

この文は、生まれた時から「今まで」の経験(2 回読んだ)を表します。

次に、過去完了形の経験の文です。

I had read the book once before I was 10 years old.
「私は、10 歳(になる)までにその本を 1 回読んだことがありました。」

この文は、生まれた時から 10 歳(になった)という「過去のある時点」までに、1 回読んだという経験を表します。

これからも分かりますが、完了形の経験はある時点までの経験を表します。

そして、現在完了形は「今まで」、過去完了形は「過去のある時点まで」、未来完了形は「未来のある時点まで」の経験を表します。

現在完了形と過去完了形の解説でも同じことを書きましたが、完了形はある時点とある時点が繋がっている「線」イメージです。

未来完了形は、未来のある時点を終点とした「線」のイメージです。

未来完了形の文は、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の未来完了形〔経験〕の肯定文を否定文に書き換えてみましょう。

I will have been to England once before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度イングランドに行くことになる(でしょう)。」

この未来完了形〔経験〕の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I won't have been to England before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前にイングランドに行くことはない(でしょう)。」

この未来完了形〔経験〕の否定文は、20 歳になるという「未来のある時点まで」にイギリスに行くという経験をしないということを表しています。

未来完了形の経験の否定文では、以下のように not の代わりに never「1 度も～ない」を用いることもあります。

I will never have been to England before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度もイングランドに行くことはない(でしょう)。」

未来完了形の文は、will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

以下の未来完了形〔経験〕の肯定文を疑問文に書き換えてみましょう。

I will have been to England once before I am 20 years old.
「私は、20 歳になる前に 1 度イングランドに行くことになる（でしょう）。」

この未来完了形〔経験〕の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will you have been to England before you are 20 years old?
「あなたは、20 歳になる前にイングランドに行きますか。」

この未来完了形〔経験〕の疑問文は、20 歳になるという「未来のある時点まで」に、イングランドに行くことを経験をするかということを質問しています。

26 未来完了形と未来完了進行形（未来完了形〔完了〕）

現在完了形の形は「have (has) + 過去分詞」、過去完了形の形は、have を過去形にして「had + 過去分詞」です。

未来完了形の形は、現在完了形の have に未来を表す will を付け、「will have + 過去分詞」となります。

意味は、現在完了形や過去完了形と同じく完了、経験、継続の 3 つがあります。

ここでは、未来完了形の完了について解説します。

未来完了形の完了の意味は、「(未来のある時点で) ～し終える（でしょう）」または「(未来のある時点までに) ～してしまう（でしょう）」です。

以下の未来完了形の例文をみてみましょう。

I will have finished the work when my friend comes.
「友達が来た時、私はその仕事を終えている（でしょう）。」

この文は、「過去のある時点」から続けていたり、「今から」する仕事が友達が来るという「未来のある時点まで」に完了するだろうということを表しています。

未来完了形の完了は、「過去のある時点」から行っている動作や「現在」から行う動作が「未来のある時点」で完了するだろうということを表します。

未来完了形の完了の文を現在完了形と過去完了形の完了の文と比べてみましょう。

まず、現在完了形の完了の文です。

I have already finished the work.
「私は、すでにその仕事を終えてしまった。」

この文は、過去のある時点から続けていた動作が「現在までのどこかで」完了したことを表します。その結果、今すべき仕事はないということまで表します。

次に、過去完了形の完了の文です。

I had finished the work when my friend came.
「私は、友達が来た時その仕事を終えてしまっていた。」

この文は、友達が来た時という「過去のある時点より前のどこかで」それまで続けていた動作が完了したことを表します。

このように、現在完了形は「現在」、過去完了形は「過去のある時点」、未来完了形は「未来のある時点」までのどこかで動作が完了したことを表します。

現在完了形と過去完了形の解説でも同じことを書きましたが、完了形はある時点とある時点が繋がっている「線」イメージです。

未来完了形は、未来のある時点を終点とした「線」のイメージです。
未来完了形の文は、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の未来完了形 [完了] の肯定文を否定文に書き換えてみましょう。

I will have finished the work when my friend comes.
「友達が来る時、私はその仕事を終えている（でしょう）。」

この未来完了形の文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I won't have finished the work when my friend comes.
「友達が来る時、私はその仕事を終えていない（でしょう）。」

この未来完了形の否定文は、友達が来るという「未来のある時点まで」に過去から行っていた仕事やこれから行う仕事が完了しないということを表しています。

未来完了形の文は、will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

以下の未来完了形 [完了] の肯定文を疑問文に書き換えてみましょう。

I will have finished the work when my friend comes.
「友達が来る時、私はその仕事を終えている（でしょう）。」

この未来完了形の文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will you have finished the work when your friend comes?
「友達が来る時、あなたはその仕事を終えていますか。」

この未来完了形の疑問文は、友達が来るという「未来のある時点まで」に行っていた仕事やこれから行う仕事が完了するかを質問しています。

27 未来完了形と未来完了進行形（疑問詞を用いた未来完了形の疑問文）

疑問詞 How many times 「何回」と How long 「どの位の間」を用いた未来完了形の疑問文について解説します。

How many times 「何回」は経験の疑問文で、How long 「どの位の間」は継続の疑問文で用います。これらは What 「何」などと同じ疑問詞なので、疑問文の前につけて使います。

まず、How long 「どの位の間」を未来完了形の継続の疑問文に付けると、以下のようになります。

How long will you have lived in Japan till next year?
「あなたは、来年で日本にどの位（の間）住んでいますか。」

How long をつけた未来完了形の継続の疑問文は、未来のある時点までの何らかの状態の継続期間を尋ねる時に用います。

答え方は for を用いて継続期間を表し、以下のようになります。

I will have lived in Japan for two years till next year.
「私は、来年で 2 年間日本に住んでいることになる。」

会話などでは、以下のように継続期間のみ答える場合もあります。

For two years. 「2 年間です。」

次に、How many times 「何回」を未来完了形の経験の疑問文に付けると、以下のようになります。

How many times will you have visited England if you visit there again?
「もしもう 1 度イングランドを訪れたら、あなたは何回訪れることになりますか。」

How many times をつけた未来完了形の経験の疑問文は、未来のある時点までに何らかの動作を経験した回数を尋ねる時に用います。

答え方は、未来完了形の文の最後に経験した回数を付けます。

I will have visited England twice if I visit there again.
「もしもう 1 度イングランドを訪れると、私は 2 回訪れることになります。」

これは丁寧な答え方で、会話では通常以下のように期間だけ答えます。
Twice. 「2 回です。」

28 未来完了形と未来完了進行形（未来完了進行形）

未来完了進行形の形は「will have + been + 動詞の ing 形」、意味は未来完了形の継続と同じ「(未来のある時点まで) ～し続けている (でしょう)」または「(未来のある時点まで) ～し続けることになる (でしょう)」です。

未来完了進行形の形は、名前の通り未来完了形と進行形がくっついた形です。

よって、以下のように、未来完了形の形「will have + 過去分詞」と進行形の形「be 動詞 + 動詞の ing 形」を足し算すると未来完了進行形の形になります。

will have + 過去分詞

+) be 動詞 + 動詞の ing 形

will have + been + 動詞の ing 形

↑ be 動詞の過去分詞

しかし、意味は未来完了形の継続と同じ「～し続けている (でしょう)」ですが、未来完了形の継続と全く同じなら未来完了進行形は必要ありません。

継続を表す時には、動詞が状態動詞であるか動作動詞であるかにより、動詞の種類で未来完了形と未来完了進行形を使い分ける必要があります。

状態動詞とは、その状態をコロコロ変えることができない動詞 live, know, believe など、通常進行形で用いることができません。

動作動詞とは、その動作をコロコロ変えることができる動詞 play, run, study など、進行形で用いることができます。

状態動詞は進行形にできないので、状態動詞の継続を表す時には以下のように未来完了形を用います。

He will have lived in Japan for two years until he moves to America.
「アメリカに引っ越すまで、彼は 2 年間日本に住むことになる (でしょう)。」

I will have lived in Japan for two years until I move to America.
「アメリカに引っ越すまで、私は 2 年間日本に住むことになる (でしょう)。」

これに対し、動作動詞は進行形 (ing 形) にできるので、動作動詞の継続の時には以下のように未来完了進行形を用います。

He will have been studying for two hours until I call him.
「私が彼に電話をするまで、彼は 2 時間勉強し (続け) ているでしょう。」

未来完了進行形に経験や完了 (結果) の意味はなく、継続の意味しかありません。キーワードも過去完了形の継続と同じ for と since です。

未来完了進行形は、「will have + been + 動詞の ing 形」という形と未来完了形の継続との使い分けを抑えておけば大丈夫です。

未来完了進行形の文は、will の後ろに not を付ければ否定文になります。

そして、否定文の意味は「～し (続け) ていないでしょう」です。

それでは、以下の未来完了進行形の文を否定文に書き換えてみましょう。

He will have been studying until I call him.
「私が彼に電話をするまで、彼は勉強し (続け) ているでしょう。」

will の後ろに not を付け、否定文は以下ようになります。

He will not have been studying until I call him.
「私が彼に電話をするまで、彼は勉強し (続け) ていないでしょう。」

この文は、私が彼に電話をするという「未来の時点」まで彼がずっと勉強し続けていないだろうとすることを表しています。

will not の省略形 won't を用い、以下のように書くこともできます。

He won't have been studying until I call him.

未来完了進行形の疑問文は、未来完了形と同じように will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「(未来のある時点まで) ～し (続け) ているでしょうか」となります。

それでは、以下の未来完了進行形の文を疑問文に書き換えてみましょう。

He will have been studying until I call him.

「私が彼に電話をするまで、彼は勉強し (続け) ているでしょう。」

will を主語 (この場合 He) の前に出し、文末にクエッションマーク？を付け、疑問文は以下のようになります。

Will he have been studying until I call him?

「私が彼に電話をするまで、彼は英語を勉強し (続け) ているでしょうか。」

この文は、私が彼に電話するという「未来の時点」まで彼が英語を勉強し続けているだろうかということを探ねています。

答え方は Yes または No と will を用い、以下のようになります。

Yes, he will. 「はい、し (続け) ているでしょう。」

No, He won't. 「いいえ、し (続け) ていないでしょう。」

継続期間を尋ねる時には、未来完了形の継続の疑問文と同様、以下のように How long 「どの位の間」を文の先頭に置きます。

How long will he have been studying until I call him?

「私が彼に電話をするまで、彼はどの位のの間勉強し (続け) いるでしょうか。」

答え方は、継続期間を表す for ～「～間」を未来完了進行形の文の最後に付け、以下のようになります。

He will have been studying for two hours until I call him.

「私が彼に電話をするまで、彼は 2 時間勉強し (続け) ているでしょう。」

これは丁寧な答え方で、会話では通常以下のように期間だけ答えます。

For two hours. 「2 時間です。」

不変の真理とは過去、現在、未来にわたり変わらない事実のことで、例えば以下のような文があります。

The earth goes around the sun. 「地球は、太陽の周りをまわっています。」

The sun sets in the west. 「太陽は、西に沈む。」

諺は、以下のような文です。

Time is money. 「時は金なり。」

このような、不変の真理や諺は、どんな場合でも現在形で表します。

この定義は、時制の一致に関係した文章でよく用いられます。

まず、以下の文を用いて時制の一致について簡単に解説します。

I know that he is kind. 「私は、彼が親切だと知っています。」

この文の中で示されている「私は知っています」と「彼は親切です」という 2 つの事柄は、共に「現在」のことです。

そして、この文で know が knew 「知っていました」と過去形に変わった時、以下のように that 以下の動詞が is と現在のままでは意味がおかしくなります。

I knew that he is kind. 「私は、彼が親切だと知っていました。」

日本語だけみると分かりにくいと思いますが、この文では彼が「今」親切であると「過去のある時点」で知っていたと予言のような意味になってしまいます。

予言など、よほど特殊な状況でなければ、このようなことは言いません。

通常、「過去のある時点」で、彼が親切であったことを知っていたという意味になります。

よって、「知っていた」と「(親切) だった」のは過去の同じ時なので、know が過去形の knew に変わると、以下のように is も過去形の was に変えて時制を一致させなければなりません。これが時制の一致です。

I knew that he was kind. 「私は、彼が親切だと知っていました。」

次に、以下の文を考えてみましょう。

I know the earth goes around the sun.
「私は、地球が太陽の周りをまわっていることを知っています。」

この文で、know が過去形の knew に変わっても時制の一致はせず、以下のように goes を過去形の went に変えません。

I knew that the earth goes around the sun.
「私は、地球が太陽の周りをまわっていることを知っていました。」

不変の真理の場合は、時制の一致などで通常なら過去形を用いる場合でも現在形を用いなければならないのです。

もう 1 つ、諺の文を用いた場合も考えてみます。

He knows that time is money.
「彼は、時は金なり (という諺を) 知っています。」

この文で、knows が未来形の will know に変わっても時制の一致はせず、以下のように is は未来形の will be に変わりません。

He will know that time is money.
「彼は、時は金なり (とうい諺) を知るでしょう。」

このように、不変の真理や諺にはどんな場合でも現在形を用います。

30 現在形の例外的な使い方 (確定した未来の予定には現在形を用いる)

通常、現在の事実や状態を表す時には、以下のように現在形を用います。

I play tennis. 「私は、テニスをします。」

He lives in Tokyo. 「彼は、東京に住んでいる。」

そして、主語の未来に対する意思や未来の予定、動作、状態などを表す時には、以下のように未来形を用います。

I will play tennis tomorrow. 「私は、明日テニスをするつもりです。」

He will live in Tokyo next year. 「彼は、来年東京に住むでしょう。」

ここで、以下の未来形 (will) を用いた文について考えてみます。

I will leave Japan. 「私は、日本を去るつもりです。」

この未来形の文は、主語である私が将来は日本を去るつもりであることを根拠もなく漠然と言っているというような状況を表しています。

ところが、飛行機のチケットも購入し、明日日本を去ることが確定している場合は未来のことでも以下のように現在形を用います。

I leave Japan tomorrow. 「私は、明日日本を去ります。」

飛行機のチケットも購入しているような場合、日にちや時間が決まっており、チケットが高額のためキャンセルすることも普通ありません。

このように、確定した未来の予定を表す場合には、現在形を用いて表します。

意味も、未来形の「～するつもり」や「～するでしょう」ではなく、「～します」と (言い切るような感じに) なります。

この定義でよく使われる動詞は往来発着の動詞、go 「行く」、come 「来る」、leave 「去る (leave for で～へ出発する)」、arrive 「到着する」の 4 つです。

以下は、go を用いた例文です。

She goes to Kyoto next week.「彼女は、来週京都に行きます。」

京都へ行くということが「未来の確定した予定」である場合、このように未来のことでも will を用いずに現在形で表すことができます。

例えば、新幹線の指定席を予約し、よほどの理由がない限りキャンセルすることはないという状況です。

31 現在形の例外的な使い方（時の副詞節の中では未来のことでも現在形を用いる）

時の副詞節の中では未来のことでも現在形を用いるについて解説します。
この定義の解説に入る前に、まず「時の副詞節」について解説します。

この定義の中に節という言葉が出てきますが、節とは「主語と動詞の組からなる 1 つの文」のことを示します。

例えば、以下の文で、I will start「私は始めるつもりです」の部分が、主語（I）と動詞（will start）の組からなる文（節）になっています。

I will start the work when my boss comes.
「上司が来たら（来た時）、私はその仕事を始めるつもりです。」

この文にはもう 1 つ、my boss comes「私の上司が来る」という主語（my boss）と動詞（comes）の組からなる文（節）があります。

2 つの節をくっつけるために接続詞が用いられます。よく使われる接続詞としては、and「そして」、but「しかし」、when「～時」などがあります。

そして、最初の文の when my friend comes の部分について考えてみます。

この部分は、先ほど解説したように 1 つの節になっています。そして、接続詞 when「～時」によってもう 1 つの節（I will start ～）にくっついています。

when は「時」に関連した接続詞（when の意味は「～する時」）なので、when my boss comes の部分は「時の節」になります。

ここまでで、最初の定義「時の副詞節の中で未来のことには現在形を用いる」の「時の副詞節」に近づきました。あとは、副詞節の「副詞」の部分です。

そこで、文中での副詞の役割を確認してみましょう。

例えば、以下の文中の fast「速く」は副詞ですが、runs「走る」の程度（速いのか遅いのか）を説明しています。つまり、動詞を修飾しています。

He runs fast.「彼は、速く走る。」

もう 1 つ、以下の文中の yesterday 「昨日」も副詞ですが、yesterday はいつ買ったのかを表しており動詞の bought 「買った」を修飾しています。

I bought a pen yesterday. 「私は、昨日ペンを買いました。」

このように、副詞は文中で動詞を修飾する働きをします。

ここで、最初の例文をもう 1 度見てみましょう。

I will start the work when my boss comes.
「私の上司が来た時、私はその仕事を始めるつもりです。」

この文の when my boss comes の部分も同様に、「上司が来たら→始めるつもり (will start)」というように動詞を修飾しています。

よって、この節は副詞の役割をしている節なので「副詞節」となり、先ほど解説したように「時の節」でもあるので、この節は「時の副詞節」になります。

これは、最初の定義「時の副詞節の中で未来のことは現在形を用いる」に当てはまるため、この節の中では未来のことも現在形 (comes) で表します。

この場合、主語が my boss と三人称単数なので come 「来る」に s をつけて comes となるので注意しましょう。

ここで、1 つ注意が必要です。それは、when の作る節が必ず副詞節になるとは限らないということです。

接続詞の when (意味は「～の時」) は「時の副詞節」を作りますが、疑問詞の when (意味は「いつ～」) は「時の名詞節」を作ります。

「時の名詞節」について解説していきます。

以下の文の when my boss will come の部分を考えてみます。

I know when my boss will come.
「私は、いつ上司が来るか知っています。」

今度は、when の後ろに続く節の中で、come という現在形ではなく未来形の will come が用いられています。

この文で when は「いつ」という意味なので、when 以下の節は時に関連した「時の節」であることが分かります。

しかし、when 以下の節は、動詞の know を修飾している訳ではありません。

よって、この節は副詞の役割はしておらず、「副詞節」ではないのです。

この when の節は、know 「知っている」の目的語になっており、名詞の役割をしているのです。

目的語とは文中で動詞の後ろに置かれ、「～を」するのかや「～に」するのかというように、動詞 (動作) の目的を表すものです。

例えば、以下の文の him 「彼」は、誰 (何) を知っているのかというように know 「知っている」の目的を表しており、know の目的語になっています。

I know him. 「私は、彼を知っています。」

また、以下の文の tennis 「テニス」は、何をするのかというように play 「する」の目的を表しており、play の目的語になっています。

She plays tennis. 「彼女は、テニスをします。」

そして、目的語になれる品詞は him や tennis などの名詞だけです。

ここで、先ほどの文をもう 1 度みてみます。

I know when my boss will come.
「私は、いつ上司が来るか知っています。」

この文の when の節も know の目的語になっており、名詞と同じ役割をしているため、この節は「時の副詞節」ではなく「時の名詞節」ということになります。

よって、「時の副詞節の中で未来のことは現在形を用いる」という定義にあてはまらないので、未来のことは未来形で表さなければならないのです。

when が作る節が「時の副詞節」の場合は未来のことは現在形で、「時の名詞節」の場合は未来のことは未来形 (will + 動詞の原形) で表します。

when の節中で必ず現在形を用いる訳ではないので注意しましょう。

when を用いた節の中で現在形と未来形のどちらを用いるのかを判断する時に、副詞節か名詞節かと考えず、when の訳し方で決めることができます。

以下のように、when を「～時」と訳したら副詞節になるので、未来のことは現在形で表します。

I will start the work when my boss comes.
「私の上司が来た時、私はその仕事を始めるつもりです。」

また、以下のように、when を「いつ」と訳したら名詞節になるので、未来のことは未来形で表します。

I know when my boss will come.
「私は、いつ上司が来るか知っています。」

32 現在形の例外的な使い方（条件の副詞節の中では未来のことでも現在形を用いる）

まず、以下の文をみましょう。

I won't go out if it rains tomorrow.
「もし明日雨が降ったら、私は外出しないでしょう。」

この文では、明日という未来のことなのに if 節の中で未来形の will rain ではなく rains と現在形が用いられています。

理由は以下の通りです。

まず、if it rains tomorrow という節は外出しない条件を表しているので、条件の節になります。

さらに、この if 節は「明日雨が降ったら→外出しない」というように、動詞（この場合 won't go out）を修飾しているので副詞の役割をしています。

よって、この節は「条件の副詞節」となります。

これは、最初の定義「条件の副詞節の中で未来のことには現在形を用いる」に当てはまるので、未来のことでも rains と現在形を用います。

ここで、1 つ注意が必要です。When を用いた節の時と同様、if 節も名詞節になる場合があります。

以下の文をみましょう。

I don't know if it will rain tomorrow.
「私は、明日雨が降るかどうか知りません。」

この文では、明日という未来のことを表すのに will rain と未来形を用いています。

この文の if 節は know の目的語になっており、目的語になれるのは名詞だけなので、この if 節は名詞節となります。

33 進行形の例外的な使い方（近い未来の予定には現在進行形を用いる）

また、if は「〜かどうか」という意味で、条件を表していません。

よって、「条件の副詞節の中で未来のことには現在形を用いる」という定義にあてはまらないので、未来のことは未来形で表さなければならないのです。

if 節が「条件の副詞節」の場合は未来のことは現在形で、「条件の名詞節」の場合は未来のことは未来形（will + 動詞の原形）で表します。

if 節の中で、必ず現在形を用いる訳ではないので注意しましょう。

if 節の中で現在形と未来形のどちらを用いるのかを判断する時に、副詞節か名詞節かということを考える必要はなく、if の訳し方で決めることができます。

以下のように、if を「もし〜ならば」と訳したら副詞節になるので、未来のことは現在形で表します。

I won't go out if it rains tomorrow.
「もし明日雨が降ったら、私は外出しないでしょう。」

また、以下のように、if を「〜かどうか」と訳したら名詞節になるので、未来のことは未来形で表します。

I don't know if it will rain tomorrow.
「私は、明日雨が降るかどうか知りません。」

通常、主語の未来に対する意思や未来の予定、動作、状態などを表す時には、以下のように未来形を用います。

I will leave Japan next week. 「私は、来週日本を出発するもりです。」

また、未来のことでも「確定した未来の予定」は現在形で表すことができます。

例えば、日本から他の国へ行くために飛行機のチケットを購入しており、キャンセルすることはないという場合には「確定した未来の予定」と考え、未来のことでも以下のように現在形で表すことができます。

I leave Japan next week. 「私は、来週日本を発ちます。」

確定した未来の予定なので、「発ちます」と（言い切るような感じに）なります。

そして、上の文で来週を近い未来と考えると、「近い未来の予定」となり、以下のように現在進行形で表すことができます。

I am leaving Japan next week. 「私は、来週日本を出発する予定です。」

「近い未来」とは今からどの程度先のことまでなのか？、と疑問に思う方もいるかもしれませんが。

これは、話し手の主観で決まります。例えば、来週を近い未来と考える人もいれば、近くないと考える人もいます。

さらには、同じ人でもその時の気分で、来週を近い未来と考えたり、近くない未来と考えることがあると思います。

しかし、どちらかというとき現在形は時刻表などの客観的な事実を述べる場合、現在進行形は今準備していてもうすぐするというような場合に用いられます。

現在進行形は、現在動きがあるような感じになります。

文法問題でも、未来を表す文で現在形、現在進行形、未来形の 3 つのうちどれかを判断するような問題は出題されません。

よく出される問題は、以下のように未来（この場合明日）のことを表す文で「will (be going to) + 動詞の原形」が選択肢にない問題です。

He () to my house tomorrow. 「私は、明日私の家に来ます。」

1. is coming 2. come 3. came 4. has come

この定義を知らずにこのような問題を出されると混乱しますが、**近い未来の予定は現在進行形で表すことができる**ということを知っていれば、混乱することもなく 1 の is coming を選ぶことができます。

現在形の 2 も正解なのでは？と引っかからないで下さいね。現在形も用いることができますが、主語が He なので、この場合は comes でなければいけません。

そして、この定義でよく用いられる動詞は、往来発着の動詞 go「行く」、come「来る」、leave「去る (leave for で～へ出発する)」、arrive「到着する」の 4 つです。

be going to との違いは、以下の通りです。

- 1. be ～ ing のみ「意思のある近い未来」「その場で生まれた意志未来」
例) I'm coming. 「(そちらに) 行きます。」…その場で生まれた意志
- 2. be ～ ing + 時を表す副詞「確定している未来・予定」
例) I'm going tomorrow. 「私は、明日行きます。」…明日出かける予定
- 3. be going to のみ「ごく近い未来」
例) I'm (just) going to go out. 「今 (ちょうど) 出かけようとしています。」
- 4. be going to + 時を表す副詞「前からあった意図・意思」
例) I'm going to go out tomorrow. 「私は、明日でかけるつもりです。」

34 進行形の例外的な使い方（現在や過去の反復動作や習慣には進行形を用いる）

通常、進行形「be 動詞 + 動詞の ing 形」はある時点で進行中の動作を表します。

ところが、**be 動詞と動詞の ing 形の間に always 「いつも」を伴い、「いつも～ばかりしている」という反復動作や習慣を表すことがあります。**

以下の文は、通常の現在進行形の文です。

He is sleeping in the class.
「彼は、授業中に寝ています。」

この文は、sleep「寝る」という動作が今進行中であることを表しています。

そして、**この文の is と sleeping の間に always を入れると、以下のように反復動作を表します。**

He is always sleeping in the class.
「彼は、いつも授業中寝てばかりいる。」

以下のように、過去進行形でも同じように考えることができます。

I was always eating too much. ※ too much 「あまりにもたくさん」
「私は、いつも食べ過ぎてばかりいた。」

この文は、過去における習慣を表しています。

このように、**be 動詞と動詞の ing 形の間に always が付くと、進行中の動作ではなく、反復動作や習慣を表すので注意しましょう。**

第2部

助動詞

1 can（助動詞 can 可能&能力「～できる」）

can は助動詞と呼ばれ、文中で動詞の前に置いて、動詞に意味を加えます（だから動詞を助けると書いて助動詞！）。

それでは、まず以下の文をみてみましょう。

He plays tennis.「彼は、テニスをします。」

この文は、通常の現在形を用いた文で「彼がテニスをする」という現在の事実を表しているだけです。

次に、「彼は、テニスをする事ができる」という文を作ってみましょう。

ここで、play「～する」に「～することができる」の意味を加えるために、助動詞の can を用います。

以下のように、助動詞 can は動詞の前に置きます。

He can play tennis.「彼は、テニスをする事ができる。」

ここでもう1つ注意が必要で、**助動詞の後ろでは必ず動詞は原形になります。**

よって、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けないので注意しましょう。この文では、plays が play と原形になっています。

そして、can を用いると「テニスをする」という事実だけでなく、「テニスをする事ができる」と、テニスをする能力があるということを表します。

以下の文は、可能の意味になります。

You can use the room.「あなたは、その部屋を使うことができる。」

このできるは能力ではなく、その部屋を使うことが可能であるという意味です。

否定文は、can の後ろに not を付け、意味は「～することができない」となり、ある動作に対する能力がないことを表します。

先ほどの肯定文を否定文に書き変えると、以下のようになります。

He can not play tennis.「彼は、テニスをする事ができません。」

can not の省略形 can't を用いて、以下のように書くこともできます。

He can't play tennis.

疑問文は、can を主語の前に出し文末にクエッションマーク？を付け、意味は「～することができますか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き変えると、以下のようになります。

Can he play tennis?「彼は、テニスをする事ができますか。」

答え方は Yes または No と can を用い、以下のようになります。

Yes, he can.「はい、できます。」

No, he can't.「いいえ、できません。」

can の過去形は could 「～することができた」で、以下は例文になります。

・能力（テニスをする能力を持っていたという意味です。）

He could play tennis.「彼は、テニスをする事ができた。」

・可能（満月を見ることが可能だったという意味です。）

We could see the full moon.「私達は、満月を見ることができた。」

ここでは、助動詞 can の可能「～することができる」の意味について解説しましたが、おそらく can の可能の意味は多くの方が知っていると思います。

しかし、can には「～することができる」の他に3つの意味があります。

2 can（助動詞 can[可能性と推量]）

can の持つ可能性「～の可能性がある」「いったい～だろうか」と推量「～のはずがない」の意味について解説します。

まず、肯定文では以下のように「～の可能性がある」という意味になります。

Everyone can tell a lie.「全ての人は、嘘をつく可能性がある。」

推量の can は、否定文で用いられます。

否定文は可能の can の時と同じように can の後ろに not を付け、意味は「～のはずがない」となります。

The story can not be true.「その物語は、本当のはずがない。」

この否定文は、その物語が本当ではないということを話し手が推測しているということを表しています。

省略形は、以下のように can't ではなく cannot という形がよく用いられます。

The story cannot be true.

可能性の can は、疑問文で用いられます。

疑問文は、can を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「いったい～だろうか」となります。

Can the story be true?「その物語は、本当なのだろうか。」

この疑問文は、その物語が本当である可能性があるのかを話し手が尋ねているということを表しています。

3 can（助動詞 can[許可]）

can の持つ許可の意味「～してもよい」について解説します。

can の使い方は、可能「～することができる」の can の時と同じように動詞の前に置き、動詞を原形にします。

実際に、許可の can を用いた以下の文をみてみましょう。

You can go home.「あなたは、家に帰ってもよい。」

この文は、家に帰ることを許可するということを表しています。
否定文と疑問文の作り方も、可能の can の時と同じです。

否定文は、can の後ろに not を付け、意味は「～してはいけない」となります。
よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

You can not go home.「あなたは、家に帰ってはいけない。」

この否定文は、家に帰ることを許可しないということを表しています。

can not の省略形 can't を用い、以下のように書くこともできます。

You can't go home.

疑問文は、can を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。
そして、疑問文の意味は「～してもいいですか」となります。
よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下ようになります。

Can I go home?「（私は、）家に帰ってもいいですか。」

主語が you のままだと「あなたは、家に帰ってもいいですか。」とおかしな意味になるので、この場合主語を I「私」に変えます。

答え方は、Yes または No と can を用い、以下ようになります。

Yes, you can.「はい、いいです。」

No, you can't.「いいえ、いけません。」

許可をとる時は、普通「（自分が）～してもいいですか」と尋ねるので、許可の can を疑問文で用いる時は Can I ～? という形でよく用いられます。

4 can (Can you ～ ?[依頼])

Can you ～ ? の依頼の意味「～していただけますか」について解説します。

依頼の can は疑問文のみで用いられ、以下のように目の前にいる相手 (you 「あなた」) に何かを依頼する時に用います。

Can you help me? 「私を手伝っていただけますか。」

目の前にいる人 (あなた) に依頼していることは明らかなので、you は通常日本語に訳しません。

答え方には、以下のようなものがあります。

・ Yes の場合

Yes, I will. 「はい、いいですよ。」

Sure. 「もちろん。」

All right. 「いいですよ。」

Certainly. 「いいですよ。」

・ No の場合

No, I won't. 「いいえ、だめです。」

I'm sorry, but I can't. 「すみませんが、できません。」

そして、以下のように、未来形で用いる will の疑問文 Will you ～ ? も Can you ～ ? と同様に「～していただけますか」という依頼の意味を表します。

Will you help me? 「私を手伝っていただけますか。」

Can you ～ ? や Will you ～ ? 「～していただけますか」は、どちらかというと友達などに気軽に頼む時に用いられます。

厳密には、Can you ～ ? の方が Will you ～ ? よりも少し丁寧な表現とされていますが、ほぼ同じと考えてよいと思います。

丁寧に「～して頂けませんか」とお願いする時は、文末に please を付けて Can you ～ , please? とするか、can の過去形 could を用いて Could you ～ ? とします。

先ほどの文を丁寧な表現に書き換えると、以下ようになります。

Can you help me, please? 「私を手伝って頂けませんか。」

Could you help me?

Will を用いた表現だと、以下ようになります。would は will の過去形です。

Will you help me, please? 「私を手伝って頂けませんか。」

Would you help me?

厳密には、Could you ～ ? の方が Would you ～ ? よりも丁寧な表現となります。

5 can（助動詞 be able to の意味と can との違い）

助動詞 be able to の意味と can との違いについて解説します。

be able to の意味は、「～することができる」です。

以下の一般動詞を用いた文を be able to 用いて書き換えてみましょう。

He plays tennis. 「彼は、テニスをします。」

be able to も助動詞なので、can の時と同様に動詞の前に置き、be able to の後ろに置く動詞を原形にします。

よって、be able to を用いて先ほどの文を書き換えると、以下ようになります。

He is able to play tennis. 「彼は、テニスをする事ができる。」

be able to の be の部分は be 動詞で、be 動詞は主語によって変わるため、この場合は is になります。

また、助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s を付けません。この場合、plays とならないので注意しましょう。

否定文と疑問文は、be 動詞の文と同じように考えます。否定文は、be 動詞の後ろに not を付け、意味は「～することはできない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

He is not able to play tennis. 「彼は、テニスをする事ができません。」

is not の省略形 isn't を用い、以下のように書くこともできます。

He isn't able to play tennis.

疑問文は、be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～することができますか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下ようになります。

Is he able to play tennis? 「彼は、テニスをする事ができますか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞を用い、以下ようになります。

Yes, he is. 「はい、できます。」

No, he isn't. 「いいえ、できません。」

ここからは、助動詞 can と be able to の違いについて解説します。

can は普通に「～することができる」という意味で用いられますが、現在形の is/am/are able to はフォーマルな感じになります。

例えば、普通に「私は、英語を話すことができます。」と言う場合、I can speak English. というように can を用います。

これに対し、I am able to speak English. と言うと、「私は、英語を話すことができるんだけど。」というように少しもったいぶった感じになります。

過去形の could は、以下の例文のように普通にその能力を持っていて「～することができた」ということを表します。

I could swim well when I was a child.

「私は、子供の頃上手に泳ぐことができた。」

これに対し、特別な状況の中1回「～することができた」というような時は以下の例文のように was/were able to を用います。

I was able to swim well only at the time of examination.

「私は、試験の時だけ上手に泳ぐことができた。」

will can と助動詞は2つ並べられないので、未来形は will be able to を用います。

He will be able to speak English. 「彼は、英語を話せるようになるだろう。」

6 may/might (助動詞 may[許可])

may の持つ許可の意味「～してもよい」について解説します。

may も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、許可の may を用いた以下の文をみましょう。

You may go home.「あなたは、家に帰ってもよい。」

この文は、家に帰ることを「許可」するということを表しています。

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。

助動詞の can にも許可「～してもよい」の意味があるので、以下のように may を can に置き換えても同じ意味になります。

You can go home.「あなたは、家に帰ってもよい。」

否定文は may の後ろに not を付け、意味は「～してはいけない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

You may not go home.「あなたは、家に帰ってはいけない。」

この否定文は、家に帰ることを「許可しない」ということを表しています。

以下のように、may を can に置き換えても同じ意味になります。

You can not go home.「あなたは、家に帰ってはいけない。」

疑問文は、may を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～してもいいですか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下ようになります。

May I go home?「家に帰ってもいいですか。」

以下のように、may を can に置き換えても同じ意味になります。

Can I go home?「家に帰ってもいいですか。」

また、may の過去形 might を用い、以下のように Might I ～? とすると「～してもよろしいですか」と May I や Can I より丁寧な表現になります。

Might I go home?「家に帰ってもよろしいですか。」

May I と Might I のどちらの場合も、答え方は以下ようになります。

Yes, you may.「はい、いいです。」

No, you may not.「いいえ、いけません。」

7 may/might (助動詞 may[推量])

may の持つ推量の意味「～かもしれない」について解説します。

may も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、推量の may を用いた以下の文をみましょう。

He may come to the party. 「彼はパーティーに来るかもしれない。」

この文は、この文を言っている話し手が、彼がパーティーに来ることを推量（推測）しているということを表しています。

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s を付けません。この場合、comes とならないので注意しましょう。

また、might は may の過去形ですが、過去の意味で用いることはなく、「ひょっとしたら～かもしれない」と may より可能性が低い推量を表します。

よって、以下の2つの文を比べると、上の might を用いた文は下の may を用いた文より彼がパーティーに来る可能性が低いということになります。

He might come to the party.

「ひょっとしたら、彼はパーティーに来るかもしれない。」

He may come to the party. 「彼は、パーティーに来るかもしれない。」

否定文は may や might の後ろに not を付け、以下ようになります。

He may not come to the party. 「彼は、パーティーに来ないかもしれない。」

He might not come to the party.

「ひょっとしたら、彼はパーティーに来ないかもしれない。」

ただし、許可の may と区別するため、推量の意味では may より might が好んで用いられる傾向があるようです。

疑問文は、might を用いて以下ようになります。推量の疑問文に may を用いることはできないので、注意しましょう。

Might he come to the party?

「(ひょっとしたら、) 彼はパーティーに来るかもしれませんか。」

そして、状況によっては、以下のように Do you think ～? 「～だと思いますか」という形を用いることもあります。

Do you think he will come to the party?

「(あなたは、) 彼がパーティーに来ると思いますか。」

8 must (助動詞 must[義務])

must の持つ義務の意味「～しなければならない」について解説します。
must も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、義務の must を用いた以下の文をみてみましょう。

He must run fast.「彼は、速く走らなければならない。」

この文は、速く走るということを相手に義務づける意味になります。

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s を付けません。この場合、runs とならないので注意しましょう。

否定文は、must の後ろに not を付け、意味は「～してはいけない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

He must not run fast.「彼は、速く走ってはいけない。」

must not の省略形 mustn't を用いて、以下のように書くこともできます。

He mustn't run fast.

mustn't は、「マスト」と読みます。

疑問文は、must を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付けます。

そして、疑問文の意味は「～しなければいけませんか」となります。

よって、先ほどの文を疑問文に書き換えると以下ようになります。

Must he run fast?「彼は、速く走らなければいけませんか。」

答え方は、Yes の場合は must を用いて以下ようになります。

Yes, he must.「はい、走らなければなりません。」

「いいえ」と答える場合は、No, he must not. ではありません。

No, he must not. は「いいえ、走ってはいけません。」という禁止の意味なので、「走らなければいけませんか。」という質問の答えとしては不自然です。

「走らなけれいけませんか。」という質問に対していいえで答える時は、「いいえ、走る必要はありません。」と答えるのが自然です。

よって、No で答える場合は、以下のように「～する必要はない」の意味を持つ don't (doesn't) have to を用います。

No, he doesn't have to.「いいえ、走る必要はありません。」

have to は、must と同じ「～しなければなりません」という意味をもつ助動詞で、don't (doesn't) have to はその否定形です。

「～しなければなりません」という肯定文では、通常 have to が用いられることが多く、must は規則や説明など書かれた文章で用いられるようです。

9 must（助動詞 must[推量]）

must の持つ推量の意味「～にちがいない」について解説します。

must も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、推量の must を用いた以下の文をみてみましょう。

He must be a famous singer.「彼は、有名な歌手にちがいない。」

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、この場合 be 動詞は is ではなく、原形の be となるので注意しましょう。

義務「～しなければならない」の must は have to と同じ意味を持ち、書き換えができますが、推量「～にちがいない」は must にしかない意味です。

また、推量の must には過去形や未来形はありません。過去のことを推量したい時は、別の表現を使います。

否定文は must の後ろに not を付け、意味は「～のはずがない」となります。よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると以下ようになります。

He must not be a famous singer.「彼は、有名な歌手のはずがない。」

以下のように cannot にも「～のはずがない」という意味がありますが、must not のほうが確信度が高くなります。

しかし、「～のはずがない」という意味で must not が使われているのを見たことはないので、「～のはずがない」は cannot を覚えておけば大丈夫だと思います。

He cannot be a famous singer.「彼は、有名な歌手のはずがない。」

推量の疑問文は Must を主語の前に出し、以下ようになります。

Must he be a famous singer ? 「彼は、有名な歌手に違いありませんか。」

答え方は、Yes、No と must を用い、以下ようになります。

Yes he must.「はい、彼は有名な歌手にちがいありません。」

No he must not.「いいえ、彼が有名な歌手のはずはありません。」

10 must（助動詞 have to[義務]）

must の持つ義務の意味と同じ意味を持つ have to について解説します。

have to も助動詞なので、動詞の前に置き、後ろの動詞は原形になります。

意味は、must の義務の意味と同じ「～しなければならない」です。

実際に、have to を用いた以下の文をみてみましょう。

You have to hurry.「あなたは、急がなければならない。」

この文は、急ぐということを相手に義務づける意味になります。

have to は助動詞ですが、have の部分は一般動詞なので、主語が彼（三人称単数）に変わると、以下のように have を has に変えなければなりません。

He has to hurry fast.「彼は、急がなければならない。」

また、助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも have to や has to の後ろに置かれている動詞の最後に s は付けません。

よって、主語が三人称単数の He でも runs とならないので注意しましょう。

否定文は、have to の have の部分が一般動詞なので、一般動詞の否定文と同じように don't や doesn't を have の前に置きます。

そして、否定文の意味は「～する必要はない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

You don't have to hurry.「あなたは、急ぐ必要はありません。」

He doesn't have to hurry.「彼は、急ぐ必要はありません。」

must と have to は、肯定文では「～しなければならない」と同じ意味です。

ところが、否定文になると must not は「～してはいけない」、don't(doesn't) have to は「～する必要がない」と意味が異なるので注意しましょう。

疑問文も一般動詞の場合と同じように、Do や Does を主語の前に置き、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～しなければなりませんか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Do I have to hurry? 「私は、急がなければなりませんか。」
Does he have to hurry? 「彼は、急がなければなりませんか。」

答え方は、Yes または No と do、does を用い、以下のようになります。

Yes, you do. / Yes, he does. 「はい、急がなければなりません。」
No, you don't. / No, he doesn't. 「いいえ、急ぐ必要はありません。」

11 must（助動詞 had to と will have to）

義務の意味を持つ must と have to の過去形と未来形について解説します。

must 「～しなければならない」に過去形や未来形はないので、義務の意味で過去や未来のことを表す時は必ず have to を用います。

have to の過去形の形は、have を過去形の had にした had to で、意味は「～しなかった」になります。

実際に、had to を用いた以下の文をみてみましょう。

He had to do it. 「彼は、それをしなかった。」

助動詞の後ろは動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、do は does とならないので注意しましょう。

否定文は、had to の had の部分が一般動詞の過去形なので、一般動詞の過去形の否定文と同じように didn't を have の前に置き、動詞を原形に直します。

そして、否定文の意味は「～する必要はありませんでした」となります。

よって、先ほどの文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He didn't have to do it. 「彼は、それをする必要はありませんでした。」

疑問文も一般動詞の疑問文と同じように、Did を文の先頭に置き、文末にクエッションマーク？を付け、動詞を原形に直します。

そして、疑問文の意味は「～しませんでしたか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Did he have to do it? 「彼は、をしなかったか。」

答え方は、Yes または No と did を用い、以下のようになります。

Yes, he did. 「はい、しませんでした。」

No, he didn't. 「いいえ、する必要はありませんでした。」

have to の未来形の形は、未来を表す will を have の前に置いた will have to で、意味は「～しなければならないだろう」となります。

実際に、will have to を用いた以下の文をみてみましょう。

He will have to do it. 「彼は、それをしなければならないだろう。」

否定文は will の後ろに not を付け、意味は「～する必要はないだろう」となります。

よって、この肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He will not have to do it. 「彼は、それをする必要はないだろう。」

will not の省略形 won't を用い、以下のように書くこともできます。

He won't have to do it.

疑問文は will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～しなければならないでしょうか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Will he have to do it? 「彼は、それをしなければならないでしょうか。」

答え方は、Yes または No と will を用い、以下のようになります。

Yes, he will. 「はい、しなければならないだろう。」

No, he won't. 「いいえ、する必要はないだろう。」

12 would（助動詞 would は will の過去形）

will の過去形として用いられる would ついて解説します。

未来を表す will に過去形があるの？と不思議に思う方もいるかと思いますが。

will が「今からみた未来」を表すのに対し、would は「過去のある時点から見た未来」を表します。

実際に、will と would を用いた以下の文をみてみましょう。

I think (that) he will go there.

「私は、彼がそこに行くと思います。」

I thought (that) he would go there.

「私は、彼がそこに行くと思いました。」

would も will と同じ助動詞なので、would の後ろには動詞の原形を置きます。

that 「～ということ」は接続詞で、省略することができます。

それでは、この2つの文を比べてみましょう。

上の文は、「今からみた未来のある時点」に彼がそこに行く（だろう）と、私が「今」思っていることを表しています。

よって、「今からみた未来」を表すので will を用います。

下の文は、「過去のある時点」で「その過去の時点からみた未来」に彼がそこに行く（だろう）と、私が思っていたということを表しています。

よって、「過去のある時点からみた未来」を表すので、would を用います。

日本語に訳すと will と would 共に「～だろう」となり違いが分かりませんが、これを見極めるポイントがあります。

それは主節（文の中で主となる主語と動詞の組）の動詞、think「思う」と thought「思った」の部分で、以下のように考えることができます。

think は現在形なので「今」の時点で思っている、つまり「今からみた未来」のことを思っていることになるので will を用います。

thought は過去形なので「過去のある時点」で思っていた、つまり「過去のある時点からみた未来」のことを思ったこととなるので would を用います。

13 would (助動詞 would[過去の強い意志])

would の持つ強い意志の意味「どうしても～しようとした」について解説します。

実際に、強い意志の would を用いた以下の文をみてみましょう。

He would do the work.「彼は、どうしてもその仕事をしようとした。」

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、does とならないので注意しましょう。

この文の would は、「過去のある時点」で「その時点からみた未来」に対する強い意思を表しています。

否定文は、would の後ろに not を付け、意味は「どうしても～しようとしなかった」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き変えると、以下のようになります。

He would not do the work.

「彼は、どうしてもその仕事をしようとしなかった。」

would not の省略形 wouldn't を用い、以下のように書くこともできます。

He wouldn't do the work.

疑問文は、would を主語の前に出し、以下のようになります。

Would he do the work?「彼は、どうしてもその仕事をしようとしたか。」

ただ、「どうしても～しようとしたか」と質問することはあまりありません。

また、would の疑問文は以下のように過去の習慣や依頼の意味もあり、見分けがつきにくくなるため用いられないということもあります。

Would he go fishing?「彼は、以前よく釣に行きましたか。」

Would you pass it?「それをとって頂けませんか。」

※依頼は Would you ～? という形（主語が you の場合）のみです。

実際に、過去の強い意志の疑問文はほとんどみかけません。

よって、疑問文は would ではなく、以下のように一般動詞の try を用いた表現 try to「～しようとする」の疑問文を用いるのがよいと思います。

Did he try to do the work?「彼は、その仕事をしようとしたか。」

答え方は、Yes または No と did を用い、以下のようになります。

Yes, he did.「はい、しました。」

No, he didn't(did not).「いいえ、しませんでした。」

過去の強い意志を表す would は、肯定文「どうしても～しようとした」と否定文「どうしても～しようとしなかった」をしっかりと覚えて置きましょう。

14 would（助動詞 would[過去の習慣]）

would の持つ過去の習慣の意味「よく～したものだ」について解説します。
実際に、過去の習慣の would を用いた以下の文をみましょう。

He would often go fishing.「彼は、（以前）よく釣に行ったものだ。」

助動詞の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、goes とならないので注意しましょう。

そして、過去の習慣を表す would の場合は、would の後ろに「よく（しばしば）」という意味を持つ often が付くことが多いです。

また、以下のように過去を表す副詞節が付くこともあります。

He would often go fishing when he was a child.
「彼は、子供の頃よく釣りに行ったものだ。」

否定文は、would の後ろに not を付け、以下ようになります。

He would not often go fishing.「彼は、以前あまり釣に行かなかった。」

疑問文は、would を主語の前に出し、文末にクエッションマークを付け、以下ようになります。

Would he often go fishing?「彼は、以前よく釣に行きましたか。」

答え方は、Yes または No と would を用い、以下ようになります。

Yes, he would.「はい、よく行ったものでした。」
No, he wouldn't.「いいえ、あまり行きませんでした。」

しかし、過去の習慣の would の否定文や疑問文はあまりみかけません。

15 used to（助動詞 used to[過去の習慣]）

used to の持つ過去の習慣の意味「よく～したものだ」について解説します。

実際に、過去の習慣の used to を用いた以下の文をみましょう。

He used to go fishing.「彼は、（以前）よく釣りに行ったものだ。」

助動詞 used to の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、goes とならないので注意しましょう。

過去の習慣を表す used to を用いると、過去を表す言葉（last year）などが文中になくとも過去のことを表します。

助動詞 would にも「よく～したものだ」という過去の習慣の意味があります。

日本語だと全く同じですが、それぞれが持つ意味には少し違いがあります。

以下の 2 つの文を比べてみましょう。

He would go fishing.「彼は、（以前）よく釣りに行ったものだ。」
He used to go fishing.「彼は、（以前）よく釣りに行ったものだ。」

上の文のように would を用いると、今も釣りに行っている可能性があります。

これに対し、下の文のように used to を用いると昔よく行っていたけど、今は釣りに行っていないという意味になります。

would を用いると今も昔もよくしている可能性があり、used to を用いると昔はよくしていたけど今はしていないとなります。

否定文は、used to の used の部分が一般動詞の過去形なので、一般動詞の否定文と同じように didn't を used の前に置き、used を原形の use に直します。

そして、否定文の意味は「(以前) あまり～しなかった」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He didn't use to go fishing. 「彼は、(以前) あまり釣りに行かなかった。」

used to の否定文では、以下のように used をそのままにすることもあります。

He didn't used to go fishing.

疑問文も一般動詞の疑問文と同じように、Did を文の先頭に置き、文末にクエッションマーク ? を付け、動詞を原形に直します。

そして、疑問文の意味は「(以前) よく～しましたか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Did he use to go fishing? 「彼は、(以前) よく釣りに行きましたか。」

used to の疑問文では、以下のように used をそのままにすることもあります。

Did he used to go fishing?

16 used to (助動詞 used to[過去の状態])

used to の持つ過去の状態の意味「以前は～だった」について解説します。
実際に、過去の状態 used to を用いた以下の文をみてみましょう。

He used to be poor. 「彼は、以前貧しかった。」

助動詞の後ろは動詞の原形なので、be 動詞は is ではなく原形の be を用います。

そして、この文は「今は貧しくないが以前は貧しかった」というように、彼の過去の状態を表します。

以下のように、物が主語になる場合もあります。

There used to be a big tree here. 「以前、ここに大きな木がありました。」

この文は、There is (are) ～「～がある」の is の前に used to を置き、is を原形の be にしたものです。

否定文は、used to の used の部分が一般動詞の過去形なので、一般動詞の否定文と同じように didn't を used の前に置き、used を原形の use に直します。

そして、否定文の意味は「以前は～でなかった」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He didn't use to be poor. 「以前、彼は貧しくなかった。」

There didn't use to be a big tree here. 「以前、ここに大きな木はなかった。」

また、以下のように文末に before 「以前」を付け、be 動詞の過去形の否定文を用いても同じ意味を表すことができます。

He wasn't poor before. 「以前、彼は貧しくなかった。」

There wasn't a big tree here before. 「以前、ここに大きな木はなかった。」

疑問文も一般動詞の疑問文と同じように、Did を文の先頭に置き、文末にクエッションマーク？を付け、動詞を原形に直します。

そして、疑問文の意味は「以前は～でしたか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Did he use to be poor? 「以前、彼は貧しかったですか。」

Did there use to be a big tree here? 「以前、ここに大きな木がありましたか。」

また、以下のように文末に before 「以前」を付け、be 動詞の過去形の疑問文を用いても同じ意味を表すことができます。

Was he poor before? 「以前、彼は貧しかったですか。」

Was there a big tree here before? 「以前、ここに大きな木がありましたか。」

17 should (助動詞 should[義務])

should の持つ義務の意味「～すべきだ」について解説します。

should も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、義務の should を用いた以下の文をみてみましょう。

He should go there. 「彼は、そこに行くべきだ。」

この文は、彼にはそこに行く義務があるということを表しています。

助動詞 should の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、goes とならないので注意しましょう。

否定文は、should の後ろに not を付け、意味は「～すべきでない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He should not go there. 「彼は、そこに行くべきではない。」

should not の省略形 shouldn't を用い、以下のように書くことができます。

He shouldn't go there.

疑問文は、should を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～すべきですか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Should he go there? 「彼は、そこに行くべきですか。」

答え方は、Yes または No と should を用い、以下のようになります。

Yes, he should. 「はい、行くべきです。」

No, he shouldn't. 「いいえ、行くべきではありません。」

18 should (助動詞 should[当然の推量])

should の持つ当然の推量「～するはずだ」について解説します。

should も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、当然の推量の should を用いた以下の文をみてみましょう。

He should be there.「彼は、そこにいるはずだ。」

この文は、彼にはそこにいることがほぼ確実であることを、話し手が推測しているということを表しています。

助動詞の後ろは動詞の原形なので、be 動詞は is ではなく原形の be になります。

当然の推量の should は、否定文や疑問文では使いません。

「彼は、そこにいるはずはない。」という推量の否定文は、推量の can の否定 cannot 「～のはずがない」を用い、以下のようになります。

He cannot be there.「彼は、そこにいるはずはない。」

また、「彼は、そこにいるだろうか。」という推量の疑問文も、can の疑問文 Can ～? 「いったい～だろうか」を用い、以下のようになります。

Can he be there?「彼は、そこにいるだろうか。」

19 ought to (助動詞 ought to[義務])

ought to の持つ義務の意味「～すべきだ」について解説します。

ought to も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、義務の ought to を用いた以下の文をみてみましょう。

He ought to go there.「彼は、そこに行くべきだ。」

この文は、彼にはそこに行く義務があるということを表しています。

助動詞 ought to の後ろは動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、goes とならないので注意しましょう。

また、助動詞 should にも ought to と同じ義務「～すべきだ」という意味があるので、以下のよう
に ought to を should に置き換えても同じ意味になります。

He should go there.「彼は、そこに行くべきだ。」

否定文は、ought の後ろに not を付けて ought not to とし、意味は「～すべきでない」となります。よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He ought not to go there.「彼は、そこに行くべきではない。」

ought to の否定文は、以下のように should の否定文と同じ意味になります。

He shouldn't go there.「彼は、そこに行くべきではない。」

疑問文は、ought to の ought のみを主語の前に出し、文末にクエッションマーク? を付けます。そして、疑問文の意味は「～すべきですか」となります。よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Ought he to go there?「彼は、そこに行くべきですか。」

ought to の疑問文は、以下のように should の疑問文と同じ意味になります。

Should he go there?「彼は、そこに行くべきですか。」

しかし、最近では ought to の否定文と疑問文はあまり用いられないようです。

20 ought to (助動詞 ought to[当然の推量])

ought to の持つ当然の推量「～するはずだ」について解説します。

ought to も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、当然の推量の ought to を用いた以下の文をみてみましょう。

He ought to be there.「彼は、そこにいるはずだ。」

この文は、彼にはそこにいるということを話し手が推測しているということを表しています。

助動詞の後ろは動詞の原形なので、be 動詞は is ではなく原形の be になります。

当然の推量の ought to が、否定文や疑問文で用いられているのを見たことはありません。

「彼は、そこにいるはずはない。」という推量の否定文は、推量の can の否定 cannot 「～のはずがない」を用い、以下のようになります。

He cannot be there.「彼は、そこにいるはずはない。」

また、「彼は、そこにいるだろうか。」という推量の疑問文も、can の疑問文 Can ～? 「いったい～だろうか」を用い、以下のようになります。

Can he be there?「彼は、そこにいるだろうか。」

21 need (助動詞 need[必要])

need の持つ必要の意味「～する必要がある」について解説します。

need も can と同じ助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、助動詞 need を用いた以下の文をみてみましょう。

He need pay money.「彼は、お金を払う必要がある。」

助動詞 need の後ろは必ず動詞の原形なので、主語が三人称単数でも動詞の最後に s は付けません。この場合、pays とならないので注意しましょう。

ただし、助動詞の need は肯定文で用いることはなく、通常否定文と疑問文のみで用いられます。よって、肯定文は例として出ただけで普通使いません。

肯定文は一般動詞の need を用い、以下のように表します。

He needs to pay money.「彼は、お金を払う必要がある。」

否定文は、need の後ろに not を付け、意味は「～する必要はない」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He need not pay money.「彼は、お金を払う必要はない。」

need not の省略形 needn't を用い、以下のように書くこともできます。

He needn't pay money.

そして、助動詞 need の否定 need not は have to 「～しなければならない」の否定 don't (doesn't) have to 「～する必要はない」と同じ意味になります。

よって、この否定文は以下のように書き換えることができます。

He doesn't have to pay money.「彼は、お金を払う必要はない。」

疑問文は、can などと同じように need を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

そして、疑問文の意味は「～する必要がありますか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Need he pay money? 「彼は、お金を払う必要がありますか。」

答え方は、Yes または No と need を用い、以下のようになります。

Yes, he need. 「はい、払う必要があります。」

No, he needn't. 「いいえ、払う必要はありません。」

22 need（一般動詞の need）

一般動詞の need 「～を必要とする」について解説します。

前のページでも解説しましたが、以下のように助動詞の need を肯定文で用いることはできません。

× He need pay money. 「彼は、お金を払う必要がある。」

そこで、「～する必要がある」という肯定の意味を表す時には一般動詞の need を用いた表現 need to を用います。

一般動詞の need の意味は「～する必要がある」ではなく「～を必要とする」で、通常以下のように後ろに動詞の原形ではなく名詞（目的語）を置きます。

He needs money. 「彼は、お金を必要としている。」

need は、一般動詞なので主語が三人称単数の時は最後に s が付きます。

以下のように、一般動詞 need の後ろには、目的語として名詞の代わりに不定詞（to + 動詞の原形）の名詞的用法も置くこともできます。

He needs to pay money. 「彼は、お金を払う必要がある。」

不定詞の名詞的用法の意味は「～すること」なので、この文の need to pay の部分を直訳すると「払うことを必要する」となります。

これは、「払う必要がある」と同じ意味です。

よって、一般動詞の need を用いた need to ～ は、「～する必要がある」という意味になります。

このように、一般動詞の need の後ろに不定詞「to + 動詞の原形」を付けると、助動詞の need 「～する必要がある」と同じ意味になります。

一般動詞 need を用いた文の否定文は、一般動詞の否定文と同じように don't (doesn't) を動詞の前に置き、動詞を原形にします。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

He doesn't need to pay money. 「彼は、お金を払う必要はない。」

そして、この文は、以下のように have to 「～しなければならない」の否定 don't (doesn't) have to 「～する必要はない」と同じ意味になります。

He doesn't have to pay money. 「彼は、お金を払う必要はない。」

疑問文は、Do (Does) を主語の前に置き、動詞を原形に戻し、文末にクエッションマーク ? を付けます。

そして、疑問文の意味は「～する必要がありますか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Does he need to pay money? 「彼は、お金を払う必要がありますか。」

答え方は、Yes または No と does を用い、以下のようになります。

Yes, he does. 「はい、払う必要があります。」

No, he doesn't. 「いいえ、払う必要はありません。」

※一般動詞 need の否定文と疑問文は米口語のみで用いられるようです。

23 need (助動詞の need と一般動詞の need の違い)

助動詞の need と一般動詞の need の違いについて解説します。

助動詞の need は「～する必要がある」という意味を持ち、使い方は can などの他の助動詞と同じです。

助動詞の need は肯定文で用いられることはありませんが、一般動詞の need との違いをみるためにまず以下の文をみてみましょう。

He need pay money. 「彼は、お金を払う必要がある。」

※助動詞の need は肯定文では用いません。この文はあくまで例です。

この文の need は助動詞なので、主語が三人称単数でも s は付けません。助動詞の can の場合に He cans としないのと同じことで、He needs とはなりません。さらに、助動詞の後ろは動詞の原形なので、主語が三人称単数の He でも動詞の pay に s は付けません。

これに対し、一般動詞の need は「～を必要とする」という意味です。

よって、先ほどの文で助動詞 need を一般動詞の need にそのまま置き換えると、以下のおかしな意味になってしまいます。

He needs pay money. 「彼は、お金を払うを必要とする。」

この need は一般動詞なので主語が三人称単数の時は s を付け、needs となります。これは、助動詞 need が「～する必要がある」という意味を持っているのに対し、一般動詞の need は「～を必要とする」という意味だからです。

また、以下のように 1 つの主語に対し一般動詞を 2 つ並べることはできません。

I like play tennis. 「私は、テニスをするを好きです。」

意味もおかしいですね。

このような場合には、play の前に to を置いた不定詞 (to + 動詞の原形) の名詞的用法「～すること」を用い、以下のようになります。

I like to play tennis. 「私は、テニスをするのが好きです。」

play だけだと「～する」という意味なのに対し、to play の部分は「～すること」という意味になります。

よって、一般動詞の need を用いた文は以下ようになります。

He needs to pay money.「彼は、お金を払うことを必要とする。」

そして、これは「彼は、お金を払う必要がある。」と同じ意味になります。

よって、以下の助動詞 need を用いた文と一般動詞 need を用いた文は、共に「彼は、お金を払う必要がある。」という同じ意味になります。

He need pay money. [助動詞 need の場合]

He needs to pay money. [一般動詞の need の場合]

ただし、最初にも書きましたが助動詞の need は否定文と疑問文のみで用いられ、肯定文で用いられることはありません。

それぞれの文の否定文と疑問文は以下ようになります。

・ 助動詞の場合

He needn't pay moeny.「彼は、お金を払う必要はありません。」

Need he pay money?「彼は、お金を払う必要がありますか。」

・ 一般動詞の場合

He doesn't need to pay moeny.「彼は、お金を払う必要はありません。」

Does he need to pay money?「彼は、お金を払う必要がありますか。」

24 had better (助動詞 had better[忠告])

had better の持つ忠告の意味「～したほうがよい」について解説します。

had better も助動詞なので、動詞の前に置いて動詞に意味を加えます。

実際に、had better を用いた以下の文をみてみましょう。

You had better go there.「あなたは、そこに行ったほうがよい。」

助動詞 had better の後ろには、動詞の原形が置かれます。

また、この文は相手に忠告するような意味になります。

had better 「～したほうがよい」を用いた文は、以下の助動詞 should 「～すべきだ」を用いた文より強い忠告を表します。

You should go there.「あなたは、そこに行くべきだ。」

日本語だと should 「すべきだ」の方が had better 「～したほうがよい」より強い忠告のように聞こえます。

しかし、英語では should を用いた文より had better を用いた文の方が強い忠告を表すので使う時には注意しましょう。

否定文は、had better の後ろに not を付けた had better not という形を用い、意味は「～しないほうがよい」となります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

You had better not go there.「あなたは、そこに行かないほうがよい。」

過去完了形「had + 過去分詞」の否定文と混乱して、否定文を had not better としてしまう間違いをしやすいので注意しましょう。

had better の疑問文は、had を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付け、意味は「～したほうがよいですか」となります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Had I better go there? 「私は、そこに行ったほうがよいですか。」

しかし、had better の疑問文はほとんど見かけることはありません。

以下のように、had better と近い意味を持つ should 「～すべきだ」の疑問文を用いれば良いと思います。

Should I go there? 「私は、そこに行くべきですか。」

25 助動詞 + 完了形 (cannot + 完了形 [have p.p.])

cannot (助動詞) + 完了形 「～だったはずはない」について解説します。

「助動詞 + 完了形」とは、助動詞の後ろに現在完了形 「have + 過去分詞」を置いた 「cannot + have + 過去分詞」などのことです。

助動詞の後ろは、動詞の原形なので現在完了形 「have + 過去分詞」のみが付きます。過去完了形 「had + 過去分詞」を置くことはできません。

なぜこのような形を用いるのかについて、ここでは cannot 「～のはずはない」を使って解説していきます。

まず、cannot のみを用いた以下の文をみてみましょう。

He cannot be rich. 「彼は、お金持ちのはずはない。」

この文には、主に 2 人の人が関わっています。1 人はお金持ちだと推測されている「彼」、もう 1 人はこの文を言っている「話し手」です。

そして、この文で話し手は、彼が「今」お金持ちであることを、「今」そんなはずはないと推測しています。

まとめると、彼の「今」の状態を、話し手は「今」推測しています。

次に、以下の日本語の文を考えてみましょう。

「彼は、お金持ちだったはずはない。」

今度は、少し違います。

この文では、話し手が「今」推測しているという部分は同じですが、話し手は彼が「過去のある時点」でお金持ちだったということを推測しています。

まとめると、彼の「過去」の状態を、話し手は「今」推測しています。

これを、1 つずつ英文に書き換えてみましょう。

まず、「彼はお金持ちだった。」は He was rich. です。

そして、「彼は～のはずがない。」は He cannot ～ です。

He cannot ～ の～の部分に He was rich を入れれば、「彼は、お金持ちだったはずはない」という文になります。

助動詞の後ろは動詞の原形なので、普通に考えると以下のようにになります。

He cannot be rich.

ところが、これでは「彼は、お金持ちのはずがない。」という彼の「今」の状態を話し手が「今」推測している最初の例文と同じになってしまいます。

また、彼の「過去」の状態を表したいからといって、He cannot の後ろに was を置き、以下のようにすることもできません（助動詞の後ろは動詞の原形です）。

He cannot was rich.

このように、助動詞の後ろには動詞の原形しか置けず、過去形は使えないのでその代わりに（現在）完了形を用います。

よって、「彼は、お金持ちだったはずがない。」という意味を表す文は、cannot の後ろに（現在）完了形の「have + 過去分詞」を置き、以下のようになります。

He cannot have been rich.「彼は、お金持ちだったはずがない。」

この文で用いられている（現在）完了形は、cannot の部分の「現在」という時に対して 1 つ古い時（この場合は「過去」）を表しています。

本来の継続、経験、完了（結果）という意味ではないので注意しましょう。

もう 1 度繰り返しますが、cannot have + 過去分詞「～だったはずがない」は、「過去」の状態や動作を話し手が「今」推測していることを表します。

「助動詞 + 完了形」の形を作る助動詞で覚えるべきものは、cannot の他に 5 個しかないので、形と意味を暗記してしまうこともできます。

26 助動詞 + 完了形（must + 完了形 [have p.p.]）

must（助動詞）+ 完了形「～だったにちがいない」について解説します。

「助動詞 + 完了形」とは、助動詞の後ろに現在完了形「have + 過去分詞」を置いた「cannot + have + 過去分詞」などのことです。

助動詞の後ろは、動詞の原形なので現在完了形「have + 過去分詞」のみが付きます。過去完了形「had + 過去分詞」を置くことはできません。

なぜこのような形を用いるのかについて、ここでは must 「～にちがいない」を使って解説していきます。

まず、must のみを用いた以下の文をみてみましょう。

He must be rich.「彼は、お金持ちにちがいない。」

この文には、主に 2 人の人が関わっています。1 人はお金持ちだと推測されている「彼」、もう 1 人はこの文を言っている「話し手」です。

そして、この文で話し手は、彼が「今」お金持ちであるということを、「今」そうであるにちがいないと推測しています。

まとめると、彼の「今」の状態を、話し手は「今」推測しています。

次に、以下の日本語の文を考えてみましょう。

「彼は、お金持ちだったにちがいない。」

今度は、少し違います。

この文では、話し手が「今」推測しているという部分は同じですが、話し手は彼が「過去のある時点」でお金持ちだったということを推測しています。

まとめると、彼の「過去」の状態を、話し手は「今」推測しています。

これを、1 つずつ英文に書き換えてみましょう。
まず、「彼はお金持ちだった。」は He was rich. です。
そして、「彼は～にちがいない。」は He must ～ です。

He must ～ の～の部分に He was rich を入れれば、「彼は、お金持ちだったにちがいない」という文になります。

助動詞の後ろは動詞の原形なので、普通に考えると以下ようになります。

He must be rich.

ところが、これでは「彼は、お金持ちにちがいない。」という彼の「今」の状態を推測している最初の例文と同じになってしまいます。

また、彼の「過去」の状態を表したいからといって、He must の後ろに was を置き、以下のようにすることもできません（助動詞の後ろは動詞の原形です）。

He must was rich.

このように、助動詞の後ろには動詞の原形しか置けず、過去形は使えないのでその代わりに（現在）完了形を用います。

よって、「彼は、お金持ちだったにちがいない。」という意味を表す文は、must の後ろに（現在）完了形の「have + 過去分詞」を置き、以下ようになります。

He must have been rich. 「彼は、お金持ちだったにちがいない。」

この文で用いられている（現在）完了形は、must の部分の「現在（今）」という時に対して 1 つ古い時（この場合は「過去」）を表しています。

本来の継続、経験、完了（結果）という意味ではないので注意しましょう。

もう 1 度繰り返しますが、must have + 過去分詞「～だったにちがいない」は、「過去」の状態や動作を話し手が「今」推測しているということを表します。

「助動詞 + 完了形」の形を作る助動詞で覚えるべきものは、must の他に 5 個しかないので、形と意味を暗記してしまうこともできます。

27 助動詞 + 完了形（助動詞 [may, need not, should, ought to] + 完了形）

助動詞（may, need not, should, ought to）+ 完了形について解説します。

1. may have + 過去分詞「～だったかもしれない」

He may have been rich. 「彼は、お金持ちだったかもしれない。」

この文は、彼の「お金持ちだった」という「過去のある時点」の状態を「～かもしれない」と「今」推測しているということを表しています。

2. need not have + 過去分詞「～する必要はなかった（のに）」

He need not have gone there. 「彼は、そこに行く必要はなかったのに。」

この文は、「そこに行った」という「過去のある時点」で彼が行った動作は「必要なかった（のに）」と「今」指摘しているということを表しています。

3. should（ought to）have + 過去分詞「～すべきだった（のに）」

He should have gone there. 「彼は、そこに行くべきだったのに。」
He ought to have gone there. ※上の文と意味は同じです。

この文は、「過去のある時点」で彼が「そこへ行く」という動作をすべきだったと、話し手が「今」指摘しているということを表しています。

4. should not（ought not to）have + 過去分詞「～すべきでなかった（のに）」

He should not have gone there. 「彼は、そこに行くべきではなかったのに。」
He ought not to have gone there. ※上の文と意味は同じです。

この文は、「過去のある時点」で彼が「そこへ行く」という動作をすべきでなかったと、話し手が「今」指摘しているということを表しています。

これらの文の現在完了形は、may（need not, should, should not など）の部分の「現在（今）」という時に対し、1 つ古い時（この場合は「過去」）を表しています。

本来の継続、経験、完了の意味ではないので注意しましょう。

28 助動詞の慣用表現（助動詞の慣用表現 [熟語]）

助動詞の慣用表現は助動詞に他の語が付いたもので、これまでに解説したの助動詞の意味とは全く異なる意味を持ちます。

そして、これらは熟語のようなものなので、それぞれ形と意味を暗記しておく必要があります。

ここでは、よく用いられる助動詞の慣用表現について1つずつ解説しています。

1. cannot ～ too … 「(どんなに) ～してもすぎることはない」

You cannot be too careful. 「あなたは、注意してもすぎることはない。」

※ be careful 「注意する」

この慣用表現では、cannot の後ろには be 動詞の原形の be、too の後ろに形容詞が置かれる形がよく用いられます。

2. may well 「たぶん～するだろう」「～するのももっともだ」

He may well tell a lie. 「彼は、たぶん嘘をつくだろう。」

She may well run away. 「彼女が逃げるのももっともだ。」

※ run away 「逃げる」

may well を1つの助動詞と考え、その後ろに動詞の原形を置きます。

3. may as well 「～するのも悪くない」

We may as well watch a movie. 「(私達は) 映画を観るのも悪くない。」

may as well を1つの助動詞と考え、その後ろに動詞の原形を置きます。

4. would rather ～ (than …) 「(…より) むしろ～したい」

I would rather eat fish. 「私は、むしろ魚を食べたい。」

そして、何かと比較して「…よりむしろ～したい」という場合は、以下の例文のように比較対照を表す than … を文の後ろに置きます。

I would rather eat fish than meat. 「私は、肉よりむしろ魚を食べたい。」

than … の部分は付けなくても大丈夫です。その場合には、上の例文のようにただ「むしろ～したい」という意味になります。

5. would like to ～ 「～したい」

I would like to go fishing. 「私は、釣りに行きたい。」

would like to を1つの助動詞と考え、その後ろに動詞の原形を置きます。

第 3 部

受動態

1

受動態の基礎（受動態の形と意味）

これまで解説してきた「A は（が） B を～する」という動作を行う人やものを主語にした表現は、能動態と呼ばれます。

これに対し、**受動態**とは「B は A によって～される」というように、動作を受ける人やものを主語にした表現です。

そして、**受動態の形**は「be 動詞 + 過去分詞」となります。

実際に、能動態と受動態の文をみてみましょう。

まず、以下の文は「主語は～する」という能動態の文です。

He closes the door.「彼は、そのドアを閉める。」

この文と同じことを表す時に、「そのドア」を中心に考えると「そのドアは、彼によって閉められる。」という受動態の文になります。

それでは、この能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

受動態の文では、動作を受ける the door 「そのドア」を主語にします。

そして、動詞の部分を「be 動詞 + 過去分詞」に変えます。

この場合、主語が The door で現在のことなので be 動詞は is、close の過去分詞は closed なので受動態の形は is closed となります。

これで、The door is closed 「そのドアは閉められる」という部分は完成です。

最後に、誰に（よって）好かれているかを表すために、by 「～によって」を用い、by him 「彼に（よって）」を「be 動詞 + 過去分詞」の後ろに付けます。

by の後ろに代名詞を置く時は目的格になるので、by he ではなく by him という形なることに注意しましょう。

よって、受動態の文は以下ようになります。

The door is closed by him.「そのドアは、彼によって閉められる。」

過去形の文は、be 動詞の is を過去形の was にし、以下ようになります。

The door was closed by him.「そのドアは、彼によって閉められた。」

以下に、もう 1 度受動態の肯定文の形と意味をまとめます。

受動態の文は、動作を受けるものや人を主語にした表現で、形は「be 動詞 + 過去分詞」、意味は「～される」や「～された」となります。

そして、動作主は（代）名詞の目的格を by 「～によって」の後ろに置き、これを be 動詞 + 過去分詞の後に付けます。

受動態の文は be 動詞が用いられているので、be 動詞の後ろに not を付ければ否定文になります。

以下の受動態を用いた肯定文を否定文に書き換えてみましょう。

The door is closed by him.「そのドアは、彼によって閉められる。」

be 動詞 is の後ろに not を付け、否定文は以下ようになります。

The door is not closed by him.「そのドアは、彼によって閉められません。」

また、is not の短縮形 isn't を用いて、以下のように書くこともできます。

The door isn't closed by him.

もう 1 つ、以下の過去形の場合も考えてみましょう。

The car was bought by him.「その車は、彼によって購入された。」

was の後ろに not を付け、否定文は以下ようになります。

The car was not bought by him.「その車は、彼によって購入されなかった。」

was not の省略形 wasn't を用い、以下のように書くこともできます。

The car wasn't bought by him.

受動態の文は be 動詞が用いられているので、be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付ければ疑問文になります。

以下の受動態の文を疑問文に書き換えてみましょう。

The door is closed by him.「そのドアは、彼によって閉められる。」

be 動詞 is を主語 (the door) の前に出し、疑問文は以下のようになります。

Is the door closed by him?「そのドアは、彼によって閉められますか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞 (is) を用い、以下のようになります。

Yes, it is.「はい、閉められます。」

No, it isn't.「いいえ、閉められません。」

過去形の文でも疑問文の作り方は同じで、以下のようになります。

Was the car bought by him?「その車は、彼によって購入されましたか。」

答え方も、Yes または No と be 動詞 (was) を用い、以下のようになります。

Yes, it was.「はい、購入されました。」

No, it wasn't.「いいえ、購入されませんでした。」

2 受動態の基礎 (by ～ を付けない受動態)

受動態とは、「B は A によって～される」というように動作を受ける人やものを主語にした表現です。

受動態の文は、動詞の部分に「be 動詞 + 過去分詞」という形を用い、意味は「～される」や「～された」となります。

これに対し、以下の文のように、「A は B を～する」と動作を行う人やものを主語にした表現は能動態と呼ばれます。

He closed the door.「彼は、そのドアを閉めた。」

そして、この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

The door was closed by him.「そのドアは、彼によって閉められた。」

受動態の文では、動作を受けている (この場合閉められた) The door「そのドア」が主語になります。

そして、動作主 (そのドアを開けた He「彼」) は、by + (代) 名詞の目的格「～に (よって)」を be 動詞 + 過去分詞の後ろに置いて表します。

先ほどの文では、動作主を by him「彼に (よって)」という形で表しています。

しかし、動作主は受動態の文に必ず付くという訳ではなく、以下の 3 つの場合には動作主を表す「by ～」は省略されます。

- 1. 動作主が明らかな場合
- 2. 動作主が分からない場合
- 3. 動作主が一般の人の場合

まず、1 つ目の動作を行うものや人が明らかな場合について解説します。

以下の能動態の文をみてみましょう。

He broke the chair yesterday.「彼が、昨日その椅子を壊しました。」

そして、もし椅子を壊したのが彼だと明らかに分かっている場合、この能動態の文を受動態の文に書き換えると以下ようになります。

The chair was broken yesterday.「その椅子は、昨日壊されました。」

話しの流れで彼が壊したことは明らかで、わざわざ言わなくても聞き手が誰が壊したのか分かる場合には、動作主 by him「彼によって」は通常省略されます。

次に、2 つ目の誰によってされたのか分からない場合について解説します。

以下の能動態の文をみてみましょう。

They built the building 10 years ago.「彼らは、10 年前にそのビルを建てた。」

そして、この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下ようになります。

The building was built 10 years ago.「そのビルは、10 年前に建てられた。」

10 年も前のことで誰によって建てられたか分からないという場合には、このように受動態の文の動作主 by them「彼らによって」を省略します。

最後に、3 つ目の動作を行う人が一般の人の場合について解説します。

以下の能動態の文をみてみましょう。

They speak English in America.「彼らは、アメリカで英語を話します。」

そして、この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下ようになります。

English is spoken in America.「英語は、アメリカで話されています。」

この場合、they「彼ら」というのはアメリカに住んでいる一般の人なので、受動態の文の by them「彼らによって」は省略します。

また、この場合、英語はアメリカに住んでいる人によって話されていると明らかに分かるので、by them「彼らによって」が省略されと考えることもできます。

3 受動態の応用（助動詞 + 受動態）

受動態の文は、動詞の部分に「be 動詞 + 過去分詞」という形を用い、意味は「～される」や「～された」となります。

現在形や過去形の受動態の文は、以下の通りです。

Dinner is cooked by her.「夕食は、彼女によって作られます。」
The car was bought by him.「その車は、彼によって購入されました。」

ここで、「夕食は、明日彼女によって作られるでしょう。」という**未来形の受動態**の文を考えてみましょう。

明日という未来のことを表すために助動詞の will を用い、その後ろに受動態の形「be 動詞 + 過去分詞」を置きます。

そして、助動詞 will の後ろは必ず動詞の原形になるので be 動詞は be となり、受動態の形は「will + be + 過去分詞」となります。

よって、「夕食は、明日彼女によって作られるでしょう。」という受動態の文は以下ようになります。

Dinner will be cooked by her tomorrow.

否定文や疑問文の作り方は、助動詞を用いた能動態の文の場合と同じです。

よって、**否定文は助動詞 will の後ろに not を付け、以下ようになります。**

Dinner will not be cooked by her tomorrow.
「夕食は、明日彼女によって作られない（でしょう）。」

will not の短縮形 won't を用い、以下のように書くこともできます。

Dinner won't be cooked by her tomorrow.

疑問文は、助動詞 will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付け、以下ようになります。

Will dinner be cooked by her tomorrow?
「夕食は、明日彼女によって作られるでしょうか。」

答え方は、Yes または No と will を用い、以下ようになります。

Yes, it will. 「はい、作られるでしょう。」
No, it won't. 「いいえ、作られないでしょう。」

もう 1 つ、以下の文の受動態「be 動詞 + 過去分詞」の前に助動詞 must 「～にちがいない」を置いた文を考えてみましょう。

The car is bought by him. 「その車は、彼によって購入されます。」

この文の is bought の前に must を置くと、以下のように is は be となります。

The car must be bought by him.
「その車は、彼によって購入されるにちがいない。」

助動詞の後ろの動詞は必ず原形なので be 動詞は必ず原形の be になり、can や may など、どの助動詞でも受動態の形は「助動詞 + be + 過去分詞」となります。

4 受動態の応用（進行形の受動態）

受動態の文は、動詞の部分に「be 動詞 + 過去分詞」という形を用い、意味は「～される」や「～された」となります。

この受動態に進行形を加えたものが、進行形の受動態です。

まず、進行形の受動態の形と意味について解説します。

以下のように、進行形の形「be 動詞 + 動詞の ing 形」と受動態の形「be 動詞 + 過去分詞」を足し算すると、進行形の受動態の形になります。

be 動詞 + 動詞の ing 形

+) be 動詞 + 過去分詞

be 動詞 + being + 過去分詞

↑ be 動詞の ing 形

be 動詞と過去分詞の間には、進行形と受動態を繋ぐ being が必ず置かれます。

進行形の受動態の意味は、受動態の「～される」と進行形の「～している（ところです）」を組み合わせ、「～されている（ところです）」となります。

実際に、以下の受動態の文を進行形の受動態に書き換えてみましょう。

Today's breakfast is cooked by her.
「今日の朝食は、彼女によって作られます。」

is cooked の部分を「is being cooked」に書き換え、進行形の受動態の文は以下ようになります。

Today's breakfast is being cooked by her.
「今日の朝食は、彼女によって作られています。」

進行形の受動態の文は、be 動詞の後ろに not を付けると否定文になります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下ようになります。

Today's breakfast is not being cooked by her.
「今日の朝食は、彼女によって作られていない。」

is not の短縮形 isn't を用い、以下のように書くこともできます。

Today's breakfast isn't being cooked by her.

また、進行形の受動態は、be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク ? を付けると疑問文になります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Is today's breakfast being cooked by her?
「今日の朝食は、彼女によって作られていますか。」

答え方は、Yes または No と be 動詞を用い、以下のようになります。

Yes, it is. 「はい、作られています。」
No, it isn't. 「いいえ、作られていません。」

以上は現在進行形と受動態を組み合わせた場合ですが、過去進行形の受動態は be 動詞を過去形に変えます。

よって、先ほどの現在進行形の受動態の文を過去進行形の受動態に書き換えると、以下のようになります。

Today's breakfast was being cooked by her last night.
「今日の朝食は、昨夜彼女によって作られていました。」

未来進行形の受動態の形は、be 動詞の前に未来を表す助動詞 will を置き、be 動詞は原形になるので「will be + being + 過去分詞」となります。

よって、先ほどの現在進行形の受動態の文を未来進行形の受動態に書き換えると、以下のようになります。

Today's breakfast will be being cooked by her.
「今日の朝食は、彼女によって作られているでしょう。」

5 受動態の応用（完了形の受動態）

受動態の文は、動詞の部分に「be 動詞 + 過去分詞」という形を用い、意味は「～される」や「～された」となります。

この受動態に完了形を加えたものが、完了形の受動態です。

まず、現在完了形を用いて完了形の受動態の形と意味について解説します。

以下のように、現在完了形の形「have (has) + 過去分詞」と受動態の形「be 動詞 + 過去分詞」を足し算すると、完了形の受動態の形になります。

have (has)	+	過去分詞
+		be 動詞 + 過去分詞

have (has)	+	been + 過去分詞
		↑ be 動詞の過去分詞

have と過去分詞の間には、完了形と受動態を繋ぐ been が必ず置かれます。

完了形の受動態の意味は、受動態の「～される」と現在完了形の継続、経験、完了（結果）を組み合わせ、以下のようになります。

- 1. 継続「～され続けている」
- 2. 経験「～されたことがある」
- 3. 完了「～されたところです」「～されてしまった」

以下の現在完了形の文を完了形の受動態の文に書き換えてみましょう。

Dinner is cooked by her. 「夕食は、彼女によって作られます。」

is cooked の部分を「has been cooked」に書き換え、現在完了形の受動態の文は以下のようになります。

Dinner has been cooked by her.
「夕食は、彼女によって作られてしまった。」

継続、経験、完了（結果）のうち、この場合は完了の意味が 1 番自然です。

現在完了形の受動態の文は、現在完了形の文と同様に have（この場合は has）の後ろに not を付けると否定文になります。

よって、先ほどの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

Dinner has not been cooked by her yet.
「夕食は、彼女によってまだ作られていません。」

has not の短縮形 hasn't を用い、以下のように書くこともできます。

Dinner hasn't been cooked by her yet.

また、have（この場合は has）を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けると疑問文になります。

よって、先ほどの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

Has dinner been cooked by her yet?
「夕食は、彼女によってもう作られてしまいましたか。」

答え方は、Yes または No と have（has）を用い、以下のようになります。

Yes, it has. 「はい、もう作られてしまいました。」
No, it hasn't. 「いいえ、まだ作られていません。」

現在完了形の受動態の文は、以下のように経験や継続の意味も表します。

I have been told a lie by my best friend once.
「私は、1 番仲のいい友達に 1 度嘘をつかれたことがある。」

I have been praised by my mother since I was a child.
「私は、子供の頃から母親に褒められ（続け）ています。」

※ praised は praise 「褒める」の過去分詞です。

過去完了形の受動態の形は、現在完了形の受動態の have（has）の部分を過去形の had に変え、「had + been + 過去分詞」となります。

意味は、以下の 3 つです。

- 1. 継続「（過去のある時点まで）～され続けていた」
- 2. 経験「（過去のある時点までに）～されたことがあった」
- 3. 完了（結果）「（過去のある時点までに）～されてしまった」

以下は、過去完了形の受動態を用いた文です。

The room had been put away when he got there.
「彼がそこに着いた時、その部屋は片付けられてしまっていた。」

※ put away 「片付ける」の put は過去分詞です。

この文では、by them が省略されています。

過去完了形の受動態の文は、以下のように had の後ろに not を付けると否定文になります。

The room had not been put away when he got there.
「彼がそこに着いた時、その部屋は片付けられていなかった。」

had not の短縮形 hadn't を用い、以下のように書くこともできます。

The room hadn't been put away when he got there.

過去完了形の受動態の疑問文は、以下のように had を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

Had the room been put away when he got there?

「彼がそこに着いた時、その部屋は片付けられていましたか。」

答え方は、Yes または No と had を用い、以下のようになります。

Yes, it had. 「はい、片付けられていました。」
No, it hadn't. 「いいえ、作られていませんでした。」

過去完了形の受動態の文は、以下のように経験や継続の意味も表します。

I had been told a lie by my best friend before I was 20 years old.
「20 歳になる前に、私は 1 番仲のいい友達に 1 度嘘をつかれたことがあった。」

I had been praised by my mother till I was 20 years old.
「20 歳になるまで、私は母親褒められ（続け）ていました。」

未来完了形の受動態の形は、現在完了形の受動態の have（has）の前に未来を現す助動詞 will を置き、
「will have + been + 過去分詞」となります。

意味は、以下の 3 つです。

- 1. 継続「（未来のある時点まで）～され続けることになる（でしょう）」
- 2. 経験「（未来のある時点までに）～されることになる（でしょう）」
- 3. 完了（結果）「（未来のある時点までに）～されてしまう（でしょう）」

以下は、未来完了形の受動態を用いた文です。

Dinner will have been cooked by her when we get home.
「私達が家に着く時（頃）には、夕食は彼女によって作られているでしょう。」

未来完了形の受動態の文は、以下のように will の後ろに not を付けると否定文になります。

Dinner will not have been cooked by her when we get home.
「私達が家に着く時、夕食は彼女によって作られていないでしょう。」

will not の短縮形 won't を用い、以下のように書くこともできます。

Dinner won't have been cooked by her when we get home.

未来完了形の受動態の文は、以下のように will を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を
付けると疑問文になります。

Will dinner have been cooked by her when we get home?
「私達が家に着く時（頃）には、夕食は彼女によって作られているでしょうか。」

答え方は、Yes または No と will を用い、以下のようになります。

Yes, it will. 「はい、作られているでしょう。」
No, it won't. 「いいえ、作られていないでしょう。」

未来完了形の受動態の文は、以下のように経験や継続の意味も表します。

The book will have been read one hundred times if he reads it.
「もし彼がその本を読むと、その本は 100 回読まれることになる（でしょう）。」

He will have been praised by my mother till he is 20 years old.
「20 歳になるまで、彼は母親に褒められ続けるでしょう。」

6 受動態の応用（群動詞＜句動詞＞の受動態）

まず、群動詞＜句動詞＞とは何か簡単に説明します。

buy など多くの動詞は、1 語である動作を表します。

これに対し、laugh at 「～を笑う」や speak to 「～に話しかける」などのように、動詞が前置詞や副詞を伴って 1 つの動作を表すものが群動詞です。

実際に、以下の群動詞を用いた能動態の文を受動態に書き換えてみましょう。

They laughed at me. 「彼らは、私のことを笑いました。」

この文で、笑われたのは私なので受動態の文では「私」を主語にし、動詞の部分を「be 動詞＋過去分詞」に変え、受動態の文は以下ようになります。

I was laughed at by them. 「私は、彼らに笑われました。」

ここで、群動詞の受動態を作る時には 1 つ注意が必要です。

能動態の文では、群動詞 laugh at の at の後ろに目的語の me が置かれていますが、受動態の文では me は主語 I に変わり、at の後ろからなくなります。

ところが、群動詞 laugh at は laugh at で 1 つの動作を表しているため、at の後ろの目的語がなくなっても at を消さずに残します。

慣れないと、受動態の文を作る時に at を消してしまうので注意しましょう。

もう 1 つ、群動詞 speak to 「～に話しかける」を用いた能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

A stranger spoke to me on the street yesterday.

「知らない人が、昨日その通りで私に話しかけてきた。」

この文の受動態は、以下のようになります。

I was spoken to by a stranger on the street yesterday.

「私は、昨日その通りで知らない人に話しかけられました。」

speak to 「～に話しかける」は群動詞なので、受動態の文で to の後ろの目的語 me がなくなっても to を消さないで注意しましょう。

群動詞の受動態の否定文と疑問文の作り方は通常の受動態の時と同じです。

否定文は、be 動詞の後ろに not を付けます。

よって、先ほどの 2 つの肯定文を否定文に書き換えると、以下のようになります。

I wasn't laughed at by them. 「私は、彼らに笑われませんでした。」

I wasn't spoken to by a stranger on the street yesterday.

「私は、昨日その通りで知らない人に話しかけられませんでした。」

疑問文は、be 動詞を主語の前に出し、文末にクエッションマーク？を付けます。

よって、先ほどの 2 つの肯定文を疑問文に書き換えると、以下のようになります。

普通、自分に質問はしないので主語は you に変えます。

Were you laughed at by them? 「あなたは、彼らに笑われましたか。」

Were you spoken to by a stranger on the street yesterday?

「あなたは、昨日その通りで知らない人に話しかけられましたか。」

群動詞の受動態を作るには、群動詞をしっかり覚えておく必要があります。

以下はよく用いられる群動詞なので、覚えておきましょう。

take care of「～の世話をする」

look after「～の世話をする」

speak to「～に話しかける」

bring up「～を育てる」

put off「～を延期する」

send for「～を呼びにやる」

look up to「～を尊敬する」

look down on「～見下す」

speak ill of「～を悪く言う」

speak well of「～をよく言う」

make fun of「～をからかう」

make use of「～を利用する」

7 注意すべき受動態（by 以外を用いる受動態）

受動態の形は「be 動詞 + 過去分詞」、意味は「～される」です。

そして、受動態の文で動作主は、通常以下のように by「～によって」の後ろに置いて表します。

The box was opened by Ken.「その箱は、ケンによって開けられました。」

この文では、動作を受けているのは The box「その箱」、動作を行っている動作主は Ken「ケン」です。

ところが、know「知っている」や cover「覆っている」など、一部の動詞の受動態では動作主を表す時に by 以外を用います。

実際に、know を用いた以下の文を受動態に書き換えてみましょう。

Everyone knows her.「みんなが、彼女のことを知っています。」

この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

She is known to everyone.「彼女は、みんなに知られています。」

動作主は同じく everyone「みんな」なので、普通に考えると受動態の文では by everyone「みんなに（よって）」という形になりそうです。

ところが、be known という受動態の後ろでは by everyone ではなく、to everyone というように to を用いて動作主を表します。

もう 1 つ、cover を用いた以下の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

Snow covered the ground.「雪が、地面を覆っていた。」

この能動態の文を受動態に書き換えると、以下のようになります。

The ground was covered with snow.「地面は、雪で覆われていた。」

この文でも「雪で（雪によって）」を表す時に、by snow ではなく、be covered の後ろなので with snow というように with を用いて動作主を表します。

理屈を理解した方が覚えやすいという方もいると思い解説しましたが、be known to で「～に知られている」や be covered with で「～で覆われている」というに、動詞と前置詞の組み合わせを熟語として暗記してしまいましょう。

その他 by 以外を用いる受動態には、以下のようなものがあります。

1. be filled with「～で（によって）満たされている」「～でいっぱいです」

The glass is filled with water.「そのグラスは、水で満たされています。」

2. be caught in「（雨などに）降られる」

I was caught in shower yesterday.「私は、昨日にわか雨に降られました。」

8 注意すべき受動態 (be made of と be made from の違い)

動作主を表す時に by 以外を用いる受動態、be made of「～でできている」と be made from「～から作られている」の違いについて解説します。

受動態の形は「be 動詞 + 過去分詞」、意味は「～される」です。

受動態の文では、以下のように動作を受ける人や物が主語になります。

The box was opened by Ken.「その箱は、ケンによって開けられました。」

そして、通常動作主は by「～によって」の後ろに置いて表します。

この場合、動作を受けているのは The box「その箱」で、動作を行っているのは Ken「ケン」です。

ところが、以下のように know「知っている」や cover「覆っている」などの受動態の文では、by 以外を用いて動作主を表します。

She is known to everyone.「彼女は、みんなに知られています。」

The ground was covered with snow.「地面は、雪によって覆われていた。」

そして、このような by 以外を用いる受動態の中で、使い方に注意しなければならないものがあります。

それは、be made of「～でできている（作られている）」と be made from「～から作られている」です。

実際に、以下の受動態の文をみてみましょう。

The desk is made of wood.「その机は、木でできている。」

Wine is made from grape.「ワインは、ぶどうから作られている。」

※この場合、of, from の後ろの wood と grape は動作主を表しているという訳ではありません。

そして、be made of と be made from は同じような意味なので、一見以下のように書くこともできそうですが、これらは間違いです。

- × The desk is made from wood.「その机は、木から作られている。」
- × Wine is made of grape.「ワインは、ぶどうでできている。」

何でできているか見ただ目で分かるもの（材料）の場合には of、形が変わり何から作られているか見ただ目で分からないもの（原料）の場合には from を用います。

そして、上の文だと机は木でできていると見ただ目で分かり、下の文だとワインはぶどうから作られていると見ただ目では分かりません。

※ワインがぶどうから作られているということは、知識では分かっていますが見ただ目では分かりません。

よって、正しくは以下ようになります。

- The desk is made of wood.「その机は、木でできている。」
- Wine is made from grape.「ワインは、ぶどうから作られている。」

また、be made in だと「～で作られる（～製です）」という意味になります。

This computer is made in Japan.「このコンピューターは、日本製です。」

よく、洋服などに made in Japan などと書かれているのは、この受動態の一部が用いられているためです。

9 注意すべき受動態（能動態の意味を持つ受動態）

受動態の形は「be 動詞 + 過去分詞」、意味は「～される」です。

ところが、受動態の「be 動詞 + 過去分詞」という形で、「～する」や「～している」というように能動態のような意味になる場合があります。

それは、surprise「驚かせる」や satisfy「満足させる」というような、本来の意味が「～する」ではなく「～させる」といような動詞の受動態の場合です。

実際に、surprise「驚かせる」を用いた以下の能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

The news surprised us.「その知らせは、私達を驚かせた。」

この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

We were surprised at the news.「私達は、その知らせに驚かされた。」

そして、「私達は、その知らせに驚かされた。」は「私達は、その知らせに驚いた。」と同じ意味で、むしろ後者の方が自然です。

よって、be surprised at は「be 動詞 + 過去分詞」という受動態の形ですが、「～に驚く」と能動態のように訳します。

また、この場合「～に（よって）」を表すために by ではなく、at を用いている点にも注意しましょう。

surprise 自体が「驚く」ではなく、「驚かせる」という意味を持っているのでこのようなことが起こります。

もう1つ、satisfy「満足させる」を用いた以下の能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

The result satisfied them.「その結果は、彼らを満足させた。」

この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

They were satisfied with the result.「彼らは、その結果に満足しました。」

厳密には「彼らは、その結果に満足させられた。」という訳になりますが、「彼らは、その結果に満足しました。」と訳した方が自然です。

よって、be satisfied with は「be 動詞 + 過去分詞」と受動態の形をとっていますが、「～に満足する」というように能動態の意味になります。

また、この場合、動作主「～に（よって）」は by ではなく with で表します。

その他、能動態の意味を持つ受動態には以下のようなものがあります。

1. be interested in 「～に興味を持つ」

The book interests them. 「その本は、彼らに興味を持たせる。」

この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

They are interested in the book. 「彼らは、その本に興味を持っている。」

are interested をそのまま訳すと「興味を持たされる」となりますが、普通はそうに言わないので「興味を持っている」と訳します。

2. be excited about で「～に興奮する」

The movie excited me. 「その映画は、私に興奮させた。」

この能動態の文を受動態の文に書き換えると、以下のようになります。

I was excited about the movie. 「私は、その映画に興奮した。」

was excited をそのまま訳すと「興奮させられた」となりますが、普通はそうに言わないので「興奮した」と訳します。

3. be pleased with 「～を喜ぶ」「～に喜んでいる」

He was pleased with the present. 「彼は、そのプレゼントを喜んだ。」

4. be worried about 「～を心配している」

She is worried about her son. 「彼女は、彼女の息子のことを心配している。」

5. be shocked at 「～にショックを受ける」

I was shocked at the news. 「私は、そのニュースにショックを受けた。」

6. be disappointed at 「～に失望する（がっかりする）」

They were disappointed at the result. 「彼らは、その結果にがっかりした。」

なぜ能動態の意味になるのか理解してもらうために、能動態を受動態に書き換えて解説しましたが、これらは熟語のように形と意味を覚えてしまいましょう。

第 4 部

不定詞

1

不定詞の 3 用法（不定詞の 3 用法とは？）

不定詞の形は「to + 動詞の原形」です。

そして、不定詞の主な意味は以下の 3 つです。

- 1. 名詞的用法「～すること」
- 2. 形容詞的用法「～するための」「～すべき」
- 3. 副詞的用法「～ために」「～して」

これは不定詞の 3 用法と呼ばれ、不定詞は形が 1 つしかないのに意味が 3 つもあるので英語の中でも理解しにくい文法の 1 つです。

それぞれについて次のページから詳しく解説していきますが、ここではまず不定詞が文の中でどのように使われるかみてみましょう。

1. 名詞的用法の場合

To play tennis is fun.「テニスをすることは、楽しいです。」

play は「～をする」という意味ですが、To play と不定詞にすると「～をすること」という意味になります。

そして、play という動詞は主語になれませんが、to play として不定詞の名詞的用法を用いると主語になることができます。

2. 形容詞的用法

There is a chair to sit here.「ここに、座るための椅子があります。」

to sit「座るための」は、chair「椅子」という名詞を修飾しています。

big「大きい」という形容詞が chair という名詞を修飾する（big chair）のと同じように不定詞の形容詞的用法は名詞を修飾します。

3. 副詞的用法

He went to the park to play.「彼は、遊ぶためにその公園へ行った。」

to play「遊ぶために」はなぜ（公園に）行ったのかを説明しており、動詞の went を修飾しています。

副詞には、動詞、形容詞、副詞自身を修飾する役割があり、不定詞の副詞的用法も同じような役割をします。

2 不定詞の3用法（不定詞の名詞的用法）

不定詞の形は「to + 動詞の原形」です。

そして、主な意味は以下の3つで、これは不定詞の3用法と呼ばれます。

1. 名詞的用法「～すること」
2. 形容詞的用法「～するための」「～すべき」
3. 副詞的用法「～ために」「～して」

ここでは不定詞の3用法のうち、名詞的用法について解説します。

まず、文中での名詞の役割を確認しておきましょう。

名詞は、以下のように文中で主語、補語、目的語になります。

Cars are expensive.「車は、値段が高い。」※名詞の Cars は主語

He is a student.「彼は、生徒です。」※名詞の student は補語

補語とは主語を説明するものです（主語＝補語の関係が成り立ちます）。

I have dinner.「私は、夕食を食べます。」※名詞の dinner は目的語

目的語とは動詞の後ろに置かれ動作の目的を表すもので、日本語だと「～を」や「～に」の～にあたるものです。

不定詞の名詞的用法も名詞と同様に、文中で主語、補語、目的語になります。

例えば、以下の文中で To play 「～をすること」は主語になっています。

To play tennis is fun.「テニスをするのは、楽しいです。」

以下のように Play 「～をする」と動詞のままでは主語になることはできません。

誤) Play tennis is fun.「テニスをするは、楽しいです。」

次に、以下の文中で to read books 「本を読むこと」は補語になっています。

My hobby is to read books.「私の趣味は、本を読むことです。」

以下のように read 「～を読む」と動詞のままでは補語になることはできません。

誤) My hobby is read books.「私の趣味は、本を読むです。」

最後に、以下の文中で to play 「～をすること」は目的語になっています。

I like to play soccer.「私は、サッカーをすることが好きです。」

like は「～を好む」という意味で、この場合直訳は「サッカーをすることを好む」となり to play は「～を」にあたるものなので目的語になります。

以下のように、動詞 play 「～をする」のままでは目的語になることはできません。

誤) I like play soccer.「私は、サッカーをするが好きです。」

このように、動詞はそのままでは主語、補語、目的語にはなれませんが、不定詞の名詞的用法を用いると、動詞が名詞と同じ役割を果たせるようになります。

名詞的用法は、基本的に「～すること」と訳すことがほとんどですが、目的語になる場合には暗記しておいた方がよい注意すべき表現があります。

例えば、以下の文中で不定詞の名詞的用法である to play 「すること」は want 「欲しい」の目的語になっています。

I want to play soccer.「私は、サッカーをしたい。」

ところが「私は、サッカーをすることを欲しい。」という意味だと不自然なので、この場合は「私は、サッカーをしたい。」と訳します。

よって、「want to + 動詞の原形」で「～したい」と覚えておきましょう。

次に、以下の文中で不定詞の名詞的用法である to run「走ること」は began「始めた」の目的語になっています。

He began to run.「彼は、走り始めた。」

ところが「彼は、走ることを始めた。」という意味だと不自然なので、この場合は「彼は、走り始めた。」と訳します。

よって、「begin to + 動詞の原形」で「～し始める」と覚えておきましょう。

「start to + 動詞の原形」も「begin to + 動詞の原形」と同じ意味です。

これらの他、不定詞の名詞的用法を用いた表現で暗記しておいた方がよいものには以下のようなものがあります。

「try to + 動詞の原形」で「～しようとする」

※直訳は「～することに挑戦する」ですが、上のように言い換えます。

「need to + 動詞の原形」で「～する必要がある」

※直訳は「～することを必要とする」ですが、上のように言い換えます。

3 不定詞の3用法（不定詞の形容詞的用法）

不定詞の形は「to + 動詞の原形」です。

そして、主な意味は以下の3つで、これは不定詞の3用法と呼ばれます。

1. 名詞的用法「～すること」
2. 形容詞的用法「～するための」「～すべき」
3. 副詞的用法「～ために」「～して」

ここでは不定詞の3用法のうち、形容詞的用法について解説します。

まず、文中での形容詞の役割を確認しておきましょう。

形容詞は、tall boy「背の高い少年」の tall「背の高い」や big house「大きい家」の big「大きい」などのように名詞を修飾します。

不定詞の形容詞的用法も形容詞と同じように、文中で名詞を修飾します。

例えば、以下の文中で不定詞の形容詞的用法である to drink「～するための」は something「何か」という名詞を修飾しています。

I want something to drink.

「私は、何か飲み物（飲むための何か）を欲しい。」

以下のように、動詞 drink のままでは名詞を修飾することはできません。

誤) I want something drink.「私は、飲む何かが欲しい。」

よって、to drink と不定詞の形容詞的用法に変えなければなりません。

また、不定詞を置く位置も気をつけましょう。

普通の形容詞は、tall boy や big house のように名詞の前に置きます。

ところが、不定詞の形容詞的用法は something to drink のように名詞の前ではなく後ろに置きます。ほとんどの場合名詞の直後だと思って下さい。

不定詞の形容詞的用法には、以下のように「～すべき」という意味もあります。

There are many things to see in the city.
「その都市には、見るべき物がたくさんある。」

※ There is (are) ～. 「～がある (いる)」

この文中で、不定詞の形容詞的用法の to see 「見るべき」は、things 「物」という名詞を後ろから修飾しています。

不定詞の形容詞的用法は「～ための」や「～すべき」という意味を持ち、名詞を後ろから修飾します。

4 不定詞の 3 用法（不定詞の副詞的用法）

不定詞の形は「to + 動詞の原形」です。

そして、主な意味は以下の 3 つで、これは不定詞の 3 用法と呼ばれます。

- 1. 名詞的用法「～すること」
- 2. 形容詞的用法「～するための」「～すべき」
- 3. 副詞的用法「～ために」「～して」

ここでは不定詞の 3 用法のうち、副詞的用法について解説します。

まず、文中での副詞の役割を確認しておきましょう。

以下のように、副詞は動詞、形容詞、副詞自身を修飾します。

以下の文中で、副詞の fast 「速く」は run という動詞を修飾しています。fast は、速いのかおそいかというように run 「走る」程度を表しています。

He runs fast. 「彼は、速く走る。」

次に、以下の文中で、副詞 very 「とても」は tall 「背が高い」という形容詞を修飾しています。

He is very tall. 「彼は、とても背が高い。」

最後に、以下の文中で、very 「とても」は副詞の fast 「速く」を修飾しています。very は、副詞の fast を強調しています。

He runs very fast. 「彼は、とても速く走る。」

このように、副詞は動詞、形容詞、副詞を修飾します。そして、不定詞の副詞的用法も通常の副詞と同様に文中で動詞や形容詞を修飾します。

例えば、以下の文中で不定詞の副詞的用法である to meet 「会うために」は、動詞の went 「行った」を修飾しています。

I went to the park to meet him.「私は、彼に会うために公園に行きました。」

※この文で、to meet は何の目的で公園に行ったかを表しています。

以下のように、動詞 meet のままでは動詞を修飾することはできません。

誤) I went to the park meet him.「私は、彼に会う公園に行きました。」

よって、to meet と不定詞の副詞的用法に変えなければなりません。

不定詞の副詞的用法には、他に「～して」という意味もあります。

I am glad to hear the news.「私は、そのニュースを聞いて嬉しいです。」

この文中で、不定詞の副詞的用法である to hear「聞いて」は、なぜ嬉しいのかと嬉しい理由を表しており形容詞の glad「嬉しい」を修飾しています。

このように、不定詞の副詞的用法は動詞を修飾する時には「～ために」、形容詞を修飾する時には「～して」と訳します。

不定詞の副詞的用法には、上記以外の注意すべき表現が 3 つあります。

まず、以下の文を考えてみましょう。

He must be angry to say so.
「彼は、そんなことを言うなんて怒っているに違いない。」

この文の不定詞 to say「言うなんて」は、「怒っている」と判断した理由です。

「言うなんて」→「怒っている」というように、不定詞の to say は angry という形容詞を修飾しているので副詞的用法となります。

形容詞を修飾する不定詞の副詞的用法となりますが、「～して」ではなくこの場合「～するなんて」という意味になります。

そして、助動詞 must「～にちがいない」の後ろに不定詞が置かれている場合に、副詞的用法は判断の根拠を表す「～するなんて」という意味になります。

次に、以下の文をみてみましょう。

This book is difficult to understand.「この本は、理解するには難しい。」

この文中で、不定詞 to understand「理解するには」は、何をするのが difficult「難しい」のかを説明しています。

「理解するには」→「難しい」というように、不定詞の to understand は difficult という形容詞を修飾しているので副詞的用法となります。

形容詞を修飾する不定詞の副詞的用法となりますが、「～して」ではなくこの場合「～するには」という意味になります。

そして、easy や difficult という形容詞の後ろに不定詞が置かれている場合、副詞的用法は「～するには」という意味になります。

最後に、以下の文をみてみましょう。

He grew up to be a doctor.「彼は、成長して（その結果）医者になった。」

この文は、直訳すると「彼は、医者になるために成長した。」となります。

「医者になるために」→「成長した」というように、不定詞の to be は grew up「成長した」という動詞を修飾しているので副詞的用法となります。

ところが、通常「彼は、医者になるために成長した。」というような言い方はしないので、「彼は、成長して（その結果）医者になった。」と訳します。

grow up や wake up の後ろで不定詞が用いられる場合、「～になるために」ではなく「…して（その結果）～」という意味になります。

よって、不定詞の副詞的用法と覚えるより、grow up to ～「成長して～になる」や wake up to ～「目覚めて～」と熟語のように覚えてしまいましょう。

不定詞の副詞的用法の結果には、もう 1 つ live to be ～「～になるまで生きる」があります。これも熟語のように覚えてしまいましょう。

She lived to be 90 years old.「彼女は、90 歳になるまで生きた。」

不定詞

不定詞

5 不定詞の名詞的用法を含む表現（疑問詞 + 不定詞）

疑問詞とは、what「何」、when「いつ」、where「どこ」、how「どのように」、which「どちら」などです。

「疑問詞 + 不定詞」とはこれら疑問詞の後ろに不定詞を置いた、what to buy や when to start などです。

そして、名詞と同じように文中で主語、補語、動詞の目的語になります。

疑問詞 + 不定詞の形と意味を 1 つずつ確認していきましょう。

1. what + 不定詞「何を～すればいいか（すべきか）」

例えば、疑問詞 + 不定詞の what to buy は「何を買えばいいか」や「何を買うべきか」という意味になり、以下の文では主語として用いられます。

What to buy isn't important. 「何を買うべきかは、重要ではありません。」

2. when + 不定詞「いつ～すればいいか（すべきか）」

例えば、疑問詞 + 不定詞の when to start は「いつ始めればいいのか」や「いつ始めるべきか」という意味になり、以下の文では補語として用いられています。

The subject is when to start. 「議題は、いつ始めるべきかということです。」

3. where + 不定詞「どこへ（で）～すればいいか（すべきか）」

例えば、疑問詞 + 不定詞の where to go は「どこへ行けばいいか」や「どこへ行くべきか」という意味になり、以下の文では目的語として用いられています。

I don't know where to go 「私は、どこへ行けばいいのか知りません。」

4. how + 不定詞「どのように～すればいいか」「～する方法」

例えば、疑問詞 + 不定詞の how to swim で「泳ぐ方法（泳ぎ方）」という意味になり、以下の文では目的語として用いられています。

Will you tell me how to swim? 「私に泳ぎ方を教えてくださいませんか。」

5. which (名詞) + 不定詞「どれ（どちらの…）を～すればいいか」

例えば、疑問詞 + 不定詞の which to chose で「どれを選んだらいいか」という意味になり、以下の文では動詞の目的語として用いられています。

I'm thinking which to chose. 「私は、どれを選んだらいいか考えている。」

which car to buy で「どちらの車を買えばいいか」というように、which の場合は後ろに名詞がくる場合もあるので注意しましょう。

そして、「疑問詞 + 不定詞」は文中で主語、補語、目的語になるというように、名詞と同じ役割を果たします。

6 不定詞の名詞的用法を含む表現（主語 + 動詞 + 目的語 + 不定詞）

まず、以下の例文をみてみましょう。

She told him to go there.「彼女は、彼にそこへ行くように言いました。」

この文で、主語は She、動詞は told、目的語は him、そしてその後ろに不定詞 to go が置かれています。「主語 + 動詞 + 目的語（人） + 不定詞」という形で、「主語は目的語（人）に～するように…」という意味になります。

目的語には、人が置かれることがほとんどです。

to go という不定詞の部分は「行くこと」という名詞的用法です。

しかし、「彼女は、彼にそこへ行くことを言った。」だと不自然なので「～することを」「～するように」と言い換えます。

また、この形を作る動詞には tell「言う」の他に ask「頼む」、want「欲しい」、advise「忠告する」、allow「許す」などがあります。多くないので覚えておきましょう。
以下に、これらの動詞を用いた例文をあげます。

・ ask + 目的語（人） + 不定詞「目的語（人）に～するように頼む」

I asked him to help me.「私は、彼に私を手伝うように頼みました。」

・ want + 目的語（人） + 不定詞「目的語（人）に～して欲しい」

I want you to read this book.「私は、あなたにこの本を読んで欲しい。」

I want to read this book. だと「私は、この本を読みたい。」というように、want to「～したい」を用いると「私」が読むという意味になりますが、want you to だと「あなた」が読むという意味になります。

・ advise + 目的語（人） + 不定詞「目的語（人）に～するように忠告する」

He advised me to go home.「彼は、私に家に帰るように忠告した。」

・ allow + 目的語（人） + 不定詞「目的語（人）が～するのを許す」

My mother allowed me to go out.「母は、私が外出するのを許してくれた。」

7 不定詞の名詞的用法を含む表現（形式主語 it を用いた文）

まず、以下の例文をみてみましょう。

To swim in this river is dangerous.「この川で泳ぐことは、危険です。」

これは、不定詞の名詞的用法 to swim「泳ぐこと」が主語になっている文です。

しかし、この文では主語が長いので dangerous「危険な」という一番言いたいこと（結論）が最後にきています。

英語の特徴として言いたいこと（結論）を先に持ってくる傾向があるので、長い主語は形式主語（仮主語）の it に置き換えて以下のように書き換えます。

It is dangerous to swim in this river.「この川で泳ぐことは、危険です。」

また、本当の主語（真主語）の to swim in this river は文の最後に置きます。

両方の文の意味は全く同じです。

このように、英語は一番言いたいことや結論をできるだけ先に伝えるという文の構造をとり、そのために形式主語の it を用います。

逆に日本人は、理由や事例を先に述べて最後に結論を伝えます。文の構造もそれに合わせた形になっています。

形式主語 it は長い真主語を文の後ろに持っていくために形式的に用いるだけで、日本語に訳さないので注意しましょう。

形式主語（it）や真主語という言葉が出てきましたが、まず It is … to ～ という文の形で「～することは…です。」という意味になることを覚えておきましょう。

8 不定詞の名詞的用法を含む表現（不定詞の意味上の主語 [for A と of A]）

まず、以下の形式主語 it を用いた例文をみましょう。

It is dangerous to swim in this river. 「この川で泳ぐことは、危険です。」

この文で、例えば「私達にとって」泳ぐことが危険だということを言いたい時には、以下のように for us 「for + (代) 名詞の目的格」を不定詞の前に置きます。

It is dangerous for us to swim in this river.
「私達にとって、この川で泳ぐことは危険です。」

for us 「私達にとって」は、不定詞 to swim 「泳ぐこと」という動作の主語を表しており（「私達」が「泳ぐ」という関係）、**不定詞の意味上の主語**と呼ばれます。

「子供達にとって」泳ぐことが危険であると言いたい時は、意味上の主語 for children を不定詞 to swim の前に置いて以下ようになります。

It is dangerous for children to swim in this river.
「子供達にとって、この川で泳ぐことは危険です。」

children は、目的格も形は同じなので for の後ろにそのままの形で置きます。

形式主語と意味上の主語 (for A) を用いた文は、「It is … for (代) 名詞の目的格 to ～」という形で「○にとって～することは…です。」という意味になります。

意味上の主語という言葉が出てきましたが、不定詞の動作主は「for + (代) 名詞の目的格」を不定詞の前に置くことをまず覚えておきましょう。

通常、不定詞の意味上の主語は「**for + [代] 名詞の目的格**」と for を用いて表しますが、「**of + (代) 名詞の目的格**」で表す場合があります。

それは、形式主語 it を用いた it is … to ～ という文で…の部分に人の性質を現す形容詞 kind 「親切な」などが置かれている場合です。

以下の例文をみましょう。

It is kind of you to help me. 「私を助けてくれるとは、あなたは親切です。」

この文では、it is の後ろに kind 「親切な」という人の性質を表す形容詞が置かれているので、to help の意味上の主語は for ではなく of を用いて表します。

人の性質を現す形容詞は、他に以下のようなものがあります。

そして、これらの形容詞が It is … to ～ 構文の…の部分に置かれている場合は、不定詞の意味上の主語は「of + (代) 名詞の目的格」で表します。

・careless 「不注意な」

It was careless of him to forget it. 「それを忘れるとは、彼は不注意だった。」

・wise 「賢い」、clever 「頭がいい」

It is wise of him to solve the question. 「その問題が解けるとは、彼は賢い。」

・brave 「勇敢な」

It was brave of him to do it. 「それをすると、彼は勇敢でした。」

形式主語と意味上の主語 (of A) を用いた文は「it is … of (代) 名詞の目的格 to ～」という文の形で、「～するとは、○は…です。」という意味になります。

9 不定詞の名詞的用法を含む表現（形式目的語 it を用いた文）

目的語とは動詞（動作）の目的を表し、文中で動詞の後ろに置かれ日本語で「～を」や「～に」にあたるものです。

例えば、以下の文で a book は found 「見つけた」に対し「何を」にあたり、found の目的語となっています。

I found a book. 「私は、本を見つけた。」

found は find 「見つける、気づく」の過去形ですが、以下のように find は「O が C だと気づく」という文も作ります。

I found the English book easy. 「私は、その英語の本が簡単だと気づいた。」

この文で、the English book は目的語で、easy は the English book という目的語を説明する補語（目的格補語）です。

そして、以下のようにこの文の形で目的語に不定詞が置かれることがあります。

I found to read the English book easy.
「私は、その英語の本を読むことが簡単だと気づいた。」

この文では目的語が to read the English book と長く、easy 「簡単な」という結論が最後に置かれています。

形式主語 it のところでも解説しましたが、英語は easy という結論をできるだけ先に述べる構造を取り、そのために形式目的語の it を用います。

よって、以下のように to read the English book を形式目的語の it に置き換え、本当の目的語 to read the English book は文末に付けます。

I found it easy to read the English book.
「私は、その英語の本を読むことが簡単だと気づいた。」

意味は変わりません。

形式目的語の文は、形式主語の文より見慣れていないため難しいと思います。

しかし、形式目的語 it を用いる文を作る動詞は、以下の find、think、make を覚えておけば大丈夫です。熟語のように覚えてしまいましょう。

1. S find it C to ～ 「S は、～することが C だと気づく」

I found it dangerous to swim in this river.
「私は、この川で泳ぐことが危険だと気づいた。」

2. S think it C to ～ 「S は、～することが C だと思う」

I think it difficult to write a letter in English.
「私は、英語で手紙を書くことが難しいと思います。」

3. S make it C to ～ 「S は、～することを C とする」

I make it a rule to get up early.
「私は、早起きをするをルールとします。」
→「私は、早起きをするようにしています。」

10 不定詞の様々な形（不定詞の進行形）

不定詞の進行形の解説に入る前に、解説に出てくる表現を2つ解説します。

まず、1つ目は、It seems that ～「～のようです」です。

この that は接続詞なので、以下のように～の部分には節（「主語＋動詞」からなる文）が置かれます。

It seems that he is rich. 「彼は、お金持ちのようです。」

そして、上の文は that 節中の he を主語にし、seem の後ろに不定詞（この場合 to be）を置いて以下のように書き換えることができます。

He seems to be rich. 「彼は、お金持ちのようです。」

以下のように、he を繰り返すような言い方はしません。

× He seems that he is rich.

2つ目は、It is said that ～「～と言われている」です。

この that も接続詞なので、以下のように～の部分には節が置かれます。

It is said that he comes from Korea. 「彼は、韓国出身だと言われています。」

この文も、that 節中の he を主語にし、is said の後ろに不定詞（この場合 to come）を置いて以下のように書き換えることができます。

He is said to come from Korea. 「彼は、韓国出身だと言われています。」

以下のように、he を繰り返すような言い方はしません。

× He is said that he comes from Korea.

それでは、不定詞の進行形の解説に入ります。

ここで、以下の文を不定詞を用いた文に書き換えてみましょう。

It seems that he is playing tennis now.

「彼は、今テニスをしているようです。」

この時、that 以下の文章で is playing と進行形が用いられているので、この場合不定詞の進行形を用いなければなりません。

不定詞の進行形の形は、「to + be + 動詞の ing 形」です。

不定詞「to + 動詞の原形」の後ろに進行形「be 動詞 + 動詞の ing 形」を置くので、不定詞の to の後ろには必ず be 動詞の原形である be が置かれます。

そして、to be の後ろに進行形を作る動詞の ing 形が置かれ、「to + be + 動詞の ing 形」という形になります。

不定詞の進行形の意味は、不定詞の名詞的用法の「～すること」と進行形の「～している」が組み合わせ、「～している（こと）」となります。

よって、先ほどの文は不定詞の進行形（この場合 to be playing）を用いて以下のように書き換えることができます。

He seems to be playing tennis now. 「彼は、今テニスをしているようです。」

次に、以下の文を不定詞の進行形を用いて書き換えてみましょう。

It is said that she is studying. 「彼女は、勉強していると言われています。」

この場合、以下のように不定詞の進行形は to be studying となります。

She is said to be studying. 「彼女は、勉強していると言われています。」

11 不定詞の様々な形（不定詞の受動態）

不定詞の受動態の形は、不定詞「to + 動詞の原形」と受動態「be 動詞 + 過去分詞」を組み合わせ、「to + be + 過去分詞」となります。

意味は、不定詞の名詞的用法の「～すること」に受動態の「～される」の意味が加わり、「～されること」となります。

以下の通常の不定詞と不定詞の受動態を用いた例文をみてみましょう。
まず、通常の不定詞の名詞的用法を用いた文です。

I like to give a present. 「私は、プレゼントをあげることが好きです。」

この文中の to give は、通常の不定詞で意味は「あげること」となります。
次に、不定詞の受動態を用いた文です。

I like to be given a present. 「私は、プレゼントを貰うことが好きです。」

この文中の不定詞の受動態 to be given は直訳すると「与えられること」という意味になりますが、
この場合「貰うこと」とした方が自然です。

もう1つ通常の不定詞と不定詞の受動態を用いた例文をみてみましょう。
まず、通常の不定詞の名詞的用法を用いた文です。

I want to love her. 「私は、彼女を愛したい。」

want to は、直訳すると「～することが欲しい」という意味になりますが、これでは日本語的に不自然なため「～したい」と訳します。

この文中の to love は通常の不定詞で意味は「愛すること」となりますが、「愛することが欲しい」では日本語的に不自然なため「愛したい」と言い換えます。

次に、不定詞の受動態を用いた文です。

I want to be loved by her. 「私は、彼女によって愛されたい。」

この文中の不定詞の受動態 to be loved は「愛されること」となりますが、「愛されることが欲しい」では日本語的に不自然なため「愛されたい」と言い換えます。

12 不定詞の様々な形（不定詞の完了形）

不定詞の完了形の解説に入る前に、解説に出てくる表現について解説します。

それは、It seems that ～「～のようです」です。

この that は接続詞なので、以下のように～の部分には節（「主語 + 動詞」からなる文）が置かれます。

It seems that he is rich. 「彼は、お金持ちのようです。」

そして、上の文は that 節中の he を主語にし、seem の後ろに不定詞（この場合 to be）を置いて以下のように書き換えることができます。

He seems to be rich. 「彼は、お金持ちのようです。」

以下のように he を繰り返すような言い方はしません。

× He seems that he is rich.

それでは、不定詞の完了形の解説に入ります。

まず、以下の It seems that ～ という形を用いた文を He seems to ～ と不定詞を用いた文に書き換えてみましょう。

It seems that he was rich. 「彼は、お金持ちだったようです。」

この場合、上で解説した He seems to be rich. という文では間違いです。

以下の文では、「現在」彼がお金持ち (is rich) ということが「現在」推測（～のようです）されており、主節の時制 (seem) と that 節の時制 (is) が同じです。

It seems that he is rich.

よって、to の後ろに is の原形の be を置いて以下ようになります。

He seems to be rich.

ところが以下の文では「過去のある時点」で彼がお金持ち（was rich）ということをして「現在」推測しており、that 節の時制が主節の時制より 1 つ古くなっています。

It seems that he was rich.

この場合、He seems to ～ という文に書き換える時に、to ～の部分で「過去のこと」であることを表さなければなりません。

不定詞は「to + 動詞の原形」なので to の後ろに「過去のこと」を表すために、過去形の was を置くことはできません。

to be では 1 つ目の文と同じで現在のことになってしまい、過去を表すために to was も使えません。このような場合に、不定詞の完了形を用います。

不定詞の完了形の形は、不定詞「to + 動詞の原形」と現在完了形「have + 過去分詞」を組み合わせ、「to + have + 過去分詞」となります。

意味は、通常の不定詞（名詞的用法）の意味「～すること」に対して「～だった（こと）」となります。

よって、It seems that he was rich. 「彼は、お金持ちだったようです。」という文は、不定詞の完了形を用い、以下のように書き換えることができます。

He seems to have been rich.

意味は上の文と同じです。

不定詞の完了形は、「過去形」を表すのではなく、あくまで主節の時制（この場合現在）より 1 つ古い時制（この場合過去）を表します。

次に、以下の文の書き換えも考えてみましょう。

It seemed that he had come here. 「彼は、ここに来たようでした。」

この文では、主節の時制が「過去（この場合 seemed）」、that 節の時制が「過去完了（この場合 had come）」となっています。

過去完了（大過去）は、過去より古い時の状態や動作を表します。

上の文は、過去のある時点で、その時点よりさらに過去（前）に彼が「ここに来た」といことを「～だったようでした」と推測したことを表しています。

例えば、彼がここに来たのが 1 週間前で、それを推測したのが昨日だったというような状況です。

よって、主節の時制「過去」より that 節中の時制大過去」が 1 つ古いので、この場合も不定詞の完了形を用いて以下のように表します。

He seemed to have come here. 「彼は、ここに来たようでした。」

これで、過去のある時点で「彼がここに来た」、それより後の過去のある時点で「～だったようでした」と彼がここに来たことを推測したということが表せます。

ちなみに、以下のように主節の時制「過去（この場合 seemed）」と that 節の時制「過去（この場合 came）」が同じ場合は通常の不定詞を用います。

It seemed that he came here. 「彼は、ここに来るようでした。」

よって、この文を He seems to ～ を用いて書き換えると以下ようになります。

He seemed to come here.

不定詞の時制が主節の時制より 1 つ古い時制の時に、不定詞の完了形を用い、意味は、「～だった（こと）」となります。

不定詞

不定詞

13 不定詞の様々な形（不定詞の完了形 [補足]）

異なる表現を用いて、もう1度不定詞の完了形について解説します。

不定詞の完了形の形は、不定詞「to + 動詞の原形」と現在完了形「have + 過去分詞」を組み合わせ、「to + have + 過去分詞」となります。

そして、不定詞の完了形は、主節の時制（この場合現在）より1つ古い時制（この場合過去）を表します。意味は「～だった（こと）」です。

不定詞の完了形の解説に入る前に、解説に出てくる表現について解説します。

それは、It is said that ～「～と言われている」です。

この that は接続詞なので、以下のように～の部分には節（「主語 + 動詞」からなる文）が置かれます。

It is said that he plays tennis. 「彼は、テニスをするとされている。」

そして、上の文は that 節中の he を主語にし、is said の後ろに不定詞（この場合 to play）を置いて以下のように書き換えることができます。

He is said to play tennis. 「彼は、テニスをするとされている。」

以下のように he を繰り返すような言い方はしません。

× He is said that he plays tennis.

それでは、不定詞の完了形の解説に入ります。

まず、以下の It is said that ～という形を用いた文を He is said to ～ と不定詞を用いた文に書き換えてみましょう。

It is said that he played tennis. 「彼は、テニスをしたと言われている。」

この場合、上で解説した He is said to play tennis. という文では間違いです。

以下の文では、「現在」彼がテニスをする（plays tennis）ということが「現在」言われており（is said）、主節の時制（is）と that 節の時制（play）が同じです。

It is said that he plays tennis.

よって、to の後ろに plays の原形の play を置いて以下ようになります。

He is said to play tennis.

ところが、以下の文では「過去のある時点」で彼がテニスをしたということが「現在」言われており、that 節の時制が主節の時制より1つ古くなっています。

It is said that he played tennis.

この場合、He is said to ～という文に書き換える時に、to ～の部分で「過去のこと」であることを表さなければなりません。

不定詞は「to + 動詞の原形」なので to の後ろに「過去のこと」を表すために、過去形の played を置くことはできません。

to play では1つ目の文と同じで現在のことになってしまい、過去を表すために to played も使えません。このような場合に、不定詞の完了形を用います。

不定詞の完了形の形は、不定詞「to + 動詞の原形」と現在完了形「have + 過去分詞」を組み合わせ、「to + have + 過去分詞」となります。

意味は、通常的不定詞の「～すること」に対して「～だったこと」となります。

よって、It is said that he played tennis. という文は、不定詞の完了形を用いて以下のように書き換えることができます。

He is said to have played tennis. 「彼は、テニスをしたと言われている。」

次に、以下の文の書き換えも考えてみましょう。

It was said that he had been rich.「彼は、お金持ちだったと言われていた。」

この文では、主節の時制が「過去（この場合 was said）」、that 節の時制が「過去完了（この場合 had been）」となっています。

過去完了（大過去）は、過去より古い時の状態や動作を表します。

上の文は、過去のある時点で、その時点よりさらに過去に彼が「お金持ちだった」といことが「～だったと言われていた」と噂されていたことを表しています。

例えば、彼がお金持ちだったのが 10 年前で、そのことについて話されたのが昨日だったというような状況です。

よって、主節の時制「過去」より that 節中の時制「大過去」が 1 つ古いので、この場合も不定詞の完了形を用いて以下のように表します。

He was said to have been rich.「彼は、お金持ちだったと言われていた。」

これで、過去のある時点で「彼がお金持ちだった」、それより後の過去のある時点で「～だったと言われていた」と彼のことについて話されたことを表します。

ちなみに、以下のように主節の時制「過去（この場合 was said）」と that 節の時制「過去（この場合 was）」が同じ場合は通常的不定詞を用います。

It was said that he was rich.「彼は、お金持ちであると言われていた。」

よって、この文を He を主語にした文に書き換えると以下ようになります。

He was said to be rich.

不定詞の時制が主節の時制より 1 つ古い時制の時に、不定詞の完了形を用います。意味は、「～だった（こと）」となります。

14 不定詞の重要表現（too ～ to … 構文）

不定詞の重要表現について解説します。

too ～ to … 構文の意味は、「あまりに（大変）～なので…できない」です。

too ～ to … 構文を用いた以下の文をみてみましょう。

I am too tired to walk.「私は、大変疲れているので歩けません。」

The box was too heavy to carry.
「その箱は、あまりに重くて運べなかった。」

このように、too の後ろには形容詞や副詞、to の後ろには動詞の原形（この部分是不定詞）が置かれます。

ここで、2 つ目の文についてもう少し考えてみましょう。

2 つ目の too ～ to … 構文では、誰がその箱を運べないのかが分かりません。

to carry の動作主（誰にとって運べないのか）を表したい場合は、以前解説した不定詞の意味上の主語を用います。

不定詞の意味上の主語は、不定詞の to の前に「for + (代) 名詞の目的格」を置いて表します。

それでは、以下の文に「私にとって」という意味上の主語を加えてみます。

The box was too heavy to carry.
「その箱は、あまりに重くて運べなかった。」

この too ～ to … 構文で、「私にとって」その箱が重すぎて運べなかったということを表す場合は、for me を不定詞の to の前に置いて以下ようになります。

The box was too heavy for me to carry.
「その箱は、私にとってあまりに重くて運べなかった。」

15 不定詞の重要表現（～ enough to … 構文）

～ enough to … 構文の意味は、「…するほど（十分）～だ」または「…してくれるとは～だ」です。

実際に～ enough to … 構文を用いた以下の文をみてみましょう。

He is kind enough to help me.

「彼は、私を助けてくれるとは親切（な人）だ。」

The box is small enough to carry.

「その箱は、運べるほど（十分）小さい。」

使い方は、enough の前には形容詞や副詞、to の後ろには動詞の原形（この部分是不定詞）が置かれます。

ここで、2つ目の文についてもう少し考えてみましょう。

2つ目の～ enough to … 構文では、誰がその箱を運べるのか分かりません。

to carry の動作主（誰が運ぶことができるのか）を表したい場合は以前解説した不定詞の意味上の主語を用います。

不定詞の意味上の主語は、不定詞の to の前に「for + (代) 名詞の目的格」を置いて表します。

それでは、以下の文に「私の息子が」という意味上の主語を加えてみます。

The box is small enough to carry.

「その箱は、運べるほど（十分）小さい。」

この～ enough to … 構文で、「私の息子が」運ぶことができるということを表したい場合は、for my son を不定詞の to の前に置いて以下ようになります。

The box is small enough for my son to carry.

「その箱は、私の息子が運べるほど（十分）小さい。」

～ enough to … 構文で意味上の主語を置く位置は、enough と to の間です。間違えやすいので注意しましょう。

16 不定詞の重要表現（so ～ that … 構文）

so ～ that … 構文の意味と too ～ to … 構文や～ enough to … 構文との書き換えについて解説します。

so ～ that … 構文の意味は、「あまりに（大変）～なので…」です。

so ～ that … 構文の～には形容詞や副詞、…の部分には that は接続詞なので節（1つの主語と動詞の組からなる文）がきます。

そして、so ～ that … 構文の…の部分に can't 「～できない」や couldn't 「～できなかった」が用いられていると too ～ to … 構文と同じ意味になります。

では、まず以下の so ～ that … 構文をみてみましょう。

I am so tired that I can't walk. 「私は、大変疲れているので歩けません。」

この文を too ～ to … 構文に書き換えると、以下ようになります。

I am too tired to walk. 「私は、大変疲れているので歩けません。」

so 「大変」を too に変え、that I can't walk. 「(私は) 歩くことができない」という節の部分に to walk という不定詞に変えます。

もう1つ、以下のように主節の主語（The box）と that 節の主語（I）が異なる so ～ that … 構文を too ～ to … 構文に書き換えてみましょう。

The box was so heavy that I couldn't carry it.

「その箱はあまりに重くて、私はそれを運べませんでした。」

この文を too ～ to … 構文に書き換える場合、主節の主語 The box と異なるため that 節の主語 I を消すことはできません。

よって、以下のように不定詞 to carry の前に意味上の主語 for me を置きます。

The box was too heavy for me to carry.

「その箱は、あまりに重くて私には運べなかった。」

この文では、so「大変」を too に変え、that I couldn't carry it.「私には運べなかった」という節を for me to carry と不定詞を用いた表現に変えます。

逆に、too ～ to … 構文に意味上の主語が付いている場合は、so ～ that … 構文で主節の主語と that 節の主語が変わります。

また、不定詞 to ～ を that 節に書き換える時、I couldn't carry it. のように it「それ（この場合箱を指します）」を動詞の目的語として置かなければなりません。

too ～ to … 構文を so ～ that … 構文に書き変える時、と that 節中には can't「…できない」か couldn't「…できなかった」が必ず用いられます。

次に、so ～ that … 構文の…の部分に肯定文「～する」や「～できる」が用いられていると ～ enough to … 構文と同じ意味になります。

では、まず以下の so ～ that … 構文をみてみましょう。

He is so kind that he helps me.
「彼は、大変親切なので私を助けてくれます。」

この so ～ that … 構文は…の部分に肯定文が用いられており、「彼は、私を助けてくれるとは親切（な人）だ。」と同じ意味です。

よって、以下のように ～ enough to … 構文に書き換えることができます。

He is kind enough to help me.
「彼は、私を助けてくれるとは親切（な人）だ。」

so を enough「十分」に変え kind enough と enough を形容詞の後ろに置きます。so kind が kind enough と並び順が変わるので注意しましょう。

もう 1 つ、以下のように主節の主語（The book）と that 節の主語（I）が異なる so ～ that … 構文を ～ enough to … 構文に書き換えてみましょう。

The book is so easy that I can read it.
「その英語の本は、私が読めるほど簡単です。」
「その本は大変簡単なので、私は読むことができます。」

この文を ～ enough to … 構文に書き換える場合、主節の主語 The book と異なるため that 節の主語 I を消すことはできません。

よって、以下のように不定詞 to read の前に意味上の主語 for me を置きます。

The book is easy enough for me to read.
「その英語の本は、私が読めるほど簡単です。」

so easy を easy enough とし、that I can read it.「私は読むことができる」という節を for me to read 不定詞を用いた表現に変えます。

逆に、～ enough to … 構文に意味上の主語が付いている場合は、so ～ that … 構文で主節の主語と that 節の主語が変わります。

また、不定詞 to ～ を that 節に書き換える時、I can read it のように it「それ（この場合本を指します）」を動詞の目的語として置かなければなりません。

～ enough to … 構文を so ～ that … 構文に書き変える時、to … は「…する」や「…できる」という肯定の意味になるので、that 節中は必ず肯定文となります。

不定詞

不定詞

17 不定詞の重要表現（不定詞の重要表現 in order to ～）

以下の例文をみてみましょう。

I got up early in order to study. 「私は、勉強するために早く起きた。」

in order to ～ は「～するために」という意味です。また、to ～ の部分は不定詞なので、to の後ろに動詞の原形を置きます。

上の例文の in order to study 「勉強するために」の部分は、早く起きた（got up early）目的を表しています。

ここで、不定詞の3用法を思い出しましょう。

不定詞の形は「to + 動詞の原形」と1つですが、意味は以下の3つがあります。

1. 名詞的用法「～すること」
2. 形容詞的用法「～するための」「～すべき」
3. 副詞的用法「～するために」「～して」

これから分かる通り、不定詞の副詞的用法にも in order to ～と同じ「～するために」という目的の意味があります。

よって、最初の in order to ～ を用いた例文は、以下のように、不定詞「to + 動詞の原形」を用いても同じ意味になります。

I got up early to study. 「私は、勉強するために早く起きた。」

ただし、全く同じという訳ではなく、in order to ～ を用いるとより目的をはっきり表すことになります。

よって、I got up early to study. より I got up early in order to study. の方が、早く起きた目的が「勉強するため」であることを強調していることになります。

18 不定詞の重要表現（独立不定詞）

独立不定詞は、不定詞を含む熟語表現のようなものです。

独立不定詞には、以下のようなものがあります。

so to speak 「いわば」

to be sure 「確かに」

to tell the truth 「実を言うと」

to begin[start] with 「まず初めに」

これらは、文章全体を修飾する不定詞句です。

句とは複数の単語がセットで1つの意味を表すものです。

例えば、以下の文の to see him 「彼に会うために」という部分は3つの単語がセットで1つの意味を持っています。

I went to London to see him.

「私は、彼に会うためにロンドンに行きました。」

よって、to see him は句で、不定詞を含んでいる句なので不定詞句となります。

また、役割からみると、この部分は「何のために」ロンドンに「行った」のかと、動詞を修飾しているので副詞の役割をしている句で、副詞句と呼ばれます。

不定詞句や副詞句という言葉は、こんなものもあるんだなあという程度に覚えておいて頂ければ大丈夫です。

ここで独立不定詞用いた以下の例文をみましょう。

To be sure, he is telling the truth.「確かに、彼は真実を言っています。」

独立不定詞 To be sure 「確かに」は、後ろの he is telling the truth 「彼は真実を言っています」という文全体にかかっており、文章全体を修飾する句となります。

独立不定詞は上の例文のように文頭に置き、後ろに続く文に意味を加えます。

他の独立不定詞を用いた例文もみましょう。

So to speak, he is a liar.「いわば、彼は嘘つきです。」

To tell the truth, I love her.「実を言うと、私は彼女のことを愛しています。」

To begin[start] with, we should do it.
「まず初めに、私達はそれするべきだ。」

独立不定詞は、文章全体を修飾する句ですが、あまり深く考えすぎず熟語表現だと思って、まず形と意味、そして使い方をしっかり覚えておきましょう。

19 不定詞の重要表現（不定詞を含む慣用表現）

不定詞を含む慣用表現には、以下のようなものがあります。

seem to ～「～のようだ」

appear to ～「～のように見える」

happen to ～「たまたま～する」

come[get] to ～「～するようになる」

learn to ～「～できるようになる」

これらの表現の to ～ は不定詞なので、～の部分には動詞の原形がきます。
1 つずつ例文をみながら使い方を確認していきましょう。

1. seem to ～「～のようだ」

She seems to be sick.「彼女は、病気のようにだ。」
※彼女の様子、雰囲気など、全体で判断しています。

2. appear to ～「～のように見える」

She appears to be sick.「彼女は、病気のように見える。」
※彼女の顔色、姿勢など、見た目で判断しています。

3. happen to ～「たまたま（偶然）～する」

I happened to go there last week.「先週、私は偶然そこへ行きました。」

4. come[get] to ～「～するようになる」

He came[got] to have breakfast.「彼は、朝食を食べるようになった。」

5. learn to ～「～できるようになる」

The baby learned to walk.「その赤ちゃんは、歩けるようになった。」

20 不定詞の重要表現 (be 動詞 + to 不定詞)

「be 動詞 + to 不定詞」とは、例えば is to go などのように be 動詞の後ろに to + 動詞の原形が置かれている形です。

そして、この「be 動詞 + to 不定詞」という形は 5 つの意味を持ちます。この 5 つの意味を、1 つずつ例文をみながら確認していきましょう。

1. 予定「～する予定です」「～することになっている」

She is to arrive at Tokyo today. 「彼女は、今日東京に到着する予定です。」

is to arrive の部分が「be 動詞 + to 不定詞」の形になっており、この場合は「予定」の意味になります。

そして、これは未来の予定なので、未来を表す be going to を用いた以下の文と同じ意味になります。

She is going to arrive at Tokyo today.

また、以下のように be 動詞の過去形を用いると、「過去のある時点からみた未来の予定」を表すことができます。

The train was to leave last night. 「その列車は、昨夜出発する予定だった。」

この文も、be going to を用いた文と同じ意味になります。

The train was going to leave last night.

2. 義務「～すべきだ」

You are to work hard. 「あなたは、一生懸命働くべきだ。」

are to work の部分が「be 動詞 + to 不定詞」の形になっており、この場合は「義務」の意味になります。

この文は、「～すべきだ」という義務の意味を持つ助動詞 should を用いた以下の文と同じ意味になります。

You should work hard.

3. 可能「～できる」

He is to speak English well. 「彼は、上手に英語を話すことができる。」

is to speak の部分が「be 動詞 + to 不定詞」の形になっており、この場合は「可能」の意味になります。

この文は、「～できる」という可能の意味を持つ助動詞 can を用いた以下の文と同じ意味になります。

He can speak English well.

以下のように、be 動詞の過去形を用いて過去のことを表すこともできます。

They were to pass the exam. 「彼らは、その試験に合格することができた。」

この文は、can の過去形 could を用いた文と同じ意味になります。

They could pass the exam.

4. 運命「～する運命である」

He is never to see her again. 「彼は、もう 1 度彼女に会えない運命である。」

is to see の部分が「be 動詞 + to 不定詞」の形になっており、この場合は「運命」の意味になります。

never 「決して～ない」を伴うと運命の意味になることが多く、文の意味は「～しない運命である」となります。

5. 意図「～するつもり」

If you are to succeed, work hard.

「もし成功するつもりならば、一生懸命働きなさい。」

are to succeed の部分が「be 動詞 + to 不定詞」の形になっており、この場合は「意図」の意味になります。

if 「もし～ならば」という接続詞の後にくる文中で「be 動詞 + to 不定詞」は意図の意味になり、文の意味は「もし～するつもりなら」となります。

「be 動詞 + to 不定詞」は、運命と意図以外は文脈から意味を判断しなければならないので難しい部分ですが、頻繁に用いられる表現ではありません。

21 原形不定詞（知覚動詞 + 目的語 + 原形不定詞）

不定詞の形は「to + 動詞の原形」ですが、原形不定詞とは to の付かない不定詞です。つまり、原形不定詞とは動詞の原形ということです。

例えば、通常的不定詞は to play といった形になりますが、原形不定詞は to をとった play となります。

原形不定詞は、知覚動詞や使役動詞の後ろで用いられます。

ここでは、知覚動詞の場合について解説していきます。

知覚動詞とは、see「見る」、hear「聞く」、feel「感じる」など人の感覚（五感）に関する動詞です。

これら知覚動詞の後ろで不定詞を用いる時は、to を取って原形不定詞（動詞の原形）にしなければなりません。

では、実際に知覚動詞の後ろで原形不定詞を用いる例文をみましょう。

「私は、彼がテニスをするのを見た。」ということを英語で表したい時、I saw him.「私は、彼を見た。」をもとに、その後ろに彼が行った動作を表します。

通常、以下のように動詞の saw と play を 2 つ並べることはできません。

I saw him play tennis.「私は、彼がテニスをするを見た。」

「テニスをするを見た」と、意味もおかしいですね。

よって、不定詞を用いて以下のような形で表します。

I saw him to play tennis.「私は、彼がテニスをするのを見た。」

この文で、「私は、彼がテニスをするのを見た。」と to play の部分は不定詞の名詞的用法となっています。

しかし、ここで終わりではありません。最初の定義を思い出しましょう。
知覚動詞の後ろに不定詞が置かれている時は、原形不定詞になります。

よって、to play の to をとり以下が正しい形となります。

I saw him play tennis.「私は、彼がテニスをするのを見た。」

ここで、この文中の play は一般動詞の意味「～する」ではなく、不定詞の名詞的用法「～すること」の意味を持っています。

形は動詞の原形ですが、不定詞の名詞的用法の意味を持ちます。

もう 1 つ知覚動詞の後ろで原形不定詞を用いる例文をみましょう。

I heard my mother call me.「私は、母親が私を呼ぶのを聞いた。」

この文の call の部分は以下のように不定詞を用いますが、heard（hear の過去形）が知覚動詞なので to call を原形不定詞 call にしなければなりません。

× I heard my mother to call me.「私は、母親が私を呼ぶことを聞いた。」

知覚動詞 heard の後ろでは、to call と通常的不定詞を用いることはできません。

このように、能動態の場合は知覚動詞の後ろで原形不定詞を用います。

ところが、知覚動詞が用いられていても受動態の形になっている場合は to 不定詞を用いなければならないので注意が必要です。

以下の知覚動詞を用いた能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

I saw him play tennis.「私は、彼がテニスをするのを見た。」

見られた彼（He）を主語にし、知覚動詞 saw を受動態の was seen に変えて受動態の文は以下のようになります。

He was seen to play tennis (by me) .
「彼は、テニスをするのを（私に）見られた。」

※話の流れから明らかに分かるので by me「私に（よって）」は省略します。

この時、see という知覚動詞の後ろでも was seen のように受動態になっている時は to play と to 不定詞を用いなければなりません。

能動態の文では知覚動詞の後ろで原形不定詞を用いますが、受動態の文では知覚動詞の後ろでも to 不定詞を用いなければならないので注意しましょう。

22 原形不定詞（使役動詞 + 目的語 + 原形不定詞）

不定詞の形は、「to + 動詞の原形」ですが、原形不定詞とは to の付かない不定詞です。つまり、原形不定詞とは動詞の原形ということです。

例えば、通常的不定詞は to play といった形になりますが、原形不定詞は to をとった play となります。

原形不定詞は、知覚動詞や使役動詞の後ろで用いられます。

ここでは、使役動詞の場合について解説していきます。

使役動詞とは、make「させる」、have「させる」、let「させる」といった人に何かをさせるという使役の意味を持つ動詞です。

これら使役動詞の後ろで不定詞を用いる時は、to を取って原形不定詞（動詞の原形）にしなければなりません。

では、実際に使役動詞の後ろで原形不定詞を用いる例文をみてみましょう。

He made me do the work.「彼は、私にその仕事をさせた。」

この文は、1つの主語 He に対し and などを用いずに動詞の made と do が同時に使われており、一見間違いのように思えます。

本来、1つの主語に対して動詞が2つ並ぶのはおかしいので、通常は以下のように不定詞の名詞的用法を用います。

He made me to do the work.「彼は、私にその仕事をするをさせた。」

ところが、「知覚動詞や使役動詞の後ろでは原形不定詞を用いる」より、以下のように使役動詞の made（make の過去形）の後ろでは原形不定詞を用います。

He made me do the work.

よって、to do は間違いで原形不定詞の do にします。

また、意味も「彼は、私にその仕事をするをさせた。」では不自然なので、「彼は、私にその仕事をさせた。」とします。

使役動詞の後ろでは原形不定詞を用います。そして、形は動詞の原形ですが、意味は不定詞の名詞的用法の意味を持っています。

最後に、「使役動詞 + O + 原形不定詞」の文の意味について解説します。

使役動詞 meke, have, let は全て「～させる」という意味を持ちますが、それぞれ少しずつニュアンスが異なります。

3つの使役動詞は、それぞれ以下のような意味を持っています。

・使役動詞の make は、強制的に「～させる」

I made him use my pen.「私は、彼に私のペンを使わせた。」

make を用いると、強制的に自分のペンを使わせたという意味になります。

・使役動詞の have は、お願いして「～してもらう」

I had him use my pen.「私は、彼に私のペンを使って貰った。」

have を用いると、頼んで自分のペンを使って貰ったという意味になります。

have は「～させる」という意味も持っており、上の英文の日本語訳は「私は、彼に私のペンを使わせた。」となることもあります。

しかし、make が強制的であるのに対し、have は非強制的になります。

・使役動詞の let は、許可して「～させる」

I let him use my pen.「私は、彼にペンを使わせた。」

let を用いると、許可して自分のペンを使わせてあげたという意味になります。

このように、能動態の場合は使役動詞の後ろで原形不定詞を用います。

ところが、知覚動詞が用いられていても受動態の形になっている場合は to 不定詞を用いなければならないので注意が必要です。

以下の使役動詞を用いた能動態の文を受動態の文に書き換えてみましょう。

He made me do the work.「彼は、私にその仕事をさせた。」

仕事をさせられた私 (I) を主語にし、使役動詞 made を受動態の was made に変えて受動態の文は以下ようになります。

I was made to do the work by him.
「私は、彼によってその仕事をさせられた。」

この時、make という使役動詞の後ろでも was made のように受動態になっている時は to do と to 不定詞を用いなければなりません。

能動態の文では原形不定詞を用いますが、受動態の文では使役動詞の後ろでも to 不定詞を用いなければならないので注意しましょう。

23 原形不定詞（使役動詞 get + to 不定詞と help + 原形不定詞）

不定詞の形は、「to + 動詞の原形」ですが、原形不定詞とは to の付かない不定詞です。つまり、原形不定詞とは動詞の原形ということです。

通常、原形不定詞は、知覚動詞や使役動詞の後ろで用いられます。

知覚動詞とは、see「見る」、hear「聞く」、feel「感じる」など人の感覚（五感）に関する動詞です。

また、使役動詞とは、make「させる」、have「させる」、let「させる」といった人に何かをさせるという使役の意味を持つ動詞です。

まず、原形不定詞を用いる表現について例文をみながら復習してみましょう。

以下は、知覚動詞を用いた例文です。

I saw him play tennis.「私は、彼がテニスをするのを見た。」

この文の play の部分は、本来 to play「～すること」というように不定詞の名詞的用法の意味を持っています。

ところが、上の文では使役動詞 had (have「～させる」「～しれもう」の過去形) の後ろに不定詞がくるので to do ではなく原形不定詞の do を用いなければなりません。

文の意味は、「私は、彼にその仕事をするのをしてもらった。」では不自然なので、「私は、彼にその仕事をしてもらった。」と言い換えます。

次に、使役動詞を用いた例文をみてみましょう。

I has him do the work.「私は、彼にその仕事をしてもらった。」

この文の do の部分は、本来 to do「～すること」というように不定詞の名詞的用法の意味を持っています。

ところが、上の文では使役動詞 had (have「～させる」「～しれもう」の過去形) の後ろに不定詞がくるので to do ではなく原形不定詞の do を用いなければなりません。

文の意味は、「私は、彼にその仕事をするのをしてもらった。」では不自然なので、「私は、彼にその仕事をしてもらった。」と言い換えます。

ここから、注意すべき動詞 get と help を用いた表現について解説します。

まず、get は使役動詞で have と同じ「～させる (非強制的)」「～してもらう」という意味を持ちます。

ところが、get を用いて「O に～させる」「O に～してもらう」という意味を表す時は、「get O to ～」と原形不定詞ではなく to 不定詞を用います。

よって、have を用いた文を get を用いた文に書き換えると以下ようになります。

I had him do the work.「私は、彼にその仕事をしてもらった。」

→ I got him to do the work.「私は、彼にその仕事をしてもらった。」

get は使役動詞ですが、to 不定詞 (この場合 to do) になるので注意しましょう。

次に、help について解説します。help は知覚動詞でも使役動詞でもありませんが、後ろに原形不定詞を置くことができます。

以下の例文をみてみましょう。

I helped him to do the work.「私は、彼がその仕事をするのを手伝った。」

この文のように、help は help O to 不定詞「O が～するを手伝う」というように後ろに不定詞を用いることができます。

そして、以下の文のように、help は help O 原形不定詞「O が～するを手伝う」と後ろに原形不定詞をおくこともできます。

I helped him do the work.「私は、彼がその仕事をするのを手伝った。」

help は、後ろに to 不定詞と原形不定詞の両方を置くことができる動詞です。

不定詞

不定詞

第 5 部

動名詞

1 動名詞の基礎（動名詞の形と意味）

動名詞の形は「動詞の ing 形」、意味は「～すること」です。

そして、動名詞は動詞が名詞に変わったものと考えることができ、文中で名詞と同じ役割を果たします。

まず、文中での名詞の役割を確認しておきましょう。

文中で名詞は、以下のように主語、補語、目的語になります。

・名詞が主語になる場合

Cars are expensive.「車は、値段が高い。」

この文で名詞の Cars「車」は、主語になっています。

・名詞が補語になる場合

He is a student.「彼は、生徒です。」

この文で名詞の student「生徒」は、補語になっています。

補語とは主語を説明するものです（「主語＝補語」）。

・名詞が目的語になる場合

I have dinner.「私は、夕食を食べます。」

この文で名詞の dinner「夕食」は、目的語になっています。

目的語とは、動詞の後ろに置かれ動作の目的を表すものです。日本語だと「～を」や「～に」の～にあたるものです。

動名詞も名詞と同じように、文中で主語、補語、目的語になります。

例えば、以下のように動名詞の Playing「～をすること」は主語になります。

Playing tennis is fun.「テニスをすることは、楽しいです。」

以下のように動詞の Play「～をする」のままでは主語になることはできません。

× Play tennis is fun.「テニスをするは、楽しいです。」

また、以下のように動名詞の reading「～を読むこと」は補語になります。

My hobby is reading books.「私の趣味は本を読むことです。」

以下のように read「～を読む」と動詞のままでは補語になることはできません。

× My hobby is read books.「私の趣味は、本を読むです。」

最後に、以下のように動名詞の playing「～をすること」は目的語にもなります。

I like playing soccer.「私は、サッカーをすることが好きです。」

like は「～を好む」という意味で、この場合「サッカーをすることを好む」となるので playing は「～を」にあたる目的語になります。

以下のように play「～をする」と動詞のままでは目的語になることはできません。

× I like play soccer.「私は、サッカーをするが好きです。」

このように、動名詞は文中で名詞と同じ役割を果たします。

2 動名詞の基礎（不定詞の名詞的用法と動名詞）

動名詞の形は「動詞の ing 形」、意味は「～すること」です。
動名詞は名詞と同じように、文中で主語、補語、目的語になります。

Watching sports is interesting.「スポーツを観戦することは、面白い。」

この文中の動名詞 Watching は主語です。

My hobby is writing novels.「私の趣味は、小説を書くことです。」

この文中の動名詞 writing は補語です（My hobby=writing）。

I like singing songs.「私は、歌を歌うことが好きです。」

この文中の動名詞 singing は目的語です。

動名詞は、動詞が名詞に変わったものと考えられます。

名詞や動名詞と同じように、不定詞「to + 動詞の原形」の名詞的用法「～すること」も文中で主語、補語、目的語になります。
よって、上の例文の動名詞の部分を不定詞に変えても同じ意味になります。

・不定詞の名詞的用法が主語になる場合

To watch sports is interesting.「スポーツを観戦することは、面白い。」

・不定詞の名詞的用法が補語になる場合

My hobby is to write novels.「私の趣味は、小説を書くことです。」

・不定詞の名詞的用法が目的語になる場合

I like to sing songs.「私は、歌を歌うことが好きです。」

しかし、ここで解説したように不定詞の名詞的用法と動名詞が全く同じように使われるなら、動名詞は必要ありません。

よって、不定詞しか使えない場合、動名詞しか使えない場合があります。

3 不定詞と動名詞の違い（前置詞の目的語は動名詞）

動名詞の形は「動詞の ing 形」、意味は「～すること」です。

動名詞は名詞と同じように文中で主語（Eating）、補語（collecting）、目的語（watching）になります。
以下は、その例文です。

Eating vegetables is good for our health.
「野菜を食べることは、（私達の）健康によい。」

His hobby is collecting stamps.「彼の趣味は、切手を集めることです。」

I like watching birds.「私は、鳥を観察することが好きです。」

このように、動詞を動名詞に変えると、文中で動詞が名詞の役割（文中で主語、補語、目的語になる）が果たせるようになります。

不定詞「to + 動詞の原形」の名詞的用法「～すること」も、名詞や動名詞と同じように文中で主語、補語、目的語になります。

よって、上の例文の動名詞の部分を不定詞に変えても同じ意味になります。

・不定詞の名詞的用法が主語になる場合

To eat vegetables is good for our health.
「野菜を食べることは、健康によい。」

・不定詞の名詞的用法が補語になる場合

His hobby is to collect stamps.「彼の趣味は、切手を集めることです。」

・不定詞の名詞的用法が目的語になる場合

I like to watch birds.「私は、鳥を観察することが好きです。」

しかし、不定詞の名詞的用法と動名詞が全く同じように使われるなら、動名詞は必要ありません。

よって、不定詞しか使えない場合、動名詞しか使えない場合があります。

その 1 つが、前置詞の目的語になる場合です。

以下の例文をみてみましょう。

I am good at playing tennis.「私は、テニスをするのが得意です。」

この文で、動名詞 playing「～すること」は be good at ～「～が得意です。」の目的語（「何を」得意かを表している）になっています。

しかし、この場合には、目的語で「～すること」という意味だからといって以下のように不定詞の to play を用いることはできません。

× I am good at to play tennis.

それは、at という前置詞の後ろだからです。

前置詞の目的語（前置詞の後ろ）では、動名詞しか用いることはできません。

be good at のように、動詞の後に前置詞が置かれて 1 つの動作や状態を表す郡動詞（複数の単語で 1 つの動作を表すもの）の場合に注意が必要です。

be good at の他に、よく用いられ注意すべき郡動詞は以下の 2 つです。

1. look forward to ～「～を楽しみに待つ」

I am looking forward to meeting you.
「私は、あなたに会うことを楽しみにしています。」

look forward to の to は前置詞なので、後ろに動詞を起きたい場合は動名詞のみ置くことができます。

不定詞の名詞的用法 to meet も「会うこと」という意味を持ちますが、以下のように不定詞を置くことはできません。

× I am looking forward to to meet you.

また、look forward to の to は不定詞「to + 動詞の原形」の to ではないので、以下のように to の後ろに動詞の原形を置くことはできません。

× I am looking forward to meet you.

2. be used to ～「～に慣れている」

He is used to going abroad.「彼は、外国に行くことに慣れています。」

be used to の to は前置詞なので、後ろに動詞を起きたい場合は動名詞のみ置くことができます。

不定詞の名詞的用法 to go も「行くこと」という意味を持ちますが、以下のように不定詞を置くことはできません。

× He is used to to go abroad.

また、be used to の to は不定詞「to + 動詞の原形」の to ではないので、以下のように to の後ろに動詞の原形を置くことはできません。

× He is used to go abroad.

前置詞の目的語は動名詞です。同じ「～すること」という意味でも不定詞（名詞的用法）を用いることはできないので注意しましょう。

4 不定詞と動名詞の違い（目的語に不定詞しかとらない動詞と動名詞しかとらない動詞）

目的語に不定詞のみとる動詞と目的語に動名詞のみとる動詞について解説します。

動名詞は名詞と同じように、文中で主語、補語、目的語になります。

そして、動詞の目的語になる時に注意が必要です。

例えば、以下のように like の目的語の場合には不定詞と動名詞の両方を用いることができ意味も同じです。

I like to play soccer. 「私は、サッカーをすることが好きです。」

I like playing soccer. 「私は、サッカーをすることが好きです。」

不定詞と動名詞の両方を目的語にとれる動詞は、like の他に start, begin, love などがあります。

ところが、動詞によって不定詞しか目的語にとらないものと動名詞しか目的語にとらないものがあります。

ここでは、それらの動詞について解説していきます。

まず、不定詞しか目的語にとらない動詞には以下のものがあります。

hope 「望む」, plan 「計画する」, wish 「願う」, want 「欲しい」,
decide 「決める」, promise 「約束する」, expect 「期待する」,
agree 「同意する」, refuse 「断る」

以下の例文をみてみましょう。

I hope to become a soccer player.

「私は、サッカー選手になることを望んでいる。」

この文中で、不定詞 to become 「なること」は hope の目的語になっています。

動名詞 becoming も「なること」という意味を持ちますが、以下のように hope の後ろでは用いることはできません。

× I hope becoming a soccer player.

上に挙げた動詞で全てではありませんが、不定詞のみを目的語にとる動詞の中でよく出てくるものなのでしっかり覚えておきましょう。

次に、動名詞しか目的語にとらない動詞には以下のものがあります。

enjoy 「楽しむ」, finish 「終える」, avoid 「避ける」, practice 「練習する」, mind 「気にする」, escape 「逃げる」, give up 「あきらめる、やめる」

以下の例文をみてみましょう。

I enjoyed playing soccer. 「私は、サッカーをすることを楽しんだ。」

この文中で、動名詞 playing 「すること」は enjoyed の目的語になっています。

不定詞 to play も「すること」という意味を持ちますが、以下のように enjoy の後ろでは用いることはできません。

× I enjoyed to play soccer.

5 不定詞と動名詞の違い（不定詞と動名詞の両方を目的語にとるが意味が異なる動詞）

不定詞と動名詞両方を目的語にとるが意味が異なる動詞について解説します。

動名詞は名詞と同じように、文中で主語、補語、目的語になります。

そして、動詞の目的語になる時に注意が必要です。

例えば、start の目的語の場合には以下のように不定詞と動名詞の両方を用いることができ意味も同じです。

He started to work.「彼は、仕事をし（仕事をするを）始めた。」

He started working.「彼は、仕事をし（仕事をするを）始めた。」

不定詞と動名詞の両方を目的語にとり、意味も同じになる動詞は、start の他に like, begin, love などがあります。

ところが、動詞によって不定詞しか目的語にとらないものと動名詞しか目的語にとらないものがあります。

I decided to study abroad.「私は、外国で勉強することに決めました。」

というように、decide は不定詞しか目的語にとりません。

I gave up studying abroad.「私は、外国で勉強することを諦めました。」

というように、give up は動名詞しか目的語にとりません。

そして、ここでは不定詞と動名詞の両方を目的語にとることができるが意味が異なる動詞について解説します。

それらの動詞は、stop, forget, remember, regret, try の5つです。

例文をみながら1つずつ解説してあるので、不定詞と動名詞を用いる場合それぞれの形と意味をしっかり覚えておきましょう。

1. stop 「やめる、立ち止まる」

・stop to ～「～するために立ち止まる」

He stopped to smoke.「彼は、タバコを吸うために立ち止まった。」

stop の後ろに不定詞が置かれると、不定詞は名詞的用法の「たばこを吸うこと」ではなく、副詞的用法の「たばこを吸うために」という意味になります。

・stop ～ing 「～することをやめる」

He stopped smoking.「彼は、タバコをすうことをやめた（禁煙した）。」

stop の後ろに動名詞が置かれると、動名詞には「～すること」という意味しかないので、smoking は「たばこを吸うすること」という意味になります。

2. forget 「忘れる」

・forget to ～「～するのを忘れる」

I forgot to meet him.「私は、彼と会うのを忘れていた。」

不定詞が後ろにくると、forget の時制（この場合過去）より後（この場合過去からみた未来）に起こることを表します。

今日会うことを昨日忘れていたという状況です。

・forget ～ing 「～したことを忘れる」

I forgot meeting him.「私は、彼にあったことを忘れた。」

動名詞が後ろにくると、forget の時制（この場合過去）より前（この場合過去よりさらに前の過去）に起こったことを表します。

1年前に彼に会ったことを昨日忘れていたという状況です。

3. remember「覚えている」

・ remember to ～「～するの覚えている」

I remember to do the work.「私は、その仕事をするのを覚えている。」

不定詞が後ろにくると、remember の時制（この場合現在）より後（この場合未来）に起こることを表します。

これからその仕事をするということを今忘れているというような状況です。以下のように、「忘れずに～する」という意味で用いることもあります。

Please remember to do the work.「忘れずにその仕事をして下さい。」

・ remember ～ ing「～したことを覚えている」

I remember doing the work.「私は、その仕事をしたことを覚えている。」

動名詞が後ろにくると、remember の時制（この場合現在）より前（この場合過去）に起こったことを表します。

以前その仕事をしたことを今覚えているというような状況です。

4. regret「後悔する、残念に思う」

・ regret to ～「残念ながら～する」

I have to regret to tell a lie.「私は、残念ながら嘘をつかなければならない。」

不定詞が後ろにくると、regret の時制（この場合現在）より後（この場合未来）に起こることを表します。

よって、これから嘘をつくということを後悔するという意味から「残念ながら～する」という日本語訳になります。

・ regret ～ ing「～したことを後悔する」

I regret telling a lie.「私は、嘘をついたことを後悔しています。」

動名詞が後ろにくると、regret の時制（この場合現在）より前（この場合過去）に起こったことを表します。

以前嘘をついたことを今後悔しているというような状況です。

5. try「挑戦する、試みる」

・ try to ～「～しようとする」

I tried to climb the mountain.「私は、その山に登ろうとした。」

不定詞が後ろにくると、try の時制（この場合過去）より後（この場合過去からみた未来）に起こることを表し、この場合実際に山に登ったかは分かりません。

・ try ～ ing「試しに～する」

I tried climbing the mountain.「私は、試しにその山に登ってみた。」

動名詞が後ろにくると、try の時制（この場合過去）より前（この場合過去よりさらに前の過去）に起こったことを表し、実際に山に登ったことを表します。

不定詞と動名詞の両方を目的語にとるが意味が異なる動詞は全部で 5 個と多くありません。形と意味をしっかり覚えておきましょう。

6 動名詞の様々な形（動名詞の意味上の主語）

まず、以下の文をみてみましょう。

I'm sure that I will pass the exam.

「私は、きっとその試験に合格すると思います。」

I'm sure that ～ は「きっと～だと思ふ」という意味で、that は接続詞なので that の後ろには節（1つの「主語＋動詞」の組からなる文）がきます。

そして、I'm sure that ～ は I'm sure of ～ と that を of に変えても同じ「きっと～だと思ふ」という意味になります。

この時、of は前置詞なので通常後ろに名詞が置かれ、動詞（動作）を置く場合には動名詞に変える必要があります。

will のような助動詞も前置詞の後ろに置く事はできないのでとってしまいます。

よって、上の文を I'm sure of ～ を用いて書き換えると、以下のように that I will pass の部分を of passing と「前置詞＋動名詞」の形にしなければなりません。

I'm sure of passing the exam.

「私は、きっとその試験に合格すると思います。」

この場合、pass「合格する」という動詞の主語「私」は、主節（I'm sure）の主語（I）と同じなので省略します。

今度は、以下の文の書き換えを考えてみましょう。

I'm sure that he will pass the exam.

「私は、きっと彼がその試験に合格すると思います。」

今度は、pass「合格する」の主語が「私」ではなく he「彼」になっています。

この場合、I'm sure of ～ を用いた文に書き換える時に省略することはできず、合格するのは「彼」だということを示さなければなりません。

pass は、前置詞 of の後ろでは動名詞の passing となりますが、動名詞の主語は（代）名詞の所有格か目的格を動名詞の前に置いて表します。

これは、動名詞の意味上の主語と呼ばれます。

よって、上の文を I'm sure of ～ の文に書き換える時、以下のように動名詞の意味上の主語として he の所有格 his か目的格 him を passing の前に置きます。

I'm sure of him (his) passing the exam.

「私は、きっと彼がその試験に合格すると思います。」

動名詞の意味上の主語は、I'm sure of ～ のような前置詞を含む表現の後ろに動名詞が置かれる場合によく用いられます。

動名詞の意味上の主語は、他に以下のような表現と合わせて用いられます。

insist that ～ → insist on ～ 「～を主張する」

be proud that ～ → be proud of ～ 「～を誇りに思う」

be afraid that ～ → be afraid of ～ 「～を恐れている」

be ashamed that ～ → be ashamed of ～ 「～を恥じている」

7 動名詞の様々な形（動名詞の否定形）

まず、以下の文をみてみましょう。

I insisted that I would go there.「私は、そこへ行くと主張した。」

insist that ～は「～を主張する」という意味で、that は接続詞なので that の後ろには節（「主語 + 動詞」からなる文）がきます。

そして、insist that ～は insist on ～と that を on に変えても同じ「～を主張する」という意味になります。

ところが、on は前置詞なので通常後ろに名詞が置かれ、動詞（動作）を置く場合には動名詞に変える必要があります。

よって、上の文を insist on ～を用いて書き換えると、以下のように that I would go の部分を on going「前置詞 + 動名詞」の形にしなければなりません。

I insisted on going there.「私は、そこへ行くと主張した。」

前置詞の後ろに助動詞を置くこともできないので、would もとってしまいます。

また、go「行く」という動詞の主語 I「私」は、主節（I insisted）の主語（I）と同じなので省略します。

それでは、以下の文の書き換えを考えてみましょう。

I insisted that I wouldn't go there.「私は、そこへ行かないと主張した。」

今度は、wouldn't go「行くかない」と that 節の中が否定文になっています。

この場合、insist on を用いた文に書き換える時に、going の部分が否定の意味であることを示さなければなりません。

動名詞を否定する時は、動名詞の直前に not を置きます。

よって、上の文を insist on ～を用いた文に書き換えると、動名詞 going の前に否定を現すために not を置いて以下ようになります。

I insisted on not going there.「私は、そこへ行かないと主張した。」

以下の文のように、動名詞の意味上の主語と動名詞の否定形が組み合わさった形もあるので注意しましょう。

I insisted that he shouldn't go there.
「私は、彼がそこへ行くべきではないと主張した。」

まず、insist on を用いると go が動名詞の going になります。

また、前置詞 on の後ろに助動詞 should は置けないためとります。

主節の主語が I、that 節中の主語が he と異なるため意味上の主語 him または his を動名詞 going の前に置きます。

最後に、should not go と動詞 go が否定されているので、動名詞に書き換えた時に going の直前に否定を表すために not を置きます。

よって、書き換えた文は以下ようになります。

I insisted on him (his) not going there.
「私は、彼がそこへ行くべきではないと主張した。」

これは、動名詞の意味上の主語と動名詞の否定形が組み合わさった形です。

否定語の not は動名詞の直前に、意味上の主語は否定語の前に置かれるのでこの並び順にも注意しましょう。

8 動名詞の様々な形（動名詞の受動態）

動名詞の受動態の形は、動名詞「動詞の ing 形」と受動態「be 動詞 + 過去分詞」を組み合わせ、「being + 過去分詞」となります。

動名詞の受動態の意味は、動名詞の「～すること」に受動態の「～される」の意味が加わり、「～されること」となります。

以下の例文をみてみましょう。

まず、通常の動名詞を用いた文です。

I like giving a present.「私は、プレゼントをあげることが好きです。」

次に、動名詞の受動態を用いた文です。

I like being given a present.「私は、プレゼントを貰うことが好きです。」

動名詞の受動態 being given は直訳すると「与えられること」という意味になりますが、この場合「貰うこと」とした方が自然です。

もう 1 つ動名詞の受動態を用いた例文をみてみましょう。

まず、I'm afraid that ～「～を恐れている」を用いた文です。

I'm afraid that I'm scolded.「私は、叱られることを恐れています。」

この場合、that は接続詞なので後ろに節（「主語 + 動詞」からなる文）がきます。

次に、that を前置詞の of に変えた I'm afraid of ～を用いた文です。

I'm afraid of being scolded.「私は、叱られることを恐れています。」

今度は、of は前置詞なので後ろには動名詞がきます。

そして、この時 that 節中が am scolded「叱られる」と受動態になっているので、動名詞は being scolded と動名詞の受動態の形を用います。

9 動名詞の様々な形（動名詞の完了形）

動名詞の完了形の形は、動名詞「動詞の ing 形」と現在完了形「have + 過去分詞」を組み合わせ、「having + 過去分詞」となります。

動名詞の完了形の意味は、通常の動名詞の「～すること」という意味に対し、「～したこと」となります。

まず、以下の書き換えをみてみましょう。

I am ashamed that I am late for school.

「私は、学校に遅刻することを恥じています。」

この I am ashamed that の部分を I am ashamed of と前置詞 of を用いた表現に変えると、以下のようになります。

I am ashamed of being late for school.

「私は、学校に遅刻することを恥じています。」

前置詞の後ろに節（「主語 + 動詞」からなる文）は置けず、動名詞（この場合 being）を置かなければなりません。

この時、上の文で主節（I am）の時制と that 節（that I am）の時制が共に「現在」と同じなので、that 節中の am をそのまま動名詞の being に変えます。

次に、以下の文を I am ashamed of ～を用いた表現に書き換えてみましょう。

I am ashamed that I was late for school.

「私は、学校に遅刻したことを恥じています。」

この場合、前置詞 of の後ろだから was を動名詞の being に変えると間違いです。

それは、主節の時制（I am）が「現在」であるのに対し、that 節（I was）の時制が「過去」と 1 つ古いからです。

I am ashamed of being late for school.

この文のように通常の動名詞 being を用いると、この部分の時制は主節の時制（この場合現在）と同じ「現在」になってしまいます。

そこで、主節 (I am) の時制より動名詞の部分 (of ～) が 1 つ古い時制「過去」であることを表すために、動名詞の完了形「having + 過去分詞」を用います。

よって、I am ashamed of ～ を用いて書き換えた文は以下のようになります。

I am ashamed of having been late for school.
「私は、学校に遅刻したことを恥じています。」

この文は、「過去」のことを「現在」恥じているということを表しています。

ここで 1 つ注意が必要です。動名詞の完了形は、単純に「過去」のことではなく、主節の時制より 1 つ古い時制を表します。

今度は、以下の文を I am ashamed of ～ の文に書き換えてみましょう。

I was ashamed that I was late for school.
「私は、学校に遅刻することを恥じていました。」

この文では、that 節の時制 (I was) が「過去」ですが、主節の時制 (I was) も「過去」と同じ時制です。

よって、I am ashamed of ～ の文に書き換える時、of の後ろは通常の動名詞 being を用いて以下のようになります。

I was ashamed of being late for school.
「私は、学校に遅刻することを恥じていました。」

この文は、「過去のある時点」で遅刻したことを、同じ「過去の時点」で恥じていたという意味になります。

最後に、以下の文を I was ashamed of ～ の文に書き換えてみましょう。

I was ashamed that I had been late for school.
「私は、学校に遅刻したことを恥じていました。」

この文は、主節の時制が「過去」であるのに対し、that 節の時制は「大過去」と主節の時制より that 節の時制が 1 つ古くなっています。

一週間前に遅刻したことを昨日恥ずかしく思っていたというような状況です。

この場合には、I am ashamed of ～ の文に書き換える時、of の後ろは通常の動名詞ではなく動名詞の完了形 having been を用いて以下のようになります。

I was ashamed of having been late for school.
「私は、学校に遅刻したことを恥じていました。」

このように、動名詞の完了形は単純に「過去」のことではなく、主節の時制より 1 つ古い時制を現します。

そして、動名詞の完了形の形は「having + 過去分詞」で、意味は「～したこと」となります。

10 動名詞の重要表現（動名詞の慣用表現 [1]）

動名詞の慣用表現は、動名詞を含む熟語表現です。

よく用いられるものは 11 個あり、ここではそのうちの 6 個を解説します。

慣用表現は、形と意味を暗記してしまいましょう！

1. feel like ~ ing 「～したい気がする、～したい気分だ」

I feel like eating sweets. 「(私は、) 甘いものが食べたい気分だ。」

feel like の前に主語、後ろに動名詞を置きます。

2. There is no ~ ing 「～することはできない」

There is no telling the truth. 「本当のことを言うことはできない。」

文は There is no で始まり、no の後ろに動名詞を置きます。

この文は、形式主語 it を用いた「It is … to ~」構文と同じ意味になります。

It is impossible to tell the truth. 「本当のことを言うことはできない。」

impossible は「不可能な」という意味なので、この文を直訳すると「本当のことを言うことは不可能だ。」となりますが不自然なため上のように言い換えます。

3. be worth ~ ing 「～する価値がある」

This book is worth reading. 「この本は読む価値がある。」

be worth の前に主語、後ろに動名詞を置きます。

be 動詞は主語と時制により is, am, are, was, were, will be に変わります。

4. cannot help ~ ing 「～せずにはいられない」

I cannot help drinking something. 「(私は、) 何か飲まずにはいられない。」

cannot help の前に主語、後ろに動名詞を置きます。

この文は、以下のように「cannot but + 動詞の原形」という助動詞 can の慣用表現と同じ意味になります。

I cannot but drink something. 「(私は、) 何か飲まずにはいられない。」

cannot help の後ろには動名詞、cannot but の後ろには動詞の原形がきます。

5. It is no use ~ ing 「～しても無駄だ」

It is no use crying in front of me. 「私の前で泣いても無駄です。」

It is no use の後ろに動名詞を置きます。

6. Would (Do) you mind ~ ing ? 「～してくれませんか」

Would you mind closing the door? 「そのドアを閉めてくれませんか。」

Would (Do) you mind の後ろに動名詞を置き、文全体は疑問文になります。

11 動名詞の重要表現（動名詞の慣用表現 [2]）

動名詞の慣用表現は、動名詞を含む熟語表現です。

よく用いられるものは11個あり、ここではそのうちの5個を解説します。

慣用表現は、形と意味を暗記してしまいましょう！

7. cannot (never) ... without ~ ing 「…すれば必ず～する」

I never see this picture without remembering my parents.

「私は、この写真を見ると必ず両親のことを思い出します。」

cannot (never) の後ろには動詞の原形、without の後ろに動名詞を置きます。

never は「決して～ない」、without は「～なしで、～しないで」という意味なので、上の文の直訳すると以下ようになります。

「私は、両親を思い出さずにこの写真を見ることはない。」

ところが、この日本語は少し不自然なため「…すれば～する」と言い換えます。

この慣用表現では、never の代わりに cannot を用いることもできます。

8. on ~ ing 「～するとすぐに」

On seeing me, he ran away. 「私を見るとすぐに、彼は逃げた。」

前置詞 on の後ろに動名詞を置きます。

また、上の文は接続詞 as soon as 「～するとすぐに」を用いて以下のように書き換えることができます。

As soon as he saw me, he ran away.

as soon as は接続詞なので、後ろに節（「主語 + 動詞」からなる文）がきます。

9. in ~ ing 「～する時、～する場合」

In hearing it, she was glad. 「それを聞いた時、彼女は喜んだ。」

前置詞 in の後ろに動名詞を置きます。

また、上の文は接続詞 when 「～する時」を用いて以下のように書き換えることができます。

When she heard it, she was glad.

when は接続詞なので、後ろに節（「主語 + 動詞」からなる文）がきます。

10. be busy (in) ~ ing 「～するのに忙しい」

She is busy (in) cooking dinner. 「彼女は、夕食を作るのに忙しい。」

be busy の後ろに動名詞を置きます。busy と動名詞の間に前置詞 in が置かれることもあります。

be 動詞は主語と時制により is, am, are, was, were, will be に変わります。

11. need ~ ing 「～する（される）必要がある」

This car needs repairing. 「この車は、修理する必要がある。」

need の後ろに動名詞を置きます。

動名詞が受動態の形になっていませんが、「～される必要がある」と受動態の意味「～される」を持ちます。

この例文でも、日本語訳は「車は修理する～」と能動態のようになっていますが、厳密には「車は修理される」と受身の関係になっています。

第 6 部

分詞

1

分詞の基礎（現在分詞と過去分詞の形と意味）

分詞には、現在分詞と過去分詞の 2 種類があります。

現在分詞の形は「動詞の ing 形」で、意味は「～している」です。

現在分詞は、進行形「be 動詞 + 現在分詞（動詞の ing 形）」で用いられます。

例えば、以下のような現在進行形の文で現在分詞は用いられ「～している」という意味を表します。

The girl is cooking now.「その少女は、今料理をしているところです。」

動名詞の形も「動詞の ing 形」ですが、動名詞は「～すること」という意味で文中で名詞的な役割を果たします。

これに対し、現在分詞は文中で形容詞的な役割を果たします。

上の例文では、「The girl=cooking（少女 = 料理している）」と現在分詞の cooking は主語 The girl を説明している補語になっています。

また、この cooking は、「料理している少女」と少女という名詞を修飾する形容詞的な役割をしています。

過去分詞の形は、規則動詞の場合「動詞の原形 + ed」、不規則動詞の場合は「動詞の過去分詞形」です。

不規則動詞の過去分詞は、動詞の過去分詞形をそれぞれ覚えておく必要があります。過去分詞の意味は、「～された」です。

過去分詞は、受動態「be 動詞 + 過去分詞」で用いられます。

例えば、以下のような受動態の文で過去分詞は用いられ「～された（る）」という意味を表します。

The box was made by him.「その箱は、彼によって作られた。」

過去分詞は、現在完了形「have + 過去分詞」などの完了形でも用いられますが、過去分詞本来の意味は受動態の「～された（る）」となります。

上の例文では、「The box=made（箱 = 作られた）」と過去分詞の made は主語 The box を説明している補語になっています。

また、この made は、「作られた箱」と箱という名詞を修飾する形容詞的な役割をしています。

2 分詞の形容詞的用法（分詞の形容詞的用法 [名詞を前から修飾する場合]）

分詞には、現在分詞と過去分詞の 2 種類があります。

現在分詞の形は「動詞の ing 形」で、意味は「～している」です。

過去分詞の形は、規則動詞の場合「動詞の原形 + ed」、不規則動詞の場合「動詞の過去分詞形」で、意味は「～された」です。

これら現在分詞や過去分詞は形容詞と同じように名詞を修飾し、これを分詞の形容詞的用法と呼びます。

以下の文では、通常の形容詞 tall「背が高い」が後ろの名詞 boy「少年」を修飾しています。

There is a tall boy.「背の高い少年がいます。」

この形容詞 tall と同じように現在分詞は名詞を修飾します。

上の文の tall を現在分詞 sleeping「眠っている」に変えた以下の文では、**現在分詞の sleeping が boy という名詞を修飾しています。**

There is a sleeping boy.「眠っている少年がいます。」

次に、過去分詞を用いた例文をみてみましょう。

There is a broken watch.「壊れた時計があります。」

この文で、**過去分詞 broken「壊された」は watch という名詞を修飾しています。**

過去分詞は「～された」という意味を持つので、上の文は直訳すると「壊された時計があります。」となります。

ところが、「壊された時計」という言い方より「壊れた時計」の方が自然なので上の文のように言い換えます。

では、どのような時に現在分詞を用いて名詞を修飾し、どのような時に過去分詞を用いて名詞を修飾するのかについて解説します。

それは、**分詞の元になる動詞と修飾される名詞の関係**です。

例えば、以下の文で、「少年 (boy)」は「眠っている (sleeping)」というように少年と眠るの間には**能動の関係**が成り立ちます。

There is a sleeping boy.「眠っている少年がいます。」

よって、**この場合には「～している」という意味を持つ現在分詞 sleeping を用いて boy を修飾**します。

これに対して以下の文では、「時計 (watch)」は「壊された (broken)」というように時計と壊すの間には**受動（受身）の関係**が成り立ちます。

There is a broken watch.「壊れた時計があります。」

よって、**この場合には「～された」という意味を持つ過去分詞 broken を用いて watch を修飾**します。

動詞と修飾される名詞の関係が、能動の関係なら現在分詞、受身（受動）の関係なら過去分詞を用いて名詞を修飾します。

ここでは、分詞は通常の形容詞と同じように名詞の前に置かれ、名詞を修飾する場合について解説しました。

3 分詞の形容詞的用法（分詞の形容詞的用法 [名詞を後ろから修飾する場合]）

分詞には、現在分詞と過去分詞の 2 種類があります。

現在分詞の形は「動詞の ing 形」で、意味は「～している」です。

過去分詞の形は、規則動詞の場合「動詞の原形 + ed」、不規則動詞の場合「動詞の過去分詞形」で、意味は「～された」です。

これら現在分詞や過去分詞は形容詞と同じように名詞を修飾し、これを分詞の形容詞的用法と呼びます。

以下の例文をみてみましょう。

There is a sleeping boy.「眠っている少年がいます。」

There is a broken watch.「壊れた時計があります。」

上の文中の現在分詞 sleeping「眠っている」は名詞 boy「少年」を、下の文中の過去分詞 broken「壊された」は名詞 watch「時計」を修飾しています。

sleeping や broken は、tall boy「背の高い少年」の形容詞 tall や big watch「大きい時計」の形容詞 big と同じような働きをしています。

また、通常の形容詞は、something（anything）「何か」など一部の名詞以外は名詞の前に置かれ、後ろの名詞を修飾します。

先ほど例に挙げた tall boy や big watch という形になります。

形容詞が something（anything）を修飾する場合は、something（anything）cold「冷たい物（何か）」と形容詞が後ろに置かれる形になります。

分詞が名詞を修飾する場合は、ある条件により名詞の前に置かれる場合と名詞の後ろに置かれる場合があります。

もう 1 度最初の例文をみてみましょう。

There is a sleeping boy.「眠っている少年がいます。」

There is a broken watch.「壊れた時計があります。」

これらの文のように分詞 1 語（sleeping や broken）で名詞を修飾する場合は、名詞の前に分詞が置かれます。

これに対し、分詞が他の語とセットになり名詞を修飾する場合には、名詞の後ろに分詞が置かれます。

以下の例文をみてみましょう。

There is a boy sleeping in a bed.「ベット寝ている少年がいます。」

There is a watch broken by Ken.「ケンによって壊された時計があります。」

これらの文では、sleeping in a bed「ベットで寝ている」や broken by Ken「ケンによって壊された」と分詞が他の語を伴って名詞を修飾しています。

このように、分詞を含めて 2 語以上セットで（句になって）名詞を修飾する場合には名詞の後ろに分詞が置かれます。

置かれる位置に関係なく、修飾している名詞との関係が能動「～している」の場合は現在分詞、受身（受動）「～された」の場合は過去分詞を用います。

4 分詞の叙述用法（分詞の叙述用法 [主格補語]）

分詞には、現在分詞と過去分詞の 2 種類があります。

現在分詞の形は「動詞の ing 形」で、意味は「～している」です。

過去分詞の形は、規則動詞の場合「動詞の原形 + ed」、不規則動詞の場合は「動詞の過去分詞形」です。意味は「～された」です。

分詞の叙述用法とは、現在分詞や過去分詞が文中で補語となる用法です。

まず、補語について解説します。

補語とは主語や目的語を説明する言葉です。ここでは、主語を説明する主格補語について解説します。

He is tall.「彼は、背が高い。」

この文は SVC の第 2 文型で、He は主語、is は動詞、tall「背が高い」は主語である He「彼」を説明している補語です。

この文で He=tall と考えることができます。そして、この文中の補語 tall は主語 He を説明している補語なので主格補語と呼ばれます。

補語になれる品詞は名詞と形容詞です。

上の例文では tall という形容詞が補語になっていますが、以下のように名詞（この場合 teacher）も補語（He=teacher）になることができます。

He is a teacher.「彼は、先生です。」

現在分詞や過去分詞も、この主格補語として用いることができます。

以下の例文をみてみましょう。

He sat watching TV.「彼は、テレビを観ながら座っていた。」

この文の現在分詞 watching「観ている」は、座っていたと同時に彼がテレビを「観ていた」ということを表しています。

He=watching（彼は観ていた）という関係が成り立っており、watching は主語 He を説明している主格補語となります。

そして、この場合現在分詞は「～しながら」という意味になります。

次に、過去分詞を用いた例文をみてみましょう。

He sat surrounded by dogs.「彼は、犬に囲まれて座っていた。」

この文の過去分詞 surrounded「囲まれた」は、座っていたと同時に彼が犬に「囲まれていた」ということを表しています。

He=surrounded（彼は囲まれていた）という関係が成り立っており、surrounded は主語 He を説明している主格補語となります。

そして、この場合過去分詞は「～されて」という意味になります。

主格補語の部分に現在分詞と過去分詞のどちらを用いるかは、主語と補語なる動詞（分詞の元になる動詞）の関係で決まります。

主語と補語になる動詞の関係が「～している」という関係の場合は現在分詞、主語が「～された」という関係の場合は過去分詞を用います。

これは、分詞の形容詞的用法の時と同じです。

この形を作る動詞（主語と分詞の間に置かれる動詞）には、sit「座る」の他に come, go, stand, lie「横たわる」, remain「とどまる」, keep があります。

これらの動詞を用いた例を幾つか以下にあげておきます。

She came running toward me.「彼女は、私の方に走りながら来た。」

この文では、She=running「彼＝走っている」という関係が成り立っています。

He stood scolded.「彼は、叱られて立っていました。」

この文では、He=scolded「彼＝叱られてた」という関係が成り立っています。

I kept waiting for him.「私は、彼を待ち続けた。」

この文では、I=waiting「私＝待っている」という関係が成り立っています。

keep は「(ある状態に) 保つ」という意味なので、直訳は「私は、彼を待っている状態に保った。」となりますが不自然なので上のように言い換えます。

keep～ing で「～し続ける」と覚えておきましょう。

最後に 1 つ、主格補語として過去分詞を用いる場合に注意しなければならない点について解説します。

それは、「～する」や「～している」という意味の過去分詞を用いる場合です。

例えば、be surprised at ～ は、形は「be 動詞 + 過去分詞」で受動態の形ですが「～に驚く」と能動態の意味になります。

過去分詞 surprised は、「驚く」や「驚いている」というような意味になります。

よって、主格補語として surprised を用いた文は「～されて」ではなく、以下のように「～して」や「～しながら」と現在分詞を用いた時のような意味になります。

He sat surprised at the news.「彼は、そのニュースに驚いて座っていた。」

このような能動の意味を持つ過去分詞には、他に以下のようなものがあります。

例文と合わせて覚えておきましょう。

・excited「興奮している、ワクワクしている」

He stood excited about the game. (He=excited「彼＝興奮している」)
「彼は、その試合に興奮して立っていました。」

・satisfied「満足している」

He looked satisfied with the result. (He=satisfied「彼＝満足している」)
「彼は、その結果に満足しているように見えた。」

・pleased「喜んでいる」

He looked pleased with the present. (He=pleased「彼＝喜んでいる」)
「彼は、そのプレゼントに喜んでいるように見えた。」

・shocked「ショックを受けている」

He sat shocked at the news. (He=shocked「彼＝ショックを受けている」)
「彼は、そのニュースにショックを受けて座っていた。」

これらは、全て主語が「～をしている」という意味ですが現在分詞ではなく過去分詞を用いています。

5 分詞の叙述用法（分詞の叙述用法 [目的格補語]）

分詞が目的格補語になる場合は、少し難しいので数回に分けて解説します。

目的格補語とは目的語を説明する言葉です。

以下の例文をみてみましょう。

I found him smart. 「私は、彼が頭がいいということに気づいた。」

この文は SVOC の第 5 文型で、I は主語、found は動詞、him は目的語、smart 「頭がいい」 は目的語である him 「彼」を説明している補語です。

この文で、him=smart と考えることができます。そして、この文中の補語 smart は、目的語 him を説明している補語なので目的格補語と呼ばれます。

現在分詞や過去分詞も、この目的格補語として用いることができます。

以下の現在分詞を用いた例文をみてみましょう。

I saw him playing tennis. 「私は、彼がテニスをしているのを見た。」

この文の現在分詞 playing 「している」 は、私が彼を見た時に彼がテニスを「していた」ということを表しています。

よって、him=playing （彼 = していた）という関係が成り立ち、playing は目的語 him を説明している目的格補語となります。

そしてこの場合、現在分詞は「～している」という意味になります。

次に、過去分詞を用いた例文をみてみましょう。

I saw him surrounded by dogs. 「彼は、彼が犬に囲まれているのを見た。」

この文の過去分詞 surrounded 「囲まれた」 は、私が彼を見た時に彼が犬に「囲まれていた」ということを表しています。

よって、him=surrounded （彼 = 囲まれていた）という関係が成り立ち、surrounded は目的語 him を説明している目的格補語となります。

そして、この場合過去分詞は「～されている」という意味になります。

目的格補語の部分に現在分詞と過去分詞のどちらを用いるかは、目的語と補語になる動詞（分詞の元になる動詞）の関係で決まります。

目的語と補語になる動詞の関係が「～している」と能動の関係の場合は現在分詞、「～されている」と受身（受動）の関係の場合は過去分詞を用います。

ここでは、例文に see 「見る」という動詞を用いて解説しましたが、目的格補語に分詞を動詞を取る動詞は限られています。

6 分詞の叙述用法（知覚動詞 [使役動詞] + 目的語 + 現在分詞）

まず、目的格補語について復習しましょう。

目的格補語とは目的語を説明する言葉です。

I think him smart. 「私は、彼が頭がいいと思います。」

という文で、smart 「頭がいい」 は目的語である him 「彼」 を説明しています。

この文では him=smart と考えることができ、smart は目的語 him を説明している補語なので目的格補語と呼ばれます。

以下のように、目的格補語として現在分詞や過去分詞を用いることができます。

I saw him playing tennis. 「私は、彼がテニスをしているのを見た。」

この文の現在分詞 playing 「している」 は、私が彼を見た時に彼がテニスを「していた」ということを表しています。

よって、him=playing （彼＝していた）という関係が成り立っており、現在分詞 playing は目的語 him を説明している目的格補語となります。

I saw him surrounded by dogs. 「彼は、彼が犬に囲まれているのを見た。」

この文の過去分詞 surrounded 「囲まれた」 は、私が彼を見た時に彼が犬に「囲まれていた」ということを表しています。

よって、him=surrounded （彼＝囲まれていた）という関係が成り立っており、過去分詞 surrounded は目的語 him を説明している目的格補語となります。

目的格補語に分詞を取ることができる動詞は限られおり、ここでは現在分詞を目的格補語に取る動詞について例文を用いながら解説していきます。

1. 知覚動詞 see[hear] 「O が～しているのを見る [聞く]」

I heard her singing the song. 「私は、彼女がその歌を歌っているのを聞いた。」

この文の現在分詞 singing 「歌っている」 は、私が彼女を見た時に彼女が歌を「歌っていた」ということを表しています。

また、her=singing （彼＝歌っていた）という関係が成り立っており、この場合現在分詞は「～している」という意味になります。

2. 使役動詞 have 「O を（ある状態に）して [させて] おく」

I had my son watching TV. 「私は、息子にテレビを観させておいた。」

現在分詞 watching は本来「観ている」という意味なので、この文を直訳すると「私は、息子をテレビを観ている状態にしておいた。」となります。

しかし、日本語として不自然なため、「私は、息子にテレビを観させておいた。」と言い換えます。

この文でも my son=watching （息子＝観ていた）という関係が成り立っています。

3. keep[leave] 「O を（ある状態に）しておく」

He kept me waiting. 「彼は、私を待たせた。」

現在分詞 waiting は本来「待っている」という意味なので、この文を直訳すると「彼は、私を待っている状態に保った。」となります。

しかし、日本語として不自然なため、「彼は、私を待たせた。」と言い換えます。

この文でも me=waiting （私＝待っていた）という関係が成り立っています。

現在分詞を用いる場合は、目的語と現在分詞の関係は「目的語＝～している [た]」と能動の関係になっており、現在分詞の意味は「～している」となります。

ところが、使役動詞の have や keep[leave] の後ろに現在分詞がくる場合は、現在分詞を「している」と訳さないので注意しましょう。

7 分詞の叙述用法（知覚動詞 [使役動詞] + 目的語 + 過去分詞）

まず、目的格補語について復習しましょう。

目的格補語とは目的語を説明する言葉です。

I found him stubborn.「私は、彼が頑固だと気づきました。」

という文で、stubborn「頑固な」は目的語である him「彼」を説明しています。

この文では him=stubborn と考えることができ、stubborn は目的語 him を説明している補語なので目的格補語と呼ばれます。

以下のように、目的格補語として現在分詞や過去分詞を用いることができます。

I saw him crossing the street.「私は、彼が通りを横切っているのを見た。」

この文の現在分詞 crossing「横切っている」は、私が彼を見た時に彼が通りを「横切っていた」ということを表しています。

よって、him=crossing（彼＝横切っていた）という関係が成り立っており、現在分詞 crossing は目的語 him を説明している目的格補語となります。

I saw him scolded by a teacher.「私は、彼が先生に叱られているのを見た。」

この文の過去分詞 scolded「叱られていた」は、私が彼を見た時に彼が先生に「叱られていた」ということを表しています。

よって、him=scolded（彼＝叱られていた）という関係が成り立っており、過去分詞 scolded は目的語 him を説明している目的格補語となります。

目的格補語に分詞を取る動詞は限られており、ここでは過去分詞を目的格補語に取る動詞について例文を用いながら解説していきます。

1. 知覚動詞 see[hear]「O が～されているのを見る [聞く]」

I saw the door opened.「私は、そのドアが開けられているのを見た。」

この文の過去分詞 opened「開けられている」は、私がドアを見た時にドアが「開けられていた」ということを表しています。

よって、door=opened（ドア＝開けられていた）という関係が成り立っており、この場合過去分詞は「～されている」という意味になります。

ただ、この文の状況では過去分詞を「～されている」と訳さず、「私は、ドアが開いているのを見た。」としても問題ありません。

2. 使役動詞 have[get]「O を～される、O を～してもらう」

I had my car stolen.「私は、車を盗まれた。」

car=stolen（車＝盗まれた）という関係が成り立っており、過去分詞 stolen は「盗まれる」という意味なので had my car stolen で「車を盗まれた。」となります。

have[get] の後ろに過去分詞がくる場合には、以下のように「O を～してもらう」という意味になることもあります。

I had my car washed.「私は、車を洗ってもらった。」

この文では my car=washed（車＝洗われた）という関係が成り立っているため過去分詞 washed「洗われる」を用います。

この文を直訳すると「私は、車を洗われた。」となりますが日本語として不自然なため「私は、車を洗ってもらった。」と訳します。

3. keep[leave]「O を～されたままにしておく」

He kept the window opened.「彼は、窓を開けたままにしておいた。」

この文では window=opened（窓＝開けられていた）という関係が成り立っているため過去分詞 opened「開けられている」を用います。

この文を直訳すると「彼は、窓を開けられたままにしておいた。」となりますが、日本語として不自然なため「彼は、窓を開けたままにしておいた。」と訳します。

使役動詞の have や keep[leave] の後ろに過去分詞がくる場合は、過去分詞を「～されている」と訳さなくなることがよくあるので注意しましょう。

8 分詞の慣用表現 (go ~ ing[現在分詞])

go ~ ing で、「～しに行く」という意味になります。

以下の文では、go shopping の部分が go ~ ing にあたり、「買い物に行く」という意味になります。

I go shopping. 「私は、買い物に行きます。」

go の部分は、以下のように主語が三人称単数なら goes になります。

She goes shopping. 「彼女は、買い物に行きます。」

過去形なら、以下のように go は went になります。

She went shopping yesterday. 「彼女は、昨日買い物に行きました。」

未来形なら、以下のように will go となります。

She will go shopping tomorrow. 「彼女は、明日買い物に行くでしょう。」

～ ing の部分には、スポーツや娯楽活動を表す動詞がきます。

よく用いられるものを以下にあげます。

go hunting 「狩りに行く」

go walking 「散歩に行く」

go dancing 「踊りに行く」

go swimming 「泳ぎに行く」

go hiking 「ハイキングに行く」

go camping 「キャンプに行く」

go skiing 「スキーに行く」

go skating 「スケートに行く」

go snowboarding 「スノーボードに行く」

ski, skate, snowboard は、それぞれ「スキーをする」、「スケートをする」、「スノーボードをする」という動詞です。

もちろん「スキー」、「スケート」、「スノーボード」という名詞としての意味もありますが、ここでは動詞として用いられています。

9 分詞の慣用表現 (with + 名詞 + 分詞)

基本的に with + 名詞 + 現在分詞の場合には「～しながら」、with + 名詞 + 過去分詞の場合には「～させながら」という意味になります。

まず、以下の例文をみてみましょう。

He was standing with his eyes shining.

「彼は、目を輝かせて立っていました。」

この文の with his eyes shining の部分は、直訳すると「目を輝かせながら」となりますが、「目を輝かせて」とした方が日本語として自然です。

また、with の後ろの his eyes は「(嬉しくて自然に) 輝いている」ので、his eyes と shine は能動の関係と考えられ shine は現在分詞 shining になります。

目は何かによって輝かされるものではなく、喜んだりすると自然に輝きますよね。少女漫画のような感じだと思ってください。

次に、以下の例文をみてみましょう。

He was standing with his eyes closed. 「彼は、目を閉じて立っていました。」

この文の with his eyes closed の部分は、直訳すると「目を閉じさせながら」となりますが、「目を閉じて」とした方が日本語的に自然です。

また、with の後ろの his eyes は「(人の意思によって) 閉じられている」ので、his eyes と close は受動の関係と考えられ close は過去分詞 closed になります。

人間の目は、まばたき以外は人の意志によって閉じられます。

このように、with の後ろの名詞と分詞の元になる動詞の関係が、能動なら現在分詞を、受身(受動)なら過去分詞を用います。

また、現在分詞を「～している」、過去分詞を「～された」と訳さないことが多いので注意しましょう。

10 分詞の慣用表現 (the + 分詞)

the + 分詞で「～の人々」という意味になります。

まず、以下の例文をみてみましょう。

There were the singing. 「歌っている人々がいました。」

この文の the singing の部分は、「歌っている人々」という意味を持ち、singing people と同じ意味になります。

上の例文は、以下の文と同じ意味になります。

There were singing people.

また、この場合 sing 「歌う」と people 「人々」の関係は「人々＝歌っている」と能動の関係のため sing は現在分詞 singing になります。

次に、以下の例文をみてみましょう。

There were the attacked. 「襲われた人々がいました。」

この文の the attacked の部分は、「襲われた人々」という意味を持ち、attacked people と同じ意味になります。

上の例文は、以下の文と同じ意味になります。

There were attacked people.

また、この場合 attack 「襲う」と people 「人々」の関係は「人々＝襲われる」と受身（受動）の関係のため attack は過去分詞 attacked になります。

分詞を用いた表現ではありませんが、これと似た表現で the + 形容詞でも「～の人々」という意味を持ちます。

例えば、以下のようなものです。

the rich = rich people 「お金持ちの人々」

the old = old people 「年老いた人々（老人）」

分詞は形容詞と同じような役割をするので、the + 形容詞と the + 分詞は「～人々」という同じような意味を持ちます。

11 分詞の慣用表現 (形容詞を修飾する分詞)

形容詞を修飾する品詞は副詞です。

まず、以下の例文をみてみましょう。

It's very hot. 「とても暑い。」

It's very cold. 「とても寒い。」

これらの文の very は副詞ですが、文中の形容詞 hot や cold を修飾しています。

現在分詞や過去分詞は、この副詞 very のように形容詞を修飾します。

次に、以下の例文をみてみましょう。

It's burning hot. 「焼けつくように暑い。」

It's freezing cold. 「凍りつくように寒い。」

これらの文の現在分詞 burning 「燃えている」と freezing 「凍っている」は、それぞれ形容詞の hot と cold を強め修飾しています。

ただ、「燃えている暑い」や「凍っている寒い」では日本語的に不自然です。

よって、この場合 burning は「焼けつくように」、freezing は「凍りつくように」というような意味になります。

これは、単語と意味を暗記しておく必要があります。形容詞を修飾する分詞については、それほど多くないのでしっかり覚えておきましょう。

補足で、副詞は形容詞の他に動詞や副詞自身も修飾することについて解説しておきます。

He runs fast. 「彼は、速く走る。」という文の fast 「速く」は、速く→走るというように動詞 runs を修飾しています。

He runs very fast. 「彼は、とても速く走る。」という文の very 「とても」は、とても→速くというように副詞 fast を修飾しています。

このように、副詞は動詞、形容詞、副詞を修飾します。

第 7 部

分詞構文

1 分詞構文（分詞構文の作り方）

分詞構文とは、接続詞を用いた文の接続詞を消して、その代わりに分詞（主に現在分詞）を用いた文です。

例えば、接続詞を用いた文とは以下のような文です。

As he is sick, he is in bed.「彼は病気なので、今ベッドにいます。」

この文は、接続詞 As「～ので」により 2 つの文 he is sick と he is in bed が繋がられています。

この文の接続詞 As を消して、動詞の is を現在分詞の being に変えると以下のように分詞構文になります。意味は、上の文と全く同じです。

Being sick, he is in bed.

この時、he is sick の he は、he is in bed の文でも用いられており 2 回繰り返す必要はないので消去します。

接続詞を用いた、As he is sick, he is in bed. から、分詞構文 Being sick, he is in bed. への書き換え手順は以下の通りです。

1. 接続詞を消す。
2. 主語が同じ場合は消す。
3. 動詞を現在分詞（～ ing）にする。

2 と 3 については、必ず接続詞にくっついている方の文に対して行います。

これは、分詞構文の中で一番基本的な形です。

分詞構文には、この基本形の他に主語が異なる分詞構文、否定の分詞構文、時制の異なる分詞構文、受動態の分詞構文という形があります。

2 分詞構文（独立分詞構文）

独立分詞構文（2 つの文の主語が異なる分詞構文）について解説します。

分詞構文とは、接続詞を用いた文の接続詞を消して、その代わりに分詞（主に現在分詞）を用いた文です。

例えば、接続詞を用いた文とは以下のような文です。

As he knew the truth, he told it to me.
「彼は真実を知っていたので、私にそれを教えてくれた。」

この文は、接続詞 As「～ので」により 2 つの文 he knew the truth と he told it to me が繋がられています。

この文は、以下の手順で分詞構文に書き換えることができます。

1. 接続詞を消す。
2. 主語が同じ場合は消す。
3. 動詞を現在分詞（～ ing）にする。

この書き換えは、必ず接続詞にくっついている方の文に対して行います。

そして、上の文を分詞構文に書き換えると以下ようになります。意味は、上の文と全く同じです。

Knowing the truth, he told it to me.

3 分詞構文（否定の分詞構文）

分詞構文とは、接続詞を用いた文の接続詞を消して、その代わりに分詞（主に現在分詞）を用いた文です。

例えば、接続詞を用いた文とは以下のような文です。

As he was sick, he was in bed.
「彼は病気だったので、ベッドに（ベッドで寝て）いました。」

この文は、接続詞 As 「～ので」により 2 つの文 he was sick と he was in bed が繋がられています。

この文は、以下の手順で分詞構文に書き換えることができます。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が同じ場合は消す。
- 3. 動詞を現在分詞（～ ing）にする。

この書き換えは、必ず接続詞にくっついている方の文に対して行います。

そして、さきほどの接続詞を用いた文を分詞構文に書き換えると以下ようになります。意味は、上の文と全く同じです。

Being sick, he was in bed.

これは、分詞構文の中で一番基本的な形で、ここでは否定の分詞構文について解説していきます。

まず、以下の接続詞を用いた文をみてみましょう。

As he was not busy, he went out with his friend.
「彼は忙しくなかったので、友達と出かけました。」

この文では、接続詞 As にくっついた文が否定文になっています。

これは、分詞構文の中で一番基本的な形で、ここでは 2 つの文の主語が異なる分詞構文（独立分詞構文）について解説していきます。

まず、以下の接続詞を用いた文をみてみましょう。

When I saw him, he was sleeping in his room.
「私が彼を見た時、彼は部屋で寝ていました。」

この文では、接続詞 When にくっついた文の主語が I、後ろの文の主語が he と 2 つの文の主語が異なります。

この場合、分詞構文に書き換える手順は以下のようになります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 接続詞にくっついた文の主語が、もう 1 つの文の主語と異なる場合はそのまま残す。
- 3. 動詞を現在分詞（～ ing）にする。

実際に、上の例文を分詞構文に書き換えてみると、When を消し、I はそのまま残し、saw は seeing となります。

よって、分詞構文は以下のような文になります。

I seeing him, he was sleeping in the room.

I はそのまま同じ場所に残すので、この場合文の先頭にきます。

また、接続詞にくっついた文のみを書き換えるので後ろの文はそのままです。

2 つの文の主語が異なる分詞構文は、独立分詞構文と呼ばれます。

この場合、分詞構文に書き換える手順は以下のようになります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が同じ場合は消す。
- 3. 否定語 not や never は～ ing の前に残す。
- 4. 動詞を現在分詞（～ ing）にする。

実際に、上の例文を分詞構文に書き換えてみると、As と he を消し、was は being となり being の前に否定語 not を置くので以下のような文になります。

Not being busy, he went out with his friend.

否定語 not のみが、～ ing の前に置かれることに注意しましょう。

また、接続詞にくっついた文のみを書き換えるので後ろの文はそのままです。

4 分詞構文（2 つの文の時制が異なる分詞構文）

まず、以下の接続詞を用いた文をみてみましょう。

As I finished the work, I am satisfied now.
「私はその仕事を終えたので、今満足しています。」

この文では、接続詞 As にくっついた文の時制が過去（finished）、後ろの文の時制が現在（am）と 2 つの文の時制が異なります。

時制が異なるとは、厳密には接続詞にくっついている文の時制がもう 1 つの文の時制より 1 つ古い場合です。

この場合、分詞構文に書き換える手順は以下のようになります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が同じ場合は消す。
- 3. 動詞を Having + 過去分詞の形にする。

ここで、なぜ Having + 過去分詞という形を用いるかについて解説します。

As I finished the work, I am satisfied now.

この文で、finished という動詞を finishing にしてしまうと、I am という文の時制と同じ現在ということになり finished と時制が過去ということを表せません。

また、過去だということを表したいからといって、過去形の finished に ing を付けることもできません。

そこで、I am ～ という文の時制（現在）より 1 つ古い時制（過去）を表す印として「having + 過去分詞」という形を用います。

実際に、上の例文を分詞構文に書き換えてみると、As と I を消し、finished の部分は Having finished となります。
よって、分詞構文は以下のような文になります。

Having finished the work, I am satisfied now.

接続詞にくっついた文のみを書き換えるので後ろの文はそのままです。

時制が 1 つ古いという組み合わせには、「過去と現在」以外に「現在完了と現在」、「過去完了と過去」があります。

例えば、以下の文は、接続詞にくっついた文に現在完了形 (have lived)、もう 1 つの文に現在形 (can) が用いられています。

As I have lived in America for ten years, I can speak English.
「10 年間アメリカに住んでいるので、私は英語を話せます。」

現在完了形は、過去と今が繋がっている (過去を含んだ今) ので現在形より 1 つ古い時制と考えます。
よって、この文を分詞構文に書き換えると以下ようになります。

Having lived in America for ten years, I can speak English.

右側の文の時制 (現在) より 1 つ古い現在完了形だということを表すために、分詞は Having lived という形になります。

最後に、以下のような過去完了形と過去形が用いられた文をみてみましょう。

Though I had met her, I didn't notice her at the party.
「私は彼女に会ったことがあったけれど、パーティーで彼女に気づけなかった。」

過去完了形は、過去より前の時と過去が繋がっているの (過去よりさらに前の過去を含んだ過去) で過去形より 1 つ古い時制と考えます。
よって、上の文を分詞構文に書き換えると以下ようになります。

Having met her, I didn't notice her at the party.

右側の文の時制 (過去) より 1 つ古い過去完了形だということを表すために、分詞は Having met という形になります。

5 分詞構文 (受動態の分詞構文)

以下の接続詞を用いた文をみてみましょう。

As I was hit by him, I was very angry.
「私は彼に殴られたので、私はとても怒りました。」

この文では、接続詞 As にくっついた文の部分が受動態 (was hit 「殴られた」) になっています。

この場合、分詞構文に書き換える手順は以下のようになります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が同じ場合は消す。
- 3. 動詞を (being) + 過去分詞の形にする。

受動態の形は「be 動詞 + 過去分詞」で be 動詞の ing 形は being なので分詞構文の場合 being + 過去分詞という形を用います。

よって、上の例文を分詞構文に書き換以下のような文になります。

Being hit by him, I was very angry.

接続詞にくっついた文のみを書き換えるので後ろの文はそのままです。

そして、受動態の分詞構文では以下のように「being + 過去分詞」の being を省略することもできます。

Hit by him, I was very angry.

よって、受動態の分詞構文は過去分詞で始まることがあります。

6 分詞構文（分詞構文への書き換え [応用]）

これまでに、分詞構文の基礎、主語が異なる分詞構文、否定の分詞構文、時制の異なる分詞構文、受動態の分詞構文について解説してきました。

それぞれ別々に、接続詞を用いた文から分詞構文へ書き換える手順を解説してきましたが、**全てに対応した書き換え手順があります。**

ここでは、どの形にも使える分詞構文への書き換え手順について解説します。

分詞構文に書き換える手順は以下のようになります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が異なる場合はそのまま残す。主語が同じ場合は消す。
- 3. 否定語 not、never は ing の前に残す。なければ 3 は飛ばします。
- 4. 接続詞を用いた文の時制が 1 つ古い時は having + 過去分詞の形にする。
※時制が同じ場合は動詞を通常の ing 形（現在分詞）にする。
- 5. 接続詞を用いた文が受動態の時は、(being) + 過去分詞の形にする。
※ 4 と 5 両方に当てはまる時は、(having been) + 過去分詞の形にする。

また、受動態が絡んでいる場合（4 と 5）、being や having been は省略できます。

上の手順を用いて、以下の例文を分詞構文に書き換えてみましょう。

As the letter wasn't sent to her, she doesn't know the fact.
「その手紙が彼女に送られてこなかったので、彼女はその事実を知りません。」

1. 接続詞 As を消します。

the letter wasn't sent to her, she doesn't know the fact.

2. 主語が異なるので、the letter をそのまま残します。

The letter wasn't sent to her, she doesn't know the fact.

3. 否定語 not があるので、そのまま（ing の前に）残します。

The letter not sent to her, she doesn't know the fact.

4+5. 接続詞を用いた文の時制が 1 つ古く、さらに受動態になっているので、having been + 過去分詞の形を用います。

よって、分詞構文は以下のようになります。

The letter not having been sent to her, she doesn't know the fact.

接続詞にくっついた文のみを書き換えるので、後ろの文はそのままです。

さらに、受動態の分詞構文では以下のように「having been + 過去分詞」の having been を省略することもできます。

The letter not sent to her, she doesn't know the fact.

よって、受動態の絡んだ分詞構文の時は上の文のように現在分詞でなく過去分詞で始まることになります。

7 分詞構文の訳し方（分詞構文の訳し方 [基礎]）

例えば、以下のような分詞構文があったとします。

Being sick, he is sleeping in bed.「彼は病気なので、ベッドで寝ています。」

右側の文は文全体が書かれているので日本語に訳しやすいと思いますが、左側の文は省略されている部分があり意味が分かりにくいと思います。

上の分詞構文のもとの文は、以下の通りです。

As he is sick, he is sleeping in bed.

この文なら欠けている部分がないので、日本語に訳しやすいと思います。

よって、分詞構文を日本語に訳すには、以下の分詞構文への書き換え手順を使ってもとの文に戻す必要があります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が異なる場合はそのまま残す。主語が同じ場合は消す。
- 3. 否定語 not、never は ing の前に残す。なければ 3 は飛ばします。
- 4. 接続詞を用いた文の時制が 1 つ古い時は having + 過去分詞の形にする。
※時制が同じ場合は動詞を通常の ing 形（現在分詞）にする。
- 5. 接続詞を用いた文が受動態の時は、(being) + 過去分詞の形にする。
※ 4 と 5 両方に当てはまる時は、(having been) + 過去分詞の形にする。

また、受動態が絡んでいる場合、being や having been は省略できます。

これは通常の文から分詞構文への書き換えの手順ですが、分詞構文を訳す時には、2 から 5 を先に考え、最後に接続詞を考えます。

以下の文を手順を用いてもとの文に戻してみましょう。

Being sick, he is sleeping in bed.「彼は病気なので、ベッドで寝ています。」

2. 主語が消されているので主語は He

He being sick

3. 否定語はないのでこの手順は無視します。

4. being と ing 形を用いているので時制は右の文と同じ。

He is sick

5. 受動態（being + p.p.）ではないのでこの手順は無視します。

1. できあがった He is sick と He is sleeping in bed をつなぐのに適する接続詞は「～なので」の意味を持つ As（Because）。

よって、もとの文は以下ようになります。

As he is sick, he is sleeping in bed.

そして、意味は「彼は病気なので、ベッドで寝ています。」だと分かります。

8 分詞構文の訳し方（分詞構文の訳し方 [応用]）

分詞構文は接続詞など省略されている部分が幾つかあり、そのままでは日本語に訳しにくいと思います。

よって、分詞構文を日本語に訳すには、以下の分詞構文への書き換え手順を使ってもとの文に戻す必要があります。

- 1. 接続詞を消す。
- 2. 主語が異なる場合はそのまま残す。主語が同じ場合は消す。
- 3. 否定語 not、never は ing の前に残す。なければ 3 は飛ばします。
- 4. 接続詞を用いた文の時制が 1 つ古い時は having + 過去分詞の形にする。
※時制が同じ場合は動詞を通常の ing 形（現在分詞）にする。
- 5. 接続詞を用いた文が受動態の時は、(being) + 過去分詞の形にする。
※ 4 と 5 両方に当てはまる時は、(having been) + 過去分詞の形にする。

また、受動態が絡んでいる場合、being や having been は省略できます。

これは通常の文から分詞構文への書き換えの手順ですが、分詞構文を訳す時には、2 から 5 を先に考え、最後に接続詞を考えます。

ここでは、主語の異なる場合と否定の分詞構文の訳し方を解説します。

以下の分詞構文を日本語に訳してみましょう。

He not telling the truth, she was angry.

この文を以下の手順でもとの文に戻していきます。

- 2. 主語 He が ing の前に置かれているので、もとの文の主語も He。

He not telling the truth

- 3. 否定語 not が ing の前に置かれているので、もとの文は否定文。

He [doesn't または didn't] tell the truth

- 4. telling と ing 形を用いているので時制は右の文と同じ。

He didn't tell the truth

- 5. 受動態 (being + p.p.) ではないのでこの手順は無視します。

- 1. できあがった以下の 2 つの文をつなぐのに適する接続詞は、「～なので」の意味を持つ As（または Because）となります。

He didn't tell the truth 「彼は本当のことを言わなかった」

She was angry 「彼女は怒った」

よって、もとの文の形と意味は以下ようになります。

As he didn't tell the truth, she was angry.
「彼が本当のことを言わなかったので、彼女は怒りました。」

もう 1 つ、時制の異なる場合と受動態の分詞構文の訳し方を解説します。

以下の分詞構文を日本語に訳してみましょう。

Having been told a lie by her, he is angry now.

この文を以下の手順でもとの文に戻していきます。

- 2. ing の前の主語が消されているので、右の文の主語と同じ。

He having been told a lie by her

- 3. 否定語は置かれていないので、この手順は飛ばします。
- 4. Having + 過去分詞なので、時制は右の分より 1 つ古い過去となります。
- 5. been p.p. と受動態となっているので、もとの文は受動態となります。

Having been p.p. という形の場合 4 と 5 は同時に考え、この場合過去形の受動態であることが分かります。

He was told a lie by her

- 1. できあがった以下の 2 つの文をつなぐのに適する接続詞は、「～なので」の意味を持つ As（または Because）となります。

He was told a lie by her 「彼は彼女に嘘をつかれた」

he is angry now. 「彼は今怒っている」

よって、もとの文の形と意味は以下のようになります。

As he was told a lie by her, he is angry now.
「彼女に嘘をつかれたので、彼は今怒っています。」

9 分詞構文の慣用表現（分詞構文の慣用表現）

分詞構文の慣用表現には以下のようなものがあります。

generally speaking 「一般的に言えば」

frankly speaking 「率直に言えば」

strictly speaking 「厳密に言えば」

judging from ～ 「～から判断すれば」

considering ～ 「～のわりには」

concerning ～ 「～に関して」

talking of ～ 「～と言えば」

according to ～ 「～によれば」

supposing ～ 「～と仮定すれば」

これらは、熟語のように暗記してしまいましょう。

使い方は、文章の前において文に意味を付け加えます。

以下に幾つか例文をあげておきます。

Generally speaking, we hope peace.
「一般的に言うと、私達は平和を望んでいる。」

Judging from his face, he seems to be Korean.
「彼の顔から判断すると、彼は韓国人のようだ。」

Talking of fruits, I like apples.
「果物と言えば、私はりんごが好きです。」

第 8 部

文型

1

第 1 文型（文型とは？）

文型とは、英語の文章を文の形で分類したもので、英語の文型は 5 つあります。

ここではまず、5 つの文型について通して解説します。そして、次のページから 5 つの文型を 1 つずつ詳しく解説していきます。

5 つの文型は、第 1 文型、第 2 文型と普通に数字で分類されています。そして、文型を分類するために以下の記号が用いられるので覚えておきましょう。

S：Subject（主語）

V：Verb（動詞）

O：Object（目的語）

C：Complement（補語）

M：Modifier（修飾語）

1. 第 1 文型 [SV]

第 1 文型は、以下の例文のように主語と動詞からなる文のことです。

He runs.「彼は走る。」

しかし、主語と動詞のみからなる文というのはほとんどありません。ほとんどの文は、以下のように後ろに副詞などの修飾語を伴います。

He runs fast.「彼は、速く走る。」

修飾語 M は文型を判断する要素には含まれません。

2. 第 2 文型 [SVC]

第 2 文型は、以下の例文のように主語、動詞、補語からなる文のことです。

He is a doctor.「彼は、先生です。」

補語とは、主語を説明する言葉（名詞や形容詞）で、「主語＝補語（この場合 He=doctor）」の関係が成り立ちます。

3. 第 3 文型 [SVO]

第 3 文型は、以下の例文のように主語、動詞、目的語からなる文のことです。

He plays soccer.「彼は、サッカーをします。」

目的語とは、動詞に対して「何を」するのかや「誰に」するのかを表す言葉（名詞）で、動詞の後ろに置かれます（この場合 soccer）。

4. 第 4 文型 [SVOO]

第 4 文型は、以下の例文のように主語と動詞、そして動詞の後ろに目的語を 2 つとる文のことです。

He gave me a present.「彼は、私にプレゼントをくれた。」

第 4 文型の場合、第 3 文型と違い動詞の後ろに「何を」するのかと「誰に」するのかという目的語を 2 つとります。

5. 第 5 文型 [SVOC]

第 5 文型は、以下の例文のように主語と動詞、そして動詞の後ろに目的語と補語を 1 つずつとる文のことです。

He calls me Tom.「彼は、私のことをトムと呼びます。」

第 5 文型は、まず動詞の後ろの「何を」に当たる目的語を 1 つとり、その目的語の後ろに目的語を説明する補語を 1 つとります。

「目的語＝補語（この場合 me=Tom）」の関係が成り立ちます。

2 第 1 文型（第 1 文型 [SV]）

まず、第 1 文型に関係のある記号を確認しておきましょう。

S : Subject（主語）

V : Verb（動詞）

M : Modifier（修飾語）

第 1 文型は、以下のように文を構成している主要素が主語と動詞のみからなる文（記号を用いると SV）のことです。

He gets up.「彼は、起きる。」

しかし、主語と動詞のみからなる第 1 文型の文というのはほとんどありません。

ほとんどの文は、以下のように後ろに副詞（early）などの修飾語を伴います。

He gets up early.「彼は、早く起きる。」

この文では、early は「早く→起きる」というように動詞 gets up を修飾しています。

形容詞は「名詞」、副詞は「動詞、形容詞、副詞」を修飾するので、修飾語と呼ばれ記号は M で表します。

修飾語は、文型を判断する要素には含まれません。

今度は以下の例文をみてみましょう。

A tall boy is in the park.「背の高い少年が、公園の中にいます。」

この文も第 1 文型です。

この文では、A tall boy「背の高い少年」は主語、is は動詞、in the park は「公園の中に→いる」と動詞を修飾している修飾語です。

A tall boy の形容詞 tall は、名詞 boy を修飾している修飾語でもあります。

しかし、「(a) + 形容詞 + 名詞（この場合 a tall boy）」という部分はセットにしも分けても文型は変わらないので通常セットにします。

ここで 1 つポイントがあります。

上の文のように、文の後ろの方に動作を行う場所や時刻を表している「前置詞 + 名詞」がある場合、修飾語（M）とみなすことができます。

よって、以下のように長い文でも第 1 文型になります。

A tall boy was in the park at 3 p.m. yesterday.
「背の高い少年が、昨日午後 3 時に公園にいた。」

この文では、A tall boy「背の高い少年」は主語、was は動詞です。

そして、in the park、at 3 p.m.、yesterday は「公園の中に→いた」、「午後 3 時に→いた」、「昨日→いた」と全て動詞の was を修飾している修飾語です。

文の後ろの方にある「前置詞 + 名詞」が動作を行う場所や時刻を表している場合は修飾語なので、文型を判断する要素から省くことができます。

3 第2文型（第2文型 [SVC]）

まず、第2文型に関係のある記号を確認しておきましょう。

S : Subject（主語）

V : Verb（動詞）

C : Complement（補語）

M : Modifier（修飾語）

第2文型は、以下のように主語、動詞、補語からなる文（記号で SVC）です。

He is a teacher. 「彼は、先生です。」

この文で、He は主語、is は動詞、a teacher は補語です。

主語は動作をする人や物を、動詞は主語が行う動作を表します。そして、第2文型の補語は主語を説明している名詞や形容詞です。

第2文型の補語は、主語を説明する補語なので主格補語と呼ばれます。

上の例文の a teacher は、主語の He 「彼」が誰であるかやどういう人であることを説明しています。

つまり、He=a teacher の関係が成り立っています。

上の例文の補語は名詞ですが、以下のように形容詞も補語になります。

He is tall. 「彼は、背が高い。」

この文で、主語は He、動詞は is、補語は tall です。

形容詞 tall 「背が高い」は、主語 He がどういう人であることを説明しています。また、He=tall の関係が成り立っています。

このように、第2文型は SVC という形で、必ず S（主語）=C（補語）の関係が成り立っています。そして、第2文型を作る代表的な動詞は、例文にも用いられていた be 動詞（is, am, are など）です。

第2文型は S=C を満たさなければならず、制限が厳しいので第2文型を作れる動詞はそれほどありません。

4 第2文型（第2文型を作る動詞）

第2文型とは、主語、動詞、補語からなる文（記号を用いると SVC）のことで、補語は主語を説明しています。

つまり、「主語 = 補語（S=C）」の関係が成り立っています。

第2文型は S=C という制限があるので、第2文型を作る動詞は多くありません。

まず、第2文型を作る代表的な動詞は be 動詞です。

そして、ここでは be 動詞以外の第2文型を作る動詞について、例文を用いながら解説していきます。

1. become 「～になる」

She became a singer. 「彼女は、歌手になった。」

主語：She、動詞：became、補語：a singer

She=a singer 「彼女 = 歌手」の関係が成り立っています。

2. look 「～のように見える」

She looks sad. 「彼女は、悲しそうに見える。」

主語：She、動詞：looks、補語：sad

She=sad 「彼女 = 悲しい」の関係が成り立っています。

look だけだと「～を見る」という意味ではなく、「～のように見える」という意味になります。ちなみに、「～を見る」は look at ～ です。

3. feel「～に[と]感じる」

She felt happy.「彼女は、幸せに感じた。」

主語：She、動詞：felt、補語：happy

She=happy「彼女＝幸せ」の関係が成り立っています。

4. sound「～（のよう）に聞こえる」

The song sounds good.「その歌は、よさそうに聞こえる。」

主語：The song、動詞：sounds、補語：good

The song=good「その歌＝よい」の関係が成り立っています。

5. taste「～の味がする」

This curry tastes good.「このカレーは、美味しい。」

主語：This curry、動詞：tastes、補語：good

This curry=good「このカレー＝美味しい」の関係が成り立っています。

また、この文は直訳すると「このカレーは、美味しい味がする」となりますが、日本語的に不自然なので「このカレーは、美味しい。」と言い換えます。

6. get + 形容詞「～になる」

She got happy.「彼女は、幸せになった。」

主語：She、動詞：got、補語：happy

She=happy「彼女＝幸せ」の関係が成り立っています。

また、通常名詞も補語になりますが、get の後ろに補語がくる場合には形容詞になることがほとんどです。

5 第3文型（第3文型 [SVO]）

まず、第3文型に関係のある記号を確認しておきましょう。

S：Subject（主語）

V：Verb（動詞）

O：Object（目的語）

M：Modifier（修飾語）

第3文型とは、以下のように主語、動詞、目的語からなる文（記号を用いるとSVO）のことです。

He plays tennis.「彼は、テニスをします。」

この文で、Heは主語、playsは動詞、tennisは目的語です。

主語は動作をする人や物を、動詞は主語が行う動作を表します。

そして、目的語は動詞の後ろに置かれ、動作（動詞）の目的を表します。日本語で「何（誰）を」や「誰に」にあたるものです。

上の例文でも、目的語のtennisは動詞のplay「～する」に対して「何を」するのかと動作の目的を表しています。

目的語を後ろにとる動詞は、have「～を持っている」、eat「～を食べる」、buy「～を買う」など数え切れないほどあります。

第2文型のように動詞が少なければ、動詞でおおよその判断はできます。

しかし、第3文型を作る動詞は数え切れないほどあるので、動詞を覚えておき第3文型だと判断することは不可能です。

よって、動詞の後ろに「何（誰）を」や「誰に」に当たる目的語が1つあれば第3文型だと考えるのが第3文型だと判断する簡単な方法です。

最後に 1 つ注意です。目的語になれる品詞は名詞だけです。

I have a car.「私は、車を持っています。」

I ate apples.「私は、りんごを食べました。」

I bought a house.「私は、家を買いました。」

これらの文の目的語 a car、apples、a house は全て名詞です。

他の品詞（動詞、形容詞、副詞など）は目的語として用いることができないので注意しましょう。

また、第 3 文型は上で解説した例文のように SVO だけで文が構成されているものだけではなく、文末に修飾語を伴うこともあります。

以下は、第 3 文型に修飾語 yesterday「昨日」が付いた文です。

He played tennis yesterday.「彼は、昨日テニスをしました。」

修飾語とは文中の形容詞や副詞で、文型を判別する要素には含まれません。

この文の yesterday は、「昨日→した」と動詞 played を修飾している副詞です。

また、文中の「前置詞＋名詞」が場所や時を表している場合にも修飾語と考えることができます。

以下は、第 3 文型に「前置詞＋名詞」が付いた文です。

He played tennis in the park.「彼は、公園でテニスをしました。」

He played tennis in the morning.「彼は、午前中テニスをしました。」

これらの文中の in the park は「公園で→した」、in the morning は「午前中→した」と動詞 played を修飾しおり、副詞的な役割をしている修飾語となります。

毎回ここまで考える必要はなく、文中に「前置詞＋名詞」があり、それが場所や時を表している場合には修飾語とみなして問題ありません。

6 第 3 文型（目的語と副詞の違い）

まず、以下の例文をみてみましょう。

I know the boy.「私は、その少年を知っている。」

この文で、I は主語、know は動詞、the boy は目的語です。

目的語は動詞の後ろに置かれ、動作（動詞）の目的を表すもので、日本語に訳した時に「何を」や「誰に」にあたるものです。

上の例文では、the boy が動詞の know「知っている」に対して「誰を」知っているのかと動詞の目的を表しているのので the boy は know の目的語となります。

次に、以下の例文をみてみましょう。

I go there.「私は、そこへ行きます。」

この文で、I は主語、go は動詞です。

そして、there「そこへ」は go の目的語ではなく「どこへ」→「行く」というように行く場所を説明しており、動詞 go を修飾している副詞となります。

like「好む」という動詞には「何（誰）を」好きなのか、

play「する」という動詞には「何を」するのか、

have「持っている」という動詞には「何を」持っているのか、

という目的語が必要ですが、go「行く」という動詞は、「何を」や「誰に」を表す目的語が後ろに置かれる必要はありません。

there の部分を to London と句に置き換えても同じです。句とは 2 語以上の単語がセットで 1 つの意味を持っているものです。

I go to London. 「私は、ロンドンへ行きます。」

この文の to London の部分も「どこへ」) → 「行く」 かと行く場所を説明しており、動詞 go を修飾しています。

to London の部分は、副詞の役割をしている句なので副詞句と呼ばれます。

go は後ろに直接目的語をとらない動詞で自動詞と呼ばれ、目的語（名詞）を後ろに置く場合は、前置詞を伴います。

上の例文の London は、go の目的語ではありませんが前置詞 to の目的語です。

逆に、後ろに目的語をとる動詞（know や like など）は他動詞と呼ばれます。

7 第 3 文型（不定詞、動名詞、名詞節は目的語になる）

第 3 文型は、以下のように主語、動詞、目的語からなる文（記号を用いると SVO）のことです。

He likes dogs. 「彼は、犬が好きです（犬を好む）。」

この文で、He は主語、likes は動詞、dogs は目的語です。

主語は動作をする人や物を、動詞は主語が行う動作を表します。

そして、目的語は動詞の後ろに置かれ、動作（動詞）の目的を表します。日本語で「何（誰）を」や「誰に」にあたるものです。

上の例文でも、目的語の dogs は動詞の like 「好む」に対して「何を」好むのかと動詞の目的を表しています。

そして、以下の第 3 文型の例文の目的語（a car、apples、a house）をみても分かるように、目的語として用いることができる品詞は名詞だけです。

I have a car. 「私は、車を持っています。」

I ate apples. 「私は、りんごを食べました。」

I bought a house. 「私は、家を買いました。」

他の品詞（動詞、形容詞、副詞など）は目的語として用いることができないので注意しましょう。

目的語になれるものは基本的に名詞ですが、動詞が名詞の役割をする不定詞（名詞的用法）や動名詞も目的語になることができます。

以下の例文をみてみましょう。

He likes to cook. 「彼は、料理をすることが好きです。」

この文で、He は主語、likes は動詞です。

そして、不定詞の to cook 「料理すること」は「何を」好むのかと動詞 like の目的を表しており、like の目的語と言えます。

このように、動詞が名詞の役割を果たせる形である不定詞の名詞的用法も動詞の目的語になることができます。

不定詞の名詞的用法には、「to + 動詞の原形」で「～すること」という意味を持つものの他に、「疑問詞 + 不定詞」という形もあります。

以下の例文もみてみましょう。

He knows what to do.「彼は、何をすべきかを知っています。」

この文で、He は主語、knows は動詞です。

そして、「疑問詞 + 不定詞」の what to do「何をすべきか」は「何を」知っているのかと動詞 know の目的を表しており、know の目的語と言えます。

このように、不定詞「to + 動詞の原形」の名詞的用法や「疑問詞 + 不定詞」も動詞の目的語になることができます。

次に、以下の例文をみてみましょう。

He enjoyed cooking.「彼は、料理をするを楽しんだ。」

この文で、He は主語、enjoyed は動詞です。

そして、動名詞の cooking「料理すること」は何を」好むのかと動詞 enjoyed の目的を表しており、enjoyed の目的語と言えます。

このように、動名詞も動詞の目的語になることができます。

もう 1 つ、名詞節（文）も目的語になることができます。

節とは、主語と動詞の組からなる 1 つの文章です。

以下の例文をみてみましょう。

I know that he is rich.「私は彼がお金持ちだということを知っている。」

この文には、まず I know「私は、知っている」という部分に 1 つ主語（I）と動詞（know）からなる節があります。

そして、that の後ろに he is rich「彼はお金持ちである」という部分にもう 1 つ主語（he）と動詞（is）からなる節があります。

このように、節という言葉は 1 つの文中に 2 つ以上の主語と動詞の組がある時に用います。

よって、以下の文も主語（I）と動詞（live）の組からなる 1 つの文章ですが、主語と動詞の組が 1 つしかないのでこのような場合節という言葉は使いません。

I live in Japan.「私は、日本に住んでいる。」

そして、最初の例文 I know that he is rich. の that he is rich「彼はお金持ちである」という節について詳しくみてみましょう。

この節（that 以下）は、know「知っている」という動詞に対し「何を」知っているのかを表しており、know の目的語になっていると考えられます。

目的語になることができるのは名詞だけなので、目的語になれる節は名詞節ということになります。

よって、that he is rich という節は名詞節で、このように文章が動詞の目的語になることもあります。

この文中の that は接続詞で、「～ということ」という意味を持っています。そして、接続詞 that が作る節は that 節と呼ばれます。

8 第 4 文型（第 4 文型 [SVOO]）

まず、第 4 文型に関係のある記号を確認しておきましょう。

S：Subject（主語）

V：Verb（動詞）

O：Object（目的語）

M：Modifier（修飾語）

第 4 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語が 2 つ置かれる文（記号を用いると SVOO）のことです。

I gave her a present.「私は、彼女にプレゼントをあげました。」

主語は動作を行う人や物、動詞は主語が行う動作を説明するものです。

よって、この文の I は主語、gave は動詞です。

目的語とは動詞の後ろに置かれ、動作（動詞）の目的を表します。日本語だと「何（誰）を」や「誰に」にあたるものです。

この文で、her「彼女に」は動詞 gave に対して「誰に」あげたのかを表している目的語になっています。

また、a present「プレゼントを」は動詞 gave に対して「何を」あげたのかを表している目的語になっています。

上の文では her と a present という 2 つの目的語が存在することになります。

そして、このように動詞の後ろに「誰に」と「何を」という 2 つの目的語が置かれている文は第 4 文型となります。

第 4 文型の 2 つの目的語は、間接目的語と直接目的語に分けられます。

第 4 文型の目的語のうち動詞のすぐ後ろで「誰に」を表す目的語は間接目的語と呼ばれ、記号で O1 と表します。

これに対し、間接目的語の後ろに置かれ「何を」にあたる目的語は直接目的語と呼ばれ記号で O2 と表します。

よって、第 4 文型の目的語を間接目的語と直接目的語を区別して記号で表すと SVO1O2 となります。

第 4 文型は、動詞の後ろに目的語が 2 つ置かれていなければならない、制限があるので第 4 文型を作る動詞はたくさんありません。

9 第 4 文型（第 4 文型を作る動詞）

第 4 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語が 2 つ置かれる文（記号を用いると SVOO）のことです。

I gave her a present.「私は、彼女にプレゼントをあげました。」

この文で、He は主語、gave は動詞、her と a present は目的語です。

第 4 文型の目的語は、「誰に」動作をしたのかを表す間接目的語と「何を」したのかを表す直接目的語に分けられます。

上の文で、間接目的語は her、直接目的語は a present です。

記号で、間接目的語は O1、直接目的語は O2 と表されるので、第 4 文型は記号を用いると SVO1O2 と表されることもあります。

第 4 文型は、動詞の後ろに目的語が 2 つ置かれていなければならない、制限があるので第 4 文型を作る動詞はたくさんありません。

ここでは、第 4 文型を作る動詞でよく用いられるものを解説していきます。

1. tell O1 O2「O1 に O2 を言う（伝える）」

I told him the truth.「私は、彼に真実を伝えた。」

主語は I、動詞は told、間接目的語は him、直接目的語は the truth です。

2. show O1 O2「O1 に O2 を見せる（教える）」

I will show you the picture.「私は、あなたにその写真を見せるつもりです。」

主語は I、動詞は will show、間接目的語は you、直接目的語は the picture です。

3. lend O1 O2「O1 に O2 を貸す」

He lent me his car.「彼は、私に（彼の）車を貸してくれた。」

主語は He、動詞は lent、間接目的語は me、直接目的語は his car です。

lent は lend「貸す」の過去形です。車を貸す商売のレンタカーって lent a car（レント ア カー）「車を貸す」からきているのではないのでしょうか？

4. send O1 O2「O1 に O2 を送る」

I sent her an e-mail.「私は、彼女にメールを送りました。」

主語は I、動詞は sent、間接目的語は her、直接目的語は e-mail です。

5. teach O1 O2「O1 に O2 を教える」

I teach them English.「私は、彼らに英語を教えています。」

主語は I、動詞は teach、間接目的語は them、直接目的語は English です。

6. buy O1 O2「O1（のため）に O2 を買う」

He bought her a present.「彼は、彼女にプレゼントを買いました。」

主語は He、動詞は bought、間接目的語は her、直接目的語は a present です。

7. get O1 O2「O1（のため）に O2 を手に入れる」

I will get you a ticket.「私は、あなたのためにチケットを手に入れます。」

主語は I、動詞は will get、間接目的語は you、直接目的語は a ticket です。

8. make O1 O2「O1（のため）に O2 を作る」

They made us desks.「彼らは、私達のために机を作ってくれました。」

主語は They、動詞は made、間接目的語は us、直接目的語は desks です。

9. cook O1 O2「O1（のため）に O2 を料理する（作る）」

She cooked me dinner.「彼女は、私のために夕食を作ってくれました。」

主語は She、動詞は cooked、間接目的語は me、直接目的語は dinner です。

10. find O1 O2「O1（のため）に O2 を見つける」

He found me a new house.「彼は、私のために新しい家を見つけてくれた。」

主語は He、動詞は found、間接目的語は me、直接目的語は a new house です。

10 第 4 文型（第 4 文型と第 3 文型への書き換え）

第 4 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語が 2 つ置かれる文（記号を用いると SVOO）のことです。

I gave him a car.「私は、彼に車をあげました。」

この文で、I は主語、gave は動詞、him と a car は目的語です。

第 4 文型の目的語は、「誰に」動作をしたのかを表す間接目的語と「何を」したのかを表す直接目的語に分けられます。

上の文で、間接目的語は him、直接目的語は a car です。

記号で、間接目的語は O1、直接目的語は O2 と表されるので、第 4 文型は記号を用いると SVO1O2 と表されることもあります。

そして、第 4 文型は第 3 文型の文に書き換えることができます。

上の例文は、以下のように間接目的語と直接目的語の順番を入れ替えることができます。

I gave a car to him.「私は、彼に車をあげました。」

ただし、この場合入れ替えるだけでは駄目で、間接目的語の前に前置詞 to を置かなければなりません。

そして、「前置詞＋名詞」は修飾語になるので to him の部分は修飾語となり、文の型を記号で表すと SVOM となります。

修飾語 M は文型を判別する要素からは省かれるので、この文の文型は SVO と目的語が 1 つしかない第 3 文型となります。

間接目的語と直接目的語の順番を入れ替えた時に、間接目的語の前に to を置かなければならない動詞には以下のようなものがあります。

- give O1 O2「O1 に O2 を与える」
- tell O1 O2「O1 に O2 を言う（伝える）」
- show O1 O2「O1 に O2 を見せる」
- lend O1 O2「O1 に O2 を貸す」
- send O1 O2「O1 に O2 を送る」
- teach O1 O2「O1 に O2 を教える」

次に、以下の文をみてみましょう。

He bought me a car.「彼は、私に車を買ってくれました。」

この第 4 文型の文でも間接目的語は me、直接目的語は a car の順番を入れ替えることができ、以下のようになります。

He bought a car for me.「彼は、私に車を買ってくれました。」

ただし、この場合間接目的語の前に前置詞 for を置かなければなりません。

そして、「前置詞＋名詞」は修飾語になるので for me の部分は修飾語となり、文の型を記号で表すと SVOM（第 3 文型）となります。

間接目的語と直接目的語の順番を入れ替えた時に、間接目的語の前に for を置かなければならない動詞には以下のようなものがあります。

- buy O1 O2「O1（のため）に O2 を買う」
- get O1 O2「O1（のため）に O2 を手に入れる」
- make O1 O2「O1（のため）に O2 を作る」
- cook O1 O2「O1（のため）に O2 を料理する」
- find O1 O2「O1（のため）に O2 を見つける」
- choose O1 O2「O1（のため）に O2 を選ぶ」

それほど数が多いので to と for の使い分けのためにこれらの動詞を暗記してもよいと思いますが、簡単な使い分けの方法があります。

まず、give O1 O2「O1 に O2 を与える」という時、与える相手（O1）が目前にいなければ give「与える」という動作は成立しません。

このような場合には、動詞の後ろの間接目的語（O1）と直接目的語（O2）を入れ替える場合には、間接目的語の前に to を置きます。

send については郵便局などの有料サービスを使わず、直接手渡すと考えます。

次に、buy O1 O2「O1（のため）に O2 を買う」という時、相手（O1）と一緒にいなくても物（O2）を買って、後で渡すことができます。

よって、相手（O1）が目前にいなくても buy「買う」という動作は成立します。

このような場合には、動詞の後ろの間接目的語（O1）と直接目的語（O2）を入れ替える場合には、間接目的語の前に for を置きます。

to と for の使い分けは、その動作を行う時に相手（間接目的語）がその場に行ないとできないなら to、いなくてもできるなら for を用いると覚えておくと楽です。

最後に、第 4 文型を作る動詞で 1 つだけ間接目的語と直接目的語を入れ替える時に of を用いる動詞があります。

それは、ask「O1 に O2 を尋ねる（頼む）」です。以下の of を使わない場合と of を遣った場合の例文をみてみましょう。

I asked him the work.「私は、その仕事を彼に頼んだ。」

I asked the work of him.「私は、その仕事を彼に頼んだ。」

上の例文のように間接目的語、直接目的語の順だと前置詞は使わず、間接目的語を直接目的語の後ろに置くと前置詞 of を間接目的語の前に付けます。

11 第 5 文型（第 5 文型 [SVOC]）

まず、第 5 文型に関係のある記号を確認しておきましょう。

S：Subject（主語）

V：Verb（動詞）

O：Object（目的語）

C：Complement（補語）

M：Modifier（修飾語）

第 5 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語とその目的語を説明している補語が置かれている文のことで、記号を用いると SVOC です。

I call him Bob.「私は、彼をボブと呼んでいます。」

この文で、I は主語、call は動詞、him は動詞 call の目的語、Bob は目的語 him を説明している補語です。

補語とは、主語や目的語を説明している言葉（名詞や形容詞など）です。

この第 5 文型の文中の Bob は目的語の him が誰なのかを説明しており、目的語を説明している補語なので目的格補語と呼ばれます。

これに対し、第 2 文型 SVC の補語（C）は主語を説明している補語なので、主格補語と呼ばれます。

繰り返しますが、第 5 文型の特徴は動詞の後ろに目的語とその目的語を説明している補語が置かれています。

先ほどの例文（I call him Bob.）でも、call という動詞の後ろに「～を」という目的語の him とその him を説明している補語の Bob が置かれています。

また、Bob は him を説明しているので、第 5 文型の目的語（O）と補語（C）には C=O（この場合 him=Bob）の関係が成り立つと考えることができます。

第 5 文型は、動詞の後ろに目的語と補語が置かれ、さらに目的語 = 補語の関係が成り立たなければならぬので、第 5 文型を作る動詞は多くありません。

第 5 文型を作る動詞で call 以外によく使われる動詞には、以下のようなものがあるので覚えておきましょう。

- name OC「O を C と名づける」
- make OC「O を C にさせる」「O を C (の状態) にする」
- keep OC「O を C (の状態) に保つ」
- think OC「O を (が) C だと思う」
- find OC「O が C だと気づく (分かる)」
- elect OC「O を C に選ぶ」

12 第 5 文型 (第 5 文型と第 4 文型を作る動詞 make と find)

第 5 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語とその目的語を説明している補語が置かれている文のことです。記号を用いると SVOC です。

She made me angry.「彼女は、私を怒らせた。」

この文で、は She は主語、made は動詞、me は動詞 made の目的語、angry は目的語 me を説明している補語です。

第 5 文型では「目的語 = 補語」の関係が成立し、上の例文でも「me=angry (彼 = 怒っている)」の関係が成り立っています。

第 5 文型は動詞の後ろに補語と目的語が置かれており、さらに「目的語 = 補語」という関係が成り立っていないと成り立ちません。

よって、制限が厳しく第 5 文型を作る動詞はたくさんありません。

第 5 文型を作る動詞については第 5 文型 [SVOC] 解説しましたが、その中で make と find は第 4 型を作ることができる動詞でもあるので注意が必要です。

以下の例文をみてみましょう。

She made me dinner.「彼女は、私に夕食を作ってくれた。」

この文で、She は主語、made は動詞、me は間接目的語 (「～に」)、dinner は直接目的語 (「～を」) です。よって、この文は SVO1O2 の第 4 文型です。

このように make は、「O を C (の状態) にする」という意味だと第 5 文型、「O1 (のため) に O2 を作る」という意味だと第 4 文型の文を作ります。

She made me angry.「彼女は、私を怒らせた。」

この第 5 文型の文は、動詞の後ろに置かれている目的語 me と補語 angry に「目的語 = 補語」の関係が成り立っています。

She made me dinner.「彼女は、私に夕食を作ってくれた。」

この第 4 文型の文では、動詞の後ろに置かれている 2 つの目的語の間にはイコール（間接目的語＝直接目的語）の関係が成り立っていません。

日本語の意味が分からなくても、このことから第 4 文型か第 5 文型かを判別することができます。

第 4 文型と第 5 文型を作る動詞でよく用いられるものに、もう 1 つ find があります。

We found him angry.「私達は、彼が怒っているのに気づいた。」

この文で、We は主語、found は動詞、him は動詞 found の目的語、angry は目的語 him を説明している補語です。よって、この文は SVOC の第 5 文型です。

第 5 文型では「目的語＝補語」の関係が成立し、上の例文でも「him=angry」の関係が成り立っています。

以下の例文をみてみましょう。

We found him his watch.「私達は、彼（のため）に腕時計を見つけた。」

この文で、は We は主語、found は動詞、him は動詞 found の間接目的語、his watch は直接目的語です。よって、この文は SVO1O2 の第 4 文型の文です。

このように find は、「O が C だと気づく」という意味だと第 5 文型、「O1（のため）に O2 を見つける」という意味だと第 4 文型の文を作ります。

We found him angry. 「私達は、彼が怒っているのに気づいた。」

この第 5 文型の文では、動詞の後ろに置かれている目的語と補語に「目的語＝補語」の関係が成り立っています。

We found him his watch.「私達は、彼（のため）に腕時計を見つけた。」

この第 4 文型の文では、動詞の後ろに置かれている 2 つの目的語の間にはイコール（間接目的語＝直接目的語）の関係が成り立っていません。

13 第 5 文型（第 5 文型の補語になる原形不定詞）

第 5 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語とその目的語を説明している補語が置かれている文のことです。記号を用いると SVOC です。

We calls him Bob.「私達は、彼をボブと呼んでいる。」

この文で、We は主語、calls は動詞、him は動詞 calls の目的語、Bob は目的語 him を説明している補語です。

She made him angry.「彼女は、彼を怒らせた。」

この文で、She は主語、made は動詞、him は動詞 made の目的語、angry は目的語 him を説明している補語です。

第 5 文型では「目的語＝補語」の関係が成り立っており、上の例文では「him=Bob」、下の例文では「him=angry」の関係が成り立っています。

また、上の例文では Bob という名詞が、下の例文では angry という形容詞が補語になっています。

補語になるものには、名詞や形容詞の他に原形不定詞、現在分詞、過去分詞などがあります。

ここでは、原形不定詞が補語になる場合について解説します。

以下の例文をみてみましょう。

I saw him sing a song.「私は、彼が歌を歌うのを見た。」

この文で、I は主語、saw は動詞、him は動詞 saw の目的語、sing a song は目的語 him を説明している補語です。

この文中で、「him=sing a song（彼＝歌を歌う）」という関係が成り立っているので、sing a song の部分は目的語 him を説明している補語と言えます。

そして、このように原形不定詞（to の付かない不定詞、この場合 sing）も補語になることができます。

原形不定詞は、see, hear, feel などの知覚動詞や have, make, let などの使役動詞の後ろで用いられます。

14 第 5 文型（第 5 文型の補語になる現在分詞と過去分詞）

第 5 文型は、以下の例文のように主語、動詞の後ろに目的語とその目的語を説明している補語が置かれている文のことで、記号を用いると SVOC です。

We named our son Tom.「私達は、息子をトムと名づけた。」

この文で、は We は主語、named は動詞、our son は動詞 named の目的語、Tom は目的語 our son を説明している補語です。

第 5 文型では「目的語＝補語」の関係が成立し、上の例文でも「our son=Tom」の関係が成り立っています。

補語になるものには、名詞や形容詞のほかに原形不定詞、現在分詞、過去分詞などがあります。

ここでは、現在分詞と過去分詞が補語になる場合について解説します。
まず、以下の例文をみましょう。

I heard him singing a song.「私は、彼が歌を歌っているのを聞いた。」

この文で、I は主語、heard は動詞、him は動詞 heard の目的語、singing a song は目的語 him を説明している補語です。

この文中で、「him=singing a song（彼＝歌を歌っている）」という関係が成り立っており、singing a song は him を説明している補語となります。

次に、以下の例文をみましょう。

I heard him called by his mother.「私は、彼が母親に呼ばれるのを聞いた。」

この文で、I は主語、heard は動詞、him は動詞 heard の目的語、called by his mother は目的語 her を説明している補語です。

この文中で、「him=called by his mother（彼＝母親に呼ばれる）」という関係が成り立っており、called by his mother は him を説明している補語となります。

このように、現在分詞（この場合 singing）と過去分詞（この場合 called）も補語になることができます。
補語として用いられる現在分詞と過去分詞も see, hear, feel などの知覚動詞や have, make, let などの使役動詞の後ろで用いられます。

第 9 部

関係代名詞

1 関係代名詞の基礎（関係代名詞の種類）

関係代名詞の種類と役割について解説します。

関係代名詞には以下のようなものがあります。

who, whom, which, whose, that

これら関係代名詞は、接続詞と代名詞の働きをして形容詞節を導きます。

上の説明を読むと難しく感じますが、簡単に言うと 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する節を作ることです。

これでも難しいかもしれませんね。

実際に、以下の例文をみてみましょう。

There is a boy who is running in the park.
「公園の中を走っている少年がいます。」

この文では、以下の 2 つの文が関係代名詞 who により繋がれおり、関係代名詞 who は 2 つの文を繋ぐ接続詞の役割をしています。

There is a boy. 「少年がいます。」

who[もとは He] is running in the park. 「彼は、公園の中を走っています。」

また、who is running in the park. の部分は a boy という名詞を後ろから修飾しています。

よって、関係代名詞 who の後ろの文は形容詞（形容詞は名詞を修飾する）の役割をしている節（主語と動詞の組からなる文）なので形容詞節となります。

ここではまず、関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する節（形容詞節）を作るものということを覚えておいて下さい。

2 関係代名詞の種類（人で主格の関係代名詞 who）

主格の関係代名詞は who, which, that です。

文を繋ぐ時に名詞をこれらの関係代名詞に置き換えるのですが、who は人の場合、which は人以外で用います。

そして、that は人と人以外のどちらの場合でも用いることができます。

関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

まず、2 つの文を繋ぐという部分について解説します。

2 つの英文を関係代名詞を用いて繋ぐ手順は以下の通りです。

- 2 つの文で同じ人または物を見つける。

この時、1 つの文に 2 つ同じ人や物がある場合はあいまいな方を選びます。これについては、人以外で目的格の関係代名詞 which のところで詳しく解説します。

- 片方を関係代名詞に置き換える。

手順 1 で選んだ 2 つの名詞のうち、修飾される名詞ではない方の名詞を関係代名詞に置き換えます。

手順 1 で選んだ名詞の中で関係代名詞に置き換えなかった方の名詞は先行詞（修飾される名詞）と呼ばれます。

- 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

それでは、以下の 2 つの文を関係代名詞を用いて繋いでみましょう。

There is a boy. 「少年がいる。」

He is running in the park. 「彼は、その公園の中を走っている。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の a boy と 2 つ目の文の He が同一人物です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は「その公園の中を走っている少年がいます。」となり、修飾されている名詞は a boy なのでもう片方の He を関係代名詞に置き換えます。

この時、He は主語かつ人なので主格で人の関係代名詞 who に置き換えます。
よって、2 つ目の文は who is running in the park. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞（修飾される名詞）a boy の後ろに関係代名詞 who がくるように、who is running in the park をそのまま繋げます。
よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

There is a boy who is running in the park.
「その公園の中を走っている少年がいます。」

関係代名詞を用いて繋げた文、who is running in the park 「その公園の中を走っている」は先行詞 a boy を修飾（説明）しています。

この場合、以下のように who の代わりに that を用いることもできます。

There is a boy that is running in the park.

主格の関係代名詞を用いて繋いだ文にはもう 1 つの形があります。

今度は、上の手順をもとに以下の 2 つの文を繋いでみましょう。

A boy is running in the park. 「その少年が公園の中を走ってる。」
He is holding a big tree. 「彼は、大きい木を抱えている。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の a boy と 2 つ目の文の He が同一人物です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと、日本語は「大きい木を抱えている少年が、その公園の中を走っている。」となります。

そして、修飾されている名詞（先行詞）は「少年」なので、もう片方の He を関係代名詞に置き換えます。

この時、He は主語かつ人なので主格で人の関係代名詞 who に置き換えます。

よって、2 つ目の文は who is holding a big tree. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞（修飾される名詞）a boy の後ろに関係代名詞 who がくるように、who is holding a big tree を繋げます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

A boy who is holding a big tree is running in the park.
「大きい木を抱えている少年が、その公園の中を走っています。」

関係代名詞を用いて繋げた文、who is holding a big tree 「大きい木を抱えている」は先行詞 A boy を修飾（説明）しています。

また、この場合以下のように who の代わりに that を用いることもできます。

A boy that is holding a big tree is running in the park.
ここで、関係代名詞を用いて繋いだ 2 つの文をもう 1 度みてみましょう。

最初の There is a boy who is running in the park. という文は、There is a boy という文の直後に who is running in the park という文を繋げました。

これに対し、2 つ目の A boy who is holding a big tree is running in the park. という文は A boy is running in the park. という文の boy と is の間に who is holding a big tree というもう 1 つの文が挿入された形になっています。

これは、先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置き、関係代名詞でくっつけた文が後ろから先行詞を修飾する形にしなければならないからです。

関係詞（関係代名詞や関係副詞）を用いて 2 つの文を繋いだ文は、必ずこの 2 つのどちらかの形になります。

3 関係代名詞の種類（人以外で主格の関係代名詞 which）

主格の関係代名詞は who, which, that です。

文を繋ぐ時に名詞をこれらの関係代名詞に置き換えるのですが、who は人の場合、which は人以外で用います。

そして、that は人と人以外のどちらの場合でも用いることができます。

関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

それでは、以下の 2 つの文を関係代名詞を用いて繋いでみましょう。

That is a house. 「あれは、家です。」

It is in the center of this town. 「それは、この町の中心にある。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の a house と 2 つ目の文の It が同じ物です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は「あれは、この町の中心にある家です。」となり、修飾されている名詞は a house なのでもう片方の It を関係代名詞に置き換えます。

この時に、It は主語かつ人以外なので主格で、人以外の時に用いる関係代名詞 which に置き換えます。

よって、2 つ目の文は which is in the center of this town となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞（修飾される名詞）a house の後ろに関係代名詞 which がくるように、which is in the center of this town をそのまま繋げます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

That is a house which is in the center of this town.

「あれは、この町の中心にある家です。」

関係代名詞を用いて繋げた文、which is in the center of this town 「この町の中心にある」は先行詞 a house を修飾（説明）しています。

この場合、以下のように which の代わりに that を用いることもできます。

That is a house that is in the center of this town.

主格の関係代名詞を用いて繋いだ文にはもう 1 つの形があります。

今度は、上の手順をもとに以下の 2 つの文を繋いでみましょう。

The house is on the hill. 「その家は、その丘の上にあります。」

It was built by him. 「それは、彼によって建てられました。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の The house と 2 つ目の文の It が同じ物です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は、「彼によって建てられた家は、その丘の上にあります。」となり、修飾されている名詞（先行詞）は The house なのでもう片方の It を関係代名詞に置き換えます。

この時に、It は主語かつ人以外なので主格で人以外の時に用いる関係代名詞 which に置き換えます。

よって、2 つ目の文は which was built by him. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞（修飾される名詞）The house の後ろに関係代名詞 which がくるように、which was built by him をそのまま繋げます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

The house which was built by him is on the hill.
「彼によって建てられた家は、その丘の上にあります。」

関係代名詞を用いて繋げた文、which was built by him 「彼によって建てられた」は先行詞 The house を修飾（説明）しています。

この場合、以下のように which の代わりに that を用いることもできます。

The house that was built by him is on the hill.

ここで、関係代名詞を用いて繋いだ 2 つの文をもう 1 度みてみましょう。

最初の That is a house which is in the center of this town. という文は、That is a house. という文の後ろにそのままもう 1 つ which is in the center of this town という文を繋げました。

2 つ目の The house which was built by him is on the hill. という文は The house is on the hill. という文の house と is の間に which was built by him というもう 1 つの文が挿入された形になっています。

これは、先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置き、関係代名詞でくっつけた文が後ろから先行詞を修飾する形にしなければならないからです。

関係詞（関係代名詞や関係副詞）を用いて 2 つの文を繋いだ文は、必ずこの 2 つのどちらかの形になります。

4 関係代名詞の種類（人で目的格の関係代名詞 whom）

目的格の関係代名詞は whom, which, that です。

文を繋ぐ時に名詞をこれらの関係代名詞に置き換えるのですが、whom は人の場合、which は人以外で用います。

that は、人と人以外のどちらの場合でも用いることができます。

関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

それでは、以下の 2 つの文を関係代名詞を用いて繋いでみましょう。

He is a man. 「彼は、男性です。」

I met him at the party yesterday.
「私は、昨日そのパーティーで彼に会った。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の a man と 2 つ目の文のが him が同じ人です。

この場合、1 つ目の文の He も同じ人になりますが「背の高い彼」などのように代名詞が修飾されることがはないので a man を選びます。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は「彼は、私が昨日そのパーティーで会った男性です。」となり、修飾されている名詞（先行詞）は a man なのでもう片方の him を関係代名詞に置き換えます。

この時に、him は目的語かつ人なので目的格で人の時に用いる関係代名詞 whom に置き換えます。

よって、2 つ目の文は I met whom at the party yesterday. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

目的格の関係代名詞を用いて 2 つの文を繋ぐ時は、1 つ注意が必要です。

先行詞（修飾される名詞）a man の後ろに関係代名詞 whom がくるように、I met whom at the party を whom I met at the party と whom を文の先頭に出して a man の後ろに繋がます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

He is a man whom I met at the party yesterday.
「彼は、私が昨日そのパーティーで会った男性です。」

関係代名詞を用いて繋げた文、whom I met at the party yesterday 「私達が昨日そのパーティーで会った」は先行詞 a man を修飾（説明）しています。

ただ、人で目的格の関係代名詞にも人で主格の場合と同様に who が用いられることが多いようです。

He is a man who I met at the party yesterday.

また、who、whom の代わりに以下のように that を用いることもできます。

He is a man that I met at the party yesterday.

5 関係代名詞の種類（人以外で目的格の関係代名詞 which）

人以外で目的格の関係代名詞 which について解説します。

目的格の関係代名詞は whom, which, that です。

文を繋ぐ時に名詞をこれらの関係代名詞に置き換えるのですが、whom は人の場合、which は人以外で用います。

that は、人と人以外のどちらの場合でも用いることができます。

関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

それでは、以下の 2 つの文を関係代名詞を用いて繋いでみましょう。

The building is a museum. 「その建物は、博物館です。」

I visited there yesterday. 「私は、昨日そこを訪問しました。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

この時、1 つの文に 2 つ同じ人や物がある場合はあいまいな方を選びます。

1 つ目の文の The building と 2 つ目の文のが there が同じ物です。

この場合、1 つ目の文の a museum も there と同じ人ですが、The buildingの方が a museum よりあいまいなので The building を選びます。

それは、あいまいな名詞ほど修飾され易いからです。

建物の方が博物館よりあいまいなので、「私が昨日訪問した建物は、博物館です。」の方が「その建物は、私が昨日訪問した博物館です。」より自然です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は「私が昨日訪問した建物は、博物館です。」となり、修飾されている名詞（先行詞）は The building なのでもう片方の there を関係代名詞に置き換えます。

この時に、there は目的語かつ物なので目的格で人以外の時に用いる関係代名詞 which に置き換えます。

よって、2 つ目の文は I visited which yesterday. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

目的格の関係代名詞を用いて 2 つの文を繋ぐ時は、1 つ注意が必要です。

先行詞（修飾される名詞）The building の後ろに関係代名詞 which がくるように、I visited which yesterday を which I visited yesterday と which を文の先頭に出して The building の後ろに繋がます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

The building which I visited yesterday is a museum.
「私が昨日訪問した建物は、博物館です。」

関係代名詞を用いて繋げた文、which I visited yesterday「私が昨日訪問した」は先行詞 The building を修飾（説明）しています。

この場合、以下のように which の代わりに that を用いることもできます。

The building which I visited yesterday is a museum.

6 関係代名詞の種類（目的格の関係代名詞の省略）

まず、以下の文をみましょう。

Many people know the boy whom we met yesterday.
「多くの人が、私達が昨日会った少年を知っています。」

この文には、以下のように関係代名詞 that を用いることもできます。

Many people know the boy that we met yesterday.

これは、目的格の関係代名詞 whom や that により以下の 2 つの文が繋がられた文です。

Many people know the boy.「多くの人が、その少年を知っています。」

We met him yesterday.「私達は、昨日彼に会いました。」

そして、これらの目的格の関係代名詞 whom と that は以下のように省略することができます。

Many people know the boy we met yesterday.
「多くの人が、私達が昨日会った少年を知っています。」

意味は関係代名詞を用いた文と同じです。

もう 1 つ関係代名詞 which を用いた文もみましょう。

The mountain which we climbed last week was very high.
「私達が先週登った山は、とても高かった。」

この文には、以下のように関係代名詞 that を用いることもできます。

The mountain that we climbed last week was very high.

これは、目的格の関係代名詞 which や that により以下の 2 つの文が繋がられた文です。

The mountain was very high.「その山は、とても高かった。」

We climbed it last week.「私達は、先週それ（その山）に登りました。」

そして、これらの目的格の関係代名詞 which と that は以下のように省略することができます。

The mountain we climbed last week was very high.
「私達が先週上った山は、とても高かった。」

意味は関係代名詞を用いた文と同じです。

このように、目的格の関係代名詞は省略することができます。
※最近では、省略されることがほとんどです。

7 関係代名詞の種類（所有格の関係代名詞 whose）

所有格の関係代名詞は whose のみです。

文を繋ぐ時に名詞を関係代名詞に置き換えるのですが、人でも人以外でも所有格の場合は whose を
用います。
また、所有格には関係代名詞の that は用いることができません。

関係代名詞は 2 つの文を繋ぎ、関係代名詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。
それでは、以下の 2 つの文を関係代名詞を用いて繋いでみましょう。

We know the girl.「私達は、その少女を知っています。」

Her father is an artist.「彼女の父親は、芸術家です。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の the girl と 2 つ目の文のが Her が同じ物です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は、「私達は、父親が芸術家をしている少女を知っています。」となり、修飾
されている名詞（先行詞）は the girl なのでもう片方の Her を関係代名詞に置き換えます。

この時、Her「彼女の」は所有格なので、所有格に用いる関係代名詞 whose に置き換えます。

よって、2 つ目の文は whose father is an artist. となります。
3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞（修飾される名詞）the girl の後ろに関係代名詞 whose がくるように、whose father is an
artist を繋げます。
よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

We know the girl whose father is an artist.
「私達は、父親が芸術家をしている少女を知っています。」

関係代名詞を用いて繋げた文、whose father is an artist「父親が芸術家をしている」は先行詞 the girl
を修飾（説明）しています。

関係代名詞 whose を用いて 2 つの文を繋ぐ場合、もう 1 つの形があります。

それは、上の 2 つの文の繋ぎ方の手順 3 で「whose + 名詞」が目的語の場合は後ろの名詞も一緒に先行詞の後ろに置かなければならないということです。

今度は、この手順をもとに以下の 2 つの文を繋いでいきます。

The woman is a pianist.「その女性は、ピアニストです。」

We know her brother.「私達は、彼女の弟を知っています。」

1. 2 つの文で同じ人または物を見つける。

1 つ目の文の The woman と 2 つ目の文のが her が同じ人です。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋ぐと日本語は、「私達が弟のことを知っている女性は、ピアニストです。」となり、修飾されている名詞は The woman なのでもう片方の her を関係代名詞に置き換えます。

この時、her「彼女の」は所有格なので所有格に用いる関係代名詞 whose に置き換えます。

よって、2 つ目の文は We know whose brother. となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

この時、whose brother（whose + 名詞）の部分が目的語になっているので、whose brother を文の先頭に出して先行詞の後ろに置きます。

そして、先行詞（修飾される名詞）The girl の後ろに「関係代名詞 + 名詞（whose brother）」がくるように、whose brother we know を繋げます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

The woman whose brother we know is a pianist.

「私達が弟のことを知っている女性は、ピアニストです。」

関係代名詞を用いて繋げた文、whose brother we know「私達が弟のことを知っている」は先行詞 The woman を修飾（説明）しています。

第 10 部

関係副詞

1 関係副詞の種類

関係副詞には、以下のようなものがあります。

where, when, why, how

これら関係副詞は、接続詞と副詞の働きをして形容詞節を導きます。

上の説明を読むと難しく感じますが、簡単に言うと 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する節を作るということです。

実際に、以下の例文をみてみましょう。

I visited the city where he lives.
「私は、彼が住んでいる街を訪れました。」

この文は、以下の 2 つの文が関係副詞 where により繋がれおり、関係副詞 where は 2 つの文を繋ぐ接続詞の役割をしています。

I visited the city. 「私は、その街を訪れました。」

where he lives (もとは、he lives there) 「彼が住んでいる。」

また、where he lives の部分は the city という名詞を後ろから修飾しています。

よって、関係副詞 where の後ろの文は形容詞 (形容詞は名詞を修飾する) の役割をしている節 (主語と動詞の組からなる 1 つの文) なので形容詞節となります。

ここでは、関係副詞は 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する節を作るということをまず覚えておいて下さい。

2 関係副詞 (where)

関係副詞は 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

そして、where は先行詞が場所に関連する言葉の時に用いる関係副詞です。
まず、2 つの文を繋ぐという部分について解説します。

関係副詞を用いて 2 つの英文を繋ぐ手順は以下の通りです。

1. 2 つの文で同じものを表している言葉を見つける。

2. 片方を関係副詞に置き換える。

手順 1 で選んだ 2 つの人または物のうち、副詞である方を関係副詞に置き換えます。もう一方は名詞です。

手順 1 で選んだ人または物のうち、関係副詞に置き換えなかった名詞は先行詞 (修飾される名詞) と呼ばれます。

3. 先行詞の後ろに関係副詞がくるように残りの文を置く。

それでは、以下の 2 つの文を関係副詞を用いて繋いでみましょう。

That is the place. 「あれは、その場所です。」

I lived there ten years ago. 「私は、10 年前そこに住んでいました。」

1. 2 つの文で同じものを表している言葉を見つける。

1 つ目の文の the place と 2 つ目の文の there が、同じ場所を表す言葉です。

2. 片方を関係副詞に置き換える。

1 で選んだ the place と there のうち副詞は there です。

よって、there を関係副詞に置き換えます。

関係副詞

関係副詞

ここで補足しておきますと、副詞とは動詞、形容詞、副詞を修飾する品詞です。

この場合、there「そこに」は「どこに」→「住んでいた」のかを表しており、動詞の lived を修飾している副詞です。

もう片方の名詞 the place が先行詞となり、the place は場所に関連する言葉なので there を関係副詞 where に置き換えます。

よって、2 つ目の文は I lived where ten years ago. となります。

3. 先行詞の後ろに関係副詞がくるように残りの文を置く。

先行詞 the place の後ろに関係副詞 where がくるように、where I lived ten years ago と書き換えて繋がります。

よって、関係副詞 where により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

That is the place where I lived ten years ago.
「あれは、私が 10 年前に住んでいた場所です。」

関係副詞 where を用いて繋げた文、where I lived「私が住んでいた」は先行詞 the place を修飾（説明）しています。

関係副詞の where は先行詞が場所の時に用いられ、先行詞が place「場所」の時は書かなくても推測できることから以下のように省略されることもあります。

That is where I lived ten years ago.
「あれは、私が 10 年前に住んでいた場所です。」

以下のように先行詞が place 以外の時は、記載しないと先行詞が何か分からなくなってしまうため、通常省略されることはありません。

That is the house where I lived ten years ago.
「あれは、私が 10 年前に住んでいた家です。」

そして、以下のように関係副詞 where は省略されることが多いです。

That is the house I lived ten years ago.
「あれは、私が 10 年前に住んでいた家です。」

3 関係代名詞と関係副詞の違い

関係代名詞も関係副詞も 2 つの文を繋ぎ、その前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

似ているので、関係代名詞と関係副詞はまとめて関係詞と呼ばれます。

ただ、関係代名詞は名詞の代わりに、関係副詞は副詞の代わりに用いて 2 つの文を繋ぎます。

この部分について、2 つの文を繋ぎながら解説します。

2 つの英文を関係代名詞を用いて繋ぐ手順は以下の通りです。手順の 2 に注意して解説を読んで下さい。

- 1. 2 つの文で同じ人またはものを表す言葉を見つける。
- 2. 片方を関係代名詞または関係副詞に置き換える。

・1 で選んだ人や物が両方とも名詞の場合

手順 1 で選んだ 2 つの名詞のうち、修飾される名詞ではない方の名詞を関係代名詞に置き換えます。

・1 で選んだ物のうち片方が副詞の場合

手順 1 で選んだ 2 つの物のうち、副詞である方を関係副詞に置き換えます。もう一方は名詞です。

手順 1 で選んだ人またはもののうち、関係詞に置き換えなかった名詞は先行詞（修飾される名詞）になります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞または関係副詞がくるように残りの文を置く。

それでは、まず以下の 2 つの文を関係詞を用いて繋いでみましょう。

The park is near my house.「その公園は、私の家の近くにあります。」
We played soccer there.「私達は、そこでサッカーをしました。」

1. 2 つの文で同じ人またはものを表す言葉を見つける。

1 つ目の文の The park と 2 つ目の文の there が同じ物です。

2. 片方を関係詞に置き換える。

1 で選んだ The park と there のうち there が副詞なので、これを関係副詞に置き換えます。

もう片方の The park が先行詞となり、the park は場所に関連する言葉なので関係副詞 where に置き換えます。

よって、2 つ目の文は We played soccer where. となります。

3. 先行詞の後ろに関係副詞がくるように残りの文を置く。

先行詞 The park の後ろに関係副詞 where がくるように、where we played soccer と書き換えて繋が
ます。

よって、関係副詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

The park where we played soccer is near my house.
「私達がサッカーをした公園は、私の家の近くにあります。」

次に、以下の 2 つの文を関係詞を用いて繋いでみましょう。

The temple was very beautiful.「その寺は、とても美しかった。」
We visited there yesterday.「私達は、昨日そこを訪れました。」

※下の英文の there は「そこ」という意味の名詞です。

1. 2 つの文で同じ人またはものを表す言葉を見つける。

1 つ目の文の The temple と 2 つ目の文の there が同じ物です。

2. 片方を関係詞に置き換える。

1 で選んだ The temple と there は両方とも名詞なので、修飾されている名詞ではない方を関係代名
詞に置き換えます。

日本語は「私達が昨日訪れた寺は、とても美しかった。」となるので、修飾されている名詞は The
temple です。

修飾されていない方の名詞 there は人以外で目的格なので、関係代名詞 which に置き換えます。

よって、2 つ目の文は We visited which yesterday. となります。The temple は、先行詞となります。

3. 先行詞の後ろに関係詞がくるように残りの文を置く。

先行詞 the temple の後ろに関係代名詞 which がくるように、which we visited yesterday と書き換
えて繋がます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

The temple which we visited yesterday was very beautiful.
「私達が昨日訪れた寺は、とても美しかった。」

関係代名詞と関係副詞は似ていますが、2 つの文を繋ぐ時に関係代名詞は名詞の代わりに、関係副詞
は副詞の代わりに用います。

その他の形容詞節を導き先行詞（名詞）を修飾するという役割は全く同じです。

4 関係副詞（when）

関係副詞は 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

そして、when は先行詞が時に関連する言葉の時に用いる関係副詞です。

それでは、以下の 2 つの文を関係副詞を用いて繋いでみましょう。

I remember the day. 「私は、その日のことを覚えています。」

I met him for the first time then. 「私は、その時彼に初めて会った。」

1. 2 つの文で同じものを見つける。

1 つ目の文の the day と 2 つ目の文の then が同じものです。

2. 片方を関係副詞に置き換える。

1 で選んだ the day と then のうち副詞である then を関係副詞に置き換えます。then は時に関係する言葉なので関係副詞 when に置き換えます。

ここで補足しておきますと、副詞とは動詞、形容詞、副詞を修飾する品詞です。

この場合、then 「その時に」 は、「その時に」 → 「会った」ということを表しており、動詞 met を修飾している副詞です。

もう片方の名詞 the day が先行詞となり、the day は時に関連する言葉なので関係副詞 when に置き換えます。

よって、2 つ目の文は I met him for the first time when. となります。

3. 先行詞の後ろに関係副詞がくるように残りの文を置く。

先行詞 the day の後ろに関係副詞 when がくるように、when I met him for the first time と書き換えて繋げます。

よって、関係副詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

I remember the day when I met him for the first time.
「私は、彼に初めて会った日のことを覚えています。」

関係副詞を用いて繋げた文、when I first met him 「私が初めて彼に会った」は先行詞 the day を修飾（説明）しています。

関係副詞の when は先行詞が時に関する言葉の時に用いられ、先行詞が time 「時」の時は書かなくても推測できることから以下のように省略されることもあります。

I remember the time when I met him for the first time.
→ I remember when I met him for the first time.
「私は、彼に初めて会った時のことを覚えています。」

また、以下のように関係副詞 when が省略された形が用いられることが多いです。

I remember the time I met him for the first time.

5 前置詞 + 関係代名詞 = 関係副詞

なぜ前置詞 + 関係代名詞 = 関係副詞という公式が成り立つのか、2 つの文を繋ぎながら解説していきます。

That is the house. 「あれは、(その) 家です。」
He lives there. 「彼は、そこに住んでいます。」

この 2 つの文で、1 つ目の文の the house と 2 つ目の文の there が同じものです。
これら 2 つのうち、副詞の there を関係副詞 where に置き換えます。
そして、2 つの文を繋ぐと以下ようになります。

That is the house where he lives. 「あれは、彼が住んでいる家です。」

次に、以下の 2 つの文を繋いでみましょう。

That is the house. 「あれは、(その) 家です。」
He lives in it. 「彼は、そこに住んでいます。」

この 2 つの文では、1 つ目の文の the house と 2 つ目の文の it が同じものです。
この 2 つは両方とも名詞なので片方を関係代名詞に置き換えます。

2 つの文を繋いだ日本語は「あれは、彼が住んでいる家です。」となり、修飾されているのは the house なのでもう一方の it を関係代名詞 which に置き換えます。
そして、2 つの文を繋ぐと以下ようになります。

That is the house which he lives in. 「あれは、彼が住んでいる家です。」

また、この文は前置詞 + 関係代名詞を用いて以下のように 2 つの文を繋ぐことができます。

That is the house in which he lives. 「あれは、彼が住んでいる家です。」

ここで、この文を最初の関係副詞を用いた文、That is the house where he lives. と照らし合わせると「in which = where」であることが分かります。
よって、前置詞 + 関係代名詞 = 関係副詞であるということが分かります。

前置詞 + 名詞は、文中で副詞の役割をすることがあり、その場合には前置詞 + 名詞を関係副詞に置き換えることができます。

6 前置詞 + 名詞を関係副詞に置き換える

前置詞 + 名詞を関係副詞に置き換える方法について解説します。

以下の 2 つの文を繋ぎながら解説していきます。

I remember the day. 「私は、その日のことを覚えています。」

I met him for the first time on the day. 「私は、その日彼に初めて会った。」

2 つの文を繋ぐ手順は以下の通りです。

1. 2 つの文で同じものを見つける。

1 つ目の文の the day と 2 つ目の文の the day が同じものです。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋いだ日本語は、「私は、初めて彼に会った日のことを覚えています。」となるので、1 つ目の文の the day が先行詞となります。

よって、2 つ目の文の the day を人以外で目的格の時に用いる関係代名詞 which に置き換え、2 つ目の文は以下ようになります。

I met him for the first time on which.

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞である 1 つ目の文の the day の後ろに関係代名詞 which がくるように、which I met him for the first time on と書き換えて繋がります。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下ようになります。

I remember the day which I met him for the first time on.
「私は、彼に初めて会った日のことを覚えています。」

ここで、手順 2 で関係代名詞の前に前置詞がある場合は前置詞 + 関係代名詞の形で文を繋ぐことができるので、上の文は以下のように書くこともできます。

I remember the day on which I met him for the first time.
「私は、彼に初めて会った日のことを覚えています。」

また、前置詞 + 関係代名詞は関係副詞に置き換えることができます。

よって、手順 1 で同じものを選ぶ時に 2 つ目の文で the day ではなく、on the day を選ぶと on the day の部分は「その日に」→「会った」と動詞を修飾しており、副詞の役割をしているため以下のように関係副詞に置き換えることができます。

I remember the day when I met him for the first time.
「私は、彼に初めて会った日のことを覚えています。」

1 語で場所や時を表す言葉は、there「そこで（に）」と then「その時（に）」くらいしかありません。

よって、副詞 1 語を関係副詞に置き換えるよりも、前置詞 + 名詞を関係副詞に置き換えて文を繋ぐことがほとんどです。

7 関係副詞（why）

関係副詞は 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

そして、why は、先行詞が理由の時に用います。理由を表す単語は reason しかないので、why の先行詞は必ず (the) reason になります。

しかし、先行詞が the reason だから必ず関係副詞 why を用いるという訳ではなく、関係代名詞 which を用いる場合もあるので注意しなければなりません。

それでは、では、以下の 2 つの文を繋ぎながら解説していきます。

This is the reason. 「これは、その理由です。」

I was late for it. 「私は、そのせいで遅れました。」

1. 2 つの文で同じものを見つける。

1 つ目の文の the reason と 2 つ目の文の it が同じものです。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋いだ日本語は、「これは、私が遅れた理由です。」となり、修飾されている 1 つ目の文の the reason が先行詞となります。

よって、2 つ目の文の it を人以外で目的格の時に用いる関係代名詞 which に置き換え、2 つ目の文は I was late for which となります。

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞である 1 つ目の文の the reason の後ろに関係代名詞 which がくるように、which I was late for と書き換えて繋げます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下のようになります。

This is the reason which I was late for.
「これは、私が遅れた理由です。」

ここで、手順 2 で関係代名詞の前に前置詞がある場合は前置詞 + 関係代名詞の形で文を繋ぐことができるので、上の文は以下のように書くことができます。

This is the reason **for** which I was late.
「これは、私が遅れた理由です。」

また、前置詞 + 関係代名詞は関係副詞に置き換えることができるので、for which を先行詞が理由 (the reason) の時に用いる関係副詞 **why** に置き換えて以下のように書くこともできます。

This is the reason **why** I was late.
「これは、私が遅れた理由です。」

手順 1 で同じものを選ぶ時に 2 つ目の文で it を選ぶと it は名詞なので関係代名詞 which を用います。

ところが、for it を選ぶと for it の部分は「そのせいで」→「遅れた」と動詞を修飾する副詞の役割をしているので関係副詞 **why** に置き換えます。

1 語で理由を表す言葉はないので、前置詞 + 名詞 (for it または for the reason) を関係副詞 **why** に置き換えます。

先行詞が理由 the reason だからいつも関係副詞 **why** を用いるという訳ではなく、関係代名詞 **which** を用いる場合もあるので注意しましょう。

そして、以下のように関係副詞 **why** は省略されることが多いです。

This is the reason I was late.

8 関係副詞 (how)

関係副詞は 2 つの文を繋ぎ、関係副詞の前にある名詞 [先行詞] を修飾する形容詞節を作ります。

そして、**how** は、先行詞が方法の時に用います。方法を表す単語は way しかないので、**how** の先行詞は必ず (the) way になります。

しかし、先行詞が the way だから必ず関係副詞 **how** を用いるという訳ではなく、関係代名詞 **which** を用いる場合もあるので注意しなければなりません。

それでは、では、以下の 2 つの文を繋ぎながら解説していきます。

This is the way. 「これは、その方法です。」

I learned English in it. 「私は、その方法で英語を学びました。」

1. 2 つの文で同じものを見つける。

1 つ目の文の the way と 2 つ目の文の it が同じものです。

2. 片方を関係代名詞に置き換える。

2 つの文を繋いだ日本語は、「これは、私が英語を学んだ方法です。」となるので、修飾されている 1 つ目の文の the way が先行詞となります。

よって、2 つ目の文の it を人以外で目的格の時に用いる関係代名詞 **which** に置き換え、2 つ目の文は以下ようになります。

I learned English in which.

3. 先行詞の後ろに関係代名詞がくるように残りの文を置く。

先行詞である 1 つ目の文の the way の後ろに関係代名詞 **which** がくるように、which I learned English in と書き換えて繋がめます。

よって、関係代名詞により 2 つの文を繋ぐと、以下ようになります。

This is the way which I learned English **in**.
「これは、私が英語を学んだ方法です。」

ここで、手順 2 で関係代名詞の前に前置詞がある場合は、前置詞 + 関係代名詞の形で文を繋ぐことができます。

よって、上の文は以下のように書くこともできます。

This is the way **in** which I learned English.
「これは、私が英語を学んだ方法です。」

また、前置詞 + 関係代名詞は関係副詞になるので、**in which** を先行詞が方法の時に用いる関係副詞 **how** に置き換え以下のように書くこともできます。

This is the way **how** I learned English.
「これは、私が英語を学んだ方法です。」

ただ、関係副詞 **how** を用いる時は **the way how** という書き方はできません。

the way を消すか、**how** を消して以下のように書かなければなりません。

This is **how** I learned English.

This is **the way** I learned English.

手順 1 で同じものを選ぶ時に 2 つ目の文で **it** ではなく **in it** を選ぶと、**in it** の部分は「その方法で」→「学んだ」と動詞を修飾しています。

よって、**in it** は副詞の役割をしているので関係副詞に置き換えます。

1 語で方法を表す副詞はないので、前置詞 + 名詞 (in + it または in + the way) を関係副詞 how に置き換えます。

あと、先行詞が理由 **the way** だからいつも関係副詞 **how** を用いるという訳ではないので注意して下さい。

名詞を置き換える時は、先行詞が **the way** でも関係代名詞の **which** を用います。

9 関係副詞の応用（関係副詞の先行詞の省略）

まず、関係副詞 **why** で先行詞を省略する場合を解説します。

This is the reason **why** I was angry with him.
「これは、私が彼に怒っていた理由です。」

関係副詞 **why** の先行詞は **the reason** しかなく、書かなくても分かるので **the reason** は以下のように省略されることがあります。

This is **why** I was angry with him.

関係副詞 **how** の先行詞は **the way** しかありません。そして、以下のように **how** の前に先行詞 **the way** は書いてはいけません。

This is **the way how** I solve the problem.
「これは、私がその問題を解いた方法です。」

関係副詞 **how** を用いた文は、**the way** を消して **how** だけ残すか、**how** を消して **the way** だけ残して以下のようになります。

This is **how** I solve the problem.
This is **the way** I solve the problem.

ここでは、関係副詞 **where** と **when** の先行詞を省略することがあるということについて解説します。

以下の例文をみてみましょう。

This is the house **where** he lives.
「これは、彼が住んでいる家です。」

この文の **the house** のように先行詞が書かないと分からない場合には、通常先行詞は省略しません。

ところが、以下のように先行詞が the place「場所」の場合には the place が省略されることがあります。

That is the place where I went last year.
「それは、私が去年行った場所です。」

関係副詞 where により先行詞が場所を表すと分かるので、「場所」という意味の the place は書かなくても意味が分かるため省略されます。

よって、上の文は以下のように書くこともできます。

That is where I went last year.

以下のような関係副詞 when を用いた文でも、先行詞が the time「時」の時には省略されることがあります。

I remember the time when I met him for the first time.
「私は、初めて彼に会った時のことを覚えています。」

よって、この文は the time を省略して以下のように書くこともできます。

I remember when I met him for the first time.

これは、関係副詞の when が「時」という意味を持っており、書かなくても分かるので省略されることがあります。

その他の where や when の先行詞は、前後の文から明らかに分かる場合を除いて省略されることはまずありません。

10 関係副詞の応用（関係副詞 when の表現 the time when 〜）

関係副詞 when の注意すべき表現について解説します。

以下の 2 つの文を関係副詞 when を用いて繋いでみましょう。

The time will surely come.「その時は、きっと来るでしょう。」

We will travel to the moon then.「私達は、その時月に旅行するでしょう。」

まず、2 つの文の同じものは The time と then です。

then は副詞で先行詞 The time が時に関連する言葉なので then を関係副詞 when に置き換えます。

そして、when が先行詞 The time の後ろにくるように 2 つ目の文 when we will travel to the moon を繋ぎます。

よって、文を繋ぐ手順どおりに繋ぐと以下ようになります。

The time when we will travel to the moon will surely come.
「私達が月に旅行する時が、きっと来るでしょう。」

ところが、「～する時が…（だろう）」という言い方をする時は以下のように when 〜 の部分は先行詞 The time でなく通常文の最後に置きます。

The time will surely come when we will travel to the moon.
「私達がつきに旅行する時が、きっと来るでしょう。」

先行詞 The time と関係副詞 when が離れているので訳す時に注意しましょう。

11 関係副詞の応用（関係副詞の継続用法 [非制限用法]）

関係副詞の where と when には、関係代名詞と同じように継続用法があります。

下の継続用法の文をみてみましょう。

I went to Rome, where I saw a lot of buildings.
「私はローマに行き、（そして）そこで多くの建物をみました。」

この文のように、継続用法では先行詞と関係副詞の間にコンマ「,」が置かれ、コンマのところで文を切って訳します。

コンマのところで切った後に、接続詞の「そして」や「しかし」を補うとスムーズに日本語に訳すことができます。

「, where」は、「and there」や「but there」と同じ意味になると覚えておくといえます。

よって、上の文を丁寧に訳すと「私はローマに行きました。そして、そこで多くの建物をみました。」となります。

これに対し、先行詞と関係副詞の間にコンマのない以下のような文は、限定用法と呼ばれます。

That is the park where I often went in my childhood.
「あれは、私が子供の頃よく行った公園です。」

この文では、where I often went in my childhood 「私が子供の頃よく行った」の部分が先行詞の the park を修飾しています。

どのような公園なのか、と関係副詞節（関係副詞の後ろの文）が公園を限定するので限定用法と呼ばれます。

限定用法は、制限用法と呼ばれることもあります。

逆に継続用法は先行詞を限定（制限）しないので、非制限用法と呼ばれます。

関係副詞 when の継続用法は以下のようになります。

He visited me yesterday, when I went out.
「彼は昨日私を訪れた、しかしその時私は外出していた。」

where の継続用法と同様に、先行詞 yesterday と when の間にコンマ「,」が置かれそこで一度切って訳します。

コンマのところで切った後に、接続詞の「そして」や「しかし」を補うとスムーズに日本語に訳すことができます。

「, when」は、「and then」や「but then」と同じ意味になると覚えておくといえます。関係副詞の why や how に継続用法はないので注意しましょう。

第 11 部

複合関係詞

1

複合関係詞の種類

複合関係詞とは関係代名詞や関係副詞に ever が付いたもので、複合関係詞には複合関係代名詞と複合関係副詞があります。

複合関係詞は関係代名詞や関係副詞とは異なり、先行詞を修飾するのではなくそれぞれ意味をもち名詞節や副詞節を作ります。

※節とは主語と動詞の 1 組からなる文章です。

複合関係詞には以下のようなものがあり、意味も合わせて記載しておきます。

- ・ 複合関係代名詞
 - whoever ～「～する人は誰でも」「誰が～しても」
 - whomever ～「～する人誰にでも」「誰に～しても」
 - whichever ～「～するものはどちらでも」「どちらが～しても」
 - whatever ～「～するものは何でも」「何が～しても」
- ・ 複合関係副詞
 - whenever ～「～する時はいつでも」「いつ～しようとも」
 - wherever ～「～するところはどこでも」「どこで～しようとも」
 - however ～「どんなに～しようとも」

複合関係詞は、節を導くので以下のように複合関係詞の後ろには主語と動詞の組が置かれます。

You can take whichever you like.
「あなたは、好きな方どちらでも取ることができます。」

Whichever、Whatever は主語の代わりにもなるので、後ろに動詞のみ置かれることもあります。

Whichever wins, I will be glad.
「どちらが勝っても、私は嬉しいです。」

Whoever は主語として用いるので後ろには動詞のみがきます。

Whoever said so, I don't believe it.
「誰がそう言っても、私はそれを信じません。」

2

複合関係代名詞（whoever）

複合関係代名詞 whoever ～ には、「～する人は誰でも」と「誰が～しても」の 2 つの意味があります。

whoever は疑問詞「誰」や関係代名詞の who と同じく主語として用いられ、後ろに動詞を置き節（主語と動詞からなる文）を作ります。

以下の例文をみてみましょう。

Whoever comes is welcome.「来る人は誰でも、歓迎します。」

このように Whoever を「～する人は誰でも」と訳す時は、名詞節を導き、文中で主語や目的語になります。

上の文では whoever comes が節で、この部分が名詞の役割（主語になる）をしているので名詞節となります。

次に以下の例文をみてみましょう。

Whoever comes to the party, he will be pleased.
「誰がそのパーティーに来たとしても、彼は喜ぶでしょう。」

このように Whoever を「誰が～しても」と訳す時は、副詞節を導き、文中でもう 1 つの節の動詞を修飾します。

上の文の whoever comes to the party という節は、「誰が来たとしても」→「喜ぶでしょう」と動詞を修飾する副詞の役割をしているので副詞節となります。

「誰が～しても」は、譲歩の意味とも言われます。

譲歩を表す場合は、以下のように whoever を no matter who に書き換えても同じ意味を表します。

No matter who comes to the party, he will be pleased.
「誰がそのパーティーに来たとしても、彼は喜ぶでしょう。」

名詞節や副詞節、譲歩というところまでは覚える必要はないので英文の形（whoever の後ろに動詞がくること）と意味をしっかりと覚えておきましょう。

3 複合関係代名詞（whichever）

複合関係代名詞 **whichever** ～ には、「～のものはどちらでも」と「どちらが～しても」の 2 つの意味があります。

whichever は、疑問詞「どちら」や関係代名詞の **which** と同じく主語や目的語として用いられます。以下の例文をみてみましょう。

You can take whichever you like.
「あなたは、好きな方どちらでも取ることができます。」

この文中で、**whichever** は **like** の目的語（動詞の後ろで「～を」や「～に」を表す名詞）として用いられています。
また、**Whichever** が「～のものはどちらでも」という意味で用いられる時は、名詞節を導き文中で主語や目的語（この場合、**take** の目的語）になります。

上の文では **whichever you like** が節で、この部分が名詞の役割（目的語になる）をしているので名詞節となります。
以下の例文のように、**whichever** の後ろに名詞が置かれることもあります。

You can take whichever seat you like.
「あなたは、好きな方の席どちらでも取ることができます。」

次に以下の例文をみてみましょう。

Whichever wins, he will be satisfied.
「どちらが勝ったとしても、彼は満足するでしょう。」

この文で、**whichever** は **wins** の主語として用いられています。
また、**Whichever** が「どちらが～しても」という意味で用いられる時は、副詞節を導き文中で動詞を修飾します。
上の文では **Whichever wins** という節は、「どちらが勝ったとしても」→「満足するでしょう」と動詞を修飾する副詞の役割をしているので副詞節となります。

「どちらが～しても」は、譲歩の意味とも言われます。

譲歩を表す場合は、以下のように **whichever** を **no matter which** に書き換えても同じ意味になります。

No matter which wins, he will be satisfied.
「どちらが勝ったとしても、彼は満足するでしょう。」

4 複合関係代名詞（whatever）

複合関係代名詞 **whatever** ～ には、「～のもの（こと）は何でも」と「何が（を）～しても」の 2 つの意味があります。

whatever は、疑問詞「何」や関係代名詞の **what** と同じく主語や目的語として用いられます。以下の例文をみてみましょう。

I don't like whatever he does.
「私は、彼がすることは何でも気に入らない。」

この文で **whatever** は **does** の目的語として用いられているので、**whatever** の後ろには主語 + 動詞が置かれます。
また、**Whatever** が「～のもの（こと）は何でも」という意味で用いられる時は、名詞節を導き文中で主語や目的語になります。

上の文では **whatever he does** が節となり、この部分が名詞の役割（目的語になる）をしているので名詞節となります。

次に、以下の例文をみてみましょう。

Whatever he says, I will do it by myself.
「彼が何を言っても、私は一人でそれをします。」

このように **Whatever** が「何が（を）～しても」という意味で用いられる時は、副詞節を導き文中で動詞を修飾します。

上の文で **Whatever he says** という節は、「彼が何を言っても」→「する」と動詞を修飾する副詞の役割をしているので副詞節となります。

「何が（を）～しても」は、譲歩の意味とも言われます。

譲歩を表す場合は、以下のように **whatever** を **no matter what** に書き換えても同じ意味を表します。

No matter what he says, I will do it by myself.
「彼が何を言っても、私は一人でそれをします。」

5 複合関係副詞（whenever）

複合関係副詞 whenever ～ には、「～する時はいつでも」と「いつ～しても」の 2 つの意味があります。

whenever は「whenver + 主語 + 動詞 + (～)」という形を作り、whenever によって導かれる節は副詞節となります。

副詞節とは、動詞を修飾する文のことです。以下の例文をみてみましょう。

Please ask me whenever you have a question.
「質問があるは時いつでも、私に尋ねてください。」

この文で、whenever you have a question の部分は「質問のある時に」→「尋ねる」と動詞を修飾（副詞の役割）している節なので副詞節となります。

また、「～する時はいつでも」という意味で用いる時は、以下のように whenever を at any time when に置き換えることができます。

Please ask me at any time when you have a question.
「質問があるは時いつでも、私に尋ねてください。」

次に、以下の例文をみてみましょう。

Whenever I visit his house, he goes out.
「私がいつ彼の家を訪ねても、彼は外出しています。」

この文で、whenever I visit his house の部分は「彼の家を尋ねると」→「外出している」と動詞を修飾（副詞の役割）している節なので副詞節となります。

また、「いつ～しても」という意味で用いる時は、以下のように whenever を no matter when に置き換えることができます。

No matter when I visit his house, he goes out.

6 複合関係副詞（wherever）

複合関係副詞 wherever ～ には、「～するところはどこでも」と「どこで（に、へ）～しても」の 2 つの意味があります。

wherever は「wherever + 主語 + 動詞 + (～)」という形を作り、wherever によって導かれる節は副詞節となります。

副詞節とは、動詞を修飾する文のことです。以下の例文をみてみましょう。

You may sit wherever you want to.
「あなたは、座りたいところどこでも座ってよい。」

この文では、want to sit の sit は同じ単語の繰り返しのため省略されています。

この文で、wherever you want to の部分は「座りたいところへ」→「座る」と動詞を修飾（副詞の役割）している節なので副詞節となります。

また、「～するところどこでも」という意味で用いる時は以下のように wherever を at any place where に置き換えることができます。

You may sit at any place where you want to.
「あなたは、座りたいところどこでも座ってよい。」

次に、以下の例文をみてみましょう。

Wherever he lives, he'll make a lot of friends.
「彼はどこに住んでも、彼はたくさんの友達を作るだろう。」

この文で、Wherever he lives の部分は「彼はどこに住んでも」→「作るだろう」と動詞を修飾（副詞の役割）している節なので副詞節となります。

また、「どこに～しても」という意味で用いる時は以下のように wherever を no matter where に置き換えることができます。

No matter where he lives, he'll make a lot of friends.

7 複合関係副詞（however）

複合関係副詞 however ～ は、「どんなに～しても」という意味です。

however は、「however + 形容詞（副詞）+ 主語 + 動詞 + （～）」という形を作り、however によって導かれる節は副詞節となります。

以下の例文をみてみましょう。

However hard I try, I can't do it.
「どんなに一生懸命挑戦しても、私はそれをすることができない。」

この文で、However hard I try の部分は「一生懸命挑戦しても」→「できない」と動詞を修飾（副詞の役割）している節なので副詞節となります。

他の複合関係詞と異なり、However は後ろに形容詞または副詞が付くので文の形に注意しましょう。

また、以下のように however を no matter how に置き換えることができます。

No matter how hard I try, I can't do it.
「どんなに一生懸命挑戦しても、私はそれをすることができない。」

複合関係副詞 however を用いた文の however の後ろにくる文の形は、以下のような how を用いた感嘆文の形と同じです。

How busy he is! 「彼は、なんて忙しいんだろう。」

How difficult it is! 「それは、なんて難しいんだろう。」

第 12 部

仮定法過去と仮定法過去完了

1

仮定法過去

仮定法過去は、現在の事実の逆や願望を表します。
例えば、以下のような事実があったとします。

As I don't have money, I can't buy it.
「お金を持っていないので、私はそれを買えない。」

この文ように、現在における事実は普通に現在形を用いて表します。
そして、この文の逆は以下ようになります。

「もしお金を持っていれば、私はそれを買うことができるのに。」

これは現在の事実の逆、または願望を表します。
そして、このような仮定を英語で表す時は現在のことも過去形を用いて表し、仮定法過去と呼ばれます。
英語の形は以下ようになります。

If + 主語 + (助) 動詞の過去形 ～ ,
主語 + would (could, should, might) + 動詞の原形 ～ .

意味は、「もし～なら、～だろう (～できるのに、～すべきだ、～かもしれない)」となります。
If 節ではない方の文には、必ず助動詞の would, could, should, might のうちどれかが用いられます。
だいたい would か could が用いられます。

単純に「～するだろう」という時には would を、「できるのに」と能力や可能性の話をする時には could を用います。
上の仮定の文をこの形を用いて英語に書き換えると、以下ようになります。

If I had money, I could buy it.
「もしお金を持っていれば、私はそれを買うことができるのに。」

現在の事実の逆を表すので、事実の文が否定なら仮定法過去の文は肯定に、事実の文が肯定なら仮定法過去の文は否定になります。

次に、以下の文を仮定法過去の文に書き換えてみましょう。

As I'm not a bird, I can't fly to you.
「私は鳥ではないので、あなたのところに飛んでいけない。」

この文を仮定法過去の文に書き換えると、以下ようになります。

If I were a bird, I could fly to you.
「もし私が鳥なら、あなたのところに飛んで行けるのに。」

仮定法過去の文では、be 動詞は were を用います。

口語（話し言葉）では以下のように was を用いることもありますが、文語（書き言葉）では通常 were を用います。

If I was a bird, I could fly to you.

しかし、最近はほとんどの場合で were が用いられるようです。
また、仮定法過去の文は If を省略し、主語と動詞の順番を逆にして以下のように書くことができます。

If I had money, I could buy it. → Had I money, I could buy it.
If I were a bird, I could fly to you. → Were I a bird, I could fly to you.

2 仮定法過去完了

仮定法過去完了は過去の事実の逆や願望を表し、形は以下のようになります。

If + 主語 + had + 過去分詞 ～ ,
主語 + would (could, should, might) + have + 過去分詞 ～ .

意味は、「もし～だったら、～しただろう（～できたのに、～すべきだったのに、～だったかもしれない）」となります。

If 節ではない方の文には、必ず助動詞の would, could, should, might のうちどれかが用いられます。
だいたい would か could が用いられます。

単純に「～しただろう」という時には would を、「できたのに」と能力や可能性の話をする時には could を用います。

以下の過去の事実を表す文を仮定法過去完了の文に書き換えてみましょう。

As I didn't have money, I couldn't buy it.
「お金を持っていなかったので、私はそれを買えませんでした。」

この場合、事実なので過去のことを表すのに（助）動詞の過去形を用います。
この文を仮定法過去完了の文に書き換えると、以下のようになります。

If I had had money, I could have bought it.
「もしお金を持っていたら、私はそれを買うことができたのに。」

この文は、「お金を持っていなかったので、買えなかった。」という事実の逆を表しているので、過去の出来事です。仮定法過去完了を用いて表します。

If 節ではない方の文では助動詞の後ろは動詞の原形なので、過去完了形「had + 過去分詞」を用いることができません。

よって、「have + 過去分詞」を用い、「would (could, should, might) have + 過去分詞」という形を用います。

また、仮定法過去完了の文は If を省略し、過去完了形を作る had と主語の順番を逆にして以下のよう書くことができます。

If I had had money, I could have bought it.
→ Had I had money, I could have bought it.

3 仮定法過去 + 仮定法過去完了

仮定法過去は、以下のように現在の事実の逆や願望を表します。

If I knew her adress, I would visit her.
「もし彼女の住所を知っていれば、私は彼女を訪れるでしょう。」

仮定法過去完了は、以下のように過去の事実の逆や願望を表します。

If I had known her adress, I would have visited her.
「もし彼女の住所を知っていたら、私は彼女を訪れたでしょう。」

そして、「もし（過去に）～していたら、（今）～だろう」というように If 節が過去のこと、もう片方が現在のことを表す場合があります。

このような場合、仮定法過去と仮定法過去完了を組み合わせ、形は以下のようになります。

If 主語 + had + 過去分詞 ～ ,
主語 + would (could, should, might) + 動詞の原形 ～ .

それでは、この形を用いた以下の例文をみてみましょう。

If I had worked harder, I would be successful now.
「もしもっと一生懸命働いていたら、私は今頃成功しているだろう。」

事実は、以下のようになります。

As I didn't work hard, I'm not successful.
「(過去に) 一生懸命働かなかったので、(今) 成功していない。」

そして、If 節の中は過去のこと（働いていなかった）で、もう片方は現在のこと（成功していない）を表しています。

よって、If 節中には仮定法過去完了、もう一方の文には仮定法過去を用います。

4 I wish + 仮定法過去

仮定法過去は、以下の例文のように現在の事実の逆や願望を表します。

If I had a car, I could drive you to the station.
「もし私が車を持っていれば、あなたを駅まで車で送って行けるのに。」

この文では「車を持っていないので、あなたを駅まで車で送れない。」という現在の事実の逆を表しているため、過去形を用います。

このように条件付きで仮定を表す時には if 節を付けますが、単純に「～ならいいのに」という仮定を表すこともあります。
そのような場合に、「I wish + 仮定法過去」を用います。

以下の現在の事実があります。

I'm sorry (that) I don't have a car.
「残念ながら、私は車を持っていません。」

I'm sorry は、この場合「すみません」ではなく「残念ながら～」や「～を残念に思う」という意味になります。

この事実の逆は、日本語だと以下のようになります。

「(私が、) 車を持っていればいいのに。」

これを英語に書き換えると、以下のようになります。

I wish I had a car.

現在の事実の逆なので、I wish の後ろの have は過去形になります。
以下のように、「I wish + 仮定法過去」でも be 動詞の過去形は were を用います。

I wish I were rich. 「(私が、) お金持ちならいいのに。」

以下のように、口語では was を用います。

I wish I was rich.

しかし、最近はほとんどの場合で were が用いられるようです。
この文の事実は以下の通りです。

I'm sorry (that) I'm not rich.
「残念ながら、私はお金持ちではありません。」

5 I wish + 仮定法過去完了

仮定法過去完了は、以下の例文のように過去の事実の逆や願望を表します。

If I had had a car, I could have driven you to the station.
「もし私が車を持っていたら、あなたを駅まで車で送って行けたのに。」

「私は車を持っていなかったので、あなたを駅まで車で送って行けなかった。」という過去の事実の逆を表しているので、過去完了形を用います。

このように条件付で仮定を表す時には if 節を付けますが、単純に「～だったらよかったのに」という仮定を表すこともあります。

そんな時に、「I wish + 仮定法過去完了」を用います。

以下のような過去の事実があります。

I'm sorry (that) I didn't have a car.
「残念ながら、私は車を持っていませんでした。」

I'm sorry は、この場合「すみません」ではなく「残念ながら～」や「～を残念に思う」という意味になります。
この事実の逆は、日本語だと以下のようになります。

「(私が、) 車を持っていたらよかったのに。」

これを英語に書き換えると、以下のようになります。

I wish I had had a car.

過去の事実の逆なので、I wish の後ろの have は過去完了形の「had + 過去分詞(had had)」になります。

6 仮定法の慣用表現

仮定法の慣用表現で重要なものは、以下の 3 つです。

1. If it were not for ～「もし～がなければ」

If it were not for your help, I couldn't do the work.
「もしあなたの助けがなければ、私はその仕事ができないだろう。」

If it were not for ～ は、But for ～ や Without ～ と同じ意味です。

よって、上の文は以下のように書き換えることができます。

But for (Without) your help, I couldn't do the work.

2. If it had not been for ～「もし～がなかったら」

If it had not been for your help, I couldn't have done the work.
「もしあなたの助けがなかったら、私はその仕事ができなかっただろう。」

If it had not been for ～ は、But for ～ や Without ～ と同じ意味です。

よって、上の文は以下のように書き換えることができます。

But for (Without) your help, I couldn't have done the work.

3. It's time + 仮定法過去「～する時（時間）です」

It's time you went to bed.「(あなたは、) 寝る時間です。」

It's time の後ろの動詞は、必ず過去形になります。

ここで、1 と 2 のところで出てきた But for と Without についてもう少し解説します。

But for と Without には現在の仮定(仮定法過去)と過去の仮定(仮定法過去完了)の意味がありますが、But for と Without だけでは見分けがつきません。

よって、この仮定法過去「もし～がなければ」と仮定法過去完了「もし～がなかったら」という 2 つの意味は、残りの文章の時制で見分けます。

例えば、以下の文では I couldn't do the work. の部分が「私はその仕事ができないだろう。」と現在の仮定を表しています。

But for (Without) your help, I couldn't do the work.

よって、But for (Without) の部分も「もしあなたの助けがなければ」と現在のことを仮定していると考えることができ、以下のように書き換えることができます。

If it were not for your help, I couldn't do the work.

次に、以下の文では I couldn't have done the work. の部分が「私はその仕事ができなかっただろう。」と過去の仮定を表しています。

But for (Without) your help, I couldn't have done the work.

よって、But for (Without) の部分も「もしあなたの助けがなかったら」と過去のことを仮定していると考えることができ、以下のように書き換えることができます。

If it had not been for your help, I couldn't have done the work.

7 as if + 仮定法過去と as if + 仮定法過去完了

as if + 仮定法過去と as if + 仮定法過去完了について解説します。

as if + 仮定法過去で「まるで～であるかのように」という意味を表します。

通常、仮定法過去は現在の事実の逆や願望を表す時に用いますが、as if + 仮定法過去は使い方が異なるので注意が必要です。

as if の後ろの時制が主節の時制と同じ時を表す場合に仮定法過去を用います。
実際に、以下の例文をみてみましょう。

He looks as if he were ill.「彼は、まるで病気であるかのように見える。」

この文では、「～のように見える」と主節 (He looks) の時制が現在で as if の後ろの時制も「病気である」と現在です。

よって、主節の時制と as if の後ろの文の時制が共に現在と同じなので、as if + 仮定法過去 (were) が用いられます。

as if の後ろで仮定法過去を用いるパターンはもう 1 つあります。
以下の例文をみてみましょう。

He looked as if he were ill.「彼は、まるで病気であるかのように見えた。」

この文では、「～のように見えた」と主節 (He looked) の時制が過去で、as if の後ろの時制も「病気だった」と過去です。

よって、主節の時制と as if の後ろの文の時制が共に過去と同じなので、as if + 仮定法過去 (were) が用いられます。

ここからは、as if + 仮定法過去完了について解説します。

as if + 仮定法過去の意味「まるで～であるかのように」に対し、as if + 仮定法過去完了は「まるで～であったかのように」という意味を表します。

通常、仮定法過去完了は過去の事実の逆や願望を表す時に用いますが、as if + 仮定法過去完了は使い方が異なるので注意が必要です。

as if の後ろの時制が主節の時制より 1 つ古い時を表す場合に、as if + 仮定法過去完了を用います。実際に、以下の例文をみてみましょう。

He looks as if he had been ill.
「彼は、まるで病気であったかのように見える。」

この文では、「～のように見える」と主節 (He looks) の時制が現在であるのに対し、as if の後ろの時制は「病気だった」と過去です。

よって、as if の後ろの文の時制 (過去) が主節の時制 (現在) より 1 つ古いので、as if + 仮定法過去完了 (had been) が用いられます。

as if の後ろで仮定法過去完了を用いるパターンはもう 1 つあります。以下の例文をみてみましょう。

He looked as if he had been ill.
「彼は、まるで病気だったかのように見えた。」

この文では、「～のように見えた」と主節 (He looked) の時制が過去で、as if の後ろの時制は「病気だった」とさらに前の過去です。

例えば、昨日まだ顔色が悪く、1 週間前まで「病気だった」ように昨日「見えた」というような状況です。

よって、as if の後ろの文の時制 (過去完了) が主節の時制 (過去) より 1 つ古いので、as if + 仮定法過去完了 (had been) が用いられます。

8 その他の仮定法 (if S should と if S were to)

if S should と if S were to について解説します。

まず、If 節中で should が用いられた以下のような形は、「万一～ならば、～だろう (できるだろう、すべきだ、かもしれない)」という意味になります。

If + 主語 + should + 動詞の原形 ～ ,
主語 + would (could, should, might) + 動詞の原形 ～ .

助動詞の部分は、would, could, should, might の原形 will can, shall, may が用いられる場合もあります。この表現は、現在または未来に対する実現性が少ない仮定を表します。

以下の例文をみてみましょう。

If it should rain tomorrow, I would stay here.
「万一明日雨が降ったら、私はここにいるだろう。」

この表現は、現在や未来に「雨が降る可能性が低い」場合に用います。

また、この文は接続詞の If を省略し、主語と should の順を入れかえて以下のように書くこともできます。意味は変わりません。

Should it rain tomorrow, I would stay here.
「万一明日雨が降ったら、私はここにいるだろう。」

現在や未来における条件を表す場合は、以下のように現在形や未来形を用います。

If it rains tomorrow, I won't go out.
「もし明日雨が降ったら、私は外出しません。」

この文は雨が降る可能性が低いわけではなく、明日「雨が降る可能性がある」場合に用いられます。

次に、If 節中で were to が用いられた以下のような形は、「仮に～ならば、～だろう（できるだろう、かもしれない）」という意味になります。

If + 主語 + were to + 動詞の原形 ～ ,
主語 + would (could, might) + 動詞の原形 ～ .

この表現は、ありそうもないことについての仮定を表す。

If she were to know that, she would get angry.
「仮に彼女がそれを知ったら、彼女は怒るだろう。」

この文は、「彼女がその事実を知ることがまずありえない」が、知ったら怒るだろうということを表します。

9 その他の仮定法（仮定法の注意すべき表現）

仮定法の注意すべき表現について解説します。

以下の 3 つがあります。これらは、熟語のように覚えてしまいましょう。

1. If only + 仮定法過去（仮定法過去完了）～ .
「～しさえすればよい（よかった）のだが」

If only the rain would stop.
「雨が、やみさえすればよいのだが。」

If only he had sent her an e-mail.
「彼は、彼女にメールを送りさえすればよかったのだが。」

2. in your position「あなたの立場なら」

I would not do it in your position.
「あなたの立場なら、私はそれをしないだろう。」

この文は、以下の if 節を用いた仮定法の文と同じ意味です。

I would not do it if I were in your position.

3. To hear O speak[talk]「O が話すのを聞いたら」

To hear him speak English, you would take him for an American.
「彼が英語を話すのを聞いたら、あなたは彼がアメリカ人だと思うだろう。」

この文は、以下の if 節を用いた仮定法の文と同じ意味です。

If you heard him speak English, you would take him for an American.

特に、2 と 3 は if を使わない仮定法なので注意しましょう。

第 13 部 同格・比較・最上級

1 同格（同格表現の基礎 as ～ as …）

同格を表す形は as ～ as … で、意味は「…と同じくらい～」となります。
例えば、「武は、健と同じくらい背が高い。」という文は以下ようになります。

Takeshi is as tall as Ken.

まず、以下の「武は、背が高い。」という文をベースに同格を表す as ～ as で形容詞 tall を挟みます。

Takeshi is as tall as

そして、2 つ目の as の後ろに比較している対象である Ken を置けば、Takeshi is as tall as Ken. という同格を表す文になります。

同格を表す as ～ as の～の部分に置かれる形容詞や副詞は必ず原形です。

次に、副詞を用いた同格の文を作ってみましょう。

I can run fast.「私は、速く走ることができる。」

fast「速く」は、動詞 run を修飾している副詞です。

そして、彼も同じくらい速く走ることができるとして、「私は、彼と同じくらい速く走ることができる。」という文を考えてみます。
速さが同じなので fast を as ～ as で挟み、比較対照の彼 (he) を 2 つ目の as の後ろに置いて以下のようになります。

I can run as fast as he.

次に、同格の否定を表す not as ～ as … について解説します。
同格の否定 not as ～ as … の意味は、「…ほど～でない」となります。

先ほどの、Takeshi is as tall as Ken. という文を否定に書き換えてみましょう。
否定文は、be 動詞 is の後ろに not を付けて以下ようになります。

Takeshi is not as tall as Ken.

この文を直訳すると、「タケシは、ケンと同じくらい背が高くない。」となりますが、日本語的に不自然なため「タケシは、ケンほど背が高くない。」と訳します。

もう 1 つ、副詞を用いた同格の否定文をみてみましょう。

I can run as fast as he.「私は、彼と同じくらい速く走ることができる。」

この文の否定文は、can の後ろに not を付けて以下ようになります。

I can not run as fast as he.「私は、彼とほぼ速く走ることはいできない。」

最後に、同格の倍数表現について解説します。

同格の as ～ as の前に倍数を表す twice「2 倍」や half「半分」を付けた twice (half) as ～ as … という形は、「…の 2 倍（半分）～」という意味になります。

以下の例文をみてみましょう。

This box is twice as big as that box.「この箱は、あの箱の 2 倍大きい。」

同格の as ～ as の前に twice「2 倍」を置くことで、「同じくらい」ではなく「2 倍大きい」ということを表せます。

そして、この同格の文のように同じ言葉（box）が繰り返される場合は、通常 2 つ目の単語を one に置き換えます。

This box is twice as large as that one.

英語は、同じ言葉の繰り返しを嫌うためにこのような置き換えをします。

3 倍以上は、以下のように数に times 「倍」を置きます。

This box is three times as big as that one.
「この箱は、あの箱の 3 倍大きい。」

半分は、以下のように同格の as ～ as の前に half を置きます。

The population of this city is half as large as that of that city.
「この都市の人口は、あの都市の人口の半分です。」

人口を比較する時は、large を用います。また、the population の繰り返しを避けるためにこの場合は that を用います。

～ of … の～の部分に置かれる単語の繰り返しを避けるために、単数の場合は that、複数の場合は those を用います。

2 同格（同格 as as を用いた慣用表現）

慣用表現は熟語のようなものです。以下に例文を用いて解説していくので、形と意味を暗記しておきましょう。

1. as ～ as one can 「できるだけ～」 (= as ～ as possible)

Run as fast as you can. 「できるだけ速く走りなさい。」

one の部分は誰がするかで変わります。この文は命令文で、走るのはあなたなので you can となります。

He ran as fast as he could. 「彼は、できるだけ速く走りました。」

この文では走るのは彼なので one の部分は he となり、過去のことなので can は could と過去形になります。

one can の部分は possible 一語に置き換えることができ、上の 2 つの文は以下のように書くこともできます。

Run as fast as possible.

He ran as fast as possible.

possible を用いる時は、人称や時制を気にする必要はありません。

2. ～ as well as … 「…と同様に～」 (= not only … but also ～)

I like cats as well as dogs.
「私は、犬と同様に（と同じように）猫も好きです。」

この文は、not only … but also ～ 「…だけでなく～も（…と同様に～も）」を用いて以下のように書き換えることができます。

I like not only dogs, but also cats. 「私は、犬だけでなく猫も好きです。」

この文は、「私は、犬と同様に猫も好きです。」と訳すこともできます。

3. not so much B as A 「B というよりむしろ A」 (= A rather than B)

He is not so much a writer as a pianist.
「彼は、作家というよりむしろピアニストです。」

この文は、A rather than B を用いて以下のように書き換えることができます。

He is a pianist rather than a writer.

これは、比較の慣用表現です。

3 比較（比較表現の基礎 比較級 + than …）

比較級を用いた表現の基礎について解説していきます。

比較表現の形は、「形容詞や副詞の比較級 + than …」です。そして、意味は「…より～だ」となります。

ここで、形容詞や副詞の比較級について少し解説しておきます。比較級とは、形容詞や副詞に er を付けたものです。

例えば、tall 「背が高い」の比較級は taller です。ほとんどの形容詞や副詞は er を付けて比較級を作りますが、例外もあります。

語尾が e で終わるものは、r のみ付けます。

例) wise 「賢い」→ wiser

語尾が子音 + y のものは y を i に変えて er を付けます。

例) easy 「簡単な」→ easier

語尾が単母音（母音 1 つ）+ 子音のものは子音を重ねて er を付けます。

例) hot 「熱い」→ hotter

通常のものに加え、この 3 パターンは覚えておきましょう。

それでは、実際に比較を表す例文をみてみましょう。

Takeshi is taller than Ken. 「タケシは、ケンより背が高い。」

taller than の部分が「比較級 + than …」で、「…より背が高い」というように比較を表しています。than の後ろに比較対照である Ken 「ケン」を置きます。

上の文は形容詞の比較です。

もう 1 つ副詞の比較を用いた例文をみてみましょう。

My mother gets up earlier than I. 「私の母は、私より早く起きます。」

early 「早く」は副詞で、動詞の gets up を修飾しています。また、子音 + y で終わっているので、比較級は y を i に変えて er を付けた earlier という形になります。

通常、比較級は形容詞や副詞に er を付けますが、長い形容詞や副詞の場合は前に more を付けて比較級を作ります。以下の例文をみてみましょう。

This flower is more beautiful than that one.
「この花は、あの花より美しい。」

beautiful は長い形容詞なので、最後に er を付けるのではなく前に more を付けて比較級にします。ただ、長いとはどの位長さなのか？ということについてですが、厳密には 3 音節以上の語全てと 2 音節以上のほとんどの語、そして ly で終わる副詞です。

音節とは、辞書を引いた時に「beau-ti-ful」のようにハイフンで区切られているものです。ただ、単語を覚えるだけでも大変なのに音節の数まで考えられませんよね。

よって、more を付ける形容詞や副詞でよく用いられるものはそれほど多くないので出てきたものを覚えていけば大丈夫です。

よく用いられる形容詞は difficult 「難しい」、important 「重要な」、popular 「人気のある」、副詞は slowly 「ゆっくりと」、quickly 「すばやく」などです。

最後の 2 つのように ly で終わる副詞のほとんどは more を付けて比較級にします。

例外) early 「早く」→ earlier
最後に、これら比較の文を強める場合を考えてみます。

日本語だと、「彼は、彼の兄よりずっと背が高い。」や「この絵は、あの絵よりずっと美しい。」という意味の時です。

通常、形容詞や副詞を強める時は very 「とても」を前に付け、tall や beautiful を強めると very tall や very beautiful となります。

ところが、比較級になると very ではなく前に much や far を付けます。よって、先ほどの日本語を英語に直すと以下ようになります。

He is much (far) taller than his brother.
「彼は、彼の兄よりずっと背が高い。」

This picture is much (far) more beautiful than that one.
「この絵は、あの絵よりずっと美しい。」

口語（話し言葉）では、以下のように a lot を付ける場合もあります。

He is a lot taller than his brother. 「彼は、彼の兄よりずっと背が高い。」

形容詞や副詞を強める時、比較級になると very ではなく much (far, a lot) を前に付けるので注意しましょう。

4 比較（疑問詞を用いた比較の疑問文）

疑問詞を用いた比較の疑問文の形と意味は、以下のようになります。

Who (Which) ～ 比較級, A or B? 「A と B のどちらが～ですか。」

まず、以下の比較の文を疑問文にしてみましょう。

This house is bigger than that one. 「この家は、あの家より大きい。」

この文は、be 動詞が用いられているので以下のように be 動詞を主語の前に出せば疑問文になります。

Is this house bigger than that one? 「この家は、あの家より大きいですか？」

これは通常の疑問文ですが、「この家とあの家では、どちらが大きいですか。」と尋ねることもあります。

この場合「どちら」を表す疑問詞 which を用い、疑問文は以下のようになります。

Which is bigger, this house or that one?
「この家とあの家では、どちらが背が大きいですか。」

答え方は、文章を作る必要はなく以下のようにどちらなのかだけ答えます。

This house is. 「この家です。」

「どちら」を表す疑問詞は物の場合には Which を用いますが、人の場合には以下のように Who を用います。

Who runs faster, Ken or Takeshi?
「ケンとタケシのどちらが速く走りますか。」

答え方は以下の通りです。

Takeshi does. 「武です。」

また、この場合 run の繰り返しを避けるために does を用います。

5 比較（比較級を用いた慣用表現）

以下に、よく用いられる慣用表現を例文を用いて 1 つずつ解説していきます。

1. 比較級 and 比較級「ますます（だんだん）～」

It is getting colder and colder. 「だんだん寒くなってきている。」

この表現は、この文のように It is getting ～「～になってきている」という表現との組み合わせでよく用いられます。

「It is getting 比較級 and 比較級」という形で、「だんだん～になってきている」という意味になります。

2. The 比較級 ～, the 比較級 … 「～すればするほど、ますます…」

The higher we climb, the colder it gets.
「高い所へ登れば登るほど、ますます寒くなる。」

The 比較級の後ろには、「(主語) + 動詞」からなる文が付きます。また、The + 比較級の部分が主語になっている場合は動詞以降が付きます。

3. no more than (only) ～ 「～しか」

I have no more than 5000 yen. 「私は、5000 円しかもっていない。」

no more than を only に置き換えて、以下のように書くこともできます。

I have only 5000 yen.

4. no less than (as much[many] as) ～ 「～も」

I have no less than 5000 yen. 「私は、5000 円も持っている。」

no less than = as much[many] as なので、上の文は以下のように書き換えることができます。

I have as much as 5000 yen.

また、同じ 5000 円でも 3 の no more than だとそれしかないという意味になり、4 の no less than だとそんなにもあるという意味になります。

6 最上級（最上級を用いた表現 the + 最上級 + in (of) …）

最上級の形と意味について解説していきます。最上級の形は「the + 形容詞や副詞の最上級 + in (of) …」で、意味は「…の中で 1 番（最も）～」です。

形容詞や副詞の最上級とは、tallest のように形容詞や副詞の最後に est を付けたものです。

ただ、比較級を作る時と同様に単純に est を付ければ最上級になるというものばかりではありません。

ほとんどの形容詞や副詞は est を付けて最上級になりますが、例外もあります。

語尾が e で終わるものは、st のみ付けます。

例) wise 「賢い」→ wisest

語尾が子音 + y のものは y を i に変えて est を付けます。

例) easy 「簡単な」→ easiest

語尾が単母音（母音 1 つ）+ 子音のものは子音を重ねて est を付けます。

例) hot 「熱い」→ hottest

通常のものに加え、この 3 パターンは覚えておきましょう。

次に、「…の中で」を表す in と of の使い分けですが、1 つの場所やグループの中でという時には in を、複数の中でという時には of を用います。

それでは、以下の形容詞の最上級を用いたの例文をみてみましょう。

Ken is the tallest in his class. 「ケン、クラスの中で一番背が高い。」

最上級の前に the を付けることを忘れないようにしましょう。そして、クラスは 1 つのグループ（または場所）なので、in を用います。

以下のように「5 人の中で」という場合、複数なので of を用います。

Ken is the tallest of the five. 「ケン、5 人の中で一番背が高い。」

次に、副詞の最上級を用いた例文をみてみましょう。

He can run the fastest of all.

「彼は、みんなの中で一番速く走ることができる。」

fast 「速く」は動詞 run を修飾している副詞です。

ここで 1 つ注意が必要で、副詞の最上級の前にある the は省略して以下のように書くこともできます。

He can run fastest of all.

また、この文では all 「みんな」は複数を表すので in ではなく of を用います。

ここまでで解説したように、通常最上級は形容詞や副詞に est を付けますが、長い形容詞や副詞の場合は前に most を付けて最上級を作ります。

以下の例文をみてみましょう。

This flower is the most beautiful of the five flowers.

「この花は、その 5 本の花の中で一番美しい。」

beautiful は長い形容詞なので、最後に est を付けるのではなく前に most 付けて最上級にします。

ただ、長いとはどの位長さなのか？ということについてですが、厳密には 3 音節以上の語全てと 2 音節以上のほとんどの語、そして ly で終わる副詞です。

音節とは、辞書を引いた時に「beau-ti-ful」のようにハイフンで区切られているものです。

ただ、単語を覚えるだけでも大変なのに音節の数まで覚えられませんよね。

よって、most を付ける形容詞や副詞でよく用いられるものは数多くないので出てきたものを覚えていけば大丈夫です。

よく用いられる形容詞と副詞は、difficult 「難しい」、important 「重要な」、popular 「人気のある」、slowly 「ゆっくりと」、quickly 「すばやく」などです。

最後の 2 つのように ly で終わる副詞のほとんどは most を付けて比較級にします。

例外) slowly 「ゆっくりと」→ more slowly

次に、「飛びぬけて一番～」と最上級の文を強める場合を考えてみます。

最上級を強める場合には、the + 最上級の前に「飛びぬけて」を表す by far または much を置いて以下ようになります。

Ken is by far[much] the tallest in his class.
「ケン は、クラスの中で飛びぬけて一番背が高い。」

また、「二番目に～」、「三番目に～」と言いたい時は、the と最上級の間に second、third を置いて以下ようになります。

Ken is the second tallest in his class.
「ケン は、クラスの中で二番目に背が高い。」

He can swim the third fastest of all students.
「彼は、全ての生徒の中で三番目に早く泳ぐことができる。」

7 比較（最上級を用いた慣用表現）

以下の慣用表現は、熟語のように覚えておきましょう。

1. make the best use of ～ 「～を最もよく（最大限に）利用する」

Make the best use of this chance.
「このチャンスを最大限に利用しなさい。」

2. for the most part 「大部分は」

I know that for the most part.
「私は、それについて大部分は分かっています。」

3. most of all 「とりわけ」

Most of all, he is a liar.
「とりわけ、彼は嘘つきだということだ。」

4. at (the) least 「すくなくとも」

There were at least 100 people in the room.
「その部屋には、少なくとも 100 人の人がいた。」

5. at (the) earliest 「早くとも」

I will finish the work at noon at earliest.
「私がその仕事を終えるのは、早くても正午になるだろう。」

6. at last 「ついに」

At last, she became a singer.
「ついに、彼女は歌手になりました。」

7. do one's best 「最善を尽くす」

Do your best. 「最善をつくしなさい。」

8 最上級（比較級と最上級の不規則変化）

比較級と最上級が不規則に変化する副詞と形容詞について解説します。

形容詞や副詞の中には、er や est、more や most を付けるのではなく、不規則に変化して比較級や最上級になるものがあります。

ここで解説する形容詞と副詞は、比較級と最上級を暗記しておきましょう。

1. good 「よい」, well 「上手に」→ better（比較級）, best（最上級）

This pen is better than that one.
「このペンは、あのペンよりいい。」

He can speak English better than I..
「彼は、私より上手に英語を話すことができる。」

2. bad 「悪い」, ill 「病気の」→ worse（比較級）, worst（最上級）

His manner is worse than his brother's.
「彼のマナーは、彼の弟より悪い。」

3. many, much 「たくさんの」→ more（比較級）, most（最上級）

I have more books than he has. 「私は、彼よりたくさんの本を持っている。」

4. little 「少ない」→ less（比較級）, least（最上級）

There were less people in this room than in that room.
「この部屋には、あの部屋より少ない人がいた。」
「この部屋にいる人の数は、あの部屋より少なかった。」

以下は、不規則に変化する形容詞や副詞の中で 2 通りの変化があるものです。

5. far 「遠い」「遠く」

[距離] → farther（比較級）, farthest（最上級）

[程度] → further（比較級）, furthest（最上級）

This park is farther from my house than that one.
「この公園は、あの公園より私の家から遠い。」

Ken's house is the farthest from here.
「ケンの家が、ここから一番遠い。」

Let's stop dicussing it further.
「これ以上、それについて議論するのは止めましょう。」（程度）

6. late 「遅い」「遅く」

[時間] → later（比較級）, latest（最上級）

[順序] → latter（比較級）, last（最上級）

I arrived there later than my grilfriend.
「私は、彼女より遅くそこへ到着した。」

He finished working (the) last in my office.
「彼は、私の事務所で一番遅く仕事を終えた。」

9 最上級（比較⇔同格⇔最上級の書き換え）

同格、比較、最上級の文の書き換えについて解説します。

まず、同格と比較の文の書き換えについて解説します。

同格の否定表現 not as ～ as … は、「…ほど～でない」という意味です。

He is not as old as I. 「彼は、私ほど年を取っていない。」

この同格の文は「彼は、私より若い。」という意味を表しており、以下のように比較表現を用いて表すこともできます。

He is younger than I. 「彼は、私より若い。」

また、「私」を主語にすると以下のような比較表現で表すこともできます。

I am older than he. 「私は、彼より年を取っています。」

次に、同格と最上級の書き換えについて解説します。

最上級の形は「the + 形容詞または副詞の最上級 + in (of) …」で、意味は「…の中で最も～」です。

Tokyo is the largest city in Japan. 「東京は、日本で一番大きい都市です。」

この文は large の最上級 (largest) を用いて「一番～」という意味を表しています。

最上級の文は、「No (other) + 単数名詞 ～ + as[so] + 形容詞や副詞の原級 + as …」と同格表現を用いても同じ意味を表すことができます。

先ほどの最上級の文をこの同格表現を用いて表すと、以下のようになります。

No (other) city in Japan is as large as Tokyo.
「東京と同じくらい大きい都市は、日本にはありません。」

英文を直訳すると「日本のゼロの都市が、東京と同じくらい大きい」となりますが、日本語的に不自然なので上のような日本語訳になります。

同格は 2 人の人や 2 つのものを比べているので、東京と他の都市を 1 つずつ比べていることになります。

東京という 1 つの都市と他の都市全てをまとめて比べることはできないので、No other の後ろには名詞の単数形がくることに注意しましょう。

上の文では都市に限定した話をしているので No (other) 単数名詞という形を用いましたが、種類が分からない場合には以下のように Nothing を用います。

Nothing is as important as life.
「(全ての中で、) 命と同じくらい大切なものはない。」
「(全ての中で、) 命が一番大切だ。」

10 最上級（比較⇔最上級の書き換え）

以下は最上級の文です。

Tokyo is the largest city in Japan. 「東京は、日本で一番大きい都市です。」

この最上級の文は、比較級を用いて表すことができます。

まず、日本語で比較の表現を用いて上の最上級の文を言い換えると、「日本には、東京より大きい都市はない。」となります。

これは、英語で以下の形で表すことができます。

No (other) + 単数名詞 ～ + 比較級 + than … 「…より～なものはない」

実際に、上の最上級の文を比較級を用いた文に書き換えると、英文は以下のようになります。

No (other) city in Japan is larger than Tokyo.

「東京より大きい都市は、日本にはない。」

直訳は「日本のゼロの都市が、東京より大きい。」となりますが、日本語的に不自然なので上のような日本語に言い換えます。

これは、「東京が一番大きい都市」ということを表しているので、この形を用いると比較級を用いて最上級を表すことができます。

また、この表現で No (other) の後ろは通常単数名詞になります。これは、同格と同様に比較も必ず 1 人と 1 人、または 1 つと 1 つを比べているからです。

東京と他の都市全てではなく、東京と大阪、東京と福岡というように 1 つずつ比べているのです。

上の文では都市に限定した話をしていますが、以下の文のように何の種類か分からないという時は No (other) 単数名詞の代わりに Nothing を用います。

Nothing is more important than health (of all) .

「(全ての中で、) 健康より重要なものはない。」

「(全ての中で、) 健康が一番重要です。」

最上級の文は、もう 1 つ別の比較表現を用いて表すことができます。

Tokyo is the largest city in Japan. 「東京は、日本で一番大きい都市です。」

この最上級の文を比較表現を用いて日本語で言い換えると、「東京は、日本の他のどの都市よりよりも大きい。」となります。

これは、英語で以下の形で表すことができます。

比較級 + than any other + 単数名詞 「他のどんな…より～」

実際に、上の最上級の文をこの比較級を用いた表現を用いて書き換えると、以下のようになります。

Tokyo is larger than any other city in Japan.

「東京は、日本の他のどの都市よりも大きい。」

これは、「東京が一番大きい都市」ということを表しているので、この形を用いると比較級を用いて最上級を表すことができます。

また、この表現でも any other の後ろは通常単数名詞になります。

東京と他の都市全てではなく、東京と大阪、東京と福岡というように 1 つずつ都市を比べているからです。

11 比較と最上級で注すべき表現 (the 比較級 of the two)

以下は最上級の文です。

That boy is the tallest of the three.

「その少年は、3 人の中で一番背が高い。」

比べている対象の数が3人または3つ以上の場合は、「その中で一番～」となるので最上級を用います。

この文で、of the three の部分を of the two に変えると、最上級ではなく比較級を用い以下ようになります。

That boy is the taller of the two.

「その少年は、2 人のうちで背が高い方です。」

このように、比べている対象が2人または2つの場合は「どちらかが～より…」となるので比較級を用います。

全体は最上級のような形になっていますが、比較級を用いなければならないので注意しましょう。

また、この形では形容詞や副詞の比較級の前に the が付きます。慣用表現を除いた比較表現で、唯一比較級に the が付く形なので注意しましょう。

「the 比較級 of the two」で「2 人 (2 つ) のうちより～」と覚えておきましょう。

12 比較と最上級で注すべき表現 (the を付けてはいけない最上級)

通常、最上級を文中で用いる場合には、以下のように形容詞や副詞の最上級の前に the を付けます。

This lake is the deepest of the five. 「この湖は、5 つの中で一番深い。」

次に、以下の最上級を用いた文をみてみましょう。

This point is deepest in this lake.

「この湖の中で、このポイントが一番深い。」

今度は、最上級 deepest の前に the が付いていません。

複数の中で「一番」という時は最上級に the を付けますが、1 人の人や 1 つの物の中での性質で「一番」という時には the を付けません。

This lake is the deepest of the five.

まず、この文では「5 つの湖の中で」と複数の中で「一番深い」ということを表しているので、最上級に the を付けます。

This point is deepest in this lake.

それに対し、この文では 1 つの池の中での深さという性質を比べ、ある地点が「一番深い」ということを表しているので最上級に the を付けてはいけません。

これは、慣用表現を除いた最上級の表現で、唯一 the を付けない形なので注意しましょう。

以下のように、副詞の最上級の前の the は省略可能であって、付けてはいけないということはありません。

He can swim (the) fastest in our class.

「彼は、私達のクラスで一番速く泳ぐことができます。」

13 比較と最上級で注すべき表現 ((a) most + 形容詞の原級 + 名詞)

通常、difficult などの長い形容詞や副詞の最上級を作る時に most を形容詞や最上級の前に置きます。

そして、文中で最上級を用いる時は以下のように the を最上級の前に置きます。

This is the most difficult English book of all.
「これは、全ての中で一番難しい英語の本です。」

ところが、most は「(a) most + 形容詞の原級 + 名詞」という形で用いられる時、very と同じ「とても」という意味になります。

This is a most difficult English book.
「これは、とても難しい英語の本です。」

この場合、English book は単数なので most の前に a が付きます。

most には、他に「ほとんどの」という意味もあります。

Most people in our town joined the party.
「私達の町のほとんどの人々は、そのパーティーに参加した。」

最上級を勉強すると、most はいつも「一番～」という意味だと勘違いしやすいので注意しましょう。

14 比較と最上級で注すべき表現 (than ではなく to を用いる比較)

than ではなく to を用いる比較について解説します。
通常、「～より…」という比較には「比較級 + than …」という形を用います。

ただ、以下の 5 つの比較表現では than ではなく to を用います。

1. prefer ～ to …「…より～を好む」

I prefer dogs to cats.「私は、猫より犬が好きです。」

これは、通常の比較を用いると以下のようにになります。

I like dogs better than cats.

2. junior to …「…より年下」

He is junior to me.「彼は、私より年下です。」

to の後ろは目的格（この場合 me）になります。主格の I は置けません。

× He is junior to I.

これは、通常の比較を用いると以下のようにになります。

He is younger than I.

そして、これらの表現で「彼は、私より 2 歳年下です。」というように年齢差を表したい場合があります。
2 通りの表現があり、まず 1 つ目の表現は比較級の前に年齢差をそのまま置いて以下のように書きます。

He is two years junior to me.
He is two years younger than I.

もう 1 つの表現では、以下のように by を用いて年齢差を文の最後に置きます。

He is junior to me by two years.
He is younger than I by two years.

3. senior to …「…より年上」

He is senior to me.「彼は、私より年上です。」

これは、通常の比較を用いると以下ようになります。

He is older than I.

この場合も 2 と同様に、「彼は、私より 2 歳年上です。」というように年齢差を表したい時は以下の 4 つの表現を用います。

He is two years senior to me.
He is two years older than I.
He is senior to me by two years.
He is older than I by two years.

4. superior to …「…より優れている」

This car is superior to that one.「この車は、あの車より優れている。」

これは、通常の比較を用いると以下ようになります。

This car is better than that one.

5. inferior to …「…より劣っている」

This car is inferior to that one.「この車は、あの車より劣っている。」

これは、通常の比較を用いると以下ようになります。

This car is worse than that one.

6. prior to …「…より前に」「…より先に」

The day when the affair happened was prior to my birthday.
「その事件が起きた日は、私の誕生日より前だった。」
「その事件は、私の誕生日より前に起きた。」

15 何と何を比較しているのか？（同格偏）

同格表現で何と何を比べているのか？について解説します。

これは、同格や比較の文を作る時に私達日本人が混乱しやすい部分です。

それは、同格は形容詞や副詞の原級を as as ではさむと覚えており、何と何を比較しているのかについては深く考える習慣が身に付いていないからです。

同格や比較の文を作る時には、「何」と「何」を比べているかをしっかり考えないと正しい文章を作ることができないことがよくあります。

例えば、「彼は、私と同じ年だ。」という同格を表す英文を作る時に、以下の 2 つの文で迷ってしまいます。

He is as old as I.
He is as old as me.

ここでは、まずこの文を例にとり解説していきます。

実は、この同格文は以下の 2 つの事柄を比べています。

He is old.「彼は、年をとっている。」
I am old.「私は、年をとっている。」

そして、1 つの文中で比べるためにこの 2 つの文を繋ぐ必要があります。

その時に、同格で繋ぐ場合 as を用いて以下ようになります。

He is old as I am old.

同格の as as の後ろの as は、2 つの文を繋ぐ接続詞のような働きをしています。

そして、この場合「年」を比べて「同じくらい」ということを表したいので、同格を表す as を old の前に置いて以下ようになります。

He is as old as I am old.
「彼は、私が年をとっているのと同じ位年をとっている。」

ここで、日本語でも英語でも同じ言葉の繰り返しは避けるので、old は消します。
また、am も he is の部分から be 動詞だと容易に推測できるので省略し、完成した文は以下のような文になります。

He is as old as I.「彼は、私と同じ年だ。」

am を消す理由としては、今は「彼」と「私」という比較対照が分かればいいので am は必要ないということも言えます。
ただ、この文では以下のように me を用いることもあるようです。

He is as old as me.

次に、「彼は、私と同じ位多くの本を持っています。」という文を考えてみます。

この場合、同格は as as で挟むと覚えていると He has boods as many as I have という文を作ってしまうことがよくあります。実は、この文では間違いなのです。

この文は、以下の 2 つの事柄を比べています。

He has many books.「彼は、多くの本を持っています。」
I have many books.「私は、多くの本を持っています。」

そして、この 2 つの事柄を 1 つの文中で比べるため、同格で繋ぐ場合に接続詞的な役割を果たす as を用いて以下ようになります。

He has many books as I have many books.

この後がポイントです。「本の多さ」を比べて同じ位と言いたい訳ですから、以下のように many の前に同格を表す as を置きます。

He has as many books as I have many books.
「彼は、私が多くの本を持っているのと同じ位多くの本を持っています。」

そして、I have の後ろの many books の部分は同じ語の繰り返しとなるので省略され以下ようになります。

He has as many books as I have.
「彼は、私同じ位多くの本を持っています。」

この場合、have は has の変形なので同じと考え以下のように書くこともあります。

He has as many books as I.

ただ、これだと「彼が持っている量 (He has)」と「私 (I)」を比べている感じになってしまうので have は残しておいた方がよいと思います。
もう 1 つ、「彼女は、彼女の姉と同じ位美しい。」という文を考えてみます。
この文は、以下の 2 つの事柄を比べています。

She is a beautiful woman.「彼女は、美しい女性です。」
Her sister is a beautiful woman.「彼女姉は、美しい女性です。」

そして、この 2 つの事柄を比べるため、as を用いて以下ようになります。

She is a beautiful woman as her sister is a beautiful woman.

この場合、「美しい」度合いを比べて同じということを表しているので、同格を表す as を beautiful の前に置いて英文は以下ようになります。
She is a as beautiful woman as her sister is a beautiful woman.

同格を表す as を置く位置に気をつけましょう。ここで、a (1 人の) は woman に付いているものなので woman の前に移動し、文は以下ようになります。

She is as beautiful a woman as her sister is a beautiful woman.
「彼女は、彼女の姉が美しい女性であるのと同じ位美しい女性です。」

最後に、同じ言葉の繰り返しは避けるため is a beautiful woman の部分を消し、完成した文は以下のような文になります。

She is as beautiful a woman as her sister.
「彼女は、彼女の姉と同じ位美しい女性です。」

しかし、この文章は文法的には正しいのですが通常は以下の文章が用いられます。
She is as beautiful as her older sister.「彼女は、彼女の姉と同じ位美しい。」

16 何と何を比較しているのか？（比較偏）

比較表現で何と何を比べているのか？について解説します。

これは、同格や比較の文を作る時に私達日本人が混乱しやすい部分です。

それは、比較の形を形容詞や副詞の比較級 + than と覚えており、何と何を比較しているのかについては深く考える習慣が身に付いていないからです。

同格や比較の文を作る時には、「何」と「何」を比べているかをしっかり考えないと正しい文章を作ることができないことがよくあります。

まず、「彼は、私より若い。」という簡単な比較の文を例にとって考えてみます。

何と何を比較しているのかを理解していないと、以下の 2 つの文でどちらが正しいのか迷ってしまいます。

He is younger than I.
He is younger than me.

この程度の文なら「比較級 + than」ということさえ覚えていれば感覚的に作れてしまうかもしれませんが、実は次のような考え方をしています。

上の比較の文は、以下の 2 つの事柄を比べています。

He is young. 「彼は、若い。」
I am young. 「私は、若い。」

そして、この 2 つの文（事柄）を 1 つの文中で比べるために繋ぐ必要があり、同格では as を用いましたが比較の場合は than を用いて以下のように繋がます。

He is young than I am young.

比較表現の than は、2 つの文を繋ぐ接続詞のような働きをしています。

そして、この場合「より若い」と若さを比較して「より～」ということを表したいので、young を比較級の younger に変えて以下のような文になります。

He is younger than I am young.

最後に、young は同じ言葉の繰り返しは避けるため、am も He is の部分から be 動詞の繰り返しとなるので消して完成した文は以下ようになります。

He is younger than I. 「彼は、私より若い。」

※口語では、He is younger than me. ということもあります。

次に、「彼は、日本語より英語を上手に話すことができる。」という比較の文を例にとって考えてみます。

この文は、以下の 2 つの事柄を比べています。

He can speak English well. 「彼は、英語を上手に話すことができる。」
He can speak Japanese well. 「彼は、日本語を上手に話すことができる。」

そして、この 2 つの事柄を比べるために than を用いて繋ぎ以下ようになります。

He can speak English well than he can speak Japanese well.
「彼は、日本語を上手に話すことができるより英語を上手に話すことができる。」

また、この場合「より上手」と話す上手さを比較を比較して「より～」ということを表したいので、well を比較級の better に変えて以下のような文になります。

He can speak English better than he can speak Japanese well.

最後に、同じ言葉の繰り返しは避けるため than の後ろの He can speak と well は同じ語の繰り返しとなるので消し、完成した文は以下ようになります。

He can speak English better than Japanese.
「彼は、日本語より英語を上手に話すことができる。」

than の後ろは必ず He や I などの主格ではなく、何と何を比べているかにより変わるので注意しましょう。

最後に、「今日は、昨日より寒い。」という比較の文を考えてみます。

この文は、以下の 2 つの事柄を比べています。

It is cold today.「今日は、寒い。」
It was cold yesterday.「昨日は、寒かった。」

そして、この 2 つの事柄を比べるために than を用いて繋ぎ、1 つの文にすると以下ようになります。

It is cold today than it was cold yesterday.

また、この場合「より寒い」と寒さを比較して「より～」ということを表したいので、cold を比較級の colder に変えて以下のような文になります。

It is colder today than it was cold yesterday.
「今日は、昨日が寒かったのより寒い。」

ここで、than の後ろの It と cold は同じ語の繰り返し、was も最初の It is から容易に推測できるため消して以下ようになります。

It is colder today than yesterday.「今日は、昨日より寒い。」

以下のように順番を変えたりしないように注意しましょう。

It is today colder than yesterday.

同格表現の場合は並び順が変わることもありますが、比較表現は基本的にもとの文から並び順を変える必要はありません。

第 14 部

文の種類

1 命令文（命令文の基礎）

命令文は、目の前にいる人（または人達）に何かをするように命令する時に用い、文は動詞の原形で始まり意味は「～しなさい」となります。

以下の文は、通常の文です。

You speak English here.「あなたは、ここで英語を話します。」

この文は、あなたが「英語を話す」という事実を表しています。

この文で、You を取ると以下のように命令文になります。

Speak English here.「ここでは、英語を話しなさい。」

be 動詞の場合も同じく、原形の be で始まります。

Be careful.「注意しなさい。」

命令は目の前にいる You（「あなた」や「あなた達」）にするものなので、実際に動作を行う人（主語）が必ず You なので書かなくても分かります。

よって、「You」が省略されてしまったため命令文では主語を書きません。

英語の文章の中でも一番簡単な文章なのでほとんどの方が覚えていると思いますが、命令文に主語がないのはこのような理由からだと言われています。

命令文の否定（禁止の命令文）は一般動詞でも be 動詞でも動詞の前に Don't を置き、意味は「～するな」「～してはいけない」となります。

Don't run in this room.「この部屋の中では走ってはいけない。」

Don't be noisy.「騒がしくしてはいけない。」

命令文の否定（禁止の命令文）は、以下のように助動詞 must の否定 must not（省略形は mustn't）と同じような意味になります。

You musn't run in this room.
「(あなたは、) この部屋の中では走ってはいけない。」

You mustn't be noisy.「(あなたは、) 騒がしくしてはいけない。」

禁止の命令文では、Don't の代わりに Never「決して（絶対に）～ない」を置くと禁止の意味が強まり「絶対に～してはいけない」という意味になります。

Never run in this room.「絶対にこの部屋の中で走ってはいけない。」

Never be noisy.「絶対に騒がしくしてはいけない。」

2 命令文（依頼の命令文と勧誘の命令文）

命令文は、目の前にいる人（または人達）に何かをするように命令する時に用い、文は動詞の原形で始まります。意味は、「～しなさい」となります。

命令文は、以下のような文です。

Speak English here.「ここでは、英語を話しなさい。」

Be quiet.「静かにしなさい。」

命令文に Please を付けると、「～して下さい」という依頼の意味になります。

以下のように please は、文頭または文末に付けます。文末に付ける時は、please の前にコンマ「,」を置きます。

Please speak English here. または、Speak English here, please.
「ここでは、英語を話して下さい。」

Please be quiet. または、Be quiet, please.
「静かにして下さい。」

依頼の命令文は、助動詞の will を用いた表現 Will you ～? 「～してくれませんか」と同じような意味になります。

上の 2 つの依頼の命令文は、以下のように書き換えることができます。

Will you speak English here? 「ここでは、英語を話してくれませんか。」

Will you be quiet? 「静かにしてくれませんか。」

否定（禁止の命令文）の場合も、依頼の命令文の作り方は同じです。

Please don't run here. または、Don't run here, please.
「ここでは、走らないで下さい。」

Please don't be noisy. または、Don't be noisy, please.
「騒がしくしないで下さい。」

そして、命令文の先頭に Let's を付けると、以下のように「(一緒に) ～しましょう」という勧誘の意味になります。

Let's go to the park. 「公園へ行きましょう。」

勧誘の命令文は、助動詞の shall を用いた表現 Shall we ～? 「(一緒に) ～しましょうか」と同じ意味になります。

上の勧誘の命令文は、以下のように書き換えることができます。

Shall we go to the park? 「公園へ行きましょう。」

答え方は、Yes または No と let's を用いて以下のようになります。

Yes, let's. 「(はい,) 行きましょう。」
No, let's not. 「(いいえ,) やめましょう。」

let's は let us の省略形です。

let は使役動詞で本来「(許可して) ～させる」という意味があり、「Let us + 動詞の原形」を直訳すると「私達に～させて」となります。

しかし、命令文で用いられている場合にはこのような訳し方はせず、「Let's + 動詞の原形」で「～しましょう」という日本語訳になります。

3 感嘆文（How を用いる感嘆文）

感嘆文は、「なんて～だろう」と驚きを表す時に用います。

感嘆文は How を用いる場合と What を用いる場合がありますが、How を用いた形は以下になります。

How + 形容詞または副詞 + 主語 + (助動詞) + 動詞！

例えば、以下のような文です。

How happy I am! 「私は、なんで幸せなんだろう。」

この文は、以下の文がもとになっています。

I am very happy. 「私は、とても幸せです。」

この文は「とても幸せ」と幸せの度合いを強調しているだけですが、「なんて幸せだろう」と驚きを表したい時に感嘆文を用います。

「very + 形容詞または副詞」という形の場合は、very を how に書き換え、「how + 形容詞または副詞」を文の先頭に出します。

上の文では very happy（形容詞）を how happy に変え、文の先頭に出します。

そして、文の最後にピリオドではなく、驚きを表すエクスクラメーションマーク（ビックリマーク）「!」を付け、感嘆文は以下ようになります。

How happy I am! 「私は、なんで幸せなんだろう。」

もう 1 つ、以下の文を感嘆文に書き換えてみましょう。

He can run very fast. 「彼は、とても速く走ることができる。」

この文では、very fast（very + 副詞）を how fast に変えて文の先頭に出し、文末に「!」を付け感嘆文は以下ようになります。

How fast he can run! 「彼は、なんて速く走ることができるんだろう。」

4 感嘆文（What を用いる感嘆文）

感嘆文は「なんて～だろう」という意味で驚きを表すために用いられ、感嘆文には以下の 2 通りの形があります。

How + 形容詞または副詞 + 主語 + 動詞！

What + (a) + 形容詞 + 名詞 + 主語 + 動詞！

how を用いる時は、以下のように how の後ろは形容詞または副詞のみです。

How happy I am! 「私は、なんで幸せなんだろう。」

What を用いる時には、what + 形容詞の後ろに名詞がきます。

What a big animal this is! 「これは、なんて大きい動物なんだろう。」

この文は、以下の文がもとになっています。

This is a very big animal. 「これは、とても大きい動物です。」

この文は「とても大きい」と大きさを強調しているだけですが、「なんて大きいのだろう」と驚きを表したい場合に感嘆文を用います。

この場合、very + 形容詞（big）の後ろに名詞（animal）があるので、very を what に置き換えます。

そして、a what big animal ではなく、以下のように what が先頭にくるように what a big animal と並び替えて文の先頭に出します。

What a big animal this is!

感嘆文の最後には、ピリオドではなくエクスクラメーションマーク（ビックリマーク）「!」を付けます。

以下のように複数の場合は、a は必要ありません。

These are very big animals. 「これらは、とても大きい動物です。」

この文を感嘆文に書き換える場合には、まず very + 形容詞（big）の後ろに名詞（animals）があるので very を what に変えます。

そして、What big animals を文の先頭に出し、感嘆文は以下ようになります。

What big animals these are! 「これらは、なんて大きい動物なんだろう。」

5 注意すべき疑問文（否定疑問文）

まず、be 動詞の否定疑問文について解説します。

He is busy now.「彼は、今忙しい。」

上の文を疑問文に書き換えると以下ようになります。

Is he busy now?「彼は、今忙しいですか？」

これは、通常の疑問文です。

次に、以下の否定文を疑問文に書き換えてみます。

He isn't busy now.「彼は、今忙しくない。」

疑問文は、be 動詞を用いた通常の疑問文と同じように、be 動詞を主語の前に出し以下ようになります。

Isn't he busy now?「彼は、今忙しくないのですか。」

ただし、この時否定を表す not も be 動詞と一緒に前に出します。

このような疑問文は、否定疑問文と呼ばれます。

否定疑問文は否定文を疑問文の形にすればよいだけなので、作るのはそれほど難しくありません。
ただ、否定疑問文は答え方に注意が必要です。

先ほどの否定疑問文の答え方を考えてみます。

Isn't he busy now?「彼は、今忙しくないのですか。」

答えは以下の 2 通りで、日本語の通りに英語にすると以下ようになります。

No, he is.「いいえ、忙しいです。」

Yes, he isn't.「はい、忙しくありません。」

ところが、これらは間違いです。

英語では、後ろが肯定文の場合は Yes を、後ろが否定文の場合は No を置かなければなりません。よって、正しくは以下ようになります。

Yes, he is.「いいえ、忙しいです。」

No, he isn't.「はい、忙しくありません。」

忙しい場合は he is (busy)「彼は忙しい」と肯定文になるため、「いいえ」でも英語は Yes で答えます。

逆に忙しくない場合は he isn't (busy)「彼は忙しくない」と否定文になるため、「はい」でも英語は No で答えます。

これは日本人がてこずるところなので、反復して身につけて下さい。

次に、一般動詞の否定疑問文について解説します。

以下は、一般動詞の通常の疑問文です。

Do you have dinner?「あなたは、夕食を食べますか。」

この通常の疑問文で Do の部分を否定文で用いる Don't に変えると以下のように否定疑問文になります。

Don't you have dinner?「あなたは、夕食を食べないのですか。」

通常の疑問文が「～しますか」となるのに対し、否定疑問文の意味は「～しないのですか」となります。

否定疑問文は否定文を疑問文の形にすればよいだけなので、作るのはそれほど難しくありませんが、
否定疑問文は答え方に注意が必要です。

上の否定疑問文の答え方を考えてみます。答えは以下の 2 通りで、日本語の通りに英語にすると以下ようになりますがこれらは間違いです。

No, I do.「いいえ、（私は）食べます。」

Yes, I don't.「はい、（私は）食べません。」

英語では、後ろが肯定文の場合は Yes を、後ろが否定文の場合は No を置かなければなりません。よって、正しくは以下ようになります。

Yes, I do. 「いいえ、（私は）食べます。」

No, I don't. 「はい、（私は）食べません。」

夕食を食べる場合は I do (have) 「私は食べます」と肯定文になるため、「いいえ」でも英語は Yes で答えます。

逆に食べない場合は I don't (have) 「私は食べない」と否定文になるため、「はい」でも英語は No で答えます。

否定疑問文に答える時は、「いいえ」が Yes、「はい」が No となるので間違えないようにしましょう。

主語が三人称単数の場合、時制が過去の場合も同じように考えます。

・一般動詞の現在形で主語が三人称単数の否定疑問文

Doesn't he play soccer? 「彼は、サッカーをしないのですか。」

Yes, he does. 「いいえ、彼はします。」

No, he doesn't. 「はい、彼はしません。」

・一般動詞の過去形の否定疑問文

Didn't she know it? 「彼女は、それを知らなかったのですか。」

Yes, she did. 「いいえ、彼女は知っていました。」

No, she didn't. 「はい、彼女は知りませんでした。」

最後に、助動詞の否定疑問文について解説します。

以下は、通常の助動詞の疑問文です。

Will he come to our party?
「彼は、（私達の）パーティーに来るつもりですか。」

この疑問文で Will の部分を否定文で用いる Won't に変えると以下のように否定疑問文になります。
won't は will not の省略形です。否定疑問文では will not は用いません。

Won't he come to our party?
「彼は、（私達の）パーティーに来ないつもりですか。」

通常の疑問文が「～するつもりですか」となるのに対し、否定疑問文の意味は「～しないつもりですか」となります。

また、答えは以下の 2 通りで、日本語の通りに英語にすると以下のようにになりますがこれらは間違いです。

No, he will. 「いいえ、彼は来るでしょう。」
Yes, he won't. 「はい、彼は来ないでしょう。」

英語では、後ろが肯定文の場合は Yes を、後ろが否定文の場合は No を置かなければなりません。正しくは以下ようになります。

Yes, he will. 「いいえ、彼は来るでしょう。」
No, he won't. 「はい、彼は来ないでしょう。」

彼が来る場合は he will (come) 「彼は来るでしょう」と肯定文になるため、「いいえ」でも英語は Yes で答えます。

逆に食べない場合は he won't (come) 「彼は来ないでしょう」と否定文になるため、「はい」でも英語は No で答えます。

以下のように、他の助動詞の時も同じように考えます。

Can't she swim? 「彼女は、泳げないのですか。」

Yes, she can. 「いいえ、泳ぐことができます。」
No, she can't. 「はい、泳ぐことができません。」

6 注意すべき疑問文（付加疑問文）

付加疑問文は、相手に念をおしたり、確認をとる表現で、意味は「～ですよ」「～ではないですよ」となります。

まず、be 動詞の付加疑問文から解説していきます。

以下は通常の be 動詞の疑問文です。この場合、質問している人には、彼が忙しいか忙しくないかは全く分からず質問しています。

Is he busy? 「彼は、忙しいですか。」

これに対し、彼が忙しいということがだいたい分かっていて、それを確認するような時に付加疑問文を用います。

付加疑問文の意味は「彼は、忙しいですよ。」となり、実際にこの付加疑問文を作ってみると以下のようになります。

He is busy, isn't he? 「彼は、忙しいですよ。」

このように、付加疑問文はベースとなる文は疑問文にしないでそのまま作り、その後ろに疑問文を付けます。

ベースとなる文が肯定文の場合は、後にコンマ「,」+ 否定疑問文を付けます。

答え方は通常の疑問文と同じで、以下のようになります。

Yes, he is. 「はい、彼は忙しいです。」

No, he isn't. 「いいえ、彼は忙しくありません。」

以下のように、this と that は it で、these と those は they で受けます。

This is beautiful, isn't it? → Yes, it is. / No, it isn't.

That is an apple, isn't it? → Yes, it is. / No, it isn't.

These are apples, aren't they? → Yes, they are. / No, they aren't.

Those are apples, aren't they? → Yes, they are. / No, they aren't.

ベースとなる文が否定文の場合は、以下のようにコンマの後ろは普通の疑問文になります。

He isn't busy, is he? 「彼は、忙しくないのですか。」

また、ベースとなる文が否定文の場合、答え方は否定疑問文の時と同じで以下のようになります。Yes が「いいえ」、No が「はい」になるので注意しましょう。

Yes, he is. 「いいえ、彼は忙しいです。」

No, he isn't. 「はい、彼は忙しくありません。」

次に、一般動詞の付加疑問文について解説します。

以下は、通常の一般動詞の疑問文です。

Do you speak English? 「あなたは、英語を話しますか。」

この場合、質問している人は相手が英語を話すか話さないのかは全く分からず、純粋に質問しているだけです。

これに対し、相手が英語を話すということがだいたい分かっていてそれを確認するような時に付加疑問文を用い、以下のようになります。

You speak English, don't you? 「あなたは、英語を話しますよね。」

You speak English. 「あなたは、英語を話します。」という肯定文の後に、コンマ「,」+ 疑問文を付けます。

この場合、ベースとなる文が肯定文（You speak English）なので、コンマの後ろは否定疑問文の形になります。

答え方は通常の疑問文と同じで、以下のようになります。

Yes, I do. 「はい、私は英語を話します。」

No, I don't. 「いいえ、私は英語を話しません。」

以下のようにベースとなる文が否定文の場合は、コンマの後ろは普通の疑問文の形になります。

He doesn't speak Egnlish, does he? 「彼は、英語を話しませんよね。」

答え方は否定疑問文と同じで、以下のようになります。

Yes, he does. 「いいえ、彼は話します。」

No, he doesn't. 「はい、彼は話しません。」

過去形の場合は、did と didn't を用いて以下のようになります。

Children went to school yesterday, didn't they?

「子供達は、昨日学校に行きましたよね。」

Children didn't go to school yesterday, did they?

「子供達は、昨日学校に行きませんでしたよね。」

このように、代名詞以外の Children などは、同じ単語の繰り返しを避けるために、コンマの後ろの疑問文では代名詞（この場合 they）に置き換えられます。

ここからは、助動詞の付加疑問文について解説します。

以下は通常の助動詞の疑問文です。

Will you finish the work today?

「あなは、その仕事を今日終えるつもりですか。」

この場合、相手が今日仕事を終えるつもりか、終えるつもりはないのか分からず単に質問しているだけです。

これに対し、相手が今日仕事を終えるつもりであることがだいたい分かっていてそれを確認するよ
うな時に付加疑問文を用い、以下のようになります。

You will finish the work today, won't you?

「あなたは、今日その仕事を終えるつもりですよね。」

You will finish the work today. 「あなたは、今日その仕事を終えるつもりです。」という肯定文の後に、
コンマ「,」+ 疑問文を付けます。

この場合ベースとなる文が肯定文（You will finish the work today.）なので、コンマの後ろは否定疑
問文の形になります。

答え方は通常の疑問文と同じで、以下のようになります。

Yes, I will. 「はい、終えるつもりです。」

No, I won't. 「いいえ、終えるつもりはありません。」

以下のようにベースとなる文が否定文の場合は、コンマの後ろは普通の疑問文になります。

You won't finish the work today, will you?

「あなたは、今日その仕事を終えるつもりはありませんよね。」

答え方は否定疑問文と同じで、以下のようになります。

Yes, I will. 「いいえ、終えるつもりです。」

No, I won't. 「はい、終えるつもりはありません。」

7 注意すべき疑問文（命令文の付加疑問文）

付加疑問文は相手に念をおしたり確認をとる表現で、意味は「～しますよね」や「～しませんよね」となります。

付加疑問文は、以下のようにベースとなる文はそのまま作り、その後ろに疑問文を付けます。

You are busy, aren't you? 「あなたは、忙しいですよね。」

そして、この文のようにメインの文が肯定文の場合には文末にコンマ「,」+ 否定疑問文を付けます。

これに対し、メインの文が否定文の場合には以下のように文末にコンマ「,」+ 通常の疑問文を付けます。

You aren't busy, are you? 「あなたは、忙しくないですよね。」

一般動詞や助動詞の場合も同様です。

ただ、命令文の付加疑問文は少し注意が必要です。

以下の命令文の付加疑問文を考えてみましょう。

Close the door. 「そのドアを閉めなさい。」

命令文を付加疑問文にする場合、通常の付加疑問文と同じように考えると文末に何を付ければよいのか困ってしまいますよね。

命令文で命令された動作は、これから、つまり未来に行う動作なので will を用いて付加疑問文を作ります。

また、命令文は目の前にいる you（あなた、あなた達）に言うので文末の疑問文の主語は必ず you になります。

よって、命令文を付加疑問文は、以下のように文末に will you と won't you のどちらかを付けて作ります。

Close the door, will you (won't you) ? 「そのドアを閉めてね。」

通常の付加疑問文のように肯定、否定という考え方はしません。

そして、意味は「～してね」と命令文よりソフトな感じになります。

これに対し、否定の命令文の場合は、以下のように will you しか付けることはできないので注意しましょう。

Don't close the door, will you? 「そのドアを閉めないでね。」

文法問題を解く時には will you と won't you の使い分けが必要ですが、会話では肯定と否定どちらの命令文でも使える will you を文末に付ければ大丈夫です。

8 注意すべき疑問文（Let's の文の付加疑問文）

付加疑問文は相手に念をおしたり確認をとる表現で、意味は「～しますよね」や「～しませんよね」となります。

付加疑問文は、以下のようにベースとなる文はそのまま作りその後ろに疑問文を付けます。

You speak English, don't you? 「あなたは、英語を話しますよね。」

そして、この文のようにメインの文が肯定文の場合には文末にコンマ「,」+ 否定疑問文を付けます。これに対し、メインの文が否定文の場合には以下のように文末にコンマ「,」+ 通常の疑問文を付けます。

You don't speak English, do you? 「あなたは、英語を話しませんよね。」

be 動詞や助動詞の場合も同様ですが、Let's の文の付加疑問文は注意が必要です。

以下の Let's を用いた文の付加疑問文を考えてみましょう。

Let's go shopping. 「買い物に行きましょう。」

ちなみに、答え方は以下ようになります。

Yes, let's. 「ええ、行きましょう。」

No, let's not. 「いいえ、やめましょう。」

Let's の文に肯定も否定ありませんから、付加疑問文にするにしても文末に何をつければよいかわかりますよね。

Let's の文を付加疑問文作る場合、疑問文の形で Let's と同じ意味の shall we ～? 「～しましょうか」を用います。

Let's の文の付加疑問文は、以下のように文末に shall we を付けます。意味は「～しましょうね」となり、相手に Yes の返事を期待して誘う時に用います。

Let's go shopping, shall we? 「買い物に行きましようね。」

答え方は、Let's や Shall we ～? の文に対しての答え方と同じです。

Let's の付加疑問文を用いる時には、相手が自分の誘いによってくるのがほぼ分かっているので答えはだいたい Yes になります。

9 特殊な否定文（準否定語を用いた否定文）

通常の否定「～ない」や「～しない」という時には、以下のように be 動詞や助動詞の後ろに not を付けたり、一般動詞の前に don't (do not)などを付けました。

He isn't (is not) a doctor. 「彼は、医者ではない。」

I don't play tennis. 「私は、テニスをしません。」

これに対し「ほとんど～ない」や「めったに～ない」など、通常よりソフトな否定を表すために準否定語を用います。

まず、量が「ほとんどない」ということを表す few と little について解説します。

few と little は両方とも「ほとんどない」同じ意味ですが、few は数えられる名詞に、little は数えられない名詞に付けます。

また、not は be 動詞、助動詞、do などの後ろに置きますが、few と little は以下のように対象となる名詞の前に置きます。

上の例文では「人々」、下の例文では「生徒」がほとんどいないので、few は people と students に付いています。

There are few people in the room.

「その部屋には、ほとんど人がいません。」

Few students came to school yesterday.

「昨日学校へ来た生徒は、ほとんどいませんでした。」

この文は直訳すると「ほとんどいない生徒が、昨日学校へ来ました。」となりますが、日本語的に不自然なため上のように訳します。

little の場合も同じです。

上の例文では「水」、下の例文では「ワイン」がほとんどいないので、little は water と wine に付いています。

There is little water in the bottle.

「その瓶の中には、ほとんど水はありません。」

数えられない名詞を用いる時は単数扱いになるので、be 動詞は is を用いることに注意しましょう。

We drank little wine at the party.
「私達は、パーティーでほとんどワインを飲みませんでした。」

この文は直訳すると「私達は、パーティーでほとんどないワインを飲みました。」となりますが、日本語的に不自然なため上のように訳します。

few と little は量が「ほとんどない」ということを表すことが多いので、There is (are) ～「～がいる(ある)」という文と一緒によく用いられます。

また、以下のように few と little に a を付けた a few と a little は「少しいる(ある)」という意味になるので注意しましょう。

There are a few people in the room.「その部屋には、少し人がいます。」

There is a little water in the bottle.「その瓶の中には、少し水があります。」

次に、程度の準否定語について解説します。

以下は通常の否定文です。

I can't understand it.「私は、それを理解できません。」

この否定文だと、理解できる部分はないということになります。

これに対し、少し理解できる部分もあるけれども「ほとんど理解できない」と言いたい場合があります。

これは理解の「程度」を表し、「ほとんど～ない」となるので準否定語は hardly または scarcely を用います。

先ほどの否定文を「私はほとんど理解できません。」という例文に書き換えると以下のようになります。

I can hardly (scarcely) understand it.「私はほとんど理解できません。」

hardly と scarcely は、not や don't と同じ位置に起きます。

以下は一般動詞の場合です。

I hardly (scarcely) knew her.
「私は、彼女のことをほとんど知りませんでした。」

最後は、頻度の準否定語について解説します。

以下は通常の否定文です。

He doesn't watch TV.「彼は、テレビをみません。」

この否定文だと、彼はテレビを全く観ないということになります。

これに対し、全くテレビを観ないというわけではなく、「めったに観ない」と言いたい場合があります。

これは観るという動作の「頻度」を表し、「めったに～ない」という意味を持つ準否定語 seldom または rarely を用います。

先ほどの否定文を「彼は、テレビをめったに観ません。」という文に書き換えると以下のようになります。

He seldom (rarely) watches TV.「彼は、テレビをめったに観ません。」

seldom と rarely は、not や don't と同じ位置に置きます。

ただし、上の例文のように seldom や rarely の後ろは原形ではなく、主語が三人称単数なので watches と es が付いていることに注意しましょう。

以下は be 動詞の場合です。

I am seldom (rarely) absent from school.
「私は、めったに学校をやすみません。」

10 特殊な否定文（完全否定と部分否定）

完全否定と部分否定には何パターンがありますが、まず not any と not every について解説します。

not+any は完全否定で「全く～ない」、not+every は部分否定で「全て～という訳ではない」という意味になります。

以下の完全否定と部分否定の例文をみてみましょう。

<完全否定>

I do not (don't) know anything about it.

「私は、それについて全く知りません。」

<部分否定>

I do not (don't) know everything about it.

「私は、それについて全て知っているという訳ではありません。」

これは暗記してしまえばよいのですが、私達は every を「全て」と覚えているので not+every の方を「全て～ない」と訳してしまいがちです。

not+every は、全てではないけどある程度は～であるという意味になるので注意しましょう。

また、上の完全否定の文は以下のように書くこともできます。

I know nothing about it. 「私は、それについて全く知りません。」

nothing は「何もない」という否定を含んだ意味を持っているので、否定文にする時に know を否定する必要はありません。

また、この文を直訳すると「私は、それについて何もないものを知っている。」となりますが日本語として不自然なので上のように意訳します。

anything, everything, nothing は物事の時に用います。人の時は以下のように anyone, everyone, no one、または anybody, everybody, nobody を用います。

<完全否定>

I do not (don't) know anyone (anybody) here.

「私は、ここにいる人を誰も知りません。」

<部分否定>

I do not (don't) know everyone (everybody) here.

「私は、ここにいる人全員を知っているという訳ではありません。」

これは暗記してしまえばよいのですが、私達は every を「全て」と覚えているので not+every の方を「全て～ない」と訳してしまいがちです。

not+every は、全てではないけどある程度は～であるという意味になるので注意しましょう。

この部分否定の文は、all 「全て」を用いて以下のように書くこともできます。

I do not (don't) know all people here.

「私は、ここにいる人全員を知っているという訳ではありません。」

ただ、all の場合は後ろに名詞の複数形がきます。これに対し、every は後ろに名詞の単数形がくるので注意しましょう。

everyday 「毎日」、everyone 「みんな」などは everydays、everyones と every の後にくる名詞を複数形にしませんよね。

every は一人一人や一つ一つをみていくという意味合いが強いため後ろに単数形がくるようです。

上の完全否定の文は、以下のように書くこともできます。

I know no one (nobody) here.

「私は、ここにいる人を誰も知りません。」

no one (nobody) は「誰も～ない」という否定を含んだ意味を持っているので、否定文にする時に know を否定する必要はありません。

not + any = no と覚えておきましょう。

上の例文で no one や nobody は目的語として用いられていますが、どちらかというと以下のように主語として用いられることが多いような気がします。

No one (Nobody) came here yesterday.

「昨日、誰もここへ来ませんでした。」

次に、完全否定の never「決して～ない」と部分否定の not+always「いつも～という訳ではない」について解説します。

以下の例文をみてみましょう。

＜完全否定＞

He never speaks English.

「彼は、決して英語を話しません。」

＜部分否定＞

He does not (doesn't) always speak English.

「彼は、いつも英語話すという訳ではありません。」

上の完全否定の文は、彼は絶対に英語を話さないということを表しています。
また、never の後ろにくる動詞は原形ではなく、主語や時制の影響を受けます。

この文では、現在形で主語が三人称単数なので speaks と最後に s を付けます。過去のことなら動詞を過去形にします。

これに対し、下の部分否定の文は普段英語を話すけどいつもではないと not は always「いつも」を否定しています。

暗記してしまえばよいのですが、私達は not+always の方を「いつも～ない」と完全否定のように訳してしまいがちなので注意が必要です。

not+always と似た部分否定の表現 not+necessarily「必ず～という訳ではない」も覚えておきましょう。以下は、not+necessarily の例文です。

＜部分否定＞

He does not (doesn't) necessarily eat rice.

「彼は、必ずお米を食べるという訳ではありません。」

not+necessarily を「決して～ない（必ず～ないは日本語的に不自然）」と完全否定として訳さないように気をつけましょう。

最後に、完全否定の not+either「両方とも～ない」と部分否定の not+both「両方とも～という訳ではない」について解説します。

以下の例文をみてみましょう。

＜完全否定＞

I do not (don't) like either of them.

「私は、それらの両方とも好きではない。」

＜部分否定＞

I do not (don't) like both of them.

「私は、それらの両方とも好きという訳ではない。」

完全否定の文は、2 つのうち両方とも好きではないということを表しています。

これに対し、下の部分否定の文は 2 つのうち片方は好きで、もう片方は好きでないという意味になります。

暗記してしまえばよいのですが、私達は not+both の方を「両方とも～ない」と完全否定のように訳してしまいがちなので注意しましょう。

以下のように、not+either は neither に置き換えることができます。

I like neither of them.

「私は、それらの両方とも好きではない。」

neither は either に not が付いたもので、否定の意味を含んでおり動詞 like を否定する必要はありません。

また、「A と B の両方とも～」と 2 つのものを具体的に示す時には either A or B、both A and B、neither A nor B を用います。以下は例文です。

<完全否定>

I do not (don't) like either dogs or cats.

I like neither dogs nor cats. 「私は、犬と猫の両方とも好きではない。」

neither を用いる時には、or ではなく nor を用いるので注意しましょう。

<部分否定>

I do not (don't) like both dogs and cats.

「私は、犬と猫の両方とも好きという訳ではない。」